日夏耿之介著

明治文學襍考

梓書房版

叙言

日本近代文學史研究ノ途上、折ニ觸レテ物セシ詩歌戲曲小說ニ係ル小論ノ類ヲ蒐メテ一卷トナシス。予ガ研究ノ第一部ハ、此年「明治大正詩史」上下二卷トナリテ上板ニ及ビシガ、小說戲曲批評ノ各部逐次刊行ノツイデツイデニ、此類ノ詳畫的論集ヲ隨時發市シ、兩種相携ヘテ、庶幾クハ近代日本藝文考索ノ全景ヲシテ完カラシメムトス。

昭和四年三月二十五日午前一時半

日夏耿之介識

明治文學襍考目次

目次

圖版目次

題簽……阿藤伯海氏

明治文學襍考

明治煽情文藝概論

――大衆文藝の種類變遷及藝術價並藝術小說の通俗價及非藝術性――

名稱の詮議

以前は通俗小說と云つたが、近頃では多分作家側から稱へはじめて大衆小說、大衆文藝といふ。ポピュラーといふ言葉には善惡二種の意味がある。ピープルと語源を等しうする事實から推測しても考へられる通り、いはゆる民衆的のといふ程の意味と、も一つは、民情に媚態を呈したがるといふほどの意味である。辭書によると英譯プルタルコス英雄列傳のカイウス・グラックスの條に於けるポピュラーの用語例がそれであるといふ。

そんな詮議は何れにしても、今日のわれらの用語例及び語感から考へて、このポピュラーの譯語として普通使用せられる通俗云々といふ語を聞けば、價値低下の感情の方が良い意味よりも強

い。民衆的云々といつても、如何に合理的立場を與へて考へても、ともすると（かの文化云々と等しいやうに）反語的に安つぽいあくどいもろい粗雜な一夜漬の卽製品を指したがる。民衆藝術といへば、ロマン・ローランの飜譯が背景を與へる以上に實際の鄕土提供品から來る聯想で通俗的なる、腰を下しすぎたる、お粗末なる小說やら繪畫やら演劇やらを漠然と考へたがる。民衆詩人といへば、拙劣な、お粗末すぎる、無知で、無反省で押しばかり强い「小說家以前」の下端文士を聯想する。根本の語義から考へて寔によろしくない聯想ではあるが、これ又現實の鄕國の提供品が正しくさうなのだから、この聯想には現在のところ一理も二理もあるといはねばならぬ。

一頻り叫ばれた民本主義や民衆藝術が下火になつたのは飽き易い民性のためのみではなくて、その表看板をかゝげて專門家面をして突ん出た連中にそも〳〵藝術價が缺ける處が餘りに多すぎたからである。文化主義に淸新にして高雅、思索的にして穩當なる思想上の本質性のひゞきを感じたのも束の間であつたとひとしく、民衆云々の形容に一味の斬新を感じたものも、忽ち又失望を感じて退いたのは、一にこの自稱專門家輩の愚劣に基くのである。更に進んで云へば、民衆一般そのもの丶敎養人としての資格の低劣に基くのである。

そこで、右のやうな語感を避け民衆文藝の名辭を忌んで、大衆云々としたは賢いけれど、畢竟これは名目の上の詮議で內容の吟味ではない。否、若干のその方面では新企圖が現在多少は覗はれるけれども、大勢から見てそれ程とり立てゝ論議すべきほどの新味はない。若しありとすればそれも今日只今以後の問題である筈だ。（大衆といふ語は、漢譯佛典中の善男善女の一群を聯想せしめる點で、當體尊重の旨には叶ふと云はれよう。）が、民衆にしてもそれらの文藝が、在來の名稱で通俗文藝に屬するものであることは、今日の狀態から見て事實である。その通俗すなはちポピユラーなる言葉に二樣の義があるとさきに云つたは、詮ずるに所謂通俗文藝の內容にも亦右の兩種があるといふ事に外ならぬ。

さて、更に又煽情云々の語を査べて見よう。これは近く、東西煽情文藝云々のごとき坪內博士の用語例もある通り、一部の人には用ひられてをる言葉で、煽情小說はすなはち昔涙香の口癖にした Sensational Novel の譯語であるが、大衆云々が對象の質量から命じた名稱であり、通俗の語が對象の容積とその質の低下とを示唆する名稱であるかの如くに感ぜられる言葉であるに對し、煽情はセンセイショナルにして、それ自らの特質を最も端的に熾烈に云ひあらはした言葉で、こ

れ又センセイショナル即質の低劣といふ聯想が必ず伴ふものあるは止むをえない。

しかし、煽情的なるもの宍勝ちに悉く質の低下を意味するとは云はれない。こゝにもいはゆる通俗小説の妙味が含まれてゐるものである。すなはち、所謂エ・スリー・デイズ・センセイションにすぎないのか。永久のセンセイションとも云はるべきものを持つてゐるのかといふところに最高の意味のセンセイショナル・ノヹルの價値批評のカン所があるのだが、事實はその様な高所を目差してゐるのではなく、凡そセンセイショナルなる文學中の藝術的要素を索訊して見る事にすぎないのである。而して、民衆的大衆的なる通俗小説が、凡べてセンセイショナルなる要件を常に殆ど唯一の目的として、場面の轉化、人物の種類、題材の目新しさ等に腐心するが故に、又、民衆的大衆的若しくは通俗的といふ如き性質指稱にも、煽情的といふ形容に於て一層概括的にして本質的説明が可能であるを思ひ、此場合此語を假用する事にしたのである。

煽情文藝の種目

先づ明治文學史を縱斷してこゝに所謂煽情的なる文學の分野を明らかにして見よう。

あらゆるセンセイショナルたる文學が、畢竟何等かの意味でキュリオシティー・ハンティングを一圖に直截に目的とする事は明白であるが、その廣い意味のキュリオシティーの種類によつて煽情文學にも異同がある。たとへば、冒險小說といひ、探偵小說又は犯罪小說といひ（この兩者を一視するは不當であるが今の日本では殆どそれが同一種に考へられてゐる）家庭小說といひ、立志小說といひ、戀愛小說といひ、少女小說といひ、悲哀小說といひ、撥髮小說といひ、傳奇小說といふ、これらのさまざまな名目の中には、當然合併せらるべきものも交つてゐるが、多くこのやうな名前で在來呼び慣はして來たものゝ大部分は總じてセンセイショナル・ノヱルである。（二十五六年の交、センセイショナルな又悽動とも譯し、涙香は悽動小說とも稱し、悽動小史といふ作者もあつた）

が、たとへば戀愛小說といふ名目の如き、如何な高級の藝術小說とて戀愛が作の感覺中樞になつてゐる時は、他の藝術小說の、社會的關心を生命とせる社會小說に對して、これは戀愛小說であるには相違ないのであるが、煽情小說種目に於ける戀愛小說とは、例へば殊更に「戀愛小說血染のハンケチ」といふごとき割註をあたまに被らせた程度の戀愛實感のキュリオシティーを必要以上に極端にあくどく誇張したものを指すのである。從つて、右の悲哀小說とか冒險小說とかいふ種

類分けは性質の一部分によつて命名せられたから生じたのであつて、その種類分けの名稱が直ちに作の本質を說明するほどの重要性を持つてはゐない。

そこで、右のやうな通俗なるさま〴〵の文藝を、大體次のごとくに分類し，主なる作者又はある作品の作者をこれに配當する事は可能であらう。

明治煽情文藝種目表　附　作者概表

一　冒險小說

探検談　腕力小說　考古小說　海洋小說　山岳小說

作（譯）者

井上勤　森田思軒　押川春浪　磯萍水　江見水蔭　櫻井鷗村　大澤天仙　福田琴月　黒田湖山

二　探偵小說

犯罪小說
怪奇小說
戰時探偵
外交奇譚
探偵實錄

作（譯）者

黑岩淚香
遠藤丸亭
菊亭笑甫
榎本破笠
二葉生
江見水蔭
水田南陽
千原伊之吉
森澤德夫
伊原青々園
德富蘆花
長田偶得
山田美妙

武田櫻桃
宮崎來城
菊地幽芳
水田南陽

類分けは性質の一部分によつて命名せられたから生じたのであつて、その種類分けの名稱が直ちに作の本質を說明するほどの重要性を持つてはゐない。

そこで、右のやうな通俗なるさま〴〵の文藝を、大體次のごとくに分類し，主なる作者又はある作品の作者をこれに配當する事は可能であらう。

明治煽情文藝種目表　附　作者概表

一　冒險小說

- 探檢談
- 腕力小說
- 考古小說
- 海洋小說
- 山岳小說

作（譯）者

- 井上勤
- 森田思軒
- 押川春浪
- 磯萍水
- 江見水蔭
- 櫻井鷗村
- 大澤天仙
- 福田琴月
- 黑田湖山

二　探偵小說

犯罪小說
怪奇小說
戰時探偵
外交奇譚
探偵實錄

作（譯）者

黑岩涙香
遠藤丸亭
菊亭笑庸
榎本破笠
二葉生
江見水蔭
水田南陽
千原伊之吉
森澤德夫
伊原青々園
德富蘆花
長田偶得
山田美妙

武田櫻桃
宮崎來城
菊地幽芳
水田南陽

須藤南翠

三　傳奇小説（戯曲）

歴史小説
怪異譚
撥鬢小説
草艸紙

作（譯）者

半井桃水
高畠藍泉
假名垣魯文
條野採菊
河竹默阿彌
須藤南翠
塚原澁柿園
村上浪六
稲岡奴之助
松原二十三階堂
西村天囚
武田仰天子
饗庭篁村
宮崎三昧
右田寅彦
岡本綺堂

伊原青々園
福地櫻痴
渡邊霞亭
宇田川文海
遲塚麗水
松村春輔
依田學海

田口掬汀
益田克德
三宅青軒
田村西男
德田秋聲
岩谷小波
高橋太華
木村小舟
武田櫻桃
田山花袋

四　家庭小説

戀愛小説
立志美譚
滑稽小説
諷刺小説
花柳小説
少年小説
少女小説
宗教小説
教訓小説

作（譯）者

山田美妙
前田曙山
柳川春葉
小栗風葉
伊原青々園
山田旭南
福地櫻痴
生田葵山
中村春雨
村山鳥逕
大澤天仙
谷活東
新田静灣
村井弦齋
小杉天外
半井桃水
堀口新泉
南新二

幸堂得知
瀨戶半眠
武田仰天子
德富蘆花
草村北星
大倉桃郎
大橋乙羽
黑田湖山
竹貫佳水
泉斜汀
渡邊溫
尾崎紅葉

藤田茂吉
木下尙江
尾崎庸夫
井上勤
牛山鶴堂

五　政治小説

政治小説
- 政治小説
- 社會思想小説
- 社會主義小説

作（譯）者
- 須藤南翠
- 矢野龍溪
- 東海散史
- 服部誠一
- 織田純一郎
- 末廣鐵腸
- 宮崎夢柳
- 小室案外堂
- 中江兆民
- 關直彥
- 久松義典
- 尾崎學堂
- 內田魯庵
- 坪內逍遙

右の表を見て、逍遙、紅葉その他の加はるを異とするものがあるかも知れぬが、逍遙はリットンが小説「リエンヂ・ゼ・ラスト・オブ・ゼ・ローマン・トリビューンズ」の譯本「慨世士傳」の譯者

として、又、紅葉は少年小説「俠黑兒」の筆者として參加せらるべきである。（此場合、少年小說はお伽噺以上の少年主人公の煽情的小說を指す。）

通俗文藝を分つて右の如くにしたは、いふまでもなく明治のそれを分類したのであつて、一般大衆文藝そのものゝ本質を產べて、これに適當の分類を本質的に行つたのではない。

若し、讀者多き作者と然らざる作者との二方面よりこの分類を試るとすれば、夏目漱石の如きは當然第一の種類に加つて通俗作者の一人とするが至當であり、森林太郎のごときは後者の運命的なるものゝ代表人物であらう。

が、問題は如何の點までポピュラーであるならば通俗的であるとするのか、讀書の鑑賞理解の程度を如何の點に置いて通俗非俗を決定するのかにあるのだが、その時代として進步した藝術の形式內容を完備した作者なら、その時代の進步せざる藝術味解者即ち不完全なる教養人の大多數によつて占領せられる最も廣義の小說讀者、文學讀者の世界には、不向きであることいふまでもないから、結局は高級作者ほど非讀者向で、低級作者ほど一般的であるに相違ないので、この場合讀者向き、非讀者向きに讀者を對象としての目安があるわけはなくとも、藝術作品の高下の判

定の上に標準が置れて、その高下に準じて讀者のたかが反比例すると思へば間違はない事になるから、結局は讀者の數及びその質を考量して二種を辨別しうるわけである。

が、かくいふと次の如き常識的質問が出るだらう。漱石は明治文壇の巨人であり、文豪である。然るに讀者がかくも多いのは何故か。莎翁は世界の詩聖である。然るにかくも夥しき讀者を世界各國各時代にわたつて有するこれ又何故かと。莎翁が各國各時代にわたつて讀まれるのは眞に傑作であるからだ。莎翁の大は一人のトルストイの反駁によつて微動だもしない。が、大部分の各國時代の讀者がもてはやすは、一には世界の大詩聖の傑作であるといふ先入見により無批判的に盲從的に流行に追隨する如き心理で喰らひ試みるにすぎないので、二には莎翁のテクストのコンストラクションのメロドラマ風の形態に隨喜するので、このメロドラマ風の個所をのみ淺薄にも味つて見て、以て莎翁を讀了してしまつたやうな盲目的安心と强ひられたる知識的虛榮心を感じてをるもの、これが昔から今日に及ぶ大部分の莎翁の讀者の本體なので、一般の讀者にとつては莎翁は依稀としてスフィンクスであり、未知の世界である。さればこそ、眞摯なる一人の莎翁文學の研究者トルストイによつて投げられた大膽な宣言が、一たびは歐洲の評壇に少からざる動搖

を與へたので、よしんば難語を了解し得ても故事に卒業しても莎翁の難解は依然として些かも除去されはしない。此處は、少數の文學の正解者のみがよく正しく味解しうる聖地である。

漱石の作品が明治から大正にまたがる小說の中で卓れたものゝ一つであるに相違はないが、かれの世界は鏡花のごとく畸異でもなければ荷風のごとく遁避的でもない。かれの思想は當年の自然主義者のごとくに自ら新見地に立つたと意識せられたものでもなければ、かれの文學趣味は新興詩歌に冷評を浴せる以外に賢明な態度を決しえなかつた程度に尋常であり保守的であつた。かれの小說が面白かつたから俗流に弘通したのであるが、面白かつたのは一般教養階級に判り易かつたからで、判り易かつたのは明快の文脈と趣味の傳統性と低徊的遊離性と眞摯の觀照態度とが卓れてゐる上に、何等異常の立脚地に彳立したものではなかつたのが條件の一つで、われ〳〵は、明治的なるものゝ總勘定の重要部分を、かれの細密な心理描寫と神經質な感情思想の叙述で覘ひ知ることは出來るが、あの當時萠え出でんとした新感情、新趣味及び新思想の芽生を明確にあの小世界の中に捕捉することは出來ないのである。すなはち、古きものゝ一般的なるものを最も賢明に懇切に穩當に而して同時代的に解釋した人の記錄として卓れた位相を持ちうるけれども、漱石に

は創作の筆をとり初めた最初からいつも古い殼がこびりついてゐたのである。甘い會話をする當世風（三四十年代風）の書生や令嬢が出て來るが、それが悉く一時代古い香を持つてゐた。同時代になり切つてゐなかつた。にもかゝはらず同時代的らしく考へさせて粗笨な讀者を感心させたのは、かれの忠實な熱心な緻密な心理描寫のおかげに外ならぬ。だから、漱石は日本のあの時代でこそ卓れた一人であつたが、此頃誰ぞやが愚劣にも考へるやうな同時代の歐洲文壇に出したら非常に卓拔な一人の作家であらうなんぞ決してありはしない。漱石の諸作よりも鷗外の「高瀨舟」の方が卓れてゐる。「高瀨舟」の文體の妙致は一般讀者には一寸判りにくいが、漱石の「道草」や「彼岸過迄」の缺陥を指摘する事は難事ではない。（漱石の小說は「心」に於てその頂點に到達した。）

晉に漱石のみではない。紅葉も亦さうである。此二人のみでない、逍遙もさうである。かの鋭感なる二葉亭すらも「其面影」では極端に凡下に墮俗してゐる。逍遙や紅葉や漱石は、作家の本質により兩分し鷗外や露伴や鏡花や荷風を一つの種目として立つと、どうしても他の種目に入れねばならぬ人々である。鷗外及びその他が皆卓れてゐて、逍遙その他が劣つてゐるといふのではなく、ひとしく明治文學者中の卓れた作家等であるが、一は普遍的にして一は特異的な世界と思

想と趣味と感情との生息者、所有者であつたといふところから明らかに兩分されうるのである。紅葉、漱石等はその「金色夜叉」や「我輩は猫である」の類型描寫手法の作品によつて代表せしむると、最も廣義の意味にひろげて明治の大衆文藝の系統にとり入れらるものであるとしても、必ずしも見方によつては失當ではないのである。

が、爾く明治大衆文藝をひろく考へてしまふと、何時しか何處までが大衆物で何處までが藝術物かその間の差別を判然と立てることが難かしくなる怕れがある。同じ紅葉の作にしても「多情多恨」や「不言不語」は嚴然たる卓拔なる藝術物であるが右の「金色夜叉」は大衆物に近いといはれぬだらうか。筋の運び方、その筋を運ぶ精神、人物の描寫の重點の置き方等を見ても、後者が新聞物であるといふ關係もあつて、性急にして藝術的に無知無神經な、只徒らに刹那の低級興味の轉換と續出とを希ふ讀者をつひ念頭に置いてゐるところから自づとさういふ傾向の作品になつてゐるのは止むを得ない。紅葉一代の作集を見て、新聞小説に執筆した彼を考へれば誰もさうなる方が自然だと思うであらう。その「金色夜叉」は、紅葉の中斷せられた將來を幾分の失望に導きかけたものでこそあれ、決して佳作ではないのである。して見ると、藝術小説も書き大衆物も書け

寧ろ一歩あやまつ時は決定的にその方に陥つてしまひさうな紅葉ではあつたが、(今日迄生殘したと假定して嚴乎たる藝術小說の領域に高踏しうる幸福なる明治の所謂文豪は何人あるだらうか。)少くとも殘されたる作品だけによつて判斷をして彼は嚴密な意味の大衆作家ではないが大衆作家の素質夥しき藝術的作家だつたとはいはれよう。而して「金色夜叉」は、今日のいはゆる藝術物の小說作者が敢て試みてゐるやうな大衆物的素質の勝つた作品であつたのである。紅葉を去つて同時代の諸作家に到ればその危惧が一層甚しいに愕く。

秋聲のごときは運命的に大衆物の拙劣な作者であつたが、生存上の必要から新聞物をしば〲試みたに拘はらずその方面では悉く失敗してゐる。荷風の如きも、外遊もせずに詳寫的寫實主義の手法と柳浪小波櫻痴等の師友を心のたよりにして、三十年代の文壇に空しく書き且遊んでゐたら、立派な田村西男の兄弟分になつて、今日の幽雅と高致との妙境に達しはしなかつたらうし、假令ば西男程度でないにもせよ、著しく見劣りせられる地處にしか落付けなかつたに相違ない。荷風にとつて外遊は內なるあるものを生かし出す絕好の機會であり、內なる他のあるものを亡ぼしつくす唯一の手段であつたのである。苦心して自ら花柳小說と名のつて反抗的反語的厭人的心境から

「おかめ笹」の類を書いても、譬へば水心ある者が投身しても本能的に身を泳がせて死ねないごとくに、到底典型的なる大衆物は書けないのである。（固より大衆物など覘つたのでない事はいふまでもないが。）

鏡花は生れて特異の心境の所有者であつたから當年流行の通俗物に走りはしなかつたが、驚くべきその天分と同時に微笑まるべき無知と淺薄と時代錯誤とを同時に持つてゐたから、その讀者は風葉のごとき書生でも捌汀ごとき丁稚でも幽芳ごとき女書生でもなかつたけれど、鷗外のそれのごとき高級の讀者は寥々たるもので、多くはこの特異の作風に讃美する高下甲乙打ち交ぜた雜多の中からいはゆる鏡花好きなる讀者のみが選び出されたので、當年に於ても今日に於てもさうだが、謂ふ所の鏡花信者は日蓮狂の善男善女と同程度で一流の怪談興味と一風變つた江戸下町情調と任俠好きとに只もうわけもなく隨喜の涙を流す鏡花イチス患者で、最もよき意味で鏡花を買つて居る高級讀者は、當代何人もよく表現しえざるユニークのロマンティック精神を、唯一人の鏡花のみが、多くの不備とする個所を有しながら、一面夥しく强く鋭く濃く所有してゐるので、その一面を好愛して他の一面は吾と自分でわが念頭に棄て去りながら鏡花を好愛してゐるのである。鏡花物の中には藝術小說の天稟と大衆物の素質とが雜然と同居しながら、それが彼の特

異の單色で蔽はれてゐる。彼の通俗性は不思議な因縁中に介在してゐる。

以上の例を擧げて知るごとく、通俗物は興味中心の筋の運び方、人物の出し入れ及びその創造法を敢てするのでなければよく滔々たる天下大衆の一顧をも希ふわけにはゆかないのであるから勢ひヤマ澤山になりケレン多しとなつて無益な涙や贅肉のごとき道德思想やとつてつけた樣な宗教觀が這入らざるを得なくもなり、通俗物といふ世界の埒內でよく成功すれば、變轉する幾場面とカミレオンの如くに筋のために變化を强要せられる性格人物と藥味澤山の涙壺とサッカリンと宗教道德任俠義憤のピリリと來る唐ガラシとの間に在つて、巧みに自然性を保ち現實性を支へ持つて、ロマンティックなる一棄の類型の藝術を作り上げることに成功する。寫實的にロマンティシスト、又はロマンティックの寫實小說家にこれが多い。（後章坪內逍遙の「小說の三派」の項參照）

普遍的であるといふ事、これが先以て通俗物作者の中心生命であつた。今後とても決して大衆作家はこの的だけをばはづすわけにはゆかない。明治の通俗煽情の文學は、この一點に於て幾種類かのものが結ばれてゐる。その時代々々特別の時花りの興味に、萍を追ふごとくに追隨しながら、或は任俠に或はプロテスタントに或は惡魔主義に或は國粹主義に或は社會主義に或は江戶趣

味に或は人道主義に看板を塗りかへ〳〵して變遷を重ねた。その變轉の間で、煽情文學そのものの本質の上に幾分の變化又は進步の跡があつたらうか。

煽情文藝の展開

一　政　治　小　說

明治文學は飜譯とその影響史とであるが、その最初の何頁かを率先擔任したものは政治小說であつた。

彼等プロシヤ軍政の憧憬者やフランス文明の謳歌者やイギリス政治組織の嘆美者などがとり入れた新輸入品のなかで、政治軍事產業の施設の方法精神と物質科學の知識とが特に長足の進步をしたのは、新興國のならひでもあり、十九世紀中期文明の吸收者として當然の歸結でもあるが、それにしても德川文明の殆ど一時は表面的だけでも跡方なく崩れてしまつた觀があつた程の維新當初から鹿鳴館時代に及ぶ歐化主義時代に殘つてゐる文學は、化政度から頽廢期に入つた德川王朝の殘滓文學で、假名垣魯文を代表者とする山々亭有人二世柳下亭種員、笠亭仙果等が生殘つた

といふのみであるから、舊時代の卓れた殘存者の怡悦をかふことが叶はぬのみか、新時代の青年者流の惝怳の對象となること固より思ひもよらず、たゞ一般民衆はその俗惡の臭味と淺膚の諷刺とを喜んでこれを當代の代表作家とし、これを當年の代表的民衆文學家と稱した。が、これらは、舊趣味に淫して開化思想に遠くから冷嘲半分に迎合したのであるから、その諷刺その皮肉は諷刺のための諷刺か、皮肉のための皮肉で、その諷刺には大なる熱情もなく、その皮肉に鋭い批評があつたわけではない。

しかし、これを新興の政治文學に比べると如何かといへば、措辭の巧妙に於て、曲折ある感情の自由（あるひは放恣すぎる）の表現に於て、新しき民權文學は舊き殘黨文學に遠く及ばぬのである。

たとへば魯文が明治になつての作「西洋膝栗毛」といひ、「安愚樂鍋」といひ、「胡瓜圖解」といひ、その諷刺はくすぐりの程度を出でず、その精神は理想も主張も定かならぬものである上に三馬を眞似ても一九をしたつても馬琴に流眄をそゝいでも種彥によつてもその何れにも及ばず、しかもその何れも就中一九三馬を倣ひ試み、福澤諭吉を文字り、「西洋事情」を基礎とし「窮理圖

解」を臺本とし岡丈紀の譯本を手にし常に「牛肉(ウシ)を食ビールを飲み、體を壯健にして壽を保ち、利を得て國を富ます」(「膝栗毛十一篇の序」)の流儀の文章をば書いてゐたのである。今、「魯文珍報」第五號(明治十一年一月二十日發行)を檢するに、

○日本劇場(にっほんしばい)の革面(かくめん)附り水戸黄門略記

○和灑上僊史玉晴又寄魯文翁　竹頼子

○双人車題詩　同氏

○詩歌狂文

○造物機關　前號の續き

○長夜の怪夢　竹田早苗

○熟果の話　中坂まとき

○土耳其通史第二回政治の部

○春窓娘學校第四回爲永喜蝶女春江翁鋪綴

等の目錄で、第一のは演劇史。造物機關といふは漢文のつゞき物小說で、活々道人と署名してあり。

若得二這等美人一　而作二妬房一　便死也甘心　左思右想不レ覺下二三更一　青衣乃進二臥房一　把レ手導レ之　彎々曲々　走二過許多房頭一　到二一個所在一　云々。

の如き文體、「長夜の怪夢」は小品小說で、「熟果の話」は

日本一般（デハナイ）裏店社會の男女不同權なるは未だ開化の熟せざるものあらん何ンだ此奴ら辨亂迷我利々々朦者のスツトコ野郞が横恣放縱無雅無茶苦に喧嘩するのを自由自由と心得たるは未だ知識の熟せざるものあらん。云々

のごとき下手な諷刺文、「土耳共通史」はトルコの歴史で、「春窓娘學校」は爲永張りのつゞき物小說である。

魯文及びその一派の社會的關心はその諷刺の淺薄なると比例して輕浮を極めてゐるが、これが一般讀書界の夥しき歡迎をうけたのは、その表現法や文體に感情や趣味に舊來の因習が多く容易に解しやすきがためと、新たに採り來る材料が「西洋事情」やら新歸朝者の談話やらを骨として

見たところ珍らしさを恒に誇つたので、その皮肉やくすぐりやとともに俗耳に入りやすく俗解を招き易かつたために外ならぬ。畢竟魯文一派は、德川末期頽廢文學の最後の殘黨であり殿將であつた。しかも決して力量卓れた殘黨殿將ではなくして、當時の風俗畫の說明　文明史の側面觀としての土俗學的興味以上に出る文學史的重要を持つてはゐなかつた。

德川末期文學殘黨でかの魯文と對立し然も魯文より遙かに藝術心の卓れたものがあつたのは河竹默阿彌であつた。

默阿彌の脚本は德川末年から發表上演ぜられてゐたが明治になつての作は特にいはゆる「散切物」または「散髮劇」は主なる物が明治六年から二十七年までの間に(河竹繁俊の記錄によると)十九篇あり、十九年の「西洋噺日本寫繪」とか十年の「女書生繁」とか十二年の飜案物「人間萬事金世中」とか十八年の「水天宮利生深川」とか二十一年の「音聞淺間幻燈畫」とかはこれ又土俗的興味以上の何ものをも、默阿彌劇史に於てすらも、持ちえないものゝみで、時勢に追隨せんとする彼の企ては外態だけで、内部これに伴ふには、彼はあまりに德川的であり完成せられたメロドラマの巧妙家でありすぎた。

これら殘黨文學者の社會的幾分の關心から去つた新興政治文學者のそれに移ると、遺がに全く變つて、西南役後フランス自由思想が急激に輸入せられて、ルソオ、ボルテイル、モンテスキウが祖述せられ、國會開設の大詔に勢ひづけられた靑年者派の政治的夢想は、實際政治の論評を試みることの自由を奪はれてゐるところから。文學の形式をかりてこれを表現しようとしたもので、こゝには舊來文學に對する不滿が新政治文學の形式を喜びうけ入れた事實もその原因の一をなしてゐる事を見のがしてはならぬ。

松村春輔が戊辰役やら井伊閣老事件やらを取材して一種の戰爭物語を書いたのは明治八九年の交であるが、その「復古夢物語」といひ、「近世櫻田紀聞」といひ一般讀者の歡迎をうけたのは單に事實の興味に基くもので戰爭に新解釋を與へた譯でも燃犀の史眼があつたわけでもない。さきの魯文が「假名讀八犬傳」の作は恰も明治元年で、かの種彥が「白縫物語」の續篇が出た時であるが、三年には「西洋膝栗毛」と「胡瓜圖解」が出、五年には「百貨物產西洋機械」や「大洋新話」が、六年には「世界部路」が、七年には「佐賀電信錄」が、八年には「現今支那事情」が、又、萬亭應賀の「日本女敎師」や「權兵衛種蒔論」やは七年に、「異形異物各覽會」は八年に、佐

伯白茅の「極端開化」は八年に出てゐる。その松村春輔が作の出た八年頃までに既に南部義籌の「修國字論」が出て洋字採用論あらはれ、西周が「明六雜誌」にローマ字論を揭げてもゐれば、スマイルズの「自助論」譯本や神田孝平の演劇改良論などが出てもゐる。西南役前後から自由思想の横溢と官權の壓迫との具體例は既に八年末廣鐵膓が曙新聞在社中禁刑に處せられた頃にはじまり「童蒙新聞」や「めざまし新聞」の發刊は新聞紙條例の發布と前後し、「頴才新誌」「花月新誌」の刊行は紀尾井坂の變と隣りし、村上佛山の死は新約聖書の完成と時を等しうし、中村正直の「西國立志編」に呼びさまされた少年は、やがて、ルソオの「民約論」やスペンサーの「社會平權論」やに刺戟されて、「萬國新史」、「泰西通鑑」、「西洋輿地誌略」、「西洋見聞錄」、「人身窮理」、「萬國公法」、「博物新論」、「眞政大意」、「立憲政體略」等の政治歷史地理學上の新著による智識が根本となり、明治十二年リットンの譯著織田純一郎が「通俗花柳春話」の愛讀者となつた。同じリットン小說では坪內逍遙遊八譯「開卷悲憤慨世士傳」(十八年)、磯野德三郎譯本「サクソン王の名殘ハロルド物語」尾崎庸夫、藤田茂吉同譯「諷世嘲俗繫思談」(十八年)、その外「ポンペイ最後の日」の邦譯本「綺想春史」、政治小說ではないが同じリットンの「夜と朝」(二十二年)は益

田克德の譯になつた。（小野次郎譯三木愛花閲「名将佳人遠征奇縁」（一名西洋水滸傳、十九年刊）も附記しておく價があらう。）

その「一夜と朝」に森田思軒が序をものしてゐる。曰く、

曩ニ我邦小説ノ趨向將ニ一變セムトスルヤ。織田氏譯スル所ノ「花柳春話」之レガ嚆矢ヲナセリ。而シテ是レ實ニリツトン氏ノ「マルトラバース」ナリ。而後西洋小説ノ我邦ニ譯サルルモノ紛然群起セリ。然レドモ其ノ文體ハ率ネ東洋ノ舊ニ仍リテ。未ダ生面ヲ其ノ間ニ開クモノアラズ。藤田氏ノ「繫思談」ヲ譯スルニ及ンデ。造句措辭別ニ一機軸ヲ出ダシ。或ハ艱奥ニシテ通ジ難キモノ無キニ非ズト雖モ。其ノ原本ヲ臨ル謹嚴精微。今日無數ノ周密文體ハ其ノ紀元ヲ此ニ遡求セザルヲ得ズ。而シテ「繫思談」ハ亦タ實ニリツトン氏ノ「ケネルムチリングリー」ナリ。何ゾ其遇ノ太ダ奇ナルヤ。嘗テリツトン氏ガ政治世界ノ生涯ヲ觀ルニ。ビーコンスフヒールド伯ヲ少年ノ日ニ知リテ。之ヲ愛蘭黨ノ首領ニ薦メ。グラツドストーン氏ヲ下僚ヨリ拔テ。アイオニアン群島ニ使セシメ。其ノ鑑識毎ネニ常人ノ先ニ居ルナリ然レドモ復タ安ゾ其ノ著作ガ身後遠ク我邦ニ入リテ毎ネニ文學世界推移ノ先ヲ爲スヲ知ラムヤ。云々。

右の序文中に見えるビーコンスフィールド伯ディズレーリの作は關直彦譯本「春鶯囀」と十九年の「三英雙美政界之情波」（渡邊治譯）とがあり、スコットはアイヴァン・ホーの譯本の跡部素山校補牛山鶴堂譯「梅蕾餘薫」があり、外にはディズレーリ傳の「經世偉訓」（尾崎學堂著）があり、逍遥の莎翁譯「自由の太刀餘波鋭鋒一名該撒奇談」が出たのは十七年であるが、和田垣謙三は十二年の夏箱根に暑を避けて漢文譯のキング・リヤ「李王」を完成したが出版はしなかつた。十九年には同じシーザ劇が鶯林學人、天香逸史戯譯「羅馬盛衰鑒」となつて上梓せられてゐる。

フランス小説はデューマの譯本が「自由の凱歌」「西洋血潮小暴風」等となり、關直彦譯「開卷驚奇西洋復讐奇談」（モンテクリスト第一篇）となり、小川忠武譯「佛蘭西二人皇后」とあらはれ「鬼啾々」「夢戀々」等も佛露革命史を取材とせるその演義本であり、筆者は宮崎夢柳、小室案外堂等で、二十年には天香外史編次學海居士評點の「慨世史談斷蓬奇緣」四卷が上板せられたが、これはエルクマン、シャトリヤンの「マダム・テレーズ」の譯本で、卷頭にフランス國歌の譯歌を揭げたのはこの種の國歌譯の嚆矢であらうか。その外にエーンズウォスの「倫敦塔」の譯本「悲風慘雨」は愛花仙

史の意譯で、鐵腸居士の譯述小說「雨中花」やチュール・ヹルヌの譯本井上勤が「政治小說佳人之血淚」、モアがユートピヤの譯本「良政府談」、本多孫四郎の譯述小說「鮮血日本刀」があり、二十一年には莎翁のコリオレエナスの譯本「白山之笛 恩愛之繼豪傑一世鏡」(板倉與太郎譯)等あるは、多く政治思想上の興味が基本となつての飜譯仕事で固よりいふ迄もなく原作や作者の詮索や考證をした上の學問仕事でもなければ創作に準ずる熱情を持つての純文學的の仕事でもない。また「政教小說蒙里西物語」や「泰西美開共和之色旗」は大石高德の譯本で右の範疇に入るべき種類のものである。

右の長々と述べ上げた飜譯物は、凡べて政治的正義又は自由への憧憬に出立する青年政治家政論家又は政治上の野望家の手間仕事で、彼等にとつて文學は經世の一助たるにすぎぬのであるから藝術上の苦悶も內省もなければ技巧上の斬新も妙趣もないのだが、在來の文學一旦こゝに廢れて古書再刻の業なほ起らず、心ある少數の學匠、藝術家、藝術愛好家は塵埃徒らに堆き傳來の古板本を飜して悠々とその鑑賞家たり說明家たり考證家たる立場に晏如としてをるにとゞまり、古文學の普及や、テクスチュアル・クリティシズムの促進や、絕對批評の展開などに心忙がれるものが無かつたから、江湖の無知性急の大衆は低級俗陋の興味と獸性の慰安との手段としてこの新開地時

代の新開地文明の新開業文學として直接に痛烈に實生活的に興趣と射利慾と射倖心とをさへそゝる新興政治文學に青春の憧れを寄せたので、リットンといひディズレーリといひ文學者として三流四流の人物で、しかも政界に一方の覇者たりし人の政治興味背景の低級なるローマン文學を喜んだのは當然である。モアの「良政府談」は入手せぬから批評は出來ないが、從來屢々飜譯の嚆矢と稱せられ、さきに引いた思軒文も亦それを證としてゐる。「花柳春話」を見るとその叙に、

摩康隷曰く　史に三種あり一に法律史と曰ひ二に戰爭史と曰ひ三に風俗史と曰ふ(中略)制度の事は波瀾氏之を記し戰爭の蹟は比由氏之を載せ風俗人情は則ち蘇格氏之を述ぶ英國一般の史は此三書を併せ讀で始て知るべきなり(中略)此書は英人李頓氏の著にして英國近世の風俗人情を寫して剩す所なく政事家の內秘、黨派の密情、親子の親、夫婦の愛、貴賤の別、貧富の差其事は皆人の視て而して未だ見ざる所を載せ、人の知りて而して未だ識らざる所を記す(中略)余嘗て英國より還の後此書を譯して以て世に之を公にし以て英史を讀む人をして其近世の風俗人情を知らしめ且英史の本體を完備ならしめんことを望めり　云々。

而して十二年の舊譯本は漢文體で婦女兒童に解しがたいから此平易文章の新譯を出すてふことはり書きを十七年版の新刻書に叙してあるのだが、最初の版は

第四十一章　一日逢君々不識　十年紅涙爲雨來

「ベンタドア既に衣を乾かして室に入り來れば只マルツラバース一人なるを以て胸中悖々滿面に紅を潮すマルツラバースも亦心穩ならずベンタドアを顧て曰くハーバート去て馬車を送らんことを約して去れば幾くもなくして馬車來るべし時に知らず侯は何れの所に去りしや言うて又曰く僕唯だ君が身雨のために害せらるゝなからんことをベンタドア曰く憂ふ勿れマルツラバース問うて曰く僕明日龍動に行んとす君若し命ずる所あらば僕幸ひに之を奉ぜん。」

の如き文體だが、右の個所を新訂譯本第三編から抜いて見ると、

第三十八章　雨を避て旗亭に氷人を恨み　車を停て隣房に情郎を見る

「斯て其翌日は朝まだきより仕度して巳刻下りにドニングデイルと其子ハーバート、マルツラバース、ベンタドアの四人は連立各馬に跨りて出行野邊は夏草の繁れる上を踏ならし行手急がぬ道なれば各意に馬を立て（中略）ベンタドアは衣を乾かし前の書院に入來ればマルツラバ

ースの唯一人悄然として座して居れば胸中に何とやら羞らう色の面に現れ少女にあらぬベンタドアも戀しといへば時ならぬ紅葉に顏を照しけるマルツラバースも心中に穩かならぬ思やありけんベンタドアを顧視てハーバードは驟雨の晴間遲きを憂く思ひ馬車を迎に遣らんとて今しも獨歸りたり侯は何處に行たまひしか昨夜の眠の足ざるゆへか僕霎時眠みて無禮の所爲してけりと言了ては又問やう和君の雨にそぼ濡て身體に害はなかりしやとベンタドアは打微笑否毫ほども害はなし必ず心に懸たまうなとマルツラバースは又言やう僕明日は龍動に行まく思ば何にまれ和君の貴命を便ずべし厭で告させたまひなば此上なき幸に侍るかし」

即ち、さきの直譯演舌文章は完く馬琴風の七五調讀本もどきに變つてゐる。その第一章を今一度援引すると、

「都なす街巷を距ること四里許り最と廣漠なる荒原あり綠草は脊丈に生茂り行步る路さへ絕絕に往來ふ人は稀にして唯聞くものは吹風の草葉に戰ぐ音ばかり其荒涼き慘景は外に譬へんやうぞなし況て頃しも冬の夜の白黑も知らぬ烏羽玉の暗の折柄降しきる雨を誘うて吹風に野

末の草の間隙より遙に見ゆる燈は誰が住む家か知らねども滅ては明る其狀は燐火の光に異ならず最と凄然狀景なり」

こんな拙い定文句の羅列であるが、不思議に內容と調和して一種のスタイルを構成してゐる。この如く初版と再刻とは文章が一變してゐるから、これを一緒にして論ずるわけにはゆかぬが、以前の更に拙かつた生硬文章に於てすらもその原作の新と奇と妙とが如何に歐化の第一階段に當時の一般民衆の異邦趣味をそゝり新派體小說の魁たるを感ぜしめたかは推測するに難くない。或は再刻文章の方は譯者以外の人の加筆かとも推される節がないではないが、何れにせよ「花柳春話」の影響が其後續出した政治小說や傳奇小說に及ぼしてゐる度合は、今日吾等が漫然と臆測する以上のものがあつたらう。此書の內容の如き政治小說の純なるものではないが、さきに引いた序文に見ゆる譯者の期待によつて判る通りの第二義的目的によつて企てられた仕事であるからしばらく此書を以て政治小說の第一書とするは、その影響範圍性質から考へても至當である。

「梅蕾餘薫」は前書よりも達意の點で卓れ情趣の乏しい點で劣つた馬琴調で、「慨世士傳」は

第一套　断腸の因と成る豪族の太刀風　大業の基を啓く英雄の袖の雨

徒にすぎし往古ぞ忍ばるゝ。羅馬は都の名のみにて。隊婆河は今も尚、溶々として舊のごとく。都城に沿うて流るれども。往て還らぬ河水の。世の盛衰の不可思議なる。

式の文體であるが、もと賀來某が百葉あまりを譯したものを土臺にして訂正續稿したもので、次第に筆が圓熟して此種傳奇文體として最も確實な、これ亦馬琴體に外ならぬ。譯者は序して泰西の小說はひとしく勸懲といふも、そを賓位に置き人情を專ら寫すが和漢のそれは夫れとは正反對で、今日尚その影響が多いから泰西正傳奇の標本として之を譯した。本書第七套女丈夫、夫に逢ふ條の如き、豪邁なる俊傑もいと女々しい女を抱くは『いと不思議なるに似たるものから是なか〳〵に人の情にて意をとどめて讀みる時には不可言の妙を覺ゆべきなり。』云々と云つたは「小說神髓」の主旨を豫唱するに外ならぬ言葉であらう。

「繫思談」。尾崎庸夫の譯筆を鳴鶴藤田茂吉が加筆したものらしく、思軒が賞美せるは「然り、予はしかく信ず」風の文體が氣に入つたのであらうが、名譯でもなければその感化は思軒以外多く

を見ぬ。只思軒のみはこの文體に於て一家をなし、この文體に於て獨自の小説文章を完成したけれど、その「無名氏」(三十一年)を最後に、政治文學の飜譯文章に於てこの種の影響は打ち絶えてしまつた。(加藤政之助譯「英國名士回天綺談」は小説ではないが、この期のこの種の興味から生れた特産物である。又、ツルゲーネフの「父と子」が早く紹介されてゐると聞いたが詳かにしない。)

創作的政治文學では矢野龍溪が、報知社員佐藤藏太郎に演述略記せしめ、後嚴密に訂正を加へた希臘史談「齊武名士經國美談」が十六年三月に出てゐるが、纂譯編述の俗史談で創作とも小説とも云はれぬが、內容の珍奇と文章の明確とが讀者を呼んで、生中の小説以上の興味と感化とを與へた。但し、著者自らの意圖は「正史實事ヲ專ラ記載スルノ本意」(「凡例」)に基いて「人情滑稽ヲ加テ小説體ト」(同上)したものであるが、結果として見れば政治小説的興味と感化とを惹起した注目すべき作品となつたのである。同じく藤田鳴鶴の「文明東漸史」が純小説の埒外にあつて大衆の讀物となつたのは、一にその內容文體の所爲である。外にはやゝ趣は異るが阪崎紫瀾「汗血千里駒」を初め柴東海散史の「佳人之奇遇」及び「東洋の佳人」、矢野龍溪の「浮城物語」、末廣鐵腸の「雪中梅」、「花間鶯」須藤南翠の「綠簑談」鐵腸の「大海原」、乙羽の「累卵の東洋」等

が著名であり、紅雪散史の「一聲」はその序に、

　憚り乍ら謙退ながら第二十世紀日本社會の未來記で。前古未曾有の自治制度のスッパ抜きで御座る。出版すれば屹度賣れます。東京中の弗匣を買切つても足りますまいから。云々

と述べたてた際物にすぎず、二十五年の「明治の花」(城南逸史)流の淺薄な政治小說が、探偵任俠の通俗ものにとつて替へられてから、この種の素人文學はぐつと少くなつて、いつの間にかその姿をかくしてしまつたが、三十五年に出た内田魯庵の「社會百面相」に凡ゆる社會相の側面觀的縮圖が見られるとともに、續いていはゆる社會主義小說木下尙江の「良人の自白」や「火の柱」が現れた。この魯庵文や同じ人の「暮の二十八日」や「社會詩人」(卅五年五月「文藝界」)や、右の尙江文は直ちに通俗小說煽情小說とする事は出來難い純藝術小說にして社會的關心に立脚したものであり、「社會百面相」は昔からある氣質(かたぎ)ものゝ轉生であり、且その立場にあつては注目すべき作品で、尙江の小說は傾向小說のあくの强いもので、社會主義文献の一としても明治小說史中の異色としても、巧拙は別問題としてやはり注目すべき作品であつたが、こゝに批評する大衆性の作ではない。又、蘆花の未完の主著「黑潮」もこゝに論ずるべきでないからこれも割愛してお

く。前に戻つて「雪中梅」を見ると、その文章の拙さ、結構のまづさ、何故にこの作が有名の政治小説かと訝かしく感ぜられるが、上篇九十四頁國野某の武田某に與へた手紙中に、ダイナマイトと印刷して、明らかに判る程度に縱斜の線を引き横にダイヤモンドとしてあるは、書き違へといふ趣好になつてゐるのだが、之を評點で「暗ニ近日ノ一事件ヲ擧ゲテ之ヲ飜案シ半部ノ趣エト爲ス何等ノ才思ゾ」など賞め上げてあるのを見ても、評者作者の態度力量は知られる。之が一知半解の政治志望の生書生にもてはやされた事はいふ迄もない。「佳人之奇遇」は散史費府の獨立閣に到るに初まり、

「淸人アリ杯盤ヲ周旋ス共應對擧止ノ凡ナラズシテ尋常ニ異ナルヲ觀ル齡大凡五旬ヲ超ユ幽蘭紅蓮ノ談ヲ聞キ眉宇激スルガ如ク傷ムガ如ク襟ヲ正シテ進ミ幽蘭ヲ揖シテ曰ク今ニシテ初テ兩孃ハ國家ノ忠臣烈女ナルコトヲ知レリ老奴モ亦亡朝ノ孤臣漫ニ自ラ料ラズ前朝ノ恢復ヲ志ス者ナリ」云々

の筆法であり、「東洋の佳人」は僅かに三十頁内外の同趣異文である。「浮城物語」は冒險興味と政治興味を結びつけた長編で、結構も雄大で、科學的道具立を用ひ、想像力の豐富は前記の諸著

遠く及ばぬ。「綠簑談」や「新粧之佳人」は南翠の出世作で、後者は歐化社會の寫眞景であり、前者は序文でソーバーの「セルフ・ガバメント」にヒントを得たと斷つてゐるが、あの中に扱はれてある地方農民生活の問題は、自治制確立に伴うて當然叫ばれねばならぬ問題で、本著はその最初の作として見られる。尙他に豫想記的雜著を附加するならば、春の屋の「內地雜居未來の夢」や鐵腸居士の「明治四十年の日本」までをも名前丈けは云つておく必要があらう。

かくの如き政治文學、社會思想の文學の見るべきものは煽情物方面に於てのみではない。藝術物の中にすらもつひに見出されなかつたのであるが、特に、社會主義基調の文學といふほどのものは固より刊行を許さるべくもない（兒玉花外の「社會主義詩集」は殆ど標題によつて發賣禁止を命ぜられた）から、クリスチャン・ソウシャリスト的の尙江小說以上に、深く對象の問題を掘り下げるわけにはゆかない。大正改元後近年社會講談など稱するものが出たが、社會思想の弘通の立場から見ても、大衆文學の見地から見ても、何等注目すべき文獻には接し得なかつたし、その作者の元祖といふべき白柳秀湖の町人物は、社會思想を弘通する以上に、任俠もどきの香氣が勝つてゐるのは、社會主義よりも通俗文藝の興味の方が作者に於てより强い爲であらうか。何れにし

ても稚醇なる「離愁」の文學がこの作者では佳品である。石川啄木の歌は、大衆抒情の詩歌とはいへぬからこゝにはあげぬが、たゞ、彼のあの調子の歌作のみが啄木の代表的なるものゝ如く、世間多く解釋して疑はないが、その以前の長詩などにもたとへば「吹角」の如きは、當時の青年詩人の何人もが歌ひ得なかつた妙境で、この方面を見のがして、啄木を觀察するは生地と死處だけを知つて生育の地を蔑ろにする評傳家のやうなもので、半解の說たるを失はぬことを云つておきたい。その「吹角」時代が過渡期なれば、社會主義歌時代も亦かの敏感で感受性の強い、從つて模倣の巧みな啄木にとつては、過渡期でなければならなかつたので、たま〳〵あの歳に生を絕たれたが故に、最終晚年の思想業績をもて代表的たらしむるは一理ないではないが、彼の性癖やら性格の特長やらを考へて、更に延壽を重ねた彼を夢想すると、今日想像で造型せられてゐる啄木よりも亦やゝ異つた彼の全形が浮び出て來る。花外はあの當時の浪曼的社會詩人の好典型で、その詩は純情の特長が年齡と共に深化されずに終つて、大衆的なる浪曼社會主義のラッパ卒となつたは彼としては順道であらう。

畢竟政治文學の回顧は、われらに失望を感ぜさせるにすぎなかつたが、元來政治的自覺の漸く

生じた青年國家の常態として、政治が社會國家文化の最高位で、わが野心の對象の最高頂にあり他の文化相悉く之に隷屬するといつた考へが根元になつての熱心な、而して淺墓な政治談義であるから、性の問題でも、農村問題でも、社會問題でも、宗教問題でも取扱つたその事に歷史的一顧の價はあるが、それを打ち眺めるわれらの立場はどうしても土俗學的興味を出でがたい。單純といへば則ち單純、簡單といへば則ち簡單、文化の哲學的詮議は如上の政治小說の何れにも覗はれない。飜譯家として思軒の後塵を拜す力だもなかつた原抱一庵は「聚芳十種」中「闇中政治家」をものしたが、藝術小說とも、通俗小說ともつかぬ愚作で、形式の上からは前者に入り、作者の主觀の出鱈目さ加減から云へば、煽情小說とすらも云はれない。斯うした形式やら筋の運びやらの上だけで、藝術小說階級中に坐し、事實は煽情小說家以下の天分しかなかつたものが明治から今日にかけて仲々多い。藝術小說の非藝術性と、煽情文學の藝術性を同時に論じなければならぬ所以である。(牛山鶴堂著社會小說「日本の未來」(春陽堂發行)。右の書に就いて記述する事を忘却せり。こゝに附記す。)

二、探偵小說

越前守忠相の「大岡政談」は久しい間裁判的興味の對象として、殆どひとり占めの人氣を脊負つたが、尚遠く西鶴の「本朝櫻陰比事」のごときがあつて、德川この方唐山船載の支那種をうけこの種の文學は少くなかつた。即ち、「棠陰比事物語」の如きを初め「鎌倉比事」、「日本棠陰比事」の類はその一である。明治に入つて、それが不相變ず活字本の新艸双紙となつて、廣く賣り捌れたが、名判官の種切れのせいか、新種は頓と現れず、轉じて探偵的興味に移り、コーナン・ドイルの如き原抱一庵や山縣五十雄に紹介されたのが古い方であるが、雜誌類を漁つたら尚古く必ずあつたらう。抱一庵はモウパッサンをも「女探偵」、「再び女探偵」(「泰西奇文」)等にこの種の興味を以て紹介してゐる。蘆花の「外交奇譚」は事實を脚色して、小說的結構とした探偵的興味の讀みものであつた。思軒の「探偵ゆーべる」はユゴーが「隨見錄」中の最長文字長愛文字にして凡べて事實一點の小說的粉飾がないと譯者自ら辯護してゐるのは、譯者の興味の奈邊にあるかを知りうる資料である。

神田孝平の探偵譯本に「揚牙兒奇獄(ヨンゲル)」あるはかつて中央公論誌上で知つたが、外にも探偵談の紹介はあつたかも知れぬ、私が「嗜讀傳發端」で「小旦那藤三」が最初に讀んだと記憶すると書いた

が、並べて見るとそれは三十三年の初秋から「時事」紙に連載せられた伊原青々園のつゞき物であつた。

その外のあり來りのものは、凡そ「嗜讀傳發端」の中に書いてあるから、再び之れを繰返さないが、書き忘れ書き落した資料と意見とを簡單に附加しておかう。

二十一年出版の飜譯に、米國マクウアッテルス氏原著日本千原伊之吉譯述「摘陰發微奇獄」がある。事實談の收錄で、假死僞葬、痲睡藥、遺言狀等二十篇が收めてあるが、日本同盟法學會といふ所の發行丈けに、探偵實記の一である「探偵淵軌」などゝ同じく、小說を餘りに遠避かつてゐる探偵實記である。

五寸針寅吉の死刑は恰も其前年であるから、つゞき物的煽情文學の興味に、探偵的好奇心の誘發が加はつて、魯文の「高橋阿傳夜叉譚」や芳川春濤の「夜嵐阿衣花仇夢」や須藤南翠の「茨木お譚」「新藁おみな」等の毒婦傳や久保田彥作の「鳥追阿松海上新話」やが出たのも同じ誘因圏の事と見て大差はない。長田偶得が「戰時大探偵」に戰爭興味と探偵興味とを結びつけたのは、日淸役前後であるが作としては拙劣であつた。金櫻堂の「長尾拙三」(半井桃水)「雪達磨」、扶桑

堂の柳崖亭友彦が「樹上の死骸」や水田南陽の「ふしぎ」、「生靈」大川屋の「川上行義」、「決死の少年」、「九寸五分」、「うこんしごき」、「戀が罪」、「紫美人」「邯鄲かへし山邊音槌」、「桀井一郎」、「名物藝者」、「ピストルお袖」、「剛賊紳士智光坊」、「櫻木芳雄」、「雪見のお辰」、「馬丁丹次」、「因果華族」、「名人藤九郎」、「南京松」、「大惡僧」、「銀座兩替屋殺」、「遠藤俊慶」、「酒卷やす」、「浪花節お千代」、「大井川殺人」、「横濱三人殺」、「振袖お仙」、「蠣殼町血の雨」、「玉乘り娘」、「大詐欺師千阪光子」、「かる業武太郎」、「横濱小僧殺」、「お茶の水婦人殺」、「澁谷村殺人」、「白菊御殿」、「眞土村騷動」、「武川兵部」、「白狐お仙」。「紫被布お蓮」、「山賊藝者」等は多く當時評判の三面記事をつゞき物にしたものゝ單行本化で、菊亭の「耳と腕」といふ飜譯小說に丸亭が序して

海外先進國の小說として予が最も愛して讀む所のものは、佛國種英國種の激情小說なり、而して今ま子が好む所のものをきけば專ら獨逸種の小說なるが故に、予と子の小說思想に稍々其の寄趨を異にせるが如しと雖も、併し其の凄慘奇想に因て產み出された激情小說といふに至つては均しく一なり。云々

と書いてあるを見ても推される通り、お茶水事件の引延しや千阪光子のロマンス化つゞき物化の

腕前識見と大差はない立場の作者らであつた。探偵小説時花りの餘波として一時は新聞小說が右のピストル强盜淸水定吉や、坂本慶次郎のつゞき物で壟斷されたことであつたが、「早稻田文學」明治二十七年一月號所載「明治二十六年文學一覽表」八月の項に

「春陽堂探偵小說前後廿集を了へ更に「高等探偵小說」を出だす、但探偵小說熱は著く下火に向かへり」

とあるから、二十年前後から七年間位の流行と見てよい。尤も、今古堂からも每月一回の豫定で「探偵文庫」を出しはじめたのが矢張りこの年からである。

涙香は當時連載の「萬朝報」紙上「人外境」の序に

余等の素徒了見にては人の智の駸々として進み、學問の理の日々に新なる今の世なるを以て小說も世と共に進まんと欲せば幾分か「智」に訴ふる分子の有るに如くは莫かるべし。云々

といひ、

新聞紙の續き物といふものは、余の考へにては、其の巧妙よりは事實と事理とを尙ぶべし。

といつたが、恰も同じ時に村井弦齋は「譽の兜」の序に

小說を編まば當に人心を高うするものを編むべし。云々

といひ、

余が物を讀まん人は願はくは形骸を讀まずして精神を讀まれよ。云々

と云つたのを捉へて雜誌「靑年文」記者が

彼が所謂微衷なるものゝ存するが故に、其記する所純潔にして勸善懲惡的の意を寓し、之を天下愚衆に讀ましむるも、其毒を流すこと探偵小說の如くならず。

と評し、「帝國文學」は恬として之れを冷笑し去つた。

又、「朝日櫻」の序で弦齋が

予心と違ひ徒に人をして快を小說中の幻影に呼ぶに至らしむ。云々

とあるを捉へて「早稻田文學」記者は、淚香の事實と事理云々と云へる說と對象し、

或はこれ讀物作者が幾多の經驗より得來れる新聞小說の要諦か、純文學の立脚地以外攻究すべき問題也。

と云つてゐる。

島村抱月の探偵小説論は、當代ほとんど唯一の探偵小説論で、しかも流俗に阿諛して飽くところを知らぬ通俗小說の代表的なるものとして、探偵小說を捉へ來つて、

「發端第一に或疑問を掲げ來たり、讀者をして好奇の心を起さしめ、譬へば數學家の或る問題を解釋すらん時の如く、逐次回を追うて疑を解き、竟に結局の答案に達せざれば止まざらしむ。隨つて第一に望む所は單に疑團の氷解に」

ある「索研的快樂を興味の根本とすること是れ也。」と斷じ、

「作者に多少の小說的技倆ある限は、幾分か人物の性癖をも描き得べきが故に、探偵吏が機敏の働き、若しくは局面の波瀾變化等の上に、若干脚色的面白味以外の面白味を具へしむることなきにあらねど、こはむしろ附屬的條件即ち二の町の面白味にして倦厭を來たさゞらんの用意のみ。」

といひ、疑ふ人は、

「一部の探偵小說を取り、讀むこと半にして殘卷を翻し、結尾の一齣を讀了せよ、必ずや前に感じたる興味の多分は忽然として銷失し、更に後半を讀み繼がん心なきに至るべし」

と論じ、更に追窮して、

「旣に疑問の說明以外に、詩的快樂を與ふる探偵小說ありとするも、そはこゝに謂ふ純粹の探偵小說にあらで、そは只事件の性質配合等に於てのみ探偵小說的なるものなるものなり、而して其の本質は已に探偵小說の範域を背したるものなり。夫れ詩的快樂卽ち世態人情の趣味に伴ふ快樂と、索究的快樂卽ち秘密の解釋に伴ふ快樂とは、互角の勢力を持して並立することと難し、假令客觀なる小說其の物の上には、兩者の元素相當して存するとも、主觀なる讀者の心は必らずや何れかに偏せざるを得ざるものなり。而して探偵小說の精髓は、此の索究的快樂を主とし、詩的快樂を從とす。」云々

ときめつけて居るが、これは前述の通俗小說の代表としての探偵物そのものゝ愚劣を憤る心と探偵小說の高級なるものを、當時抱月が親しく見る事がなかつた無經驗とより、直ちに索究的快樂そのものを、第一に探偵物の重要性と斷じて他の重大なるものを見のがしてしまつたからより生じた當然の歸結であるが、何も是が非でも索究的快樂に性急なるあまり、その所謂「詩的快樂」を斥け去つてまで考へなくともよい事である。當時の淚香が如何に幼稚な文學觀に晏如たりしか

は、さきに引いたその序文の一節で明らかに判然するが、その涙香が唯一の佳品の供給者で、他は遙かに之れに及ばなかつたのであるから、抱月の右の如き論が出でたのも無理はない。が、探偵小說の中でも、例へばポオのデュパン物などを讀めば、索究快樂以外の詩的快樂を多分にたたへた標本に出逢うであらう。ロマンティックの精神の迫るところ、冐險物に於てスティーヴンスンを見、少年物に於てリウヰス・カロルを見、怪異談に於て「ドリアン・グレイの繪姿」を見るごとくに、われらは、探偵ものに於てもポオ以外の多くの近代作者を所有するのである。索究といふ一點から見れば、畢竟冐險物も怪異談も探偵物と甲乙するところはないが、只探偵物に於ては、殺人強盜等の犯罪や性急なる事件やが題目をなすが故に、勢ひ筋の運びに筆の重心が傾いて、その作者本來に有する探偵物創作心理の中心生命をなすものゝ全體を現はすが如き、緻密の精細の悠容迫らざる藝術的描寫を、ともすれば蔑ろにするので、若しこの點に自由である天稟卓れた作家ならば、必ず、探偵小說の本格區域にあつて、しかも立派な藝術小說を書きうるのが本筋でなければならぬ。「罪と罰」まで持つて來なくとも、性格性癖の密畫から異常心理の異常ならざる釋義に到る特長を、自然なる現實性ある背景に立たせて、ロマンティックな雰圍氣を躍

々と作り出すことに成功したものに、チェスタトンの「師父ブラウン物語」があり、コーナン・ドイルの小説のあるものがある。要は、當時なほ（今日に至るまでと云つてもよい）それ程の作家がなかつたから斯かる結論を投げられたので、罪はむしろ抱月になくて作家連にある。

高山樗牛は「太陽」增刊（明治三十年六月十五日發行）の「明治の小說」に於て

撥髮小說漸く衰へて探偵小說行はれし頃に到りて小說は共墮落の極に達したり。

といひ、その發生原因を訊ねて二十年から二十五年に及ぶ「狹隘なる主觀を有せる寫實家」紅葉一派の小說が、「作家の主觀をば自己の貧少、且偏頗なる閱歷に倒照したる小人生觀」に外ならなかつたから、その「無味放埓に浮艷淫靡なる製作に」社會は倦んで來て、撥髮小說からつゞいて探偵小說に新興味を求め、轉じて鏡花、眉山、天外の觀念小說に奔つたのであるとなした。樗牛は浪六一派に對して、割合に詳らかにその特長を說明批判してゐるが、探偵小說については、殆ど一言をも費してゐない。何の價値なしとたかをくつたのであらうし、讀んでもみなかつたかも知れぬ。いや、多少は讀んでゐても讀者としての林次郎と、評者としての樗牛との興味の厚薄の關係を念頭に置き得なかつたのかも知れない。

われらが涙香に興味を有するは、主として土俗的興味の個所多きを喜ぶの情に基くのであるが、われらの少年時代の放肆なる空想を、かくも天外の彼方にまで飛ばしめる力のあつたのは、明治一代を通じてうごめいた異邦趣味の香氣と、抱月の所謂索究快樂とが不思議にもとけ合つて一つになつて、又、新たに微妙な魅力あるあるものとなつて、われらの幼き胸に迫り來つたからであらう。しかも、それにはなまぢ國文學の智識も、鑑賞のセンスも他の外國文學の準備もなかつた、而して、場面の變轉を心掛け、智力の活力を尊崇する一新聞記者黑岩涙香のたど／＼しき傳奇文體の中に、成語の臭味から來る要素や、文學知識が指圖するこの場合は餘計なあんばいの心配が皆無であつたため、簡單な着色の通俗煽情文學としてかへつて成功したのであらう。紅葉、眉山水蔭らが經濟的必要もあつて、毒をもて毒を制する風の戰法だと稱して書いた春陽堂の探偵文庫は、文章に於て內容に於て、假令ば創作と飜案や飜譯との相違こそあれ、到底涙香には及びもつかなかつたのである。（卽ち、鏡花は『活人形』を水蔭は『女の死骸』『四本指』『火中の美人』を作つてゐる）

又、小主觀寫實小說の反動現象とのみ說明せる、樗牛の行論も粗笨のそしりは免れない。成程二十歲越えた計りの少年輩の集りであつた硯友社派の文學が、その貧弱の知見の範圍と囚はれた

る取材上の趣味とからして、狹隘なる小世界に跼蹐せる記述主義と、江戶前の洒落文學主義との混淆せる心狀を持しながらも、例へば紅葉は、「娘博士」(二十年「我樂多文庫」)や「YESNO」(二十一年同上)ごとき劣作に始まつて、「色ざんげ」(二十二年「新著百種」)「おぼろ舟」(二十三年「讀賣」)、「伽羅枕」(同年同上)、「むき玉子」(二十四年同上)、「二人女房」(同年「都の花」)、等の佳作から、失敗の傑作「紅白毒饅頭」(同年「讀賣」)を既に發表してゐる。此等をしも一圖に狹隘といひ淫靡といふべくんば、樗牛當年の批評心は幼稚に非ずんば盲目であつたか、左もなければ囚はれたる道德上の偏見を、美文學の世界に迄押し嵌めんとしてゐたのに相違ない。

が、硯友末輩に到つては乳臭と粗荒と稚拙とを露骨に表はしてゐたから、樗牛の評の必ずしも中らざるには非ざるのみか、首領の紅葉さへ「三人妻」(二十五年「讀賣」)を禁止せられたりした事があるのであるから、時に浮艷時に淫靡無味時に放埒に陷つたはいふ迄もないが、當時讀者の傾向を見れば、粗雜なる政治文學に養はれ、一度び春の屋が「小說神髓」の一喝に眼覺されたとはいへ、全く覺醒せしは一部の識者のみ、多くの小說讀みは依然として、興味本位煽情本位の經世眼敎訓文學眼といふ矛盾せる立場に立つて、意識するもせざるもひとしなみに面白いもの勝ち

で漁つたのであるから、硯友一派に倦怠したといはんより、その措辭、その凝り方は寧ろ低級なる一般讀者には難解であつた所へ、井上侯が鹿鳴館狂舞の歐化政策の餘焰なほさめず、條約改正問題生じて、反動的國粋主義は勃然と起つたが、早晩來るべき內地雜居の新展開は眼前にひかへて居る。火車のひゞき遠き鄙の地は、反動運動隆盛となつた頃漸く異邦情緒のときめきを、その假面の如き固定表情の顏貌程に仄めかし初めたので、涙香物の赴く所人は怪訝の氣はひもなくて門苦取（モントマトル）の發音を高聲したのである。その泰西舞臺とその刺戟的開展の場面とは、大岡政談の探偵興味で養はれた人々には確かに「高等」でハイカラで素晴らしい讀物であつたに相違ない。政治文學の趣味の素地からこの探偵文學の處女地に移るは僅かに一歩である。たま〳〵一人の氣まぐれが、ガボリオの探偵奇譚を反譯して上梓したにせよ、下地は旣に出來上つてゐるのである。定吉、慶次郎等の巨盜にからまる綠林談叢が、索究の興味に油をかけ、偶然一夜涙香黑岩周六の手すさびは、この民衆の要求に火を點じたのであるといふにすぎぬ。

涙香、丸亭、菊亭、南陽、二葉その他の探偵談は、一時燎原の勢ひあつて諸國に蔓延したが、つひに一人の純藝術探偵談の作家をも生むことなくして、明治はついに大正に推移してしまつた。

その原因は何故か、キュリオシティ・ハンティングをあまりに安價に見すぎたためである。ロマンスの意義をはきちがへたがためである。探偵のための探偵に躊躇したがためである。藝術的希求と自己の本質とを一致させて、深刻に思惟する事が出來なかつたからである（三十五年の交、山田美妙は「女裝の探偵」を南翠は「大探偵」を公けにしてゐるが、ともに未見の書であるから意見は略く。）

三、冒險小說

冒險の精神は昔から呂んだつたが、責任感的基本の冒險で爽快にして、邪氣尠きスポート精神風の冒險意識は發達してゐない本邦であるから、西洋中世風の武者修者や、復讐にまつはる冒險は多いが、それも餘りに儒教的堅苦しさがあつて、フェミニズムの色彩がないから痛々しかつた。明治に及んで初めて、泰西風の冒險談に新天地を打開せられた明治少年は幸福であつた。かの三木愛花、高須墨合譯の「地底旅行」はいつ出たか判らぬが、ジュール・ヹルヌが浪曼的冒險談の飜譯は、この外に井上勤の「亞非利加內地三十五日間空中旅行」があれば、大平三次の「五大洲中海底旅行」があり、森田思軒居士は「大東號航海日記」やら「大叛魁」やら「蒼使者」やら「十五少年」や

らを譯してゐる。井上勤にも「學術妙用造物者驚愕試驗」「月世界旅行」があり、紅芍園主人の「鐵世界」も福田直彦譯「萬里絶域北極旅行」も川島忠之助譯「八十日間世界一週」も亦同じ原作者である。高橋雄峯の「ロビンソンクルーソー絶島漂流記」や松居松葉の「鈍機翁冒險譚」は博文館の「世界文庫」の内から、小説ではないが探檢談であるスタンレーの「闇黒阿弗利加」(矢部五州譯)やマルクハムの「大氷海」(幸田露伴譯)とともに刊行せられた。同じく小説ではないが、冒險讀物として水交社譯「ケピテンクーク世界三周航實記」が博文館から出、水田南陽譯の「ホワイト・デギル」譯本である「魔法醫者」、牛山鶴堂のデフォーが「魯敏遜漂流記」は前者は博文館・後者は春陽堂であるが、中村敬宇序蔭山廣忠譯の「世界未來記」は未見の書であるから原作者は判らない。ライダー・ハッガードには「キング・ソロモンス・マインズ」が二種譯本があり、一は宮井卯の花庵で博文館、一は菊地幽芳で駸々堂、ともに「大寶窟」といふ名前と記憶する。「アラン・クォーターメン」は幽芳により「二人女王」となつて現れ、スティーブンスンの冒險奇談「寶島」は卯の花庵主人に、アイヘンドルフの著名なる浪曼小説は「なまけもの」として阪田霧山人に抄譯せられ、ポオが冒險怪異の興味は内田魯庵の譯文集「鳥留好語」中の「黒猫」や思軒の「間一髪」やが最

初の移植であらう。森鷗外のホフマン譯「玉を抱いて罪あり」は探偵談流行の事實に直面した彼が、抱月の如く叱咤せず、樗牛の如く無視せず、その方面の興味を最高の程度に助長せしめん目的で、ポオに至りし者はホフマンに遡らざるべからずとて「マドモアゼル・スキュデリー」の一篇を紹介したのである。この點を見ても鷗外が識見は流石に高かつた。

上島笠山の「釋元恭」も現存某學僧を雛型として幾分の事實に小說的脚色を施したものと言はれた。政治文學的興味の冒險奇譚として少からず少年達に喜ばれた。

その外、月刊誌上に現れたマーク・トウェインの「乞食王子」、カロルの「不思議國巡回記」、「鏡世界」の類を漁つたら切りがないが、初期の「少年世界」にはこの種の浪漫的冒險奇談の類がしば〳〵記載せられた。「學窓餘談」、「今世少年」亦この種の譯文を掲載した少年雜誌である。

井上勤の「全世界一大奇書」即ちアラビヤンナイトや片山平三郎の「鵞瓈皤回島記」即ちガリバーストラヴエルズや井上勤の「禽獸世界狐乃裁判」(ゲーテ原作)などもこの興味に於て紹介せられたもので、就中、「一大奇書」の拙古にして浪曼的風趣豐かな文體は、やはり馬琴種彥の脈を引ひてはゐるが、獨特の奇古なる好文章で、かつて木下杢太郎君も此譯文體を嗜讀したと言つてゐた

が、同君邊りの年輩から自分頃までの少年で、あの拙劣なる名文を愛讀せぬものはなかつたらう。アラビアンナイトだけは今日と雖も、實際はあの文體でなくては眞面目に讀む氣にはなれない。涙香を回顧する以上に、此の一種奇異なる飜譯者井上勤の奇異なる文功を錄すべきである。

龍溪の「浮城物語」思軒が「十五少年」に刺戟せられ、其後輩出した冐險談譯文は小書庫をなす程多かつたが、中に記しおくべきは櫻井鷗村の飜譯冐險小說の上品で快活、無邪氣で少年らしい文章である。「二勇少年」といひ「朽木の舟」といひ「決死少年」といふ「世界冐險譚」の叢書がそれである。押川春浪も亦前後して「武俠艦隊」の系統に屬する多くの冐險小說をものした以外に「銀山王」、「ヘーグ奇怪塔」、「塔中の怪」等夥しき飜案抄譯の類がある。何れも粗荒の拙文だが、通俗文學の立場にあつては一としきりこの春浪に比肩するものが一人もなかつた事は近年の事實だから云ふ迄もなからう。

春浪の飜案物は純なる少年文學の一種で、青年に及べばもう誰も愛讀を差ひかへる程度の作ではあつたが、例へば「銀山王」ごとき傳奇小說型の冐險譚物の飜案はやゝ廣い一般小說讀者の間にも嗜み讀まれた。

さて、冒險物の讀物文藝といふべき、純創作には何があつたか。上に述べた通り、高級作品をも時代の要求又は讀者の低級の原因により、冒險的興味の一般讀物として、推薦したのが多かつた割りに、純創作の作品に至つては僅少をきはめて居た。日清役の當時、續出した戰爭小說は戰爭題材の藝術物を志して作者の未熟から內容そのものゝ精神は、煽情文藝としても拙劣な煽情小說になり了つてしまつた。弦齋の「朝日櫻」はそれである。「血の淚」はそれである。遲塚麗水の「南蠻大王」もこの種のものではなかつた乎。さきにあげた偶得の「戰時大探偵」も探偵と冒險の兩興味にわたつたそれである。南翠が「荒海實一」もそれである。末廣鐵腸が政治興味に冒險的波瀾を加味したる「南洋の大波瀾」と「あらしのなごり」の二書を後に潤飾し訂正した「大海原」もそれである。眉山が「大村少尉」の如きも前述の諸篇にも優る藝術物であるが、決して彼の價値をより重からしめるものでない。弦齋の「沖の小島」はル・サージュが「ジル・ブラス」の拙ない飜案であり、「小猫」はむしろ冒險物の筋を行つた立志小說畑の弦齋物である。「少年文學」中の眉山が「寶の山」もそれに近い。「少年文學」には「俠黑兒」(紅葉)「黃金丸」(小波)「雨の日ぐらし」等少年文學の逸篇多き好シリーズであつた。江見水蔭の「水雷艇」、「速射砲」、「國事大

探偵」等戰爭小說は凡作であり、饗庭篁村の「從軍人夫」三宅青軒の「水雷士官」もそれに準じる。その他二十八九年にわたつて夥しく輩出した軍事小說の殆ど大部が劣作に外ならなかつた。

しかし、正面から少年冒險讀物と名乘つて出現した中での佳品はなかつたか。上述の「少年文學」は傑作多き叢書だが、冒險興味は稀少で御伽噺興味が勝つてゐた。さきにも云つた春浪の「奇人の旅行」、「世界武者修行」、「空中大飛行艇」、「怪人奇談」、「魔島の奇跡」、「續空中大飛行艇」等の「世界怪奇譚」叢書とこれに繼續する「武俠之日本」、「武俠艦隊」、「海底軍艦」その他の一大長篇は結構は雄大と云へば雄大だが行文餘りに拙く、粗笨なる「痛快壯絕」の趣は卽ちあるも科學知識覺束ないのに想像力とても貧しくて、正統少年文學としては到底齡ひするに足らぬ。只當時の冒險物としてはいとせめて優秀であつた事は疑はれぬ。葵山の「小英雄」でも宮崎來城の豪傑小說でも、水蔭の海洋小說でも、春浪だけの人氣も興味も魅力もなかつた。その中に最も初期に出て後進の範となり、眞實に布置結構の雄大豪快と、科學的知識の豐富と、想像力の天惠とを當時としては兼備へてゐた逸篇が矢野龍溪の「浮城物語」(二十三年六月)である。作者の感想を引くと、

「吾輩が報知新聞へ再び入社したのは、明治十九年か二十年と思ふが、それから間もなく吾輩は同紙上へ、「浮城物語」と云ふ小説を書いた。今日から見れば何でもない事であるが、當時の出來事にしては、それは新聞界のレコード破りであつた。即ちそれは大新聞が紙上に小説を書いた最初の試であつたのだ。たゞし、これは我報知新聞の獨立を確保せんとする經營上の企圖から出たものであるが、從來日本の大新聞が永年把持し來つた信條を打破するものとして、カナリ斯界の注目を惹いた。

「浮城物語」と云ふのは、比較的高級の小説ではあつたが、斯界一般の論調は、之を批難するに傾いた、果然毎日新聞は、其雜報に於て大に之を批難した。大新聞の墮落なりと云うて、大に皮肉に嘲つた。今日から見れば誠に可笑しい事であつたのだ。

『明治文化發祥紀念誌』

作者自らは高級小説と稱してゐるが、新聞小説としては既に販賣政策上行はれた事でもある通り、藝術小説としては低級であつたが、讀物としては殆ど劃期的の功績を有するのがこの一篇である。バタビヤ附近一帶の大海洋及び諸島を舞臺とし、一生歸國せざる決心の一種のユートピヤ

ン達、文武兼備の豪富の秀才作良某を首領とし、立花以下專門各家を列ね、浮城海王の二艦を世界に既成列國の大艦隊と戰ふ筋で、六十三回で了つてゐるが明らかに作者は「附言」の通り二百回迄筆を進め、南極アフリカ、アラビヤ、南米諸國に彷徨し、明治十七年馬島女王バナバロ第三世即位し、越えて二年佛人馬島と媾和する迄はつゞける所存らしかつたが、感興が伴はなかつたのか、世評が自己の期待に反したためか、未完の儘で了つたが、後三十五年有名な「新社會」を出して、本邦には珍しいユートピヤ思想を披瀝した稀有の人だけに、(明治文學、文明史に於て龍溪の位置は、寔に不可思議なる偉大を持つてゐる。更に史的位相を究訊すべきである。)冒險的布置の背後に伏在する無何有鄕的幻夢の香氣が、この小說の現實的骨子と相まつて、特異の風色を生じてゐる。特に面白いのは、當年あり勝な利己的帝國主義の立場から、徒らに侵略思想を桃太郎的に發現したのでなくて、祖國は祖國でそのまゝそつと殘しておいて、その祖國と緣を切つて新しく自由で、知識的な新天地を創造せんとする意志の下に各人が働いてゐる事である。戰爭中一方の隊長を承はるべく餘儀なくせられた植物學者が、激戰最中森林で珍種を發見して夢中になつてゐる中に、敗戰の憂目にあふなど誇張は誇張であるが、冒險小說的の武張りすぎた性格の單調

化がなくてよい。この作は夥しい空想を青少年の間に與へた割に、その影響から卓れたものが割合に生れ出なかつたは一奇であるが、事實はこの感化の空想を創作上に具體化するだけの浪曼精神がなかつたのであらう。只、記憶するに足る佳篇では、與謝野鐵幹の詩的少年文學の美文小說「海王百詩の跋」の逸作がある。又、これよりは遙かに劣るが木村小舟の「新敷島」がある。一は「うもれ木」(三十五年)に收錄せられ、一は「少年世界」增刊「祝砲」に揭げられた。「浮城」畑の詩的小ユートピヤである。鐵幹は外に朝鮮事件を背景にして可憐なる政治興味の少年冒險小說「小刺客」をも書いてゐる。

三十年代の數多い少年冒險談中には、外に櫻桃、佳水、小舟、湖山、天仙、水蔭等の短篇中にお伽噺に非ず冒險小品にも非ず、明らかに冒險的少年文學と認むべきがあつたが、記憶朧にして索出の方法もつかないから、あつたといふ事實だけを記しておかう。冒險的ならざる少年文學は小波初め若干の佳篇があるが、それは少年文學の項に詳說しなければならぬ種類である。その冒險少年小說中記憶に殘る佳篇は、「少年世界」の「紀元節」「祝砲」「春遊び」「海と山」等の增刊によく揭げられてゐつたが、その一篇に別文にも一寸說いた福田琴月作「白薔薇館」(少年世界增刊

「春遊び」）がある。濠洲に商旅の青年が土民軍に加つて英軍と戰ひ、陣中科學の實驗を月下の白薔薇裡で試る條など、南國舞臺に冒險と、詩美と、科學興味とを點綴させて氣持のよい短篇であつた。が、結局「浮城」以外に冒險小說として一代のセンセイションを惹起したものはなかつた。遙かに質を低下させて、前述の武俠小說群が横つてゐる計りである。ライダー・ハッガードの如きジュール・ヹルヌの如き作家が一人あつて當然よい時代であるが、張三李四己が身も知らずに、高上りて純藝術の殿堂に泥足を踏み込み、たゞ形式だけその約束を守つて、內容は煽情小說のそれにも及ばぬものを作つて不遇を嘆じ、僥倖を私せんとする輩があまりに多すぎたのである。この島國に、かの小說家づれがあまりに多すぎたのである。

四、傳奇小說

明治初期に於ては、泰西の高級文藝を一般的の讀物として紹介することがせめての仕事であつたから、莎翁をも莎翁として見るよりは、讀物化したる莎翁として見る必要がある。外國文學紹介の方面の先驅としては、明治五壬申官許としてある渡邊温の「通俗伊蘇普物語」六卷に初まりさきに述べた「通俗花柳春話」に十三年のスコット譯本「春風情話」（橋顯三實は坪內逍遙譯）や

ソェヌロンのテレマックの譯本二種、「哲烈禍福譚」と「鐵烈奇譚」とがあり、尙外に「暴夜物語」（アラビヤンナイト）があり「西洋歌舞伎葉武烈士」あり、木下新三郎譯「仇結奇の赤縄西洋娘節用」や赤司氏譯「哀別奇遇誠之鏡」や「露妙樹利戯曲春情浮世之夢」（河島敬藏譯）やいつの頃の譯筆か分らぬが外山ゝ山譯「西洋浄瑠璃ハムレット靈驗皇子の仇討」があり、スコット譯には旣にあげたもの以外になほ「湖上の美人」の散文譯「春江奇緣」（坪內雄藏、高田早苗、天野爲之合譯）と、原作は知らぬが「春窓綺話」とがあり、ディズレーリの「雙鸞春話」（牛山鶴堂譯）は當時の刊本に近刻豫告を見かけたが現本の在否は知らぬ。大石高德の「花情粹話」は意國ビトリオボルゼジオー著述、佛國アメデー・ルー佛譯とあり、人情小說と割註が入つてゐる。「歐洲情話」は中村柳塢の譯本で佛國セルバント氏著と稱してある。

「春雪瑪利御最後」はシルラァのマリッ・ステュアートの院本譯で「想夫戀」はボカチヨの「十日物語」中の一話の意譯があるがこの「想夫戀」（十九年）ごときは佛譯からの重譯ではあるが、ボカチオ最初の紹介として、又奇古なる佛本よりのエッチング挿畫を挿み糸綴の合卷好みを殘した體裁で、高瀨鐵窓、笹島蜻洲、田島任天等の時代錯誤的珍妙の評語を加へたる飜譯史上の珍品、裝

幀史上の異種として珍重するに足る出版だが、その緒言に「チャンブル氏の智慧の輪（エンサイクロペヂヤ）」を引いて原作の聲價を紹介し、

吾國のお染久松の狂言に類してやゝ高尙なるものあるが如し。

と述べてゐる處を見れば、原著を如何に解してゐたかは想像せられる。同じ緒言中小説の文體については支那小説飜譯體、横文飜譯體、固有假名文體、新聞體等色々あつて

「何れが最も時好に適するやは尙ほ時論一定せざるが如し」

とあるによつても當年の文體の雜鬧は推測せられる。この書出て翌々年には早く既に二葉亭がツルゲーネフの名譯「あひびき」（二十一年七月「國民の友」）や「めぐりあひ」（同年十月「都の花」）が出てゐるのであるから面白い。尙右の書の奧附廣告に同じボカチオの「佛國女皇春遊傳」が見えるが、出たかどうか今尙筆者にとつては不明である。

春の屋が「ふたごゝろ」といふ米國小説譯本や良廼家主人譯ドン・キホーテの一節「赤縄奇聞花吹雪」の事は甞ても書いておいた。「二こゝろ」は「感激の原素に富み、脚色も面白く、俗に悅ばるべき節多ければ」飜案して新世話劇にしようと考へて「繒入新聞」に揭げたもの、佛俗小説

の飜案には別に圓朝の「歐洲小説黄薔薇」がある。「改良小説奇遇魯國美談」は大石高德の纂譯であり、湛江保の「西洋妖怪奇談」はグリム、デーナ及び一千一夜譚の拔萃で、「シンデレラ孃奇談」(卽ち泰西皿々奇談）の類の標題四十篇の收錄だ。リットン譯本「夜と朝」が若林玵藏の速記益田克德の口譯で「是非なくこゝに死を決しました」風の文體であるは注目してよい。十九年ホワイト師譯と註し、倫敦聖教書類會社刊行横濱製紙會社印刷の「天路歷程」譯本は基教弘通の方便として通俗文學の使命を帶ばしめたもの、丁髷武士が十字架を拜する挿繪があり

「我れ現世（このよ）の曠野（あれの）を辿り行き只（と）ある洞穴の邊（ほとり）に憩ひぬる間に、眠氣催ほしつ、打臥せし假寢の夢に……」云々

の譯文體で事實誰の手になつたかは判らぬが、壯重奇古の一寸面白い文體である。アプレイウスの「愛と心」(戸澤姑射譯）が出たのも元良勇次郎の小引を見ると、古文流布の意圖に基いたものらしいが文章は全く非俗である。さりとて、高級といふのでもない。

通俗非俗はまだ口語と文語とで分ける事は出來ない時代で、かへつて流布の文語の方が時として、通俗の結果を來してもゐた。十五年一月中刊行の「有喜世新聞」を見れば口語と文語とは雜

然と共に使用せられてあるを見る。顧ると、明治四年の「西國立志編」や六年の「伊曾保物語」以來、二十年初葉「浮雲」に到る時機は文章史と見れば暗中の模索時代、新文體の搖籃時代であり、文藝思想史と觀れば傳來のロマンティック・スピリットがリヤリスティックの洗禮を受けて、新らしい何かゞ胎生されんとする準備時代にあり、文明の啓蒙時代、權力の變轉時代、古典の雲隱れ時代、新文學の幼童時代であつた。

この開拓時代の最大多數の民衆の興味の對象となつたものは、必ずや保守的なる民衆の姑息なる、感情思想に根ざすものか、迎合するものでなければならず、又は急進的なる民衆の輕浮なる感情思想に根ざすものか、迎合するものでなければならぬ。民衆はある時は極めて保守的であり、ある時は極めて急進的であり、ともに俗解を要求して曲譯をも厭はず、平明を旨として錯誤をも念とはしなかつた。されば、急進か守舊か、その何れかに多少の信念と理解とを有して、しかも平明俗釋を本義とし、道義又は宗敎、又は政治又は社會思想等の方面に幾分の狂信的熱情あるものが最もよく民衆の歡迎を受け、又は愛撫を蒙り、作者それに恬然と應じて、媚態をつくし又は威儀をとゝのへた。凡べてが甘い中に一脈の辛いものゝあるを要としたのは期せずして、民

衆本來の弱點に突入つた觀がある。

が、此等俗衆の歡迎を生命とする作者等も、意識的にその立場を擬するものもあれば、殆ど運命的にその條件を生來具有して文壇に入り來つたものもあり、煽情的文藝の藝術的要素の探究は、主としてこの種の作家の作品に檢討のメスを加へる事に因て初まるべきであり、事實上第一流の位相にある作品も、多くは又この種のものに外ならなかつた。

福澤本の全盛、立志篇の重版と堅い方面は堅い方面で昌んな流行を見せてゐるその間、昔ながらの合卷趣味は、戲作者上りの新聞記者の一手專賣となり、魯文、有人こゝに時機をつかみ得た。「釋迦八相倭文庫」や「白縫譚」が慶應から明治にまたがつて書きつゞけられた如く、丁髷が散切頭になつても、頭の中の趣味性悉くが宿替へをしたわけではない。牛食もするが會席料理も時化つたのである、(食べものへの執着を見れば民衆の嗜慾の保守性と急進性とは具體的に判明する)。魯文が一九三馬によつたとすれば「江戶繁昌記」の寺門靜軒によつたは、成島柳北の「柳橋新誌」であつた。靜軒に譏笑の聲を絕たざるがごとく、柳北に諷刺の吟聲轉たさかんを極めた。幕吏上りの洋行がへり、十八世紀嗤笑の文學の今なほ殘る、而も普佛戰役の十九世紀中葉、文明今を青

葉と生ひ繁る歐羅巴を見て來た彼、德川の洗練を極めた趣味性の臺閣や、文學やに日夜ひたつた事のある彼、その彼に繪と猫と權的との三角關係の頂點に立つ明治新開地文明が、諷刺の對象となつた事はいふまでもない。威めしい漢文もどきの硬文章で、繪風流を嗤ひ、混堂會議を叙し、猫兒街晩景を說いて、表に滑稽を裝つて裏に讀者とモデルを一緒にして嘲笑するのは彼である。嘲笑し乍らも時代の荒波に卷き流され、潮に漂ひ拔手を切り乍ら、實は一面決して流俗の流際の快美を忘れなかつたのも彼である。默阿彌の如きは散切物の題材に新奇を迎合しても、白浪物の根元調子は死ぬまでも忘れ得なかつた單純の人である。魯文一派に至つてはこの新店のだらしなさを大上段からうがつてかゝり、思想に於ては新派に向ひ乍ら、趣味の本體は依稀とし、化政度の舊を守る民衆の戲作文學好きに首尾よく迎合した。花笠文京も、芳川春濤も、伊藤專三も、三代目種彥も、一筆庵可候も、二代春水も、江戶の艸草紙をそのまゝ明治に引入れた人である。明治も十五六年までは依然として江戶式綴りの通俗小說が出たが、それが例の色刷口繪の表紙は、一卷と二卷二卷と三卷とは續きものゝ畫になるといふ、體裁の新しい江戶趣味が復活しても、それも間もなく一樣に亡び去つて「小說神髓」や「浮雲」をきつかけに、十年頃から勢ひづいた政

治文學の絶頂期に入り、それも亦束の間、大衆は更にその飽くなき興味の新方向を求めたが、これに迎合したのがかのちぬの浦浪六の撥鬢小説と、涙香の探偵物とであつた。

撥鬢小説は、德川この方連綿と系統をつゞけて來た傳奇物語類の一支脈なること論なく、同じ傳奇派の畑なる儕輩作家が、たゞ末期文學の後塵を排して新しき生命に蘇生するの力なく、所謂藝術小說の階級にあるといへばあるものゝ、實は藝術的本質の血脈既に乏しきのみか、通俗的媚情文藝的であり得ることさへ難かしかつたのである。須藤南翠は流俗の興味の焦點を探ぐることを忘れなかつたから、「有喜世新聞」に起つて毒婦傳に筆を練り、政治小說に名をなしてから、俗間の讀者愈よ多くその「唐松操」に大法官玉乃世履自殺事件を取材とし「濁世」に當年の敎育界の內狀を描いたり、龍溪、學堂の先著に倣つて政治小說、就中、「緑簑談」に成功したが同時に春水張りの「雛黃鸝」も書くといふ風に八方に手を出し而も何れもに執さなかつたから、生涯九十餘篇の作風は明治末期の親鸞、空海、法然、蓮如等の諸傳に到る迄の、通俗小說期とこの諸僧傳小說期との二期とすべく、その二十年代の傳奇小說は、傳奇派に異彩を放つ何ものをも持ちえなかつた。宮崎三昧は漢文育ちのきびきびした文體にも豪柔よく使ひ分けて「塙團右衛門」「鬼一

ロ」、「鳰の浮巣」の類の歷史物語は南翠麗水よりもより多き程度に藝術小說の域にあつた人故、通俗物の史的批判の場合には算へない事とする。

が、傳奇的なる藝術小說もともに行き詰りの狀態にあつた事は、龍溪の「浮城物語」の獨創性を以てしても、將た、依田學海、饗庭篁村、宮崎三昧等專門のこの派の作者の努力を以てしても漸く讀書界に倦怠の情をみなぎり渡らしめ、新しき後繼青年作家の蹶起を肯じえなかつた事實によつて知る事が能きる。龍溪が「浮城」はさきに冐險小說の條に說いたが、廣く文壇の流派關係より見る時は、當然傳奇派の一傾向の支脈とすべきで、只作者自らのかの作に對する心意及後進への感化の二點から觀察すると、正しく冐險物語派文學として說くを妥當とするのである。

二十三年「讀賣」紙上で坪內逍遙は「小說三派」を論じて、一を固有派又主事派又物語派、二を折衷派又性情派又人情派、三を人間派と名づけた。第一派は人が客で事柄が先に主人公を必ずしも設けない。設けても脈絡關係の爲であり、事變は性情から生ぜず偶然外から來る。三世因果說又天命說を理想とし、曲亭、種彥、スモオレット、フィイルディング之に屬す。第二派は人が主で事柄が客に性情を活寫せんとする。人物は主觀であるが事と人との間には、主客後先ある丈

け故必ずしも人物が主觀ともいへぬ。サッカレエ之に屬す。スコット、ディッケンズは第一第二の中間に跨る。第三派は人が因で事が緣で、其因は性情だが、其緣は事變其物である。卽ち人因事緣で一果を寫し、此果又は他事變をも合せ、緣と更に一果を描き斯くて終に大詰に到る。ゲーテ、莎翁之に屬す。魯獨近世派又同じとの主旨である。「しがらみ草紙」の鷗外之を「文苑」中に評して(二十四年)ハルトマンが審美標準もて、その哲學上用語例を藉り來り、第一派は類想、第二派は個想、第三人間派は小天地想也とし、逍遙が作者あはれ評家憎しと感じて、今の文壇の衆生のためにこの小乘敎を說法したのだらうと云つた。

とにかく、當年文壇が主觀の狹隘と視域の狹小とに墮して、遂に元祿文學の卑猥を學ぶに至つたは、樗牛初め一部批評家の取り上げて斥けんとした事で、卑猥の背後に横はる主觀に自然派文學的解釋を施すものは未だなかつたが、寫生の立場に就ての論評は既にちらほら見え初めてゐた。何れにしても、寫實派は寫實の質と法の問題に接して仆れんとした觀がある。其樣なこちたき論爭に無緣なる滔々たる衆生讀者等も、漸く無變化と狹量と無活氣とに嫌厭たる處があつて、大勢は何時しか又、見た目面白く、場景變轉して激情夥しき煽情小說の新形式を要求し、この欲求に

應じた如くに現れたのは、さきに自滅に瀕した傳奇派脈から任俠を唯一の旗印に突如として出でた所謂撥鬢小說の大本尊ちぬの浦浪六・村上信である。

紅葉等寫實派の立場は「小說神髓」の提唱に促されたのであるが、その寫實精神の反敎訓說から見れば、これは一時的の反動派であり、其本質は通俗卑陋で藝術派の風上には置けない煽情の大衆愚文學である。「三日月」(二十四年)に初まり、「井筒女之助」、「一文字」、「奴の小萬」、「斯豪傑」、「破太皷」、「斯親子」、「深見笠」、「夜嵐」、「髯重」、「千利休」、「髯の自休」、「後の三日月」「局阿能」、「安田作兵衞」、「新小說」、「たそや行燈」、「髑髏盃」、「魚屋助左衞門」、「當世五人男」、「古賀市」、「十文字」、「海賊」、「後の海賊」、「呂宋助左衞門」、「花車」、「大阪城」、「鬼薊」、「一狂禪」、「新兵衞」、「武者氣質」、「阿字門」、「しなさだめ」、「友ちどり」、「蔦の細道」、「浮世草紙」「花房助兵衞」、「原田甲斐」、「浪華名物男」、「赤蜻蛉」、「三人兄弟」、「伊達振子」、「毒婦」、「時雨笠」、「落花浪藉」、「伽羅若衆」、「やみの闇」、「男山」、「武士道」、「なみ枕」、「雪だるま」、「金剛盤」、「うやむや日記」、「死工夫」、「石田三成」、「夜叉男」、「一軒屋」、「吉田雄藏」、「やまと心」、「日本武士」、「岡崎俊平」、「大惡魔」、「海賊大王」、「高倉長右衞門」等の如く自然派文學の勃興

した三十八年に到る迄の彼の目錄を年代順に並べて見ても、浪六の一本調子と通俗性煽情性は明らかにならう。この大衆文學が一般文壇の顰蹙を受けた事は逍遙の「小說學校撥髮科の教則」の槍玉にあげられた一事で瞭確だが、水谷不倒は「文學界」が浪六小說を『勿體らしく評して Romance の類といひしは、新しきに似て新しからず、日本固有の金平本といふ恰好の名詞あるを忘れられしとおぼし、』と揶揄し、二十六年九月二十七日の「改進新聞」が浪六に提奴(さてやつこ)と名づけ、濱町の親方と云はれる某優と、四谷の御前といふ某文學好き華族の代筆添刪して阿堵物を借り出したと報じたが、翌月六日の「讀賣」は『我れ身を文壇に委して已に五年庖厨しば〳〵空しと雖、未だ曾て銅臭の言に襲はれず』云々と元祿男の氣焰を紹介してゐる。而もその翌年には「萬朝」より非行(?)をあばかれた事もあつたほど、話題を供した人物であつた。二十七年の早稻田文學一月號は前年を回顧して『探偵小說浪六小說の流行せしが如きは、此の長き幕間の Interlude(間劇)たるに外ならず。さて昨年の末に及びて次第に著くなり來りしは時代物(歷史小說)を要求するの聲なり、』と論じてゐるし、樗牛も同趣旨を「明治の小說」中に反覆してゐて、此等の說は評壇の定說であつたと見て略ゝ誤りはないのである。後藤宙外が「浪六が作は自然に遠しと云はんよ

り寧ろ人工に過ぎたる街道なり」と云つたは自明の理を述べたのみで、その人工性の中心に迫つて浪六の缺陷長所を上げなければ、評家東道の役は果されない。

浪六が作は、「三日月」に初まり「女之助」「小萬」などを佳品とする。悉く異材同工の街氣滿々たる驕激な任俠小說で、場面の轉化と一回每の新趣好とを專ら主眼とした故「千篇一律」文字の酒落、脚色の斬新を衒ひ、又情操の掬すべきもの少し。」(樗牛「明治の小說」)と云つたはほゞ妥當の說明であるが、情操は卽ち市井任俠兒家男女の情操、味もそつけもない所涙を見せてつんとはねた所に浪六本領の情操はあつたので、これ卽ち樗牛文の缺點の一。「性格概ね卑淺に流れ、加ふるにまゝ淫猥面を掩ふものあり」と云つたは大體適評であるが、淫猥を論らはゞ當時の寫實派の方が寧ろ數に於ても激しく且多かつた。これ樗牛文の缺點の二。「文字亦杜撰孟浪、生硬を以て意氣となし、晦澁を以て餘情となす」と云つたはただ一面の理で、浪六がしばしば出放題の粗荒な表現をする事は固より事實で、興に乘つて一氣呵成を試るせいであらうが、斷じて罪すべき筆癖である。が、生硬を意氣とし晦澁を餘情とは必ずしもしてはゐない。樗牛の所謂「濶達物に拘らず、倜儻情に泥まゝ」ない任俠の野客の擧措を描寫し　今ならばそのまゝ活動寫眞にもせまほ

しきヤヽ澤山の場面を層々重來せしめる必要から、

淚と共に聞居たる於萬俄かに顏ふりあげて膝おしよせ「その方の御姓名は、御承知なされぬか」「伺はいで宜いものか」「それでは、その方の御名を、何と」「寬様」「ゑッ」

＊　＊　＊　＊

までば人の心いらちて一日の暮も長けれど、過れば三年の春秋さながら梭を投るに等しく於萬こゝに歲を重ねて十九となりぬ……

の如き描法が時あつて餘儀なくせられたので、生硬を意氣としたのでなく、晦澁を餘情としたのでもなく、斯かる場合は生硬卽意氣、晦澁卽餘情の奇異な境致を招來せしめたので、詳らかに讀めば誤用澤山の迷文句だが、筋に引かされて讀みもて行けば、思はず片唾を吞むカン所も尠くはない。生來荒けづり通俗向きのこの作者をアトケス・ロケンディの藝術宮に安置せんとするは、漁師灘五郎を觀音寺城の大廣間に押し上さうよりも不似合である。これ樗牛文第三の缺點である。

が、問題はこの大衆物のみに含まるゝ任俠譚パッセイチズの藝術味にある。杢體は悉く問はず部分々々、又は數ケ所連續場面の藝術境にある。浪六の前に誰が小萬の小萬茶屋如き素性と、性

格の女將ぶりをかくも生々と描寫したものがあるか。脇役の柳里恭には幾分の嫌味と下品とがあるが、正慶小萬と元祿小萬とを打つて一丸とした浪六の小萬にはこの書だけの別境があり、その異種性を卷尾の一二ヶ所で一はけに描き出した所には、他の同時代作家の企て及ばぬ獨自の詩境があつた。「帝國文學」記者は三昧の作中の女俠を浪六と並稱したが、此彼各特異の別あり、三昧の人物は浪六とは自ら異り、浪六のそれは根本の缺點はあれど、特殊の風趣を持つてゐた事は事實である。斯かる俗小說中の藝術境致は他の二三の佳作に就ても云ひ得られる。が、其小萬も「十七の淸き內もも、思へば生命」の御殿女中時代を描いた邊りは、何だか讀んで源之助が皆鶴姬に扮したやうなグロテスクと、菊人形の無生動とがあつて感興が來ない。讀者が作者の平生を知つてゐる爲めと、作者その人の役ちがひの不勝手とに基くからであらう。融通がきかぬといへば浪六程一本調子の通俗作家は外に一人もなかつた。その一本調子の專賣で、國民には傳說的に受ける本質の任俠肌を見せる所も、若い內の浪六には只青春の賜物である幾分の感激と幾分の夢見心地とがあつて、無機的な內包の部分々々に潑剌たる生命を溢らしめたから、一篇中必ず二三ヶ所の純藝術境があつたけれど、齡加はり世路を踏んで、かの感激が漸く薄らいで只惰性で執筆を重

ね、いつまでも源之助型主義で押し通さうとなると、俳優ならば再現家の立場から許されもしようが、創作藝術家たるべき小説作者とあつては益々下落するより道はない。撥鬢派廢れて大阪朝日に續きゝのを續ける頃は、既に業に通俗作者としての眞價をすらも疑はれるに至つて居た。

今この浪六を、その門下稻岡奴之助が五十餘篇の亞流通俗小說と較べるに、かれには時あつて藝術があるが、これには筋の否はこびがある耳である。かれには時あつて腹からの感激の嘆息を聽くが、これには無意味な虛喝があるのみである。かれの文體は一時獨自のスタイルを形成しかかつたが、これは三面記事もどきの拙文である。啻にこの二人のみでない、ひとしく通俗といふも、持つて生れた賦性の才能の高下に甚しい距離ある事は豫めよく知つておく要がある。

それのみでない、形式は高級也とて藝術小說と他人もいひ我も許す作品でも、只夫れ弓矢の把り方が法を眞似てゐるといふだけで、我流自慢の野育ちにはくらべ弓では力及ばぬへなへな武士が、所謂文壇の片隅に生存するのは昔も今も變りはない。觀照の瞳は少しも冴えず、固より語彙は貧弱で、想像力さへいとど乏しく、經驗もなければ學問もない青年作者の藝術小說の非藝術性は「小萬」の浪六や「小弓御所」の弦齋は愚か半井桃水が新聞小說、默禪、仰天子、新泉の通俗

煽情小說家の佳品の妙處なる藝術性には遠く及ばぬものである。只、前者が自己の所有する一片の性向をおほし育んで一倍の精進努力を續けたならば、天才者の領域にはよし達せざるも、一流の型を殘す事は或ひは不可能の事ではない。當年の文章下手の感傷家少女病の田山花袋が、自然派運動後今日に至る業績は正にその好例證である。後者は一部分の卓れし特長を有するも、誤られたる藝術觀を自ら正誤する好機を失し、流俗の流眄の甘味にひたつて、藝術上の苦心と藝術家としての精進をなほざりにする爲め、その通俗性すらも一時の榮花で、多くは人知れず何處かに消失し轉業して了ふ氣の毒な運命にある。即ち一は條件附きの未來を有し、一は殆どそれに絶望である。通俗家の藝術性は、たゞひろい藝術圈内の下部に屬するもの〻卓れた部分を闡明することが同時代文學史研究の上から、俗文學史攻究の立場から、又、側面的時代史觀の見地から考へて（その通俗作家が一般文學史の相當の位置にある時は、その作家に就てのあるモノグラフ研究の上から重大の部分となる事はいふまでもない。）一顧二顧の要を認めねばならない。若し又、昔よりの講談落語の類漸く飽かれ、新しき大衆文學が、新聞や通俗雜誌の上で必要となる度合が、將來益々强いとすれば、大衆物の價値はそれ自ら異種の傾向文學としての地歩を堅める上からも、

興味と性格と、激情と場面と等諸種の難闘に卒業した上で、獨自の立場を拵へ上げる必要がある。その時、昔の涙香、浪六及びその後に生じた蘆花、幽芳等家庭小説の踏んだ轍を踏むことに滿足するか、少年文學(ジユベニル・リテラテユア)といふが如き本質的の領土でなくとも、一種新領土を發見してゆくか、何れにせよ阪路を登りかけた人間は轉落する事でなければ、進む以外に道はないのである。

撥髪小説の次期に立つて通俗物と、藝術小説との中間にあつた歴史小説家は、塚原澁柿園である。村井弦齋もその一人であつた事があり、遲塚麗水も正しくその一人であつた。麗水、澁柿の位置は弦齋よりも高級に算へられたけれども、作品そのもの丶價値から見て、三人の位置は大同小異である。」三昧や學海の努力は漸く過去のものとなつた。新歴史小説の要求は、前引文の如く「早稻田文學」に現れ、樗牛之に裏書してゐるが、その直接の民衆側からの要求の所因は奈邊に存したか。あまりに惡しく扱はれたる古代への再否であるか、回顧の風潮の文壇的感化であるか。

須藤南翠は二十五年「朝日」に招かれて大阪に移り、京阪讀者對手となつて益す流俗に阿諛するのみであり、福地櫻痴は任俠時花りを見込んで二十七年「俠客春雨傘」を書き、史的興味の横溢を觀取して三十年「大森彥七」を書いた。場當り場受けを覗つた典型的の通俗劇作家であるが

右の二篇は佳篇にぞくする。續いて出た三十二年の「敵討護持院ヶ原」は無味乾燥と機械的轉換との愚作で初期の「春日局」と呼應するかれの缺陷の暴露であつた。麗水が「照日の松」「半月城」は藝術的歷史小說としても、通俗物としても有價値の作でない。澁柿園は史實の詮議詳かならんことを欲した上に、幕臣の出で相當故實に通じ、歷史的雰圍氣の描出には恰好の知識の所有者であつたから、地形史實の細密な關心が筆端にあらはれて、ともすれば讀者を混迷に導き勝ちなる上に、文章やゝ晦澁で且地味であるから、筋や文章の上から見ても通俗物ではない上に、新要求の歷史小說の性質を備へるべく、あまりに舊風を墨守する既成作家であつたから、かれが生涯無慮一百篇の小說、多くは史譚小說といふ種の舊型にすぎず、又、その位置に於てのみ必ず明治文學史の一偶に殘存しなければならぬ作家ではあつたが、かれによつて新史譚小說の展開はつひに求めど得られなかつた。二十八年の「最上川」の如き佳篇の一ともいはれたが、「東京日々新聞記者識す」と記名した櫻痴(?)の序に、脚色の奇を說き盧山を出て眞景を初めて見るをうべしといふ意味を云つてゐるが、盧山を領する澁柿園その人にも判らぬ位に錯糾してゐる結構である。通俗文壇は澁柿園によつて何ものをも惠まれなかつたが將來の歷史小說家は何となくこの人や三

味の存在の記憶に心引かれるに相違ない。「帝國文學」記者評して浪六、涙香の文字なき床屋に讀まるゝに對し、櫻痴漣柿は文字ある紳士紳商の輩に讀まるゝは一段と上位ではあるが「長々しき雜報」程度のものにすぎずとの意をもらしたるは、當時の批評を代表するものと解してよい。弦齋に至つては、「櫻の御所」、「小弓御所」、「衣笠城」、「譽の兜」、「沖の小島」、「渡宋の船」、「松が浦島」、「鎧の風」、「關東武士」等の歴史小説の外、洛陽紙價を高めた現代小説十數種を殘してゐるが、これ又浪六と共に典型的の運命的通俗作家として知られ、批評家はつひに彼を論ずるを寧ろ恥とするに至つたが、二十九年「小弓御所」の出版された時の雜誌批評を引くと、

「例の弦齋物、讀むに骨をれず、婦幼を悦ばする家庭の好讀本といふべし、古河の公方足利政氏の次男朝若丸、後に義明と名のりし明將が、家の動亂に逢ひて安房にさすらひ、舊業を恢復せんとして兵を起こしたれど成らず、佛門に歸するといふ筋、玉照姫といふ賢にして美なる婦人を點出して、因緣錯綜干戈殺伐の間に嫉妬、戀愛の綺艶を配したり、對話の文體は謠曲などの呼吸を取れるが多し、(定價三十錢)

――「早稲田文學」二十九年九月號――

とあり、ある雜誌の合評は更に突込んで筋の運びと、作者の觀念のやり場との爲に生じた性格描寫上の荒唐無稽や、事件推移の上の不自然を笑つた。畢竟新聞小說家にすぎぬとの下心から出た不親切な嘲評である。

浪六が任俠で國民昔乍らの共鳴を買つた如く、弦齋は諦念と可憐趣味と正義觀とで俗衆の日本魂を釣つた。此兩人を代表的通俗家とし、麗水櫻痴漣柿其上に位し、三昧篁村等一方の雄として又其上に位したが、歷史小說はつひに新展開に至らなかつた。野心ある樗牛の「瀧口入道」も散文の抒情詩に外ならぬ。即ち、撥鬢小說後の史譚的要求は、一面二十年代から昌んになつた古代學的探究精神の勃興が、文壇にも史的回顧の傾向を强からしめた事情が存した以上に、他面に於て最も新しき見地から祖國史を眺めたい欲望が、寫實小說の培養土の上に萌出でゝ來たためであるが、時運來らず需要のみで供給は依然たる舊阿蒙の反覆にすぎず、文壇主流は新しく觀念小說と稱された新現實小說の領土に出直したのである。

さて、弦齋の「小弓御所」には多くの缺陷と極少數の美所があり、この美所が弦齋小說中の殆ど唯一とも稱すべき藝術味となつて殘つてゐる。旣に弦齋畢竟新聞小說家にすぎずとすれば、こ

の通俗煽情小說中の藝術境は如何の性質であらうか。新歷史小說出現の期待と、風馬牛にあるは勿論だが、彼の俗受けは淚香浪六の後を繼いで彼等よりも廣く長かつた。「小弓御所」の里見義明と、鳩づかひの玉照姬の薄倖なる情事に纏綿する白瀧姬の嫉心や、北條氏康の野望やの叙述の間に仄見ゆる例の可憐趣味と、正義感と諦念との情趣の美である。部分を凝視すれば必ず拙く全體を飛讀すれば、斥けがたき一種自然の快感がある。正に通俗小說の極致である。性格描寫の如何場面の轉化の不自然など、詳かに見れば夥しい缺點をあげ得られる中に、この快感は斯かる缺陷を萬々承知した上の快感で、而も倚棄てがたき緣日草花の風趣がある。これを藝術小說家の表看板威めしい硯友末輩の一夜漬に比べると、或は觀念小說の跡を追ひ、深刻小說のひそみに倣ひ、或は紅葉露伴の後塵を拜するにすぎぬ駄作の無責任と無感激とよりは、この稚い感激と、單純な新聞小說めいた陳套な用語と、習慣的な筋の運びの面白さの方が寧ろ優つてゐるものがある。固より河原に砂金を漁る流儀の快感にすぎぬが、かの倨傲なる拙劣よりは、この我と身を墮した俗文學の思はざる風景美の方が快い事は爭はれぬ。

弦齋がその作の出た後にも、奴之助、默禪、蹴月、探菊等に俗文學の作家は多いが顧るもの極

めて少く、後年の蘆花は早くも同年の四月「恐ろしき一夜」(國民小説)を、三十年一月「漁夫の娘」(家庭雜誌)を、同年一月の「國民之友」に「河島大尉」を、翌三十一年の十一月「國民」に「不如歸」が連載せられた。尤も、彼の初陣は二十四年臘月「國民」紙上に「夏の夜語」を掲げたに初まり、「夏」(二十九年「家庭雜誌」、)「不思議の家」等を公けにしてはゐたのであるが。

その蘆花と菊地幽芳とは、殆ど時を同じうして記錄すべき新小説を新聞に掲げて新しき家庭小説の基礎を作つた。

五、家庭小説の序論

(家庭小説に含まれる戀愛、立志、滑稽、刺諷、少年、宗教等の諸傾向俗文學に就ては、少くとも三章程の紙量を要する故、こゝには序説の一部を摘記するにとゞめる)。

俗文學が民衆の最大多數と交渉を生じうる機會は、新聞と劇部とによる外はない。

半井桃水の記錄によると、前田香雪が明治八年の頃「平假名繪入新聞」に虛實混同の「金之助話」といふを連載した事がある。これが「大新聞」に小説らしいつゞきものが載つた少くとも最

初らしい。專ら政論を揭げるのが「大新聞」で艶種つゞき物のみを主とし、政治は斥けて宦海の異同などを報じるのが「小新聞」である。

十五年一月二十一日の「有喜世新聞」に、

○魯國の虛無黨は今度又風船よりダイナマイト（激烈の破烈彈）を下しガッチナなる魯國の宮殿を破壞せんと企てしが事ならずして發覺し捕縛されし者數名なり。

といふ記事があり、情事殺人の珍らしきは續きものにして揭げてあるのなどそれである。

その「大新聞」に小說らしいものが公然と載つたのは上述の「浮城物語」が「報知」に揭げられた時に初まると矢野龍溪の談話がある。（「明治文化發祥紀念誌」）

新聞ものが上演せられた最初は、これも桃水の記文によると、同じ「平假名繪入新聞」に香雪散人が、薩人澤本彥右衞門の西南戰死譚を揭げたのが十一年三月新富座に上つた時であるといふ。「續々歌舞伎年代記」を見ると、同年二月二十三日から「西南雲晴朝東風」が新富に上演、これは守田勘彌が西南芝居の種に苦心し、中井弘伊集院兼常光明寺三郎秋月種樹等から取材したと誌し役者は宗十郎、左團次、菊之助、半四郎、仲藏、菊五郎、團十郎の一座で、團十郎の西條高盛

（西郷隆盛）を見物した假名讀新聞社の魯文が、南洲に因んで團洲と云ひ初めたのを團十郎も面白いと思つて自らも亦團洲と稱したと誌してある。

更に今一度桃水文に照すと、「東京繪入」には爲永眞水の人情噺が、「繪入自由」には櫻田百枝の馬琴體飜譯小說が、大阪の「魁」には桃水が小說を、十八年の頃「改進」に南翠が、十九年頃「讀賣」に加藤瓢乎が飜譯物を、廿一年「東京朝日」に桃水が小說を連載した。又、新聞小說が販賣高に直接影響し初めたのが二十年前後からで、飜譯の黑岩涙香、羽山菊醉、思軒、その外採菊、澁柿、眉山、水蔭、柳浪、弦齋、霞亭、綠雨、三昧、篁村、半牧、浪六、文海、嵯峨の屋、霞城、得知、幽芳、仰天子、忍月、紅葉、露伴悉く筆をとつた。又、朝日社長村山龍平は常に「大家になるな、成るたけ骨折るな」と注意してゐたといふ。

冒險物といはず、傳奇物といはず、探偵物といはず、一般家庭物といはず、新聞小說の世界に入れば藝術云々は因よりいふだけ管である。場面の變化も取材の珍奇も、凡べて新聞故に必要である。民衆が衆愚と云はれねばならぬ限り、新聞は小說の作法上常に讀者への刺戟の程度を考慮しつゝ作者に煽情の注文は絕やさぬ。衆賢の無差別時代、思想上貴人の時代が出現せぬ限り、如何

に經濟上政治制度上の無差別觀が唱道せられてゐ、新聞を知識の唯一の機會とする一般讀者は絕えぬから、新聞小說が最多の讀者を背景として、經濟上有力を持してゐる間、文學の一傾向として新聞小說は、民衆敎育の普及に從ひ、極めて遲々と進步はし乍らも最も平俗の下級の水平線を占めて數に於て最上を示し、且社會敎育の方針精神と關聯して、人文敎育の展開に伴ひ、文藝敎育が今後益す精緻に神經質に論究せられねばならぬ點から考へても、新聞小說の問題は等閑に附す事の出來ない重要問題の一で、その新聞小說は卽ち通俗大衆的の煽情文藝の性質を當分變更する機會は當然あるまいから、俗文學に於ける藝術味、藝術心の俗文學的表現、作家自らの眞劍な問題として此等諸問題にからまる個人的考慮等につき考へてゆくと、單に大衆物だからとして棄てゝおく氣にはなれぬのみか、大衆物だから考へなければならぬ心持ちが反撥的に强くなる。藝術小說の作者にも通俗文藝の作者にも、生存上及藝術良心上の個人問題にからんでこの問題は根强くのしかゝつて來る。少くとも一派の人々は左樣であるだらう。其等の問題を普遍化してゆくと、吾等は過去の俗文學中の作品についても、今迄以上に眞摯に綿密に考察する必要を感じなければならぬ。

明治通俗の煽情文學の本流は、冒險物でなく政治物でなく、主として傳奇小説と家庭小説とにあつた。就中、讀者の數の方面から見れば、所謂家庭小説が弦齋の「日出島」等よりけはひして蘆花、幽芳の出世作とともに勃興し、蘆花の「不如歸」が三十一年十一月に「國民」へ、幽芳の「己が罪」が三十三年一月「大阪毎日」へ出たに初まり、爾來改元に至る迄、「緣の糸」といひ「魔風戀風」といひ「伯爵夫人」といひ「露子夫人」といひ「琵琶歌」といひ「嫁が淵」といひ「女夫波」といひ「富美子姬」といひ「長恨歌」といひ「月魂」といひ「小華族」、といふ著名の家庭小説が相次いで刊行せられたが、傳奇物語も家庭物もともに、明治初葉から中葉にかけては凡べての小説家がこれを試作習作して、殆ど凡べての藝術作家が同時に通俗家で、又、通俗作家が即ち藝術小説家であり、極めて新聞小説家的なる人々「例へば中期にあつては、桃水のごとく弦齋のごとし」が新聞小説家、通俗小説家として差別せられてゐたか、後又次第に變化を生じ來つて、文壇の變遷に伴うて時效の篩にふるひ落される者が續々と生じ、初めに藝術小説家として立つたのが、其作家の晚年又は明治末期にはいつの間にか立派な通俗小説家として、我れ人ともに認めるやうになつた人もあり（例へば天外のごとく、葵山のごとく、霖華のごとく、春葉のごとく、紅

線のごとく、風葉のごとし）、又新聞小說を頻出して時あつて通俗家に墮せんとしては辛じて持ち耐へ、結極藝術家として終始するに至つた人もあり（例へば秋聲のごとし）一旦俗文學の地平線下に沒入となり、忽然と藝術小說戲曲に復活した人もあり（例へば霜川のごとく、靑果のごとし）人々の性格と境遇と事變と僥倖により、それ〳〵の立場はあるが、明治終焉に近づくに從ひ新聞通俗家と藝術小說家とは判然と差別を生じて來て、一は多作して惰性の間に生き、一は自重して新生命を持續するのが大體二つの型となつてしまつた（最近に至つては、それが再び殆ど完全に昔に立ち歸つた觀がある。）

最初に殆ど一筋であつたものが、終りに二筋を判然と劃するに至つた理は、文壇本部の進步と批判の峻嚴と、通俗文藝の魅力性の增加とに基くものであり、讀者の增加と及びその二種類の差別の一層明瞭になつて來た事實を物語るものであり、而して、之れは普通敎育の進步普遍と、文藝の社會性絕對性の一般の間に漸くゆきわたり認められて來たによるのであらう。が、世界は絕えず進步しつゝあるとはいへ、ある時代のある原因による反文化的現象傾向は、直ちにその時代の靑少年の智識の水準を低下させる。二十世紀に生れた少年も、棄てゝおけば邈たる原始人の智識とは異るものでない。文藝に於ける讀者も亦さうである。自棄時代頽唐時代の讀者の低級は、

しば／＼一昔前の讀者の洗煉せられた趣味識にも劣る事があるを發見する。一進一退して時代は展開をつゞけてゆくからである。われらが通俗煽情の文學に對する懸念はこゝにもある。蘆花の「不如歸」は類型を描いて個型に及ばざる俗小說の典型であつたが、同じ作者の新聞小說「思ひ出の記」は等しくこの缺點に立ち乍らも、熱情高き主觀の高調でこれを救つて、通俗畑にあつて所謂藝術畑の二流作以上の眞の藝術味を發揮した。これ通俗文學の一つの勝利であらうが、新聞小說そのものゝ程度の向上が作者と作品とに幸ひした事實も閑却する事は出來ぬ。しかもこの勝利は一に作者の天稟が飽くまでも生來この種の通俗畑に適合してゐることを證據立てるものであり、今までの習慣的手法を去つて、素人らしい取材と取扱ひ方とによつたのが成功の直接誘因となつたのに外ならぬ。幽芳以下に就ては他に閑を俟つて細論し、蘆花と照應せしめ、風葉春葉以下との關係と變遷の跡と其藝術性とを論じ、合せて同時代藝術作家の非藝術味と對照せしめ、この題の最後の結語を論じて見たい。

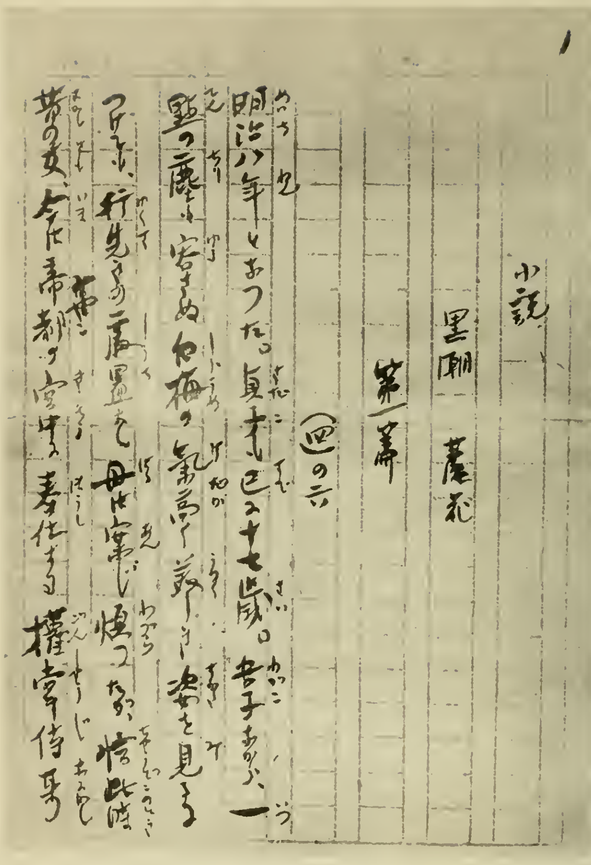
家庭文學の變遷及價値

——明治煽情文藝概論の結語——

一　緒　說

輸入的儒教主義の男尊女卑と、傳來の祖先崇拜の宗教的習俗のもたらし來つた家長制度と、日本佛教の俗解絕念觀と、その他の習慣の墮勢とが集合して作り上げた明治初期に於ける、德川的傳承の家庭思想、家庭制度が、よしんば如何にまばゆきエキゾティシズムに目醒め、汪然たる知識慾にそゝられた明治人によつて、突然の改造を試みられたとはいへ、傳來の慣習の底力はもとより一朝にして亡び去るものではなかつた。否、寧ろ一般的事實としては、慣習の勢力範圍內に蹲坐しながら（獄裡から窓外の春を想望する囚人にも似て）自由と解放とを焦心して希つてゐたに外ならなかつた。

政治的正義は、結局悠々たる雲、杳かな理想であるが、政治的自由は目前現實の生々しき希望である。その自由さへ滿足に與へられぬと思惟した十年代の民權的青年者流にとつて、世間が不平不滿の掃溜であつたと同時に、家庭的に尙改造されてゐない彼等、性的に敎化せられてゐない彼等、國家人としての資格をそそぎ込まれるに忙がしくて、人間的素質を顧る暇のなかつた彼等にとつて、家庭は慣習的禮儀の練習場ではあるが、本能的愛着愛心の自由な赤裸々な交換所ではない。快樂は外に求むべくして、內に於ては與へらるべくもない。町內の集會ではさばけた冗談を、校書の徒と交す事さへ惜まない家長も、家內ではともすれば澁面を作つて嫁孫に忠孝仁義の押賣をしたがる堅苦しい親爺である。靑白い顏をした良妻賢母等は政岡のごとくに慇懃で、戶浪のごとくに凛然としてゐるが、內實は不倫なる舅の流眄や、又はその虐使を目途とする姑のお先祖さま主義や、良人の不始末やらドラ息子の尻ぬぐひに、日も之れ足らぬ貰ひ殺しの安價きはまる「焚きざはり」で、年を經て聽て此良妻此賢母が一家の權力を握るとなると、新しく飼はれに來た嫁いびりに、しばしば昔の復讐を算へ、去年小學に入つた孫娘にもとかく女今川のおさらへを、する。これらの家庭から「世界的」の物理學者や、所謂明治「文豪」や財界の「奇傑」なる者や



德富蘆花【黑潮】原稿

「軍神」の卵の類や和製の「トロッキイ」や「スパルゴ」や「仕合せ極まる」政友總務の輩も出たのであるから、良くも考へられようし、惡くも考へられようが、畢竟この民族がこの變轉期に際會して、這般良否の產見をなしたといふにすぎぬ。問題はこの民族性、この轉回期の本來の性質如何にある。

原始的無敎化といふ原則を除いても、大和民族の上代人等が性的に快活であり、解放的であり自由であつた事、一家の和樂を素朴に直截に實行してゐた事は、上代歌文の研究からも推測せられる特性であるが、家庭の文學として特に特徵夥しきものがあつたわけでは勿論ない。その點は日本のみでなく、各國の上代文學も亦さうである。希臘叙事文學でヘシオドスの「神統記」は類稀ではないが、その「仕事と日々」は家常文學として異數のものに算へられてゐる。然るに明治に於ける家庭文學は、家庭に於ける思想新舊の問題、階級觀念よりの紛糾、虛榮心に基く家庭團欒の破壞、家庭人としての男女の一代記、上流家庭への好奇心、軍國主義の謳歌等を題目として、筋の運び方にも、暗黑面描寫の程度にも、性的好奇心のそゝり方にも、宗教道德に對する見解にも、任俠義憤の高調にも、家庭の讀物として特殊の文學的敎養を要しない一般人の興味を惹くに

足る條件を備へてをればこそ存在が許されたので、この類の小說の最高級の作例を西洋に求めると、たとへば獨逸のパウル・ハイゼの如く、佛蘭西のアレキサンダー・デューマの如く、英吉利のマリー・コレリの如き作者の作品がそれにあたる。

上代に於て原始的乍らも家庭的なりし日本人が、中世以降家族主義を根本條件とする家長思想に立ち乍ら、實際は一向に家庭的でなかつたのは、家庭の王者たるべき女人に家庭に於ける求心的權力と、自らの教育とが賦與せられなかつたがためで、禮容はあるが、親子兄妹の愛の交感はありくと表面には出ない。何らかの危機に際して、初めて顯はれるといふに止まるのであるから、文筆ある女子は惠まれた特殊の產物にすぎないので、それらの女子によつて生れた文學も、亦特殊の位置にあつて男性の領域に藝術的活動をなしたといふにとゞまり、女性作者の家庭文學も明治迄には群落的には出てゐない。外國はその點に於て數步早く進步してゐた事說く迄もない。近世文化の家庭教育に浸潤せる結果の一であるから、既に近代文明の副產物として、教育普及の間接結果として、家庭人の解放につれて此家庭文學が生れ出たとすれば、之が日本文學史中特に明治に於て、初めて明らかに具體的に表れた現象である事が判明するわけだ。德川末期迄にあつ

ても、僅かに其希望と企圖とは閃めいて居たけれども、それは極く異例で文學史中の著しい現象と迄はなつてゐなかつたから。其明治家庭文學の最初のけはひは何であつたらうか。

二　基督教的家庭文學

明治人の家庭に泰西的形式をもたらしたものは、政治家と外交官と貿易家と貴族富豪の徒とで、その泰西的内容の幾分をもたらしたものは、正に基督教徒であつた。勿論此雙方には例外も夥しいが、全體から見て斯ういふことが、ある心持に於て許さるべきであらう。

その政治家と外交官と貿易家と富豪貴族との家庭から文學が生れるに至つたは、輓近の事實であるが、基教徒の窓から家庭文學が芽生へたのは、遙かに杳く四十年の昔であつた。

新島襄は二十三年に死沒してゐるが、その創設せる同志社中心の宗教運動の效果は、啻に組合教會以外他の教學界に類似のミッション、スクールの創設を促したのみでなく、文學界にも民友社の新興文學となつてあらはれた。同志社の開校された十二年はキリスト教の傳導時代で、翌年には邦譯新約書成り、Y.M.C.A起り、十九年には邦譯舊約書完成をつけ、次いでユニテリアン傳

へられ、日本基督教會の獨立が成功し、サムマースクールが開かれるといふ有様で、明治宗教の變遷を顧るとキリスト教流布のかくも目醒ましかつた時を外に見出せない。しかし、明治十二年の頃に總數三千人にも達せざりし信徒が、十年の間に十萬人を超えるに至つた仔細は、單なる新宗教への好奇心とも、宣教者らの努力とも考へる事は出來ぬ。否、進化論の輸入は、功利說の提唱は、實證哲學の祖述は、かへつて反キリスト者の一團に仇敵の武器を逆にとつて對抗するが如き感と事實とを與へた。紅毛舶載のもの凡べてがキリスト教と同種同族のものでは必ずしも無かつたことはいふ迄もないからである。

が、明治人の異國情調は、時として、此等相容れがたき順逆相異する思想や教化やに只莫たる憧憬の念を以て對したる事も事實である。「西洋人」に對する著しき好奇的の心と何とはなき尊敬の心との混淆せる心狀である。功利的にいへば、かれ等は之れに由て時勢に必要なる語學を、この異邦人から學習する事が出來る。珍奇なる西洋的の風俗に接する事も出來る。「高等」な新文學鑑賞の眼をあけられる事も出來る。輸入時代の青年が、これらに牽引せられるは非理ではない。しかも、一たびその家庭を見た者は、個人的自由の生活狀態を目のあたりにして、男尊女卑の

「陋習感」が今さら首肯せられるのみか、一家の和樂團欒、家長の温顔、主婦の權威、兄姉弟妹の懇密はいふ迄もなく、昔から日本にあつた僕婢への温情さへ、全く今迄の大黑柱黑く、狐格子古い疊と障子と帳場と佛壇と客間との家庭（といはんよりは寧ろ御靈さまを中心に祖先への崇拜の情をさゝげつゝ集合した家族的共棲）には塵氣ほども無かつた、そして此新渡の文明開化の權化たる、神の愛の宣布者の民族のみが、羨しくも豐かに享有する美德であるかの如くに理解せられて、こゝに集り、こゝに學ぶことが、輕薄人には「高等」な開化趣味であり、功利家には此上なき便宜であり、求道者には目まくるしく現實の刺戟であり、而して文學青年には鑑賞と研究との唯一の好機會でもあつた。

一方、キリスト者の側から見れば、流布の一法として盛んに人寄せをする必要から、文學語學の教授はもとより厭ふべき筋でなく、研究、洋行、その外の方面にまで個人的內情に立入つて世話をしたものも少くはなく、又、それらの職業意識を全く離れて、懇切に教導と世話とをつゞけた牧師らも相當に多かつたから、十八年伊藤內閣が成立して、外交政策上歐化主義が堂々と行はれ初めてから一層にこの新宗教の傳播は著しくなつた。

然るに國會開設前後からしてキリスト教そのものは、歐化政策が浮薄の模倣と、無差別の輸入とを敢てした事の反動原因と、古日本の新らしき光に照らした詳査の自らなる希望の發動と、土産の愛に引寄せられる一種の回顧心とから、國粹保存が强調せられ、內部にあつても基教神學の宗派が解釋に於ての新舊見解の相異から、各派の間に漸く一致を許さゞる事情が續出し、三宅雪嶺一派の「日本」出で、井上哲次郞對キリスト者の論爭起り、內村鑑三の御名御眞影事件、クリスチャン政治家森有禮の慘死の事件が起つて、キリスト教は非愛國派の立場を强ひて立たせられる傾向が生じてから、(實際そのけはひもあつたのだが)、對外問題の紛糾と共に、朝鮮事件、日清戰爭となり、國粹家と神佛教徒と一團となつて宗派根性に反動思想が混淆して、キリスト教徒の對國家態度を曲解異釋したところへ、キリスト教徒自らこれに對抗するの根據ある思想家は少數で、多數は喧騷に驚愕するに過ぎない凡常の善男善女であつた上、牧師ら又傳敎の道を誤つて新信徒の不滿を買ひ、國粹熱に感じて脫宗の徒相つぎ、信徒次第にその數を減じて、明治キリスト教史中最も不振の時代となつた。かの外山正一が「東京學藝雜誌」第七十二號に「耶蘇教擴張の新法」を論じ、大學卒業生をクリスチャンにするを捷徑とすると云つたも、信徒の質を向上させ

る事の義務を說いたに外ならぬ。しかも、注意すべきは、明治十年代末期から此時代かけて、キリスト教的家庭文學が芽生へて來た一事で、その代表人若松賤子の執筆期は二十二年末から二十九年に至る間で、この英語をあやつり、英文を物したキリスト教新婦人の新飜譯新創作が産出した期間は、あだかも、古き日本の最終最後の閨秀小說家、書に歌に文に秀でた一代の才媛樋口一葉の活動期間で、この二人の巾幗作家はいろ〳〵の點から對照の興味が深い。

德富蘇峰は、二十年七月「國民之友」第六號に「基督教の文學」を談つて曰く、

「宗教の文學にて最も注意すべきは、（第一）何人も了解し易き、平易なる文章を作ること是れなり。彼の淨土宗の和讃及び眞宗蓮如上人の御傳記の如きは、爐邊に横臥して起つ能はざる田舍家の老婆と雖も、猶ほ之を讀むなり。（第二）讀む人をして樂ましむること是なり。如何に平易なればとて、讀んで樂まざるものは、誰れが好んで之を讀まんや。別けて宗教の思想は、動もすれば抽象的の理窟に陷り易きものなり。況んや自から好んで理窟を言ふに於てをや。吾人は敢て理窟を言ふ勿れと云はず。たゞ趣味なき理窟を言うて、人を飽かしむる勿れと云ふなり。（第三）品格を高尙ならしめんこと是れなり。若し下品なる文章を作りて、

人心を腐敗せしめば、如何に人を了解せしめ、人を樂ましむるも、既に宗教の目的を失したるものなり。彼の野鄙の言葉を使ひ、鄙猥の形容を用ゆるが如きは、實に宗教文學の賊といふ可し。」――

と論じてゐる。

この政論家の文學論の注文によく應じて現れたのが若松賤子に外ならぬ。賤子はキリスト教雜誌「女學雜誌」に連載したバーネット夫人作小說「小公子」の譯者として著聞してゐるが、一二の明治文學を叙した現行冊子にはその名さへ出てゐない程、いはゆる文壇とは緣の遠いキリスト教家庭文學の作譯者であるが、當時この書出て一般の讀書界を動かしたは今日に到る迄、その讀者つねに絕えず、その後大正作者佐々木某の新譯出でしも、その新版本つひに行はれずして、依然として此舊譯本の讀者を牽引してやまぬものがある程に一般的興味を惹起したのは、その當時「國民之友」記者が兒情を寫した作品としては「ヂツケンスに『オリバー・トウヰスト』又『オールド・キユウーリオシチー、ショツプ』等諸篇、トルストイに『幼兒、少童、及び青年』ドストイエフスキーに『禍患と侮慢』」あるが此書は「前書に比して格段なる遜色あるを見」ないとい

ひ、思軒居士は「世間の謂ゆる言文一致體に由る者にして、余が心より服せらゝの唯だ「浮雲」ありしのみ今日此書を獲て二となれり。」といひ、評家忍月が「見渡すに女學雜誌主筆巖本善治妻譯述（此所廣告の文字借用）小公子に關する諸家の評上總て評ならぬはなし、女學雜誌の面目若松女史の滿足如何ならん思へば羨望に堪へざる次第なり」といひしに徵して明白である。又その原作評は宮崎湖處子が此書は理想小說で天使の性質を小公子に擬人したものであるが、それには酒風症の老侯爵が惡役では物足らぬ。あの老人は貴族の傲慢と武人の酷薄を有する頑翁にすぎない。外に理想の大惡魔がなければならぬといひ、又、保母のメレが淡泊すぎるのはその缺點だ、「理想小說の短處は其筆力の或る一部に偏して全部に遍滿せざるにあり」といつた一文と坪內逍遙の「早稻田文學」第四號で「原書の精神は無邪氣なる小公子を主人公に利己にのみ傾ける老貴族を副主人公にして「無邪氣」の周圍に及ぼせる感化、並に周圍の無邪氣に及ぼせる影響を寫さんと力めたるものゝ如し」と云つた外に、忍月が人間には極端を喜ぶ情があるが、これは人間の弱點で、「本書小公子は人間の弱點に乘」じた作で、「之を評する者も亦自己の弱點を棚の上にあげて顧みざるものなり」と突き、老人と小兒、剛情と慈悲等年齡情性身分貧富悉く極端で「極端を除

去すれば本書の妙味なし」と斷じ、と云うて譯者や作者を貶難するのではないが、「只『極端』は老功なる文人が手腕を振ふべきの舞臺にあらずして、終に他の嗜好を犧牲にするの惡弊に陷ることを示すのみ」と結んだ一文があるのみで、忍月の評文は認識不足の難はあらが、他の評家にまさつて直ちに家庭文學、少年文學の缺陷を文學論的に突いた批難文である。

又、譯文については「讀賣」誌上に紫山人が「自他混淆支離滅裂と云はれても蓋し辯疏の辭なきに苦しむなるべし」と評し、逍遙は、流暢平易の中に長幼貴賤の別、文情の調和をはからんとして俗語を用ひ、特に「人にいひ〳〵しました」など優しい女教師が幼童に教へる風に似てゆかしいといひ、思軒が「斯の一體より以外には復た文あるを知らざる如く」と評し、「一點のヤマなし一點のケレンなし、謂ゆる場當りキザ氣に至つては毫も之を見ることなきなり」といつたは美妙の口語體を諷したるもの「原文を見て如何にも一目の下に瞭然と其意味の微細曲折の御分りになることは、丁度日本の平生の言葉を聞くやうに御分りになるものと見える。」とは賤子追悼會席上に於けるその追悼演舌の一節である。「小公子」原作は當時の評者在米の梅蓉生の一文によると、少年雜誌「セント・ニコラス」誌上にかゝけて大評判をとつたのが千八百八十五年とある

から、原作發表後四五年ならずして譯者の採る處となつたもので、「小公子」は少年文學と冠せられたれども、如何なる種類の人々も實に必讀の書にして云々と梅謦生も云つてゐるが、日本に新しく生れたキリスト教家庭文學として先鞭第一に屬する作であり・譯文も精緻を極め、明治飜譯史上必ず引證すべき第一流の飜譯文章である。たゞ、純藝術の立場から之を見て、忍月の所言に中るところ多いは否まれない。以上の引用文を見て、讀者は、當年の文壇が家庭文學も純藝術も混淆して認め、且つ、論じてゐた事實に氣がつくであらう。

賤子の文業は、「忘れがたみ」に收集せられた創作文と譯文と、外に「ジャパン・エバンゼリスト」婦人欄小兒欄主筆として執筆せるを、後ハーツホーン女史が編纂した英文集「巖本嘉志子」二十一篇がある。處女作「お向ふの離れ」が二十二年十月の「女學雜誌」に揭げられて後に、ミス・プロクターの詩を散文化した「忘れ形見」と、ディケンズが「デヴィッド・カパフィールド」の最初の部分譯「雛嫁」と、バーネット夫人の「せーら・くる物語」譯と、同じ作者の譯文斷篇「我宿の花」と、テニスンが「いなツく、あーでん物語」と、ストウ夫人がMy Wife and Iの一節「入學前」と、インジェロウが「淋しき岩」との外に、飜案らしい小品と創作小品とがあり、「太陽」

の二十九年一月に掲げた「女房演說」のごとき會話體の小篇もある。以上の譯文の選擇を見ても賤子の興味の性質は判るが、蘇峰のいふ程度の常識文學論的注文は殆ど完全に若松賤子に於て實現具體化されてゐるので、此等の譯文の巧みと「女房演說」の會話體の出來榮えとを見ると、遣して行つた作業はこれ丈けだが、賤子の才分は、決してこれ丈けに終る性質のものでなかつた事が首肯せられる。

新聞も邦字新聞よりは英紙の方が樂だと云つてゐたといふ賤子は、祈禱にも寢言にも、又心を籠めた眞面目な書翰などにも自然に英語を用ひてゐたほどに、英語に堪能の婦人であつたから、譯文特に會話の呼吸に得もいはれぬ妙味を出し得たは當然だが、當時のキリスト教家庭文學が殆どこの人を最初の最後にして亡びてしまつたは心殘りである。尤も、河井道子、辻村靖子共譯の「家庭小說ひとりぼつち」は明治三十年エミ・ライーバル女史の原作であり、松井松葉の飜譯「家庭小說樂天小屋」は米國八十萬の家庭が悲哀の淵を救はれ、その脚色物紐育、倫敦で三百日以上大入をつづけたなどゝ廣告をせられたが、ともに一般のセンセイションは贏ち得なかつた。

若松賤子の家庭文學が、たゞひとり太白のやうに輝いたのは上述の如く彼女の天分にもよるの

だが、その語學才と藝術才とをかくまで發揮せしめた母胎は、そのキリスト教的信仰に基く家庭觀、藝術觀の快活性光被性樂天性で、女子の藝術を第二義的家庭文學の埒內に跼蹐せしめたのもそれであれば、女史の人間を明治基督教徒中の最も好ましい型に仕上げたものもそれである。「小公子」はもとより米國家庭文學の飜譯にすぎず、その原作も作者の書史中にあつては That lass o' lowrie's (1877) Haworths (1879) A Fair Barbarian (1881) Through One Administration (1883) 等の「小公子」迄の前記の作と Making of a Marchioness. (1901) 等後期の作と、Phyllis. The showman's Daughter, Esmeralda 等の脚本との間に伍して、逸作を歌はれるものではあるが、米國近代文學史上中の秀什といふほどの作篇ではない。シヂキック、ワーナ、フインリ等閨秀文學者の少年文學にしても、ホーソンの少年文學にしても、トロウブリッヂ、ケイラ、オルドリッチ、グドリッチ、アボット等の少年文學にしも、ケロッグ、アダムズのそれにしても、米國少年文學の乃至少年家庭文學史の重要頁たるを失はないが、前世紀世界文學の水準に於て、英國リウキズ・カロルの占めうる程の奇異なる位相は許さるべくもないのであるが、バーネット夫人の作は、此等とは些か趣きを異にした家庭少年文學でもあり、混濁米國が僅かに有す

ら清教徒的國民性の通俗文學的展開でもある。この文學をキリスト教徒文學の一系列に位する文學として拾ひ上げた若松賤子が、清新にして高雅、快活にして敬虔、無邪氣にして凛乎たる人生の夢想を托して、これを本邦讀書界（敢て文壇といはず）に寄せたのは意味あることである。基督文學は、ホワイト師の『天路歴程』を初めとして、過去に於てかなりの數の移植を終へてゐるが、それらは純文學としてよりも、宣傳文學として役立たせられたものである。マリー・コレリの家庭キリスト文學も早く移されたが、其實際の效果は何れの點から見ても、バーネット夫人の「小公子」には及ばなかつた。蘇峰の數へた基督文學の綱目は常凡の見地を出ないが、傾向文學として結局これに落付くのがその常道であらう。忍月の算へた如き標目を持ち來らば、小公子文學の藝術價が消失しさうになるのは止むを得ないが、さういふ傾向文學の裡にあつて斷片的に存する文學興味――小公子でいふならば、母夫人の吾子に對する態度や、老貴族と小公子との初對面や、八百屋に於ける小公子の潑剌たる言動等の描寫の價値並びに作品を一貫して流れる清潔雅淳の主觀のたゞよひは、後世該系統の文學に、若干の重要な遺產をもたらすものである。而も公子の性格は忍月のいふ如く、極端に理想の成型を寫したといふ事は穴勝ち出來ない。梅馨生の文中

米國社會でフォントルロイに吾子を倣はしめるのは、氣慨ある男兒を柔弱の女子に化する危惧があると論じた說の紹介もある通り、極端といへば卽ち性格的極端には相違ないが、小公子は畢竟作者自らの理想の少年で、決して俗陋野卑な世好に强ひて投ぜんとした形迹は些かもないから、明治三十年代の文壇語に所謂「光明小說」型の家庭小說ではあるが、俗野を嫌はぬ通俗文學と同一視する事は出來ない。而も此極端性は光明小說、家庭文學の不斷の屬性である。

「大阪毎日」懸賞小說一等當選の中村春雨作の「無花果」ごときも、これが紙上に現はれたのはそれより後遠く三十四年五月以降のことであるが、キリスト敎的憧憬が中心觀念となり、キリスト敎的光明觀が主眼となつてゐたから、高山樗牛や杉村楚人冠がトルストイの「復活」に比したはよいが、後者が直ちにその模倣たと云つて酷評を下した如きは馬鹿の一つ覺の例で、作者もその回想中に「復活」を讀んだことはないと明言してゐる通り、ト翁の作品に追隨したと見たはキリスト敎的臭味のものと何もかも一括して、有名作の名を擧げて粗笨にもこれの模倣だらう位な考で評したのが、作文の際に筆がすべつて模倣也になつてしまつたので、この種の粗雜な一括評は當時ザラにあつたことである。

春雨の「無花果」は作者その回憶談に、

「光明小説とか、家庭小説とかいふわけのものでなく、勿論、作者の體驗をそのまゝ書いたのでもない、ロマンチックな、理想主義的肌合の一青年が、自由に想像力を働かせて、人生に對する疑義と、その疑義を解決するために、キリスト教的信仰とを交錯させて、小説に纏め上げた丈けのものである。今から見ると幼稚な方で、所謂舊惡全書の一つに相違ないが、唯理想主義的要求といふ事が作者たる自分の一性向として、或意味で先天的のものらしいといふ點には聊か思ひ當る節がある」云々

とある通り、作者自らは理想主義的希求の發現として書いた迄であると云つて、家庭小説、光明小説の冠を辭してはゐるが、作中人物性格の描寫法や、事件の運び方に當時漸く盛んになつた家庭小説程度の甘さと輕さとが明らかにあつて、よしんば作者のねらひ處は遙かに深刻の個所であつたにせよ、出來上つた現品の調子がその程度以上でも以下でもなかつたから、此等の一族視せられたのは當然のことで、春雨はその後の短篇たとへば「藻の花」などにこの有名な長篇よりかへつて藝術小説的佳品を書いて、それは作者自らもねらつた理想小説の新らしき型に向つて、寫

實的一歩を進めたものであることを證してゐるから、「無花果」如きも家庭文學史中に置くは非ではないが、一般小説史中に論ずる方がより便宜であるべき筋の作でもある。二十年代から三十年代に及ぶキリスト教の雰圍氣が、如何に一般讀者の間に感ぜられてゐたかを知るにはこの一篇を極めるがよい。西洋風で、「ハイカラ」で、新思想的である條件の一は正しくキリスト教的であるべき時代であつたのであるから。

春雨はその回憶中で又、この作の出た「三年程前に出て大に歡迎された蘆花の「不如歸」や一年ほど前の幽芳の「己が罪」や以後の一二年間に續出した田口掬汀の「伯爵夫人」や草村北星の「濱子」などと共に、善い加減に批評家達からこれに光明小説、家庭小説のレッテルを貼られ、つひに家庭小説家などといふ名詞まで無理押付けに頂戴させられたのが、今から思ふと隨分迷惑な話であつた。尤も、當時はこの所謂光明小説、家庭小説が文壇、乃至社會の人氣を獨占するといふすばらしい勢ひではあつた。しかしやがて反動期がやつて來て、小杉天外の寫實主義全盛時代となり、更に自然主義運動が擡頭するといふ段取りになつてゐる。」と云つてゐるから、今は迷惑もしてゐるが、當時はそれほどでもなかつたといふ意味にも受取れるが、何れにしても春雨の小

說時代は家庭文學派中に隷屬すべき條件を多々有してゐたは、衆目の見るところで、樗牛は「明治三十四年の文藝界」(三十五年一月「太陽」の「第三、紅葉露伴を葬れよ」)といふ一文の中で、

「無花果の如きは、着想に於てこそ多少の見るべきものありしが、描法措辭の幼稚なるは素より、其の全篇を貫通せる理想は尙ほ太だ淺薄なりと謂はざるを得ず。」

と云つてゐる。小說「無花果」が忽ち十餘版を重ねたは當時の最大多數の小說讀者の興味を牽いたからで、當時の最大多數の小說讀者の程度は、家庭小說好きの上を出でず、その憧憬の對象、その理想は大體に於て「己が罪」や「濱子」の中に現るゝものと大同小異の程度であり、而して「無花果」の讀者はそれ等よりは稍高き處にあつたと見るを至當とする。

キリスト敎の文學的影響は、こゝにも明らかに現れてゐるのである。只、敎會內、寺院裡に於ける文學鑑賞者の創作する基督敎文學は、その光明觀や罪惡觀に影響せられ、光明に向つてそゝぐ觀照の瞳をそのまゝの強い度合に暗黑の方面にそゝぎ得ず、暗黑は暗黑で上辷りに素通りして、一圖に光明描寫に急なるため、その樂生觀、その光明觀はあつても、世界全體へ向つてそゝぐ觀照の眼は淺薄となり偏一となるを免れなかつた。それは木下尙江のキリスト敎的社會主義小說に

も現れてゐる欠陥である。

キリスト教的なる家庭文學は、創作に於ても、飜譯に於ても、尙夥しい數があつたが、特に文壇的交涉の多い作品は尠かつた。「未だ見ぬ親」については次章に述べるが、松浦政泰の「歐米家庭美譚」の類書の外には、ウイダ（ルイズ・デ・ラ・レミイ）の「フランダースの犬」とか「三家庭」の類が嗜讀せられた。但し、ウイダは歐米でもともすれば、不健康といはれてゐるのであるからキリスト教的といふ範疇に入れるのは妥當でない樣にも思はれるが、日本人の見地から見れば歐米の悉皆ゆる種類の文學にキリスト教の殘照を見るのだから、その類を入れたら尙夥しい數にも昇るだらう。ウイダの文學をひろく家庭少年文學文献の中に於て、キリスト教的なるものゝ中に數へるのは、此意味に於て非理ではない。

三　家庭小說の光明派

二十年代三十年代に、文壇は今日のいはゆる通俗物も藝術物も一まとめにして、文壇所產として扱つてゐるのが、自然派前後を境として、文壇の藝術小說と新聞や雜誌の通俗小說と判然と二

通りに別れるに至つた。

これは文壇の質の進步であり、量の增大であり、讀者の質の進步、量の增大でもあるが、その自然派前期の硯友社末期時代にあつては通俗物も高級物も、家庭物も文壇物も尙一緒に論じて、たとへば樗牛は、前引の三十四年文藝界を論じた一文中、

「中村春雨の「無花果」菊地幽芳の「己が罪」、德富蘆花の「思出の記」等は、昨年の小說中に於て最も名高きものなりき。されど是等は從來の陳套腐爛なる群著作の間に出でゝ、稍新面目を現ぜしと云ふの外、特に多大の推奬を値せざるものなりき。」

と云つて各小說の短評に入り、轉じて、

「紅葉、露伴一輩の所謂る先進大家の如きは最早や度外視して可也。彼等は舊時の小成に安んじて旣に新進の氣力を失へり。時勢の潮に後れて早や實力の競爭に勝へざるを見るに及びてや、高く自ら標持して偏に旣得の虛名を失墜せざらむことを恐る。醜且つ陋と謂ふべし。今後の文壇は最早や彼等に求むる所なかるべし。彼等を大家と呼ぶは不可ならず、然れども其上に歷史的の三字を冠することを忘るべからず。後進作者は決して彼等の門下に赴く勿れ。」

とまで云つてゐるのは、例の書生論の臭味を免れないが、既に時代がかれ等の頭上を一過してゐる事を談つてゐる點、明快に首肯しうる。

しかも樗牛のごとき評家が、國民詩人出でよと叫び、惡寫實を斥け、文明批評家としての文學者を說いたは時勢に妥當の論議であるが、かゝる大體論、概括論は間接の教育論的教化影響はあるけれども、直接作者や、文學者に向つてその創作心を改造展開せしめ、直ちに明日の指針となるやうな效果はないので、この點、樗牛は文學評論家であり、文學史論家ではあるが、無くて叶ふまじき、時代に緊要の批評家ではなかつた。その文學評論は、ジャーナリストの立場から文學史論、文學評論を切賣りしてゐたものにすぎない。しかも、この種の論評家も、當時は樗牛抱月を外にして多くを數へる事は出來ない樣な、批評の不況時代であつたは、よく今日の文壇にも似てゐるやうだ。

三十五年春「讀賣」に連載せられ初めた五來素川譯「未だ見ぬ親」は「家庭小說」を標榜して立つた。その小引にいはゆる、「蓋しこの書に顯れたる著者の精神を求むれば、全く是れ精神教育人格の繼承を描くを以て其主眼としたるもの丶如し、」の「社會教育の一端に資」せんとしたエク

トル・マローがサン・ファミーユの飜譯であるが、原作が數年ならずして、百五十版を重ねた通俗本としての成功書であつたごとく、譯本も三十六年から今日に到る十數版を重ねた家庭文學で、當時の新聞雜誌紹介中、「純潔なる家庭小說に欠乏せる我讀書界に」(「報知新聞」)云々の語を冠して推賞したものが多かつたのは、一面この種の讀物を衷心から要求するものゝ聲ともいふべく、「福音新報」ごときキリスト教誌が、蘆花の「時鳥(不如歸?)や思出の記は、家庭の讀物としても上乘のものであらうが、少年には不適當の點もある」といひ、この書を少年家庭文學としてすゝめ、家庭小說の要領を(1)「讀んで面白き事、」(2)「面白い中に美的趣味を充分ならしめる事、」(3)「讀むものをして精神上の修養に資せしむる事、」(4)「野卑ならざる事、」(5)「殘酷の筆を省く事、」等を列擧したは、期せずして當時の宗教的家庭方面の文學的要求をあらはしてをる。又、「家庭の友」が當時出たクレーク女史原作加藤眠柳抄譯「英國士道物語」(ジョン・ハリファックス・ジェントルマン」)に似通つた所があるといつたも、その嗜好し玩賞する個所を自らよくあらはした言葉で、地名だけ巴里やテムズ河をそのまゝにして、人名を太一や源十のごとく日本化したのは二十年代からの習慣で、讀み易いを本位としたのであるが、二十年代初期にあつては、國粹運動の餘波から

なるべく西洋臭を避けて日本化する事が、その要件の一ともなつたのである。「未だ見ぬ親」に於ては、後者の如き感情は勿論些かもない事はいふまでもない。

讀書界は既に硯友社小說に飽き果てゝをるのに、樗牛のごとき勇敢な評者の叱呼もあつて、誰手を染めずとも自ら舞臺は局面一轉しなければならぬ情態に迫つてゐたのであるから、所謂「小說好き」が從來の惰性で、尙末流の硯友文學にこびりついてゐる間に、キリスト者の群は右の如き書や「ジョン・ハリファックス・ジェントルマン」全譯本の類や「三家庭」の類やに走つた。第二期「早稻田文學」の彙報でその記者も「水底の沒人」となつた第一期早稻田文學休刊後二十年代の文學界を回顧し、このいはゆる文壇の留守時代に逍遙か倫理に匿れ、鷗外西埀に下り、紅葉宿痾に苦しみ露伴漁翁となつて、新進作者又目星しいものはなかつた頃、社會の一部よりモーラル・トーンといふ事、今少し高級な社會を描いてはどうかといふ要求があつて、三十二年全國高等女學校長會議で、女學生の小說讀書を禁止するの案が決議せられ、所謂新聞小說も講談の筆記に壓倒せられる有樣であつたので、「材の上に道德を要求するの聲と、前述局面を擴張するといふの希望とは」合して蘆花、幽芳、春雨等の小說の歡迎となつたと誌してゐるのは、大體に於て是

認しうべき觀察といふてよい。蘆花一派の特質をば「何れも漠然たる意義に於ての道德的、家庭的、理想的、上中層的」とした記者の分類法も、大體の傾向を捕捉した見に立つたものと云ひ得られよう。

三十三年六月の「帝國文學」に「蕉窓漫言」の筆者は、

「現今讀者社會に於ける二個要求は、嚴肅純潔なる家庭に用ゐらるべき趣味ある讀物、及び兒童の心境智識を開發すべき無害の物語類なるべし。」

とて後者は小波の「お伽噺」があるが七八歲の幼兒の讀物で、少年物とはいはれない。若し夫れ嚴肅な家庭に歡迎せられる資格あるは、露伴の作で、「卑ならず俗ならず、悲慘度を越えず、比較的溫雅にして、比較的健全な」のがその所以であると云つてをり、更に之れに補足して、「文學者の本領は、時代精神を發展し、彼等が雙眸に映ずるがまゝに、人生を描寫するものなること、吾辯を待たずして明なり。ベン・ヂョンソンの莎翁に讓ること數步にして止まらざる所以のものは、」云々と辯じてゐるから先づ相當の文學常識ある者からすら這般の要求があつたものと見てよい。

又、同年十月號同誌に、

「批評家の口頭にのぼること稀なれど、現今の讀書社會に隱然勢力を占むるものは、講談物と弦齋の小說となるべし。地方行の新聞の重に報知なると、居士の小說あるが爲めに報知賣口多きとを知らば、思ひ半に過ぎん。決して、地方人士日常の話頭「日の出島」に限らるゝのみならず、都下に於てすら弦齋物といへば、評判惡き方にあらざるを聞かば、尙更一驚を喫するの外なかるべし。講談と弦齋物、共に趣味の高下を問ふの由なし。吾國民が如此の物を歡迎する間は明治文學も萬萬歲なる哉。」

とあるが、三十二年十一月中旬「國民」記者に向つて幸田露伴が當時の作者の眼界の狹小を難じた言葉に、

「今の小說の讀者は、お孃樣にあらざれば。書生、書生に非ざれば親の脛かぢりのみ。作家の目當とする所の讀者豈是の如くにして已むべけむや。苟も作家として世に立たむもの、少くとも三十歲五十歲以上の所謂世間の人に感興を與ふるの作なくして可ならむや。」云々

とある。此等の事實を見ると、當年の一般小說の讀者が靑書生、お孃樣の類に局限せられてゐたは、その文學興味が中年及び中年以上の者の興味を牽きえない本質のものであるを證し、中年及

び中年以上の讀者は他の讀物、又は古き時代の小說類でその讀書慾をみたし、同時代人の作つた小說は彼等の耐へる所の食餌でない事を證してゐる。が、海舟翁勝安房はその「氷川清話」で當時の小說家を列評し、露件を第一の人物とし、紅葉又才人たることを失はずとして讃美してゐるから、當時のすべての作者が穴勝ち老人組に顧みられなかつたわけではない。少くとも、青年男女の欲するところのものが、上等といはず、劣等といはず等しく老人のそれと著しく異つて來て、到底兩立すべきではなく、老人は老人、青年は青年とかつきりと兩分して來て、その青年の間にも甲乙上下の必然の差を漸く明瞭に示して來た事が明らかになり、數に於て優等を占める青年組中のある讀者が講談筆記と弦齋物とにあきたらず、自ら家庭小說の勃興發達をうながした當然の事情の誘因が肯かれる。

この一般並の青年讀者中の進んだ趣味のものが、家庭文學に闖入し來つた間、文壇は此等の讀者を對象としてのみ、經濟的に生活し存在しえたもので、其更に進んだ一派が當代末流文學と此家庭文學とにもあき足らず、樗牛等の推奬するエチェガレイやシェンキイウイッチや、ズーダーマンや、ヨーカイの新文學を嗜讀して、當流文學の主潮の非世界文學主潮傾向的無知と、劣等と

を斥け、リヤリズムを說き、ニイツチェを論じ、ペイタアを宗とし、ヘレニズムを祖述したが、それ等はやがて、自然主義及び其以後の文壇に實際活動した高級の文學青年であつた。然し、現實としての文壇は、なるべく多數讀者を對象として漸進的運命の一路を辿つてゐたので、それ等の讀者が喜び繙いた愛讀書は「己が罪」であり、「不如歸」であり。やがては寫實的なる「魔風戀風」であつた。

かつて女學校中學校及び共れと同等以上の學歷ある。然し讀者としては、凡常の男女青年にとつて、新聞小說は趣味に於て、下町的が舊趣味に偏し、思想に於て陳套を極めてゐたから、外に讀むものがない故を以て、古文學と共に併讀するか、講談と共に併讀してゐたのが、「日之出島」邊りに出た時代錯誤的男女の出現にも喜悅を感じたのは、同小說が「報知」に出初めた二十九年六月前後である。忠實を以て鳴つた「早稻田文學」の「彙報」(三十九年四月號)これを說明して「三十三年頃かに明に文壇の一勢力となつた家庭小說といふものは、其の精確の意義は未定であるが、要するに嚴肅純潔なる家庭に用ひらるべき趣味ある讀みもの、即ち在來の家庭道德と調和した讀み物といふ程の意味で、それからして題材そのものがまた家庭の主なる關係、

すなはち舅姑、親子、夫婦といふやうなもの〻情を描くといふ事に移つたやうである。今日とても恐らくその意義に大差はあるまい。而して斯く、道德と文學といふ點を目標して起つた者であるが故に、や〻もすれば、娛樂の傍ら修身齋家の上に、直接何等かの利益を授くるもの〻やうにまで解せられ、從つて一部の評家は、家庭小說は畢竟夫婦相愛し、姑嫁相和すといふ程度を以て行き止まりとなすべき者と嘲るに至つた。是等は一つは家庭小說の流行に乘じて、一派の專ら敎訓を旨とするもの抔の出で來つたが爲でもあらう。斯く家庭小說の流行に一面に、文學の威嚴品位を損ずるに類する現象をも伴つたけれど、又一方には、これに依つて小說壇に一新生面を開拓し得たことはいふ迄もない。又在來の小說讀者の領域外に立つてゐた人々の間にも、小說の讀者を得て、上下一般の社會に讀小說慾を誘起し、ともかくも、一步を淸新なる文學に近づかしめ、一般社會の讀書眼、審美眼を多少とも啓發し得た事は事實である。更に又、是等の家庭小說の多くが、脚色せられて舞臺に上るに至つた一事をも見逃してはならぬ。これ一つには一般新時代の好尙を滿足せしむるに足るべき好脚本なきにも依るとはいへ、一つには、又如何に社會がこの種の家庭小說を歡迎しつ〻あるかを知る

に足る。」云々

と報じてゐるが、忠實の一面には老婆心切すぎるこの彙報の說明は大體首肯出來るが、家庭小說の効德を讀者範圍の方面に迄延長してゐるは要するに蛇足にすぎない。

家庭小說は、畢竟硯友全盛期と自然派文學とに介在する過渡期文學にすぎず、題材に於て硯友文學の低調を破り、社會問題的關心にもわたり、基調に於て家庭問題の疑問を提出して、狹斜小說の低級を破り、家庭道德的關心にわたつてをり、會話と描寫とに寫實的新意を出さんとしてをる。人物は大學生や「海老茶式部」や學者や政治家や銀行家や牧師や女學生上りの新細君等で、會話の題目は宗教、藝術、政治社會の諸問題であり、前期文學の校書、蕩兒、若旦那、俠客の習慣的世間の些事と局面一轉してゐる等、新教育を受けた青年男女の興味をそそるものあるは、爭はれぬ魅力であり新味であつた。

只、描寫が表面的で主觀が淺薄にすぎたため、此知識世界の斬新描寫が、直ちにかの因習世界の陳套描寫よりも、藝術的有價値ではありえなかつた事いふまでもない。即ち掬汀の家庭小說「伯爵夫人」は一葉の藝術小說「にごり江」に遠く及ばぬ劣作である所以である。

さて、蘆花の「不如歸」が三十一年十一月「國民」に、幽芳の「己が罪」が三十三年一月「大阪毎日」に連載せられる頃から、家庭小説氣運一代の勃興を促したが、その時代の大勢となる直接誘因は何であるか。間接の所因に就ては上來述べて來たやうな、文壇的並に社會的情勢があつたが、啻に文學上の運動又は傾向といはず悉皆ゆる社會上の集團傾向、又は運動が直接間接の誘因兩々相俟つて大勢を決するに到る事、たとへば、自然派運動は二十年代中寫實小説の勃興あり一時光明小説的傾向に壓せられたが、三十五六年から泰西自然派文學の飜譯や紹介があり、尙早く一例をとれば、三十五年八月「帝國文學」誌上「自然主義的傾向」の一文に筆者維舟（深田康算？）のゾラ、ツルゲーネフ、ドストエフスキー、ストリンドベルヒ、イブセンをあげて、文藝の自然主義的傾向を論じ、この傾向が「罪惡小説を生み、心理的解剖に偏せしめ、個人的特殊的の者の描寫を多くし、作家の個性を發揮するを重んぜしめ、而して終に現實の社會にのみ同情を有せしむるに至れり。」云々の如き、その語は尙たど〳〵しいが、當時としては知識的先聲をあげたものが、間接の誘動となり、尙外に夥しい泰西文學の主潮を論じ、譯し、祖述したものが間接因となつて、而して直接因としては抱月、天溪、花袋等の三十七年以後の創作や主張やがそれで

あるが如くである。

今でこそ家庭小說とて、文壇作者等の輕視を買つてゐるものゝ、當時は文壇の一部の强大の勢力であつた事は、前引「自然主義的傾向」中に、

「先きに「恐ろしき一夜」を叙し、今國氏新聞紙上に「黒潮」を載せつゝある蘆花氏が作「不如歸」の如きは慥に又我社會の一問題を捕へて之を提供したものと云ふべし。」

といひ、「早稻田文學」三十九年一月號に、「不如歸」は

「之れを從來の諸作に比ぶるに、取材の範圍異なり、上流社會に於ける家庭の出來事を基礎として、純潔なる夫婦の愛情を描いたものである。」

といひ、「己が罪」も「不如歸」と

「同じ傾向に投合して遂に廣く讀まるゝに至つた。」

といひ「無花果」も

「罪惡と戀愛とを描く點は從來の作の如くであつたが、それを單に罪惡と戀愛としてのみ描かず、之れを意識して煩悶懊惱し、甚の結果精神生活に一轉機を畫するといふ點が、從來の

諸作とは異つてゐた。」

と論じてあるを見て明白だが、家庭小說のこの新味が「不如歸」や「己が罪」の作品により提出せられたのが正しく此傾向の直接に擡頭する所因であつた。

その兩人の中、特に蘆花の勃興は完全な素人小說の勝利である。たとへば、自然派文學衰へて享樂文學全盛を極めた頃、白樺の一團が不熟の語句に介意せず、素人らしい拙劣小說を書き初めたのが、やがて彼等の內の一部分の他日の成功となつたと同じ趣きである。因習を破つて新天地を打開するは、恒に維新當時の青年政治家の如き、ラファエル前派諸詩人の如き素人くさい青年である。因習に泥んだ人は因習の臭味を知らない。局外にイつて局內を虎視耽々と瞰望する青年者流のみが、よく因習の醜と、無彈力とを知り、是を糺彈し倒滅する。硯友文學全盛の砌鷗外の「舞姬」が出た時、文壇人には「いやに牛肉くさい小說だ」とか、「飜譯ものぢやないか」とか言はれた（田山花袋「東京の三十年」一三九頁）又、平田禿木の「文學界」所載の文章を紅葉は評して「西洋料理を食つてヘドを吐いたやうな文章だ」と評した。島崎藤村の處女小說「うたたね」が「新小說」に載つた時當時の新進泉鏡花は「なんだ、あれでも小說か」の語氣を洩らした（花

袋同上）。紅葉は「金色夜叉」續稿に苦吟してゐたが、その苦辛には技巧の上の苦心の外に明らかに沒日を挽回する苦惱が加はつてゐた。而も、「抒情詩」の作者獨步は「太陽」に「置土產」（同年十二月）や「郊外」（同十月）を翌年十一月の「小天地」に「牛肉と馬鈴薯」を書いて、容れられぬ靑年作者の野望と客氣とを僅かに洩らしてゐたし、蘆花は「最初の燕尾服」（十一月「國民」）や「灰燼」（三月「國民」）の如き素人文學を發表し、嵯峨之舍は「田舍美術家」（八月「太陽」）のごときあるひは飜案かとも思はれる、埋れたるかれの佳品を書いて、而も文壇の默殺に逢つてゐた。天外の「揚弓場の一時間」（新小說」七月）如きは標題のつけ方から見て當時としては異樣に感ぜられる新味があつた。魯庵が雜誌「太平洋」に連載した讀切短篇は後「社會百面相」にまとめられたが、（作者も今でいふコントの類だと云つてゐる）當時としては異種であつた。魯庵の唱導するロシヤ文學を紅葉がネチミャク文學とけなし、魯庵が評家として一派を立てながら、その創作は酬せられなかつたのは、その藝術價の稀薄にもよるが、時代がかれを異端として疏外してゐた點も見逃してはならない。堀內新泉の「家庭讀本春の卷」や久保天隨の譯本ペスタロッチの敎育小說「醉人の妻」（リーンハルドとゲルトルード）が出たのも此頃である。文の稚拙はとにかく、出

づゝくして出たものには相違ない。かくて、家庭文學は起つたのである。その歡迎は作者當人も意想外とする程盛んであつた。休載するとその翌日愛讀者の勞働者が新聞社に怒鳴り込んだり、大阪南北の茶屋では、暁の三時に配達される新聞を待つて讀む女達があつたりした類の逸話は多く傳へられた。幽芳はその著「乳姉妹」の成功を、その序に於て

「(第一) 房江といふ丁度「己が罪」の環のやうに大變に讀者の同情を惹く娘のある事(第二) 家庭小說である事(第三)地の文に極めて平易な、また詞遣ひの叮嚀な言文一致體を用ゐる事」の三に歸してゐるが、彼自らは新聞讀物として講談に替るべきものを選擇し、たま〳〵バーサ・クレイの短篇にヒントを得て、之れを複雜化したのが本著だと述べてゐる如く、最初から新讀物のつもりで執筆したのであつて、當時一般好奇心の異常な對象となつた女學生、當年のいはゆる海老茶式部を女主人公とし、その女主人公なる房江の日本的淑やかさの美と、適度の教養とが、讀者の同情を牽く事多かつたは、其後本郷座で河合木下藤澤一座らが上演して、木下吉之助の房江に同情の涙をそそらせた青年男女の夥しかつたを私が實見して今尙記憶してゐるに徵しても明らかであるが、作者亦「房江の如き女は、また慥かにみなさん方の理想にあつた事は、明白であ

らうと考へるのでございます。」と云つてゐる。平易で上品を心掛けた點も、在來の新聞小說に對する一般の要求に添ふたものに外ならぬ。同じ特質が「己が罪」にもあつて、温良の美少女環が境遇に支配せられて、肉慾家塚口の毒手にかゝり、出産後狂を發して靜養中櫻戸子爵の愛を斥けかねて夫人となり、再び塚口の迫害を受けて惱苦の末遂に、篤志看護婦となりて臺灣に赴き、西貢に大患を發せる良人の看病に赴いて夫妻の愛こゝに蘇るといふ筋は何の奇もなく、文章も平凡であり、(幽芳が生中の文壇作者に卓れて浪曼的小說の文章に甚だ巧みであつた事は、ライダー・ハツガードの二小說の譯文で十分覗ふ事が出來るが、家庭物では、新聞物といふ標準に照して、常凡無味にわざと筆を落したのであるが、あだかも其程度で、かへつて一般讀者の喝采を博したのである。)事件の進行や、性格の境涯に伴ふ展開等に出鱈目の無理押しがあるのは勿論であるが、樗牛が評して、

『大體に於て重厚の趣あるは嘉すべしと雖も、結構陳腐にして文章甚だ冗漫、加ふるに性格の研究尙ほ大に足らざる所あり、漫作を以て許すべからざるや論無し。」

と云つたは、猿芝居にドラマツルギーを持ち出す類の頓陳漢語で、この作にしてこの評ありと云

ひたいが、作者の方では舌を出して、實は評家の迂愚を嗤つてゐたに相違ない。幽芳が作は「あぐり」(三十四年「新小説」)にしても「假面」(三十四年「小天地」)にしても「若き妻」(三十三年十月「大阪毎日」)にしても、將た處女作の「人殺」(三十年「文藝倶樂部」)にしても、其後の「この花」、「白衣婦人」、「古鏡」、「胸一つ」、「その畫題」、「秘中の秘」、「黒影」、「七月間」、「みほつくし」、「春日野若子」、「新聞賣子」、「大探検」、「二人娘」、「なさぬ仲」、「夏子」、「花賣娘」、「妙な男」にしても、三十九年の人氣作「筆子」(「大阪毎日」)、四十年の評判物「月魄」(「毎日電報」)にしても、西洋通俗物の飜案も交つてはゐるが、凡べて幽芳式家庭物の境致を離れず、ドストエフスキーを早く讀んでハッガードを夙に譯してゐる彼は、不思議にも通俗家庭の文學に、徹頭徹尾終始した典型的の家庭小説家として、三十年來一貫し來つた作者で、英露の文學の鑑賞、三十年代に於ける、その文壇に於ける地位の自覺に對する自然主義文學以後の發奮と自覺、及びその後の洋行に於ける見聞等の様々な條件は、彼の其の後の創作に何等の深さをも強さをも與へてゐない。その間、些の矛盾も苦惱も無い様な外觀を呈してゐるところに、寔は通俗文藝家としての菊地幽芳の興味がある。

彼のひととなりを考へ、飜譯ものゝ文章を見、外國文學の智識を根柢として考察すると、幽芳は當然斯くありしが如き文藝史上のその位置に落付くべからざりしが如くに考へられる。然も幽芳小說は、阪地にあつては通俗ものとして當時殆ど完全に板についてゐたので、その愛讀者等の興味の輪廓も憧憬の對照も悉くその方寸の胸に收めて擒縱自在の巧致を見せ、牽引と魅惑の限りを盡した以外、藝術批評の顯微鏡にかけて見ても、あくまでも通俗的なる、興味中心の、筋の面白味としての家庭小說の大先達としての歷史價以外に、何物をも見出され得ないのである。

只一つ、廣く明治文學史に於ける女性描寫の變遷史の中で、三十年代の初期を擔當して、最初の所謂「海老茶式部」型をこしらへあげた一事は、記錄して置かなければならぬ光彩であらう。等しく家庭小說的の淺薄と甘さとをまぬがれないにもかゝはらず、又、男學生の描寫にも多く失敗してゐるにも拘はらず、この女學生描寫は、先の硯友社文學に代る新開展であり、同時に後の自然主義文學への基礎の一つでもあつて、將に蘆花や、天外と共にその功の一翼を頒つものであらう。

當時、女學生の墮落問題が云々せられたのは、社會教育上の新しい焦點であつた所爲もあるが、

一般的に云へば、やうやくその數を增し來つた新女生の一つの型としての、女學生への一般的興味心がやうやく旺盛になつた一事が、その根本を形作つてゐる事は見のがせない。而して幽芳が敏くもその當時の興味を、作品の中心生命として雇つて來て、何よりも及び誰よりも熱心に之を取扱つた事が、その成功の所因となつたのであらう。すなはち、彼のこの新しさと甘さと輕さと一般性とは、その後の文壇高下の小說に善惡二樣の影響を與へたのである。

德富蘆花流行の事實は、三十三年此方今日迄一貫して變らぬが、その讀書群の種類には多少の變遷があつた。遠く明治二十四年十二月「國民」に「夏の夜語」を揭げて以來、「夏」、「不思議の家」、「恐ろしき一夜」、「漁夫の娘」、「河島大尉」等を公けにし、別に「世界古今名婦鑑」「歷史の片影」、の類を上梓したが、「不如歸」に於て現はれた上流描寫への好奇心は、「十二文豪」に「トルストイ」を物し、ゴルドン將軍の傳記を物した彼による道義感の滿足と共に容易に讀者の迎へるところとなり、武男の簡單極まる勇壯と非人間的の無邪氣と、浪子の紋切型乍ら、實際感を離れぬ可憐と貞淑と、河島後室の類型的なる無知の姑根性と、その背景たる因習力と、その他片岡中將の剛毅と、成余某の卑陋と、その娘の輕薄と等、悉く當時習慣への征矢を放たんとして焦

燥してゐた凡俗青年の單純な快心事とする處であり、當時大人氣の戰爭場面と、ラブシーン、ハンケチの奇緣と、墓地の哀情と皆之れ新派あつらへ向きの好道具立てにて、青年の興味の奥に躍まる軍國主義と、武士道主義と、潔癖主義と、淸廉主義と、正義愛と、拜金への蔑視とを共鳴させ、モデルの大山將軍一家に對する興味やら、家兄蘇峰の政治上の立場に關する興味さへ加はつて、作の缺陷とする性格展開の非合理や、事件の行進の矛盾又は飛躍や觀照の淺薄や、主觀の輕率等は目にもとまらず、次々に出た「思出の記」（三十三年三月及三十四年一月「國民」）「零落」（同十月「新聲」）・「黑潮」（三十六年）等を經て「寄生木」に移つてゐる。

今日、蘆花を論ふことは所謂文壇附月評家のよくしない所であるやうだが、かつて蘆花は「黑潮」に於て稀に見る大規模の小說を計畫し、第一卷のみで永代未完の作となつてしまつたものゝ、その一卷は決して單に家庭小說をもて遇するものでなく、試みに三十六年中の所產を一見しても僅かに藤村の「爺」と獨步の「女難」や「惡魔」や「第三者」「正直者」等「獨步集」の諸篇が新藝術の芽生を感ぜしめ、荷風が「あめりか物語」中の諸篇を「文藝俱樂部」、「新小說」等に分載し、鏡花が「田每かゝみ」と「白羽箭」（「文藝俱樂部」）とを出してゐるのみで、紅葉は「新續

金色夜叉」に苦められ、風葉、松魚、葵山、春葉、水蔭、柳浪、眉山、春雨、掬汀、花袋等悉く駄作凡作拙作を續出してゐる上に、當時大評判となつた天外の「魔風戀風」が「讀賣」に掲げ初められた年ではあるが、此等のライヴルとして、蘆花の位置は「不如歸」に喪失した藝術感を「思出の記」にとり歸し、更に「黑潮」に於て、彼一流の描寫に拙く兎もすれば說明に走り勝な惡癖は隨所に多く見えるけれど、規模宏大に抱負も高かつた此の作で、政治的、社會的關心を中心とする大本格小說を夢想したのであるが、その續篇はついに出でず、「寄生木」に移つては更に讀物に近く小說には遠いものになつてしまつた。明治美文史の一頁を飾る「自然と人生」を初め「靑蘆集」「靑山白雲」等の作者として早くから作者の詩才は十分に認められてゐるが、その詩才は淺薄に近い小才で、生來の大才が自らにして產出した自然の天禀ではない。小說に於ても、九州人によく見る實際的の才智が邪魔をして、悠々たる大成に到らしめない。が、とにかく「黑潮」で大轉機に立つべく運命づけられてゐた彼は、小說の純粹なる精進の志を絕つて、雜文學の本職に專一となつてしまつたから、その彼は小說家としてではなく、雜文作者として奇異なる地步を明治文學史中に占めるに至つたが、小說家としては既に業に自殺してしまつてゐたのである。樗

牛は、

『「思出の記」は平板に過ぎて無味に近かり。一種清新の理想の其の間に現はるゝもの無きに非ずと雖も、畢竟尙ほ稚氣あるを免れず。』

と評してゐるが、此評は當らずといはんよりは寧ろ拙劣の評で、平板の叙述を敢てしほうせたればこそ、一味の藝術心の貫流に成功したので、蘆花流の小才であれを波瀾萬疊にしたらその卑俗は耐まつたものではない。否、あれでもヤマは多すぎる。新敎主義肌を胸奥に秘めて、叙述に自然派的冷靜を維持しえたら、尙より良い讀物になつたに相違ない。

「思出の記」の價値が、その一般を素人文學的素質にまつことは先に云つたが、當時のあらゆる高下の文學小說を通覽して、この一篇の樣な淸新の情緖と思索的反省とに富むものは、少なくとも明治三十二三四年に亙る小說書史の間に多くはない。即ち「思出の記」は今から見れば一人の通俗家庭文學者の、比較的高級なる作品と云ふに止まるけれど、例へば三十三年の三月「思出の記」が初めて、國民新聞に掲載し始められたその月、紅葉は讀賣に「月下の決鬪」を掲け、蘆花は同じ「國民」に「灰燼」を掲げ、天外は「新小說」に「頬かぶり」を掲げ、鏡花は「太陽」に

「保田物語」を掲げ、春葉は「新小說」に「機關手」を掲げて居る。鏡花の「照葉狂言」は翌月の「讀賣」に出たが、以下その年の內に公表せられた魯庵の「靑理想」にしても、紅葉の「茶椀割」にしても鏡花の「湯女の靈」にしても、抱月の「待聞あはれ」にしても、柳浪の「目黑小町」にしても、宙外の「腐肉團」にしても、露作の「太郎坊」にしても、滌柿の「金忠輔」にしても之等は比較的佳作の部類に屬するが「思出の記」は純藝術批判の立場から考察して、之等の諸作と同等及び同等以上に位する價値をもつてゐる。既成文壇の之等の諸作及びそれ以下の作品は展開せられたる思索的人生の廣袤に於て、情緒の淸新に於て、宗教的要求に於て、新時代男女の描寫に於て、よしんば、描寫が說明となり、冗漫となり遠心的となり、樗牛の所謂「平板に過ぎて無味に近かり」と云ふが如き稚氣はまぬがれずとするも、文壇全體の作品價から考量して之等の欠點を認めて尙且つ「思出の記」のオリヂナリティイ、ノヴェリティイは爭はれぬ。蘆花は畢竟藝術家の小才なるものに過ぎないが「思出の記」の蘆花は、其の一生の創作史に於ける最高潮に立つて、その潮先からこの一篇と「黑潮」のアムビシャスなる未完小說とを產出してゐる。で、「思出の記」を藝術小說の頁に入れると、宛も通俗小說の頁に挿入したが如く、依然として嶄然とし

て群を拔いて、その清新なる藝術香を文壇の隅々迄に向つて溢らしてゐる。

「思出の記」は、故に、家庭文學中の最傑作の一つであり、藝術小說中の有數の佳篇の一つでもある。家庭小說の範疇の間からこの佳品が出て、文壇小說の領域に侵蝕を試みてゐるのは、まさしく一の快事である。假令當時にあつては、「思出の記」が今日の我々が評價するが如く、それ程餘りに家庭文學的なるものゝ如くに考へられて居なかつたにしても、蘆花は當時から何となく既に文壇の圈外に立ち、「不如歸」の後を繼いで、矢張一種の光明小說型家庭小說文學の創作家として認められてゐたのであるから、この作品にこの價値があり、この豫言があり、このオリヂナリティイがあると云ふ事は期せずして、一種の家庭文學の文壇本部に於ける勝利と云つて差支へはあるまい。

當時紹介せられた高級の泰西通俗物に、長田秋濤譯デューマ作「椿姬」(三十六年五月)があり登張竹風譯ズーダーマン作「賣國奴(カツツエンスユツヒ)」があるがせめてこの境致を理想としたら、當時一般の家庭ものは一段とその深みを增したらうけれど、家庭小說は終ひに家庭小說で草村北星の「想思怨」「澄子」、「濱子」、「露子夫人」も渡邊霞亭の「次郞島」も黑法師の「想夫憐」、「新妻君」も田口

掬汀の「伯爵夫人」、「情の人」、「心の波」、「新生涯」、「女夫波」、「追恨」、大倉桃郞の「琵琶歌」「舊山河」、佐野天聲の「露の曲」春雨の「角笛」や「密航婦」や「雛鳩」、楓村居士の「橘英男」德田秋聲の「結婚難」、「ゆく雲」、「小華族」、「焰」小笠原白也の「嫁ヶ淵」堀内新泉の「人の兄」「全力の人」、「觀音岩」、「川千鳥」等、家庭小說の系統を曳いた俗文學には、光明小說の精神を追ふものと、天外式寫實派に勝つたものと二色あるが、何れも駄作凡作墮力作で如何な點からも（風俗史料として以外には）見るに足る作は完くないが、北星のセンティメンタリズムや掬汀の愛情主義が受けたのは單に、廣告法のみの所爲でもなく、前者は天外式寫實小說を陋として立つて痴鈍乍らも、純情に近いものが多少あつたためで、後者は其ヤマとカラクリとのためであるが、楓村や桃郞が戰爭背景で賣つてゐたのも束の間、家庭小說は更に推移して行つた。幽芳蘆花二家の光明小說的家庭小說が飽かれる頃、とつて變つて文壇と通俗小說方面との双方に跨つて覇を稱したのが寫實的「魔風戀風」の小杉天外である。

天外小說に入るに先ち、最後に、蘆花幽芳流行の事實の裏に蟠る女主人性格の魅力に就て云つておく。

かつて弦齋、浪六等前代の流行作者が描いた女主人公には、奴の小萬、鳩つかひの姬等當時の興味をひくに足る性格があつたが、三十年代に於ては更に知識的要素を加味して而も一脈昔乍らの淑やかさと、可憐とを失はぬ女性らしい女性を求めてゐた。「己が罪」の環「乳姉妹」の房江、「魔風戀風」の初野、草村北星が「想思怨」及び「露子夫人」の露子「澄子」の澄子、黑法師(霞亭)の「想夫憐」の雅子、小笠原白也の「嫁ヶ淵」のお梨、蘆花の「不如歸」の浪子、「思出の記」の敏子等はこれである。

時代思潮の汐先に乘つて、「想夫憐」が人種的偏感を「嫁ヶ淵」が小作爭議を描いても、階級意識の批判や、小作權是非の經濟史的考察は今日の讀者の社會思想上の常識すらない、只莫然と弱きを憫れみ强惡を憎む常識的正義觀から出發した單純の觀察で、加之、其等社會的鬪爭は色彩の一にすぎなかつた故、單に讀者の漫然たる同感を牽き得たにとどまる事、たとへば「不如歸」に於ける新舊思想の衝突のごとく、其等のテマを中心として自由自在に讀者の心魂を左右するほどの力がなかつた。かへつて「思出の記」にあらはるゝ個人的宗教上煩悶の方が讀者衷心からの同感を獲得した。例へば、「火の柱」や「良人の告白」や「飢渴」に於ける木下尙江のクリスチャン・

ソウシャリズムの思想の實行への同感、その主人公篠田蝶二への共鳴が莫として大風一過するごとき織情を咬つた以外、心肉に喰ひ入るごとき現實感的共鳴を伴ひえなかつたのは、作者尙江の態度及び傾向の然らしむる點も確かにあつたが、然るべき情態があつたからで「見神の實驗」といひ「煩悶」といふ語に特殊のひびきがあり、藤村操の死、ニイチェ主義の横溢、黑岩周六の通俗哲學「天人論」の重版等、明治レネイサンス黎明後に於ける、自我の自覺史の重要期に於ける苦惱を幾分でも描寫せんとした「思出の記」の類の方が、社會的關心以上當代青年焦眉の急問題であつたことといふ迄もないに基くものである。

かつて二十年代の自我は、古日本の回顧や西洋文明への憧憬の間に悠々と遊び戯れ眠り横はつてをり、僅かに早く目醒めた者の悲痛を、青年詩人北村透谷の慘死にうかがひ知るに止まる位であつたが、然し、維新からの三十年は歐米個人主義思想の輸入期に外ならぬので、英佛の政治思想や、マンチェスター學派の經濟學說やをとり入れた明治人の皷舞は、二十年代を尙且つめざめ且つ眠つてゐたのが一朝愕然と目醒めた三十年代が、かつて鵜呑みにしたスペンサーの進化論說やミル、ベンタムの功利說を反芻しつゝも英國哲學の實證學說を味ひ乍ら、同時に（といふより

は之れを抱擁しつゝ進んで）獨逸哲學の理想主義を玩味せんとしたが、今日から顧ると寔に單純な移植にすぎなかつたけれど、かつて政治と國家との中に發見し、若しくは發見しようとした自我を、この時代が文化一般の中樞から見出さうとしたは確かに進步には相違ない。明治全體を通じて流れる主潮が客觀的啓蒙思潮の反復で、この輸入事務の進行中に「日本的」なるアイデアリズムへの懸念があつて、要求懸念相錯交しつゝ元祿文學の復活や、西洋アイデアリズムへの流眄があり乍ら、結局は客觀的現實主義の行進に終つたのだが、美的生活の主唱が浪曼的個人主義の絕頂を示した此期に、主客觀の相尅の過程から生れる個人的苦悶が多かつたのは怪しむに足りない。社會思想は幼稚であり、個人思想も同樣であつたが、當然の必然事から後者が餘計に顧られ、前者がしばらく低迷してゐたといふのである。

さて、家庭文學中の女主人公が一般讀者の同情を惹いた事實は、疑ひなく新思想への共鳴と古き「日本的なるもの」への本能的類感とを示してゐるので、就中、浪子には俗世間が上流階級へのあこがれの一面に犧牲者への强き哀憐を示し、房江には貞淑美の勝利の快感を味ひ、敏子には溫順の知識美への共鳴を表はしてゐる。初野への同情が不足であつたのは此溫淑が不足であつた

爲である。同時に「コブシ」の流行は、他の一面なる資本主義的思想の根强いひろがりをよく表はしてゐる。

銳い新しき要求と、根强い古い本能的傳習との中に介在して、一般人はいつも無邪氣に双方への愛着を示すことを恥としないものだ。浪子への同情は日本的貞淑美への共鳴だが、同時に上流生活へのキュリオシティを示し、又、天外小說の流行は淫褻への好奇心とともに前にいふごとく功利主義の勝利を豫想してゐる者の多數を示してゐる。北星文の多少の流行は低級センティメンタリズムの橫溢とともに、日本的感情の快感をあらはしてゐるが、此等の家庭小說が壯士芝居になつて、高田實の片岡中將の武士氣質が本鄕春木町で讃美の百雷を受けるとき、大正十五年風の米國風ハイカラ娘は當時にあつては、觀衆老若男女のあたら嘲笑の的となつたのである。鷗外譯パウル・ハイゼ作「新學士」の一篇は旣に數年以前に公にせられて後、「かげ草」中に收錄せられたがこの小說の女主人公(裁縫少女)の如きは、日本的貞淑美と知識的要素とを兼ね備へた極めて日本人向の明治靑年に好愛せられる型の性格で、當時の家庭文學がこの程度の女主人公の性格の描寫に成功したならば、その家庭文學的の價値を一層增加せしめるばかりでなく、藝術小說としても

優に中流以上の位置を占め得る重要の要素を握み得たものと云はねばならぬ。よしんば、ハイゼの原作がこの樣な型の女主人公の性格を作らなかつたにしても、移植せられたる小說としての「新學士」の女主人公の性格は、確かに日本的であり、明治中期的である。その原作と飜譯との差が果してありとすれば、然も、その差異が餘りに大でありとすれば、それは自ら飜譯者の手腕の問題であるが、少なくとも「新學士」一篇は之を今日より見れば、家庭小說と藝術小說との中間に立ち、家庭文學としての最高の標準を示した、好個の純藝術小說の一種でもある。

この稀異なる立場に立つたものは、啻にこの一篇のみでない、パウル・ハイゼに類する一派の小說家はこの種の立場に立つものが少なくないことは、獨佛英の各國文學史を見れば明瞭である。ハウプトマン、ズーダアマンと、近逸獨乙劇壇に於て並稱されてゐるものゝ、ズーダアマンの位置は自ら藝術的なるものと、通俗的なるものとの中間に立つてゐる事は人よく之を知る。先に引いた小說「賣國奴」の如きは正しくその一例である。多くの近代歐洲文學史に於てこの種の型は特にロマンティックの作者に多い。詮ずるに、センセイショナルと云ふ特性を擴大せんが爲には、自らその作風がロマンティックの文學傾向の特性と一味相通ずるに至るが爲で、然らずんば極端

なる寫實主義の作風の間に、ロマンティックの要素を少なからず含有する流儀の作品がそれに屬する。スティヴンスンの「寶島」は當時數年前に宮井卯の花庵に依つて「世界文庫」の一篇として飜譯せられた事は、かつての拙文にも述べておいたが、當時之を譯した譯者の心持ち、及びそれを受取つた讀者の立場は、この小說を英國近代小說に於ける、純藝術小說の最高作品としてよりも、寧ろ一個のロマンティックなる冒險的讀物としての、その特徵を嗜愛する點にあつたに相違ない。この樣な傾向の文學作品の評價は、輕々に附する事の出來ない文學批評上の一個の小さい難關である。興味中心と云ふ點と、その興味が作者の心內に於て、如何なる必然的の重要性及價値を持つてゐるかといふ點と、之等二つのものゝ比較の點から考察して見ても、「寶島」及それに類する傾向の作品に對する批評は、他の純藝術小說に對するそれよりも、纖細の鑑賞と確實なる文學史的知識と兩々相まつてロマンティック精神に對する、廣大にして精到なる研究の餘りに非んばともすれば、玉石相混ずる如き無標準の批評結果に終る事保し難いからだ。デューマの如きはロマンティック系統の舊寫實派であるが、ハイゼ及びズーダアマンの如きは、自然主義的手法を宗として、多分なるロマンティックの香氣を所有する第二流作者であつた。之等の傾向を一段

と低級にし、寫實を宗とし、之にセンセイショナルの冀望を少なからず持たせたものが、世紀末から現代へかけて英米邊にも少なからず時花つてゐる。所謂流行の通俗文學である。マリイ・コレリーの如きはその一人である。マクス・ペンバートンの如きもその一人である。ライダー・ハッガードの如きもその一人である。小說家としてのベーリンク・グールドもその一人であれば、ミードもその一人である。ウイダもその一人である。英國文學史中の小說家を嚴峻に物色するとこの種の立場の作者が頗る多い。近代に於てその數は更におびたゞしく增加してゐる。否、却つて純藝術小說家としての作者を物色する方が甚だ難しい位に、英國近代小說の廣袤は大であるが價値は高くない。佛獨に比べてその差はたしかに數等である。米國は英國よりも更に一段と劣つてゐる。資本主義時代が通俗文學の旺盛に資した事はこの一事でも判明する。

四　家庭文學の寫實主義

小杉天外は二十年代初期の詳寫全能的寫實主義を、三十年代に自然主義へ一步進めた過渡時代の藝術小說、家庭小說双方にわたる有力作者の一人であつた。その「はやり唄」の序に、

「自然は自然である、善でも無い、惡でも無い、美でも無い、醜でも無い、たゞ或時代の或國の、或人が自然の一角を捉へて、勝手に善惡美醜の名を名づけるのだ。小說また想界の自然である。善惡美醜の孰れに對しても、叙すべし、或は叙す可からずと羈絆せらるゝ理窟は無い。たゞ讀者をして、讀者の官能が自然界の現象に、感觸するが如く、作中の現象を、明瞭に空想し得せしむれば、それで澤山なのだ。」

と論じてゐる。かれの作は「改良若旦那」のむかしから「改良若殿」を出世作として「ひだり繩」「蛇いちご」、「はつ姿」、「戀と戀」、「新學士」、「女夫星」、「新夫人」、「魔風戀風」、「にせ紫」、「コブシ」、「長者星」等に及んで、文壇小說の重要な一頁をなしてゐるが、同時に、光明小說亡きあとの新聞小說を引受けて、その系統は明らかに通俗新聞文學に這入つて了つてゐる。「魔風戀風」はその第一步と見てよい。二十年代初期の紅葉、美妙、水蔭、眉山、柳浪の舊寫實派が淺薄であつた如く、二十年代後期の眉山や、鏡花の觀念小說の寫實傾向も亦膚淺を免れぬ。柳浪の深刻小說は、心理描寫の精緻を期したものだが、當時としては出色であつたといふことにとゞまる。家庭小說に新らしい道具立てはあつたが、それが精刻に彫出されてはゐない。天外の寫實主義は、

「はつ姿」(三十三年)の右の序に見ゆる通り、一見甚だ徹底したもので、誨淫の書といふ言葉は一に天外小説の形容の如くに感ぜられたものだが、只暗黒面へ大膽の一歩二歩を進めて、世間態をも私語悪聲をも厭はぬ敢爲の態度はあつたが、寫實の實際の方法精神は、やはり淺薄で、輕率で焦點を外れてゐたから、實感的效果が猥褻の描寫の個所だけ際立つて見えて、他の部分は少しも光らない。そこで誨淫といふ一點が、特に道義的にデリケエト・センスの人や、反對に俗悪な人物に異様に注意されて騒がれたのであるが、この寫實手法は、主觀の嚴肅を欠く一事から云つても劣等のもので、人物の擧措の描寫の方法も、皮相な外面的粗描で、その一一の外的行動の裏に潜む心理の動きが看取されえない程度に淺薄であつた。ゾラを眞似たる遺傳說の取り入れなどもその流儀にすぎなかつた。

「魔風戀風」は、新聞物として百九十回にわたり連載せられた關係もあり、作者の素質の然らしむる所もあり、寫實效果の膚淺と、性格の分裂的ではあるが、結構布置の上の無理と共に、拭ひ難き缺陷で、藝術小說の範圍を辷つて、俗文學に墮するに至つた主因であるが、當年流行つた堅苦しい、實際を去る事遙かに遠い會話を斥けて、生きた現實の對話とした點は、どの範疇に置い

てもよく尊重しなければならぬ天外の獨擅場で、「コブシ」、「長者星」と進んで愈よその妙味を増してゐる。にもかゝはらず、

「可いのよ、可いのよ。」と妹の手を握つたが、涙は雨の如く落ちた。

の如く、對話の後をいつも大ざつぱな粗笨の形容で、そろつぽに追つ被せてしまふので、折角の會話の妙も、かへつて時として輕薄の多辯に受取られてしまふのである。

又

主婦は、「最う數日の御辛抱、」などと慰めて、行李から洗つてある白地の浴衣を取出し、さて初野の傍に突膝して、其の締めて居る紫根地らしい緞子の帶、糸織の曙縞の綿入、下着は絹の櫻小紋、その下のネルの襦袢を分れば、何處からとも無く白薔薇の香ひ、肌は艶々と珠玉の如きに、乳房むつちりと高く、細腰より下は腰卷の色、脚長ければしつとりとして、紅の瀧の落ちるとも譬ふ可きである。

「あら、お主婦……。」と叫んで、何うしたのか初野は燈火を背後に身を捩つた。

「ほゝゝゝ。宜しいぢやありませんか。」

「だつて。」

の如き描寫は當時、更に讀者を挑發するために、作者が意識して書いたやうに評判せられた個所の内の一つであるが、意識するもせざるも、挑發するもせざるも、描寫として甚だ拙劣な事が第一に目につく。思ふに作者は寫實を宗として新聞物の效果を高めるべく、その旗印のかげに匿れて、特にその方面の描寫を好んで試みたことは事實であるらしく、「コブシ」の劈頭青年主人公入浴中をはしたなき女中等のひき間から覗き込んで品定めする所のごときは、全體の結構を定める上に何の重要があつたかと云へば、只、美貌であることの證明と、女中らの卑俗とを描いたといふに止まるのである。環境に從つて展開する初野の性格描寫の如きも、作者自らの心理的是認を經てゐないオツポテュニズムである。東吾は朦朧として捕捉しがたく、殿井は暗中から隱見する電光下の人物にすぎない。

樗牛、天外を酷評して曰く、

「今の小説家が文明の大勢に通ぜず、學術、政治、宗教等の事歷に對して馬牛相關せざるが如きは暫らく說くを要せざらむ。唯々今日著名の作家すら、其の自己の專業たる小說著作上

の覺悟に於て極めて愚昧なる意見を有するに至りては、一言の價値あるが如し。試に一事例を擧げむ。小杉天外は小說著作上一種の意見を有すと稱するもの也。其の昨年中出だす所の作、必ず寫實小說の四字を標榜し、揚言して曰く、小說の要は有りの儘に事物を寫せば足る。作者の空想の導くところ、讀者は須らく隨伴して不備なかるべしと。是の如き無意義なる主義の上に「戀と戀」を初めとして幾多の新作は公にせられたり。就いて是を讀むに、其の所謂る寫實なるものは、唯々當面の事物を無意義に描寫して、遺漏なからんと期するものの如し。其の當然の結果として、之を外にしては讀者の注意を散じ、是を内にしては事相の統一を失ひ、精緻は煩瑣となり、丁寧は冗漫となる。是の如くにして作者の所謂る空想に隨伴を命ぜられたる讀者こそは、實に迷惑の限りと謂ふべし。(中略)而して吾人の所謂る經驗は念念刹那に於ける是等單純なる印象の連鎖に外ならざるを以て彼の具存的事物の精緻なる記述を以て寫實の本意に達せりとする輩は、取りも直さず吾人の經驗に反對せる非寫實主義を取れるものと謂はざるべからず。(中略)吾人は今の文壇に流行する惡寫實の摸本として、暫く天外を推し來りたるのみ。紅葉門下の諸作家及び柳浪の如きは特に吾人の言に耳を傾けて可

也。

自然主義の論爭は花袋の論「露骨なる描寫」(三十七年二月)の頃から盛んになるが、その芽生はかれの「重右衞門の最後」(三十五年五月)にけはひしてゐる。天外の寫實論はその先驅となつた觀があり、天外の序言樗牛の評文共に、リヤリズムの基本問題に明快な解釋を立てをらぬけれど、天外の提言が明治文學史上に歷史的重要を持つてゐる事はいふまでもない。寫實的氣運の奥底に現實への新觀照と、暗黑への類感的凝視との二方面があつた事は、新進大家天外や、若き荷風の幼稚なゾライズムにもあらはれてゐる。天外が一見徹底したらしい是等の一家見を持し乍ら而して文壇に一派を立て乍ら、抱月の樣な卓越の評家と友としよかつたに係はらず、つひに新聞家庭小說專門として文壇から姿を消したのは、その寫實論が彼自身の創作と一體にならなかつたのみでなくて、此立論そのものが、文藝學的考察と思索的深化とを經てをらぬ常識文藝論の程度にすぎなかつたために外ならぬ。

斯くて、通俗文藝の範圍にある寫實的家庭小說としての「魔風戀風」や「コブシ」や「長者星」は、一面ゾライズムの新展望を立てゝ文壇と交涉し、他面通俗的香氣と道具立とを表飾りとして

新聞物の生命を持する首鼠兩端の態度に出たのが、若し秋聲の如く、全然後者に才能のない者ならば、それが偶然幸緣となつて第一義主義に終始しえようし、非常に强大粗笨の有能者ならば、後者の經驗的影響を自ら亡して前者の縷を辿るの策に出ようけれど、天外はその何れでもなかつたため、終に後者によつて生きるの結果に終つたが、その寫實精神と對話の生動とは「コブシ」（三十九年三月「讀賣」）の頃を最盛期として、可なり廣く、可なり强く文壇全部に感化を與へた。天外文の藝術價は、この邊に最も明らかに認められる。

五　其他の家庭雜文學

柳川春葉は牛門を出て自然派に奔り「棒手振」（四十一年三月「中央公論」）のごとき佳作を出したが、つひに通俗家庭小說の專門家となり、「母の心」（三十八年「日々」）や「もつれ糸」（三十九年「朝日」）から「誓」（四十二年「毎日」）、「操」（同年「毎日電報」）、「女一代」（四十五年「報知」）のごとく次第に人氣を增して改元後「生さぬ仲」以下該傾向として好評を博した二三の長編を殘して死んだ。家庭小說家として大正後に大成した人故こゝには論じる事を敢てしないが、文淵堂の

主人が「堅實なる道念の上に立ちて、我國固有の道徳を高唱し、之を基調として人情の機微世事の萬態を如實に描破せられ」と全集の跋に述べた通り、温厚の資性であつたから、最初は容易に讀者好きがしなかつたが、さりとて秋聲のじめじめもない春風の趣が取得で、取り立て、その藝術を論ふ程の問題はない。

生田葵山も三十一年から書き初めて、少年物に浪遊し三十七年「和蘭皿」(七月「新小說」)如き好望を豫感せしむる佳篇を出し、自然派の一人として「富美子姫」、「虛榮」、「都會」等の發賣禁止文學を物したが、資性の輕率詩才の薄弱は家庭小說家としても大成する處なく、大正に入つた人である。三島霜川も葵山と同時に出て自然派に復活し、遙かに葵山以上の期待を抱かれたまゝ、家庭文學の範圍内になす處なくなつてしまつたのは愛惜に價する。

山田美妙は紅葉と並び出て言文一致の一派を建てたが、獨創に大成しえず、少年文學としては「義氣の義三」(三十三年「少年世界」增刊)、新聞物としては「金忠輔」(三十六年「日出國新聞」)があり、ライヴル紅葉の花々しい死を白眼に見て、硯友文學の末路を傍人のごとくに弔ひつゝ「文藝倶樂部」、「新小說」に間々筆を染めて、自然派運動をよそに見て、辭書の編纂により衣食しな

がら、四十三年十月ひとり淋しく死んで行つたから、家庭文學の領土に於ては勿論論すべきに足る何ものもなく、明治文學史上の史價は沒すべからざるも、俊才の末路は正しく斯人の感があつた。滑稽小說、探偵小說、脚本、歌劇と樣々にわが才を試みて、その何れもに成功しえなかつたのは、才人、才に仆れたに外ならぬのだが、その才は決して藝術上の逸脫なるものでなく、創業的世才の一種に近かつた。史價あつて絕對價少なき人は明治文學史上ひとり彼のみではない。

廣津柳浪も深刻小說の昔に「變目傳」、「河內屋」、「今戶心中」の佳篇を生み、「雨」(三十五年十月「新小說」)に新展開を感じさせたのみで、新聞物作者に入つたが、家庭文學に於ては固より魯縞らうがつ能はざる彊弩の末勢を見せたに終つた。

江見水蔭と、石橋思案はともに硯友社並び大名の一人であつた。が、その社の衰勢とともに、通俗文學に入つたが、その方面で記錄する何ものもない作者である。

渡邊霞亭は即ち碧瑠璃園、綠園主人で二十一年の頃から書き初めた。生れ落ちるからの通俗文學者であるが、代作の噂も高く、多く京阪新聞小說の卑俗を受け持つた作者で、黑法師の名で「讀賣」に揭げた「想夫憐」、「新細君」等に同程度の讀者を迎へ得、特に前者で部落民問題を扱つた

が、扱つたといふのみで固より記すべき內容はなく、「大石內藏之助」（四〇年「大阪朝日」）とい
ひ、「渡邊崋山」（同　日々」）といひ畢竟講談の再說以上のものではなかつた。

お茶坊主上りの滑稽家南新二や、江戶文學通の饗庭篁村、「天製絲瓜の水」の作者幸堂得知の諷刺滑稽文學は、むしろ黑人筋の樂屋落に近い滑稽で通俗物とは緣が遠かつた。篁村は「朝日」に三十年代の末期の頃筆をふるつたが通俗味はなかつた。昔の讀者ならば之れを通俗物と解したであらうが、明治中期後の讀者にとつては時代の推移により、興味もなければ、通俗ものとも感じられなかつたのである。その外骨皮道人の滑稽談はその亞流であり、海賀變哲は別途に出て凡常に終つた作者である。

半井桃水の文業は、二十年代初葉から一貫して東京大阪朝日に新聞物として現れたが、人氣わくが程でもなかつた代り、倦かずに長く讀まれたはその性來の通俗物のコツを得てゐたからで、十一年大阪魁新聞に入りて小說を書き初めたが最初で、魯文一派や藍泉、採菊、傀儡子と相伍したを皮切りに、二十一年東京朝日に移つて改元來以降迄新聞物を書き續けたが、家庭物とも藝術小說とも交涉する所がなく、門下に一葉が出たは偶然にすぎない。

武田仰天子も霞亭と共に、大阪通俗文學の牛耳をとつたが「朝日」紙上の作品價は桃水と選ぶところはない。「大阪毎日」によつたものに井上笠園がある。遲塚麗水も「都」により新聞物を多く物したが、紀行文の名のみ古りて文壇小説を遠のいてから、その通俗文學は全く齢せられなかつた。三十二年の頃に死んだ雪後の中村花痩や、牛門を追出された北村三啞や、譯文家の原抱一庵や「好色二人息子」で賣り出した松原二十三階堂や、昔の任俠物を新聞物に染めかへて今も生きてゐる浪六や、園藝文學の名を弘めた前田曙山や、花柳といふよりは遊廓小説をよく書いた三宅青軒や、加藤眠柳、松居松葉、小林蹴月、黑田湖山、奴之助、山田旭南、黑田天外、岡本綺堂、伊原青々園、今野愚公、中川霞城、栗島狹衣、瀨戶半眠、村山烏逕、福田琴月、齋藤渓舟、谷活東、泉斜汀、齋藤紫軒、柴田流星、田中霜柳、小川煙村、齋藤弔花、伊藤銀月、本山荻舟、岩田鳥山、篠原嶺葉、物集梧水、小田萍南等の通俗文學は同時に家庭小説の境致に入つたもの少くなかつたが、記錄すべき逸作はない。花柳小説の田村西男はその低級、喜劇の太郎冠者と相伍すべく、下町物の山岸荷葉か「紺暖簾」は「讀賣」(三十四年六月)に掲げて、紅葉、露伴等も到底その純下町描寫の髓腦に迫れるを及ぶべからずとなして、讃嘆した立派な藝術物であつたが、偏向

の作者は精進と環境とよろしきを得ずばその純一性を保持しがたく、のち「町女房」（三十八年九月「時事」）前後以降は通俗文學の堂にすらも入らなくなつたは惜しかつた。子規門を出でて俗文學に遊び、自然派勃興の氣運に乘じ、一擧に中堅作者の一人となつて「行火」、「鴎」、「復讐」の暗黒描寫を大膽に試みた佐藤紅綠の當年は、好望決してないではなかつたが、漸く新聞物に走り家庭文學に匿れ「侠艶錄」に成功するに及んで、文壇を離れて而も通俗文學の埒内にあつても、時に人氣を得るにとゞまり、何れの點より見ても意義のない後生涯に入つた。弦齋の「報知」に連載した「釣道樂」、「女道樂」、「酒道樂」、「食道樂」の道樂物は、家庭小說といひ條、小說の基調及筋の興味が中心でなくて、筋にからまる實用的知識の小說家が實利的に受けたといふことにとゞまり、その道樂物に卒業して多能多才のかれは更に「子寶」の類の教訓家庭小說にかへつて「婦人世界」的讀者を吸集したが、その影響は大正期の事實であるからこゝには說き及ぼさない。二十年代初葉以降弦齋の魅力は文壇の蔑視であり、社會の驚嘆であつたが、この道德思想とこの筋の面白味とは時勢につれて變遷はあるも、よく大多數の婦人讀者の心魂をとらへて離さなかつた。初期「小弓御所」の部分的藝術價は、中期以後には全然かげを潜め、只、全體の布置と異様の興味

を惹く挿話、又は小事件を鏤めることによつて巧みに人氣をつないで來た。この點弦齋は稀有の通俗作者で、衛生家事家政の方面にまで研究の手を延して、それが悉く人氣の中核になつてゐる處徹底した大俗文士の好典型である。

德田秋聲の家庭物は陰欝で、齒切れが惡く血の氣が無さすぎるので、一般男女の人氣を決して得なかつた。「雲の行方」(三十三年「讀賣」)の頃から「結婚難」、「小華族」を初め全國の小新聞にまでその名散見したが、文壇のその名によつて留意せられるといふにとどまり、一向に人氣もなかつた所へ、自然派運動の精神が風葉とともに一致を見出しうる本質であつたので、潮に乘じてその方での中堅作家の一人となり「黴」(四十四年「朝日」)の佳篇前後からは調子をあまり落さずに、新鮮的なる文壇小說をものして大正に入つたは幸運の作者であつた。

小栗風葉は「寢白粉」(二十九年「文藝倶樂部」)が禁止せられた當時から、寫實的の暗黑描寫を得意としてゐたが、寧ろその作風は平凡で位置も亦平凡であつた處へ、秋聲と等しく自然派運動に再會して性來の寫實手法の精神を楯にこれにいち早く參加し、その「青春」(三十八年「讀賣」)はルーディンにヒントを得たものと喧傳せられ、泰西文學の感化を受ける資格のある作者の折紙を

つけられ、「魔風戀風」と併稱せられてそれ以上の藝術價を認められてより、一躍自然派の有力作家の一人となり「天才」、「未亡人」、「戀ざめ」、「ぐうたら女」でその自然主義を相當好望に經過し、讀者は尙かれが凝視して新展開を恒に恃んでゐたに係はらず、作者自ら頽廢してしまつて紅葉が「金色夜叉後篇」の類の墮勢作と平凡なる家庭通俗文學とに匿れ、その方面に於てすら多くの代作を頻出して地方新聞にお茶をにごすにとどまり、藝術の生命は全く廢れて爾來平凡極る通俗小說作家の一人となつて大正期に入つた。紅葉門の四人中、鏡、秋の兩人が危い道を步き乍らとにかく自己の藝術型を完成しえたに反し、春、風の二人は共に自然主義に加盟して、一は早く見切りをつけ、一は立派に研究し批判しその影響感化を數へて文學史の數頁を飾るに足る業績を殘し乍ら、明治末期の頃から漸く壇を下つてしまつた。

鏡花が登張竹風の第一譯稿によつてハウプトマンが「沈鐘」の合譯を試み、世間の期待に反してまんまと失敗したに比し、生田長江の第一譯稿により風葉がダンヌチョの「死の勝利」の一節を「新潮」に揭げた時は、油氣の强い精確の筆致よくこの自然主義文學の俤を傳へてゐた。その後、かゝる名譯を絕えてダンヌチョ譯文學に見ない。もと原作の本質にもよるのであるが、風葉

の才、並びに風葉の藝術の特質の何處にあるかを窺ふことは出來る。又「金色夜叉」の後篇を繼いだ風葉の筆勢を見ても、師紅葉に模した才能のあなどり難きものがあるのを見る。畢竟、風葉は感受性の強い模倣才の卓れた藝術家であつたが、家庭物作者としては少くとも明治末期にあつては何の特性をも發揮しなかつた。

風葉門下の眞山青果、岡本靈華の二人は、一は自然派の新進俊穎として正宗白鳥と並び稱されて「南小泉村」以後の逸作を殘し、イブセン風の社會劇の試作も注目するに足る佳篇といはれたが、明治の終り、自然派の衰頽とともに師風葉に似て自ら頽廢して、通俗文學に墮してその立場にあつても何等新見地を見せ得ず、一は青果と並稱せられ、欝屈せる創才の他日の開花を期待せられる事相當に強かつたに係はらず、いつとなく影を潛めて俗文學に出沒するに至つたが、青果と等しく其方面での業績の見るべきものはなかつた。（青果の捲土重來は大正以後の事實故爰に述べない）

田村松魚も「三湖樓」（三十五年）前後のあと詩才暢びず、新聞讀物の類も亦何の展開を示さなかつた。この種の延びずして終つた人々は尙他に多いが凡て省略しておく。

堀内新泉の立志小說も、村山鳥逕の宗敎小說も變つた舞臺に立つたといふ以外、藝術物として

は勿論通俗文學としても拙劣迂愚の駄作が大部分を占めてゐた。

少年小說、少年文學は開山巖谷小波が、「我樂多文庫」の頃夙く少年文學に目をそそぎ、少年幼年物により、「黃金丸」(二十二年)、「當世少年氣質」(二十四年)を試みたが因となり、小說の迂拙に見切をつけて、お伽噺少年小說の專門となり、夥しい創作に明治少年文學の正統の型を作つたが、謂ふところの少年小說の範圍にはあまり出でず、寧ろ幼年文學の感があり、又お伽脚本「春若丸」の試作などもあつた。武田櫻桃、木村小舟、黑田湖山、猪波曉花、福田琴月、谷活東、西村渚山、生田葵山、三津木春影、高橋太華、大橋乙羽、江見水蔭等夥しき數の少年小說の作者も川上眉山等と共に「少年文學」叢書や雜誌「少年世界」「少年界」等に少年主人公の小說として興趣少からぬものを寄せた事もあつたが、多く片手間の賃仕事でなければ、お伽噺專門に傾いてゐたので、古くは「少年文學」の叢書が逸作を割合に多く見せた外、記するに足るシリーズなどは出なかつた。少年小說もこの埒を出ない。

むかしの少年雜誌には、それでもお伽噺に交つて少年小說として可なり純に近いものがあつた。少年雜誌には惜いほどの作も時としてはあつた。それが小波洋行後水蔭主宰の頃から急に程度が

下つて全くの幼年向きとなり、昔の大人染みた少年雜誌の俤は「少年世界」を初めとして何處にも見られなくなつた。雜誌のみでなく、學校そのものが全く同じ變遷を辿つてゐるのである（少年文學に就ては別に詳かに考察の機會もあらう。）

六　結　語

通俗文學は大衆文學となつた。そこには階級意識から來る内面上の多少の變化もある。しかし内質は殆どと云つてよい程度に同一である。煽情の通俗文學は嚴峻にいふと衆愚文學の概念に近接してゐる。しかも、衆愚たるを恬然と自覺してこの事に從ふことによつて、初めて大衆文學は成就せらるべきであるのに、表面上の言解は何であれ、實質的には浮腰の者途中下車の者腰の立たぬ者が八分を占めて、殘る二分がいつも何事かを企てさうなけはひを示して、吾々局外者の期待をつながせ乍ら一向に纏つたものをつひに見せて呉れないのが今迄の恒例である。又、今日の例でもあるやうだ。

講談が衰へて而も一方創作が平板化したのが文學史的所因であり、同時に文壇が雜閙して席が

ないから溢れ出たのが人の問題上の所因である。とする論者がある（菊池寛）。この常識的説明は一應尤もであるが、根本には觸れてゐない憾みがある。「文壇的群衆」よりも一般讀者の方がより健かな、より信頼すべき鑑賞眼があるといふ論者がある（生田長江）。この理想主義的説明は一應尤もであるが、これにも民衆の實際には觸れてゐない憾みがある。期待するは今の「いはゆる」通俗物が廢れて藝術的長編が「通俗」となる頃であると望む論者がある（千葉龜雄）。凡そ此種のことを便々と待つてゐられる人は幸福である。ロマン・ロオランの甚だ聰明にして甚だ幸福なるかの民衆藝術論とても、同範疇を出ることあまり遠くはない。

私のいひたいのはそんな事ではない。民衆は恒に羅馬帝政の昔から、いやオストラシズムの希臘の昔から本來藝術的には必ず低級なのが常道である。低級は精神條件的、準備行爲的必至の當然である。その民衆には首相も博士も知事もペンキ職工も三枚目も重役も農夫も入つてゐる。これが文學上の一般民衆である。大衆である。是等の大衆は日々の生活（生きるためのみの生存もあれば贅澤のための生存もある）に多忙で藝術なんぞ介意つてはゐられん人達である。尤もである。それ等の人が、どうかした拍子に何ぞ讀んで見たくなる、宰相の引見の間でも、停留場の待

合室でも、艀引の一區劃でも、工場の一隅でもよい。電車內でも、小使室でも、芋畑の眞中でもヨット船中でもよい。こんな時にこんな人の讀む者が多く大衆物である。デリケイトの趣致のものなど原則的には判らんのは當然である。大ざつぱの物、大味の物、刺戟的のもの（その刺戟は道義的刺戟でも性慾的刺戟でもよい）が悅ばれるのはいふまでもない。生田長江の「文壇的群集」は、今のブルジョア小說の對象を指すのだらうが、プロレタリア小說の對象だつて少しも違つてはゐない。何を名目に拘泥する必要があるか。勝てば官軍負ければ賊が今日では逆に考へられてゐるのか。その「文壇的群集」は文壇的樂屋落に興味を感じるのだといふ、そんな「小說家以前」の文學靑年輩も「文壇的群集」中にをるだらうが、誰といふ小說作者が亡つたとか轉んだとかいふ事を喜んで書く此頃の文學雜誌の讀者のみが「文壇的群集」ではない。それは一部である。他の一部のその中には駈け出しの靑ん僣作者の思ひも及ばぬ樣な精到纖鋭の鑑賞者もをる。只、彼等は、職業でないから書かない。書かないから、默してゐるから、受取つて計りをるからその主觀は判らない。今の評家や作者等が、かの甘い讀者をばかり對象として書いてゐるなら飛んでもない間違ひを妄想するに至るのである。

第一種の藝術から第七種第八種の藝術は、誰のユートピヤのいつの世にだつて存在する。好きなものを撰んだがいゝ。たゞ、問題は繪畫も小說も演劇も入手し易く、又は圖書館邊で讀み易くなる事だ。博物館を方々に建てる事だ。質を低下させるのでなく、民衆と藝術との道を自由にしてをく事だ。

今の「大衆文學」は昔の「通俗物」の延長には相違ないが、環境に從つて確かに性質と迄はゆかずとも、氣込みだけは異つて來た。進步といつてよからう。講談筆記にとつて代り、若しくは代らうとした點は、昔も今も同一である。家庭小說の場合がそれであつた。大衆物の今がそれである。共に過渡期の現象だ。家庭小說の後に硯友文學が全く仆れて、自然派が起つた如く、大衆物の後に文壇小說が何かに推移すれば幸福なる進步である。

うら若い青年作者の藝術小說の下宿屋的妄想の描寫よりも、その全部の價よりも、私は、及び一般民衆は、「大菩薩峠」の部分品を嗜讀してゐる。青春が惡いのでも告白が惡いのでもない、作者の青春價、告白價が僅少だからつまらぬといふのだ。

藝術小說は特選品で、大衆物はクズ物だといふのでは必ずしもない。大衆物は最初からその目

的で書かれてあるのだ。文壇作者がホマチ取りに腰を下して書いたといふのなら、そんな大衆物は（一部のバカな讀者が食ひつきもしようが）火に焚いてしまつた方がよい。

大衆物は刺戟的素質の宏大な興味の事件を大味に味つけたものだ。それでいいではないか。大衆物を書いてゐてゲーテにならうとする者があるなら、それは正しくドン・キホーテである。然し――ハイゼやコレリーやデューマになりたいといふのなら、それは一向に差閊へのない正道精進である。

若し所謂藝術小說の作者が、現代のリヤリズムの立場から考慮して、なるべくありうべき、狹小の、經驗範圍に屬する、心境又は事件を描寫するに對立し、ここにある大衆作者が、一見ありうべからざる、廣大の、直接經驗とのみ蹈躇せず、經驗の領域を擴大して而も自己の觀照生活の手綱の下にあると自覺せる、心境又は事件を大味と刺戟的との特長を失はずに描寫せんと試みたならば、大衆作物の立場にあつてその最高の位相に到達する事が不可能でなくはない。而も、細心の精密の全體と部分とをよく有機的に結ぶ藝術的反省が、之れに偶然次第次第に加はつたならば、その位相は單に通俗物に於ける最高にはとどまらぬだらう。又、藝術物作者がその藝術範圍

を擴張して觀照の銳烈を企て、殆ど大衆物作家畑程度の領土を占めるならば、時代史文明史氏族史王朝史民族史としての深みのみでない擴がりを持つてゐる作位に到達する事が出來る。そこでもし、作家の本質に異常の轉價と、進步とが急激に行はれたならば、結局初めは藝術作者だつたか大衆作家だつたか判らない樣な事變が突發しないでもない。然らば、二つの平行線は、平行線ではなくてこゝに合一してしまふわけである。

が、そんな空想はどうでもよい。今の場合、吾等の冀望は人各々その藝術に徹頭徹尾純であつてほしい事だ。かの御便利主義の功利的藝術論は、たとへば、かの輕卒にして迂遠なるローマ字論者のやうなもので、一番無價値なる文明の外道である。藝術の鬚女郞である明治家庭小說通俗文學の回顧は、如何に世の中で贅肉がはびこるか、その贅肉が如何の程度に文明全般にとつて必要なものか、贅肉中にも如何に美しい藝術が部分品として散在してゐるか、又、全文學史にとつて如何に重要の貢獻をなしたかといふ諸點についてわれ等の反省を覓めた。善人と惡人と、半善半惡人とによつて倫理學的實世界が構成せられてゐるやうに、美と醜と、半美半醜の藝術によつて審美的文學界が機構せられてゐる。どの部分が優數を示すかは時勢の內質に待たねばならぬ。

蘆花と芥川と左右田と

一

明治から大正かけて働いた人々が、ひんぴんと死ぬ。明治文學史の一部を完成しかけたわたくしとして特に感慨なきを得ぬ。

德富蘆花の死前の兄弟仲直りの場面を、新聞紙は多く劇的シーンと云つて報じた。なる程劇的シーンに違ひない。しかも、深刻な人間悲劇の一頁と解してさしつかへない。

が、世間の口の端になつた蘆花の死そのものの評判は、蘆花その人の世間價値から生じたのであつた。特にその死が異常であつたからではない。これが有島君や芥川君のやうな方法をとつたならば、一層その評判がいちじるしかつたらうと思はれる。

蘆花その人の世間價値は何處から來たのか。それは彼の著作物からである。何が故にしかく價

を生じたのか。讀者の範圍が廣く、年月が長きにわたつたからである。何が故に長く讀者を牽引したの乎。その文章が判り易い感性に富める通俗文學であるからだ。

斯う世間では云ふ。ところが、これから先きは人によつて些か違ふ。通俗文學だからねエと青くさい文壇青年が輕蔑すると、面白ければ結構ぢやありませんかと、四十がらみの肥大な山の手夫人が辯護をする。實際、文壇青年といふ通り、通俗文學であつた事は事實である。しかも通俗文學が必ずしも卑俗文學と先天的に約束が、あるひは律法が文化の內面王國の司法部に存在してゐるわけではない。いはゆる藝術小說なら、ピンから切りまで立派で眞劍で面白くて、通俗文學は、少くとも通俗文學と銘打たれた作品は一切あげて不眞面目で、下らなくて、つまらないといふのは文壇意識に囚はれた三文文士か、その文士の說に囚はれてゐる識見のない讀者であつて、世間では穴勝ちさうは云はぬ。さう云はぬのは、世間全般が批評精神にみちみちてテキパキと善悪曲邪を批判してゐるからではなくて・勿論さういふ立派な批判力のある人の言說が底力の一部にもなつてゐるが、主なる他の原因は、世間一般が右の青年文士のやうに文壇意識に囚はれないで、興味本位に、面白い本位に讀書してゐるからに外ならぬ。そこで面白ければ結構ぢやありま

せんかといふ二十年前の女學生上りの奥さんの持說が出て來るのである。

面白ければ勿論結構である。が、面白いと凡そ感じる本人の精神にさま〳〵の等級があることを忘れてはいけない。ステテコからダンカン女史まで、オッペケペから歌舞伎一流格まで、凡そ階級は千差萬別である。いかに、勇敢な革命主義が有力になつて、あらゆる文明施設の階級打破を實行しても、藝道や智力や學問の階級は永久に打破せられない事はあたりまへである。共位に痛快に傲然と、借主的に、精神世界では階級わけが嚴守せられてゐるのである。面白いと感じる心の中には、淫褻心を唆のかされて面白いと思ふものもあらうし、菩提心を起す機緣になるので面白いわいと感じるものもあらうし、自分の知らない世界――華族の家庭や外國人の內幕が判つて人間の秘密を好む心を滿心させるから面白いと思ふものもあるだらうし、その外、戰爭とか犯罪とか化物とかさま〳〵の刺戟性に富んだ題材があるので面白いと考へるのであらう。

二

蘆花の文學は「不如歸」が出た當時から、家庭小說すなはち通俗文學と呼ばれて來たものであ

る。非通俗文學者の作品と差別せられて、一段も二段もひくい位置に置かれそのかはり名と實とを儲けられるといふ事になつてゐた。(今でもさうである)。「不如歸」は明治三十一年の十一月から「國民新聞」に連載せられ出したのであるが、同じ月の「朝日」に出た半井桃水の「木葉時雨」や「内外新聞」の榎本破笠の「死刑」に比べると、同じ通俗物と呼ばれた中にも、蘆花だけが殘つて、あとの二つなどは名前すら覺えてゐるものはない。何故、不如歸の啼聲が耳にひゞいたのか。浪子の血を吐く悲戀と華族生活の珍しさと時めく大將の家庭描寫であるといふモデル興味と傳統的な道德思想に對する同感とその外の情操を強くひく要素に富んでゐたからである。

しかし、一たん「不如歸」で知られてしまつた蘆花は、卅三年三月から「國民」にかゝけて後一冊とした「思ひ出の記」を書いても、兄弟不和の直接原因となつた伊藤博文をモデルの小説「黑潮」を書いても、甚だしきはトルストイの訪問の「順禮紀行」や隨筆「みみずのたはごと」を書いても通俗文學者の餘筆だといふので、文壇そのものは努めて問題にしない傾向さへあつた。

だが、「思ひ出の記」は小說藝術として、同年同月中に出た德田秋聲の「大破裂」(「中外商業」)よりも柳川春葉の「機關手」(「新小說」)よりも尾崎紅葉の「月下の決鬪」(「讀賣」)よりも卓れて

ゐるばかりでなく、同じ年中に出た紅葉の「寒牡丹」よりもより多く創作性に富み、後藤宙外の「腐肉團」(「新小說」)や塚原澁柿の「金忠輔」(「日々」)よりも新感情に富み、鏡花の「湯女の魂」よりも卓れて、同じ鏡花の「高野聖」や「照葉狂言」や嵯峨の舍の「田舍美術家」や天外の「初姿」や紅葉の「東西短慮の刄」などと並んでこの時分の全小說壇に於ける逸作の一つであつた。

この文壇的逸作が、普通の人の逸作よりも以上に賣れたのは「不如歸」の餘波と作そのものの斬新性とに因るのであつて、レッキたる通俗小說「不如歸」の作者が書いたからとて、あとから出るもの出るもの悉くを通俗物と極めてかゝらなくてもよいわけで、その様な理窟が通るものなら今日のいはゆる一流小說家の七分通りは、蘆花の場合には逆に、昔はよい藝術小說の少數をも書いたけれど、今は見るに耐へない卑俗小說の本元だから葬つてしまへといふ提言も亦成立するわけではないか。

「黑潮」は政治小說の試作として歴史的にも注目すべく「みみずのたはごと」は作者の眞面目を赤裸々に表はした、世間氣たつぷり、衒氣たつぷりの小兒のやうな大人の蘆花の全形があらはれた人間記錄として、好讀物といふべきであり、「順禮紀行」も一人のトルストイヤンの紀行文とし

て明治紀行文學中での逸作である。ヤスナヤ・ポリヤナ村の數日を描いた所だけでも十分に存在理由はある。

だが、蘆花はつひに通俗文學者の範疇に入れられて終つた。彼はもとから藝術を安く見てゐた。人間生活を重視してゐたといふ理由で、小説そのものを安價に見るといふことは許されないのである。「思ひ出の記」以後かれは、その魂の發展史にあつたけれど、小説そのものは一向進歩しなかつた。かへつて惡くなつた。そして、文壇では新らしい小説が自然派以後急に進歩した。蘆花小説が通俗家庭文學として齢せられなくなつたのは當然である。

三

故島村抱月は、瞳をさへぎる一指頭は天上の月をもかくすと云つて、現代批評の難かしい事を云つたが、亡つた芥川龍之介君に就いても澤山すぎる位に新聞雜誌に出た追憶やら批評やらを見ても、一向にかれの眞骨頭、その特長と缺點とをよく傳へてゐるものが尠かつたのは甚だつまらなかつた。皆顧みて他をいふのでなければ肝腎なところに觸れずに、よい加減な片言隻句を談つ

てゐるのである。極親しい人が、案外に淺薄なつきあいをしてゐたといふ事を感じられた。さういふつきあひをも澤山にしても厭はない芥川君の一面をも感ぜられた。

と書きつゞけてゐるところへ來た十月號の「中央公論」をバラ〳〵とめくつて見ると、正宗白鳥氏が芥川君について、「聰明であつた氏は、谷崎氏のやうな自信を缺いてゐたのであらう。自己批判に疲れたのであらう。」と書いてゐるのを瞥見した。どういふ出發點からこの結論に來たか全篇を見なくては判らんが、芥川君の自信のありさうでない人であつたのは事實であり、自己批判に疲れた人であつた事も事實である。佐藤春夫は自信のありすぎる位に自信に富んだ作者だが芥川が彼の半分も自信を持つてゐたら、自殺せずにすんだかも知れない。聰明な人間でも、自信がある男とない男とがある。正宗氏の筆だと谷崎君が聰明でないやうにも受取られるが、勿論さう書いたわけでもなからう。今の人間は大小なりに皆自己批判に疲れてゐるのであるから、批判そのものが決して珍しくもないが、批判と自信とが微妙な關係で手を携へてゆくところに、現代生活のモード・オブ・ライフがその精神方式を示してゐるので、芥川君の自信は、この七八年來俄然として、外面的に粉飾的になつて來てゐたやうであつた。

芥川君や蘆花氏の死が著るしく話題になつたに反し、卓れた經濟學者左右田博士の死が、その銀行の破綻とともに慘めに淋しく突然に來たのは誠に氣の毒であつた。左右田氏の經濟哲學は、經濟科學讀本の受賣りを帝大老教授等がつづけてゐた後を受けて、靜謐に理性的に建設せられてゐたが、その文章が難解であるといふので一般の讀物にはならなかつた。大正六年一月の「日本及日本人」は學界の代表的研究をかゝげたが、中で左右田喜一郎氏が經濟的文明批評の學としての、經濟哲學の可能性すら提唱したものがないのを慨嘆して、一人のスタムラーすらなきか、一人のジムメルすらなきかと云つたが、その前後から若き學徒は、受賣り教授の傘下を去つて漸くこの方面に關心するもの多きを加へるに至つた。商大が過去に於て生んだ二人の眞正の學者、三浦新七氏と、左右田とこの二人の存在は願はしかるべきであつたのに、今その一人が亡つたのは眞にいたましい。只、文壇張三李四の輩の贅言の如きものがあとで加へられないはかへつて左右田氏らしくて氣持がいい。三藏法師求經のあとについて考へた高桑駒吉氏も何等人に顧みられる事なくて死んだが、學界では堀氏の先業と相照して、適當の價値を論じる者があるだらう。學者の死は靜かでいい。

怪談牡丹燈の源流

由來、怪談と艶話とは、人間の本能に根ざしたふたつの好話柄で、茶前酒後落ちゆくさきは必ずやこゝに集る浮世話の二大テーマであり、若し、これに犯罪探偵譚を加へれば、まさしく大衆好尙の三幅對が出來上るわけである。

こゝには年來些か心掛けて蒐集してみた徳川恠異談說考の材料のなかから、一般的に面白かりさうな題目をとり出して、その價値と、源流とをざつと訊ねて見よう。「怪談牡丹燈」としたのは、單に「牡丹燈籠」のみでなく「牡丹燈記」にもかゝはつてゐるからにすぎぬ。

明治二十五年七月の歌舞伎座は、月の十四日にふたを開け、新味のある外題をかゝげてお芝居好きの興味をそゝつた。すなはち「怪談牡丹燈籠」と「枕慈童」の新狂言の初上場である。

五代目は、當時大阪名古屋の旅興行をすましてかへつて來て、七月狂言の詮索にかゝつたが、結局その年の正月狂言に當りをとつた緣起をかついで、再び同じ圓朝物を出さうといふ事になつたのである。

序でだから、その正月物の事を書いておくが、三遊亭圓朝得意の讀物「鹽原多助」を新七が脚色した一月歌舞伎は、箱根の對面を中幕に擬し、對面場を居所替りで小兵衛が輕井澤の宿屋で夢にみる趣好や、切の階子乘の梅幸得意のケレンなど當つて、當り振舞をするさわぎ、十九日には三遊派が圓朝初め數十人「多助連」と誌した半天を羽折つて總見をしたものである。

その前例もある事だから、菊五郎は福地櫻痴の手で件の圓朝怪談を補綴させ、新七や其水などが加筆して通し狂言としたのであつた。

しかも、前回の興行が五月末から「戀女房染分手綱」と「太鼓音智勇三略」と所作事「加茂空也運動競」であけて團十郎が竹村定之進、酒井忠繼、乳人重の井、僞導師團阿彌を引受けたが、不入で大味噌をつけたので、田村將軍が千葉勝と出逢つて盆芝居に牡丹燈籠はどうだといふ話が出て、折も折り團十郎は菊五郎の子丑之助(今の六代目)に三吉をやらした處莫迦に上出來だつた





牡丹燈籠狂言錦繪



といふので可愛がつてゐる事實につけ込み、兩優を結び付けようと策謀怠りなく、將軍が名古屋へ出かけて五代目と相談の上一決して、いよいよ初日をあける事となつた。ところが、團十郎は六月興行の失敗で些さかひけを感じても居るし、五代目は吾子を可愛がつてくれる親情もあるので、その間がうまく行つて、こゝに音羽屋一座でふたを開ける段取となつた。

役割は

飯島平左衛門山本志丈	松　助	萩原新三郎下女おます	菊之助
若徒孝助後相川養子孝助根津伴藏後關口屋伴藏お米の亡靈			菊五郎
仲間源助良石和尚	彥十郎	仲間六藏惡者六藏	菊四郎
寮番吉兵衛白翁堂勇齋笹川鄕太夫	幸十郎	飯島の娘おつゆ同亡靈	榮三郎
飯島の妾お國宮の邊の妻お國伴藏女房おみね			秀　調
仲働おきみ	梅　枝	下女おたけ	秀　世
吉兵衛女房おさく	あやめ	宮ノ部源次郎銀之丞實は源次郎	八百藏
所化隨念	尾二松	雇婆々おくろ惡者時藏	扇　藏

石屋の倅三太	百太郎	門番の倅與吉酒屋の丁稚升吉	鯉宇作
ごぜんたきおかめ丁稚新吉	梅助	百姓勘太酌女おきめ	音藏
馬士久作	翫太郎	茶屋女おてふ	佳調
茶屋女およし	梅之助	茶屋女おつる	鶴江
手先喜兵衛	晉五郎	手代久助	八左衛門
手代仁藏	繁藏		

といふ顔ぶれ、所作事の「枕慈童」は在來の菊慈童を大體もととして新らしく新七が作つたもので、いつもは長唄斗りであるのを清元を加へて掛合にしたのである。表看板の牡丹燈籠は山田年貞が畫いた。舞台や茶屋へは、牡丹の造花の盆燈籠に重扇の紋所と、作者の名を書き五百個以上もつるし、東京市中の氷屋へも盆燈籠數百個を送り、十五十六兩日の藪入には牡丹の畫團扇を景物に出す、二十三日の兩國の川開きには、牡丹燈籠二千個を大川筋へ流すといふ宣傳振りであつた。これが牡丹燈籠の最初の上場である。あたつた事いふ迄もない。これは田村成義の「年代記」によるものである。

翌二十六年の盆興行にも、當つた圓朝物の味は忘れず圓朝作「榛名の梅香」を新七が脚色したが、一向評判にはならなかつた。「怪談乳房榎」とか「嵯峨奥妖猫奇談」とか「播州皿屋敷」とか「四谷怪談」とか「累井筒雨夜譚話」とかその頃相當に上場せられた怪談ものが多かつたが、牡丹燈籠は、累やお岩のやうに汚悪醜性でなくて、飽くまでも清くうつくしく、ロマンティックである處がとり得であつたが、狂言として見れば不備粗笨はいふまでもない小芝居の盆興行であるから、當時目星しい劇評もなく、その後も自分が上京した三十七年頃までは、大芝居でこれを上場したもの絶えて無く、僅かに三十六年の七月興行に、新富座で又五郎左喜松などの小一座が手に掛けたにとどまるやうである。

大正の初め三年七月の淺草宮戸座にて、偶然伊勢音頭と共にこの芝居を見た。その印象記を雜誌「假面」に書いた事があるが、その一節を拔くと「○大阪上り七賀之助の新三郎にはウンザリした。アレでは活動芝居だ。コンナ粗製な男は早く阪地へ歸すがよい。鬼丸のお露は聲がいやだ。誰やらのお米もなつてない。○名優權三が伴藏はコツケイなものだ。此男は早く地位を下つてホントの處から熱心にやり出さなきア出世の見込がない。○その女房は矢張り鬼丸がした。之れは

素的だ。一寸之れ丈けたツしやにやる男はないと云つてよい。權三は孝作になつてからの方がうまかつた。〇勘五郎の平左は舞台の上で何か考へながらボンヤリ座つたり立つたりする丈けだがそれでも面白い。此人を見ると無暗に氣持ちがよくなる。モ一ツ壽朝の醫者が又面白い。こんな低徊趣味はどうしても中々目ツからない。有難い(文字通りの)うれしい男の一人だ。」云々

芝居の牡丹燈籠がもてはやされたそれ以上にも、圓朝の原作は讀まれた本である。「怪談牡丹燈籠」は明治十七年七月上梓、日本橋文事堂の出版で、筆記者に若林玵藏、十九年七月までに五版を重ねてゐる。坪内逍遙の序文が面白い。全文を引くと「およそありの儘に思ふ情を言顯はし得る者は知らず〳〵いと巧妙なる文をものして自然に美辭の法に稱ふと士班釵の翁はいひけり眞なるかな此言葉や此ごろ詼談師三遊亭の叟が口演せる牡丹燈籠となん呼做したる假作譚を速記といふ法を用ひてそのまゝに謄寫しとりて草紙となしたるを見侍るに通篇俚言俗語のみを用ひてさまで華ありとも覺えぬものから句ごとに文ごとにうたゝ活動する趣ありて宛然まのあたり萩原某に面會はするが如く阿露の乙女に逢見る心地す相川それの粗忽しき義僕孝助の忠やかなる談來れば我しらず或は笑ひ或は感じてほと〳〵眞の事とも想はれ假作ものとは思はずかし是はた文の妙な

るに因る歟然り寔に其文の巧妙なるには因ると雖も彼の圓朝の舌の如きはもと文壇の人にあらねば操觚を學びし人とも覺えずしかるを倚よく斯の如く一吐一言文をなして彼の爲永の翁を走らせ彼の式亭の舌をあざむく此好稗史をものすることいと訝しきに似たりと雖もまた退いて考ふれば單に舌の述る所の深く人情の髓を穿ちてよく情合を寫せばなるべくたゞ人情の皮相を寫して死したるが如き文をものして婦女童幼に媚むとする世の淺劣なる操觚者流に此燈籠の文を讀て圓朝舌に耻ざらめやは聊感ぜし所をのべて序を乞はるるまゝに記して與へつ。春のやおぼろしるす。」倚一つ古道人といふ人の序もあるが・それは堅苦しい短かい素人文章である。

圓朝の牡丹燈籠は第一回（兒漢泥醉挑爭闘 壯士憤怒釀禍本）にはじまり、第廿一回（正邪共泣慈母之義 辛苦初復恩人之仇）に畢る二百八十六頁の小冊子だが、果して圓朝が粉本をもととして、單獨で創作し上げて口演したものであらうか。假令へば、その樣な創作魂はあつても閑暇のない職業の事であるから、あるひは序をものした古道人なるものの大凡の組立てによつて、圓朝が細部に工夫を施して口演したのではなからうか。が、これはひとつの臆説を提出してみたにすぎない。

寬保三年四月十一日、湯島社頭の聖德太子祭禮日に、本郷三丁目藤村屋新兵衛といふ刀劍商の

仲間を共に伴れて通りかゝつた年の頃二十一二の少し癇癖持ちらしい色白の武士、ふと刀に目がついて亭主と掛合つてゐると、通り掛りの醉漢が供の仲間に喧嘩をしかけるに初まり、その醉漢は丸山本妙寺中屋敷に住む、黒川孝藏といふ惡侍で、擧句の果てに黒川が斬り仆されて、若侍飯島平太郎おかまいなしとなる。後、この平太郎が家督を繼いで平左衞門となり、水道端の三宅といふ旗本から妻を迎へて、その間に出來た女子がお露といふ國色(べつぴん)で、十六の春を迎へた時、母親が死んで父親は婢女お國を妾として、その妾がおつゆをなぶる。翌年、出入の封間醫者山本志丈の知人に根津淸水谷に住む美男の浪人萩原新三郎といふ二十一歳の獨身者があつたが、その許を訪ねた志丈が、龜井戸歸りに飯島別莊へ寄つて別嬪の孃樣を見せようとて、それから兩人で出かけ、下女のお米を手引きに新三郎おつゆを逢はせると忽ち戀中となつて了ふ。飯島本邸の平左衞門は草履取孝助といふて、新規に雇ふとこれが昔殺した黒川の忘れがたみと分り、時を見て打たれてやらうと決心する。萩原は戀人お露忘れかねクヨ〳〵してゐると、そこへ孫店の伴藏が訪ねて來て氣晴しの釣に誘ひかけられ、ゆくりなくも來た飯島別莊へ一人で入り込み、お露と媾引し香箱を貰ふ處へ父親が出て來て、バッサリ斬られたと思ふとたん夢がさめて、身は依然として釣

舟に臥てゐたが、不思議や香箱の蓋許り手許にある。一方、飯島の妾お國は隣家の次男源次郎と通じて飯島を亡き者にしようとの相談を孝助に立ち聞かれ、源次郎に攻め切勸させる。萩原は志丈におつゆが戀わづらひの上句死んだときき、念佛三昧で暮してゐると、盆の十三日に「カラコン〳〵と」駒下駄の音をさせて生垣の外を通るものを見ると、三十位の大丸髷の年増が縮緬細工の牡丹芍薬の花のついた燈籠を提げ、十七八の文金高髷に秋草色染の振袖、上方風塗柄の團扇を持つた娘と歩いて通るので、ふと見れば娘はかのおつゆであり、年増は婢女のお米である。話をしかけて見ると、親父や妾が八釜しいので今は丈志に死んだと言はせて谷中三崎にゐるのだといふ。それから、二人の戀情がまた結ばれて七日に及んだが、孫店に住む伴藏が夜中に女聲がするをいぶかり萩原の家を覗いて見て、ハツト驚き近所の相者白翁堂勇齋の許へかけ込む。

飯島家では、相川新五兵衛といふ者の娘のお德が下僕の孝助を見染めたとて養子に貰ひに來るので、孝助は考へた末に諾つて平左衛門に種々忠言をして出て行く。この邊は筋を運ばせるために無理に拵へた話で寔に拙劣きはまる。伴藏は、勇齋に新三郎が幽靈と懇ろになつてゐると談るので、勇齋は萩原を訪ねて、死相を現じてゐるから、二十日を待たずに死ぬといふてさとす。

新三郎は三崎から新幡隨院へ通り拔けようとすると、御堂の後ろに新墓があり、角塔婆の前に牡丹燈籠が雨ざらしになつてゐる。庫裡へ廻つて住僧に墓の主を訊くと飯島の娘と判り、「(新)そうですか夫では全く幽靈で、(僧)なにを、(新)なんでも宜しう御座います左樣なら。」などといふ講談師や落語家特有の、惡洒落れで無知な聽客のゲラ〳〵笑ひを豫想する出鱈なセリフも交つてゐる。それから、勇齋の世話で、新幡隨院の大德良石和尙に金無垢の死靈除け、海音如來の守りを貸して貰ふ事となり、雨寶陀羅尼經文も借りてくる。家へ歸つて「傳通院の夜の八ツの鐘がボーンと忍ケ岡の池に響き」わたる頃、「駒下駄の音高くカランコロン〳〵とするから」念佛を唱へて小さくなつて匿れてゐる。飯島では、妾と情夫とが孝助を邪魔にして、相部屋の相助といふ薄馬鹿をそゝのかし、時藏、龜藏といふ梘徒を誘つて相助は孝助を道に要して殺さうとするが反つて孝助に散々打ちのめされる。伴藏は幽靈に萩原の窓下の御札を剝がしてくれば百兩やると賴まれて承知する。飯島が泊り番の留守中、妾お國が目をさますと、襖がスウとあき地袋がガタ〳〵して錠をあける音がする、「ハテナと思ふ内にスウートンと襖をしめピシャリ〳〵と裾を引く」あんばいで出て行つた者があるから行つて來ると、手文庫の胴卷の百目の金子が紛失してゐる。こ

の邊高座では凄からう、狡猾なお國はその胴卷を孝助の文庫に匿しておいて、飯島がかへると訴へて詮義が初まる段取となり、とど孝助の申譯が立たず手打ちになることにきまる。一方、伴藏は、女房おみねを談らつて新三郎の目をかすめて、海音如來を盜み出し、夜になつて幽靈が來ると百兩を受とつて札を剝がしてやつて、勇齋と後から見にゆく。飯島は孝助をもとより殺したくないから、胴卷をやつて堂忘れしてゐた事にして許す。孝助は源次郎を殺して死ぬつもりで、夜隱に忍んで鎗で突くとそれは意外にも飯島で、愕いてお國源次郎不義の仔細を物談ると、飯島は孝助の父黑川を殺したのは拙者であると今迄の祕密を明かし、孝助義憤の情誼を知悉してゐてわざと打れてやつたが、早く養家へ歸れと無理にかへし、寢てゐる源次郎を突殺さうとして反つて殺される。お國はそこで源次郎と驅落ちして了ふ。で、相川は孝助を飯島の仇打ちに出立たせる。勇齋と伴藏は新三郎の家内へ這入つてみると、一個の髑髏が萩原の首に噛みついて萩原は虛空を摑んで死んでゐる。で、伴藏は惡事露見を怖れて鄕里の栗橋へ移り妖婦お國(驅落した妾の後身)にうつゝを拔かして、女房お峯を殺してすましてゐると、召使のおますに亡靈が憑くので、醫者を賴むとそれが幇間醫志丈で、結局伴藏の白狀では、彼が新三郎の肋を蹴殺して、新墓の髑髏を

出して來て屍體にくつつけておいたのだといふ。處へ、源次郎が出て伴藏をゆすると、二十五兩やつて歸す。さて、孝助は源次郎を探して判らずに歸つてみると、相川娘お德の腹に子が生れて孝太郎となつてゐる。新幡隨院へゆくと和尚が劍難の相があると戒める。歸途志丈を殺して血迷つた伴藏に斬付られるが負傷はなかつた。尙、途中で勇齋を訪ねると其處へ來た宇都の宮の女といふが孝助の實母と判明、その實母りゑは黑川家離緣後樋の口屋五兵衞に緣付くと、八ツになるお國といふ先妻腹の娘があり、それが性惡故、三宅といふ旗本へ奉公に出した處、先達て源次郎を伴れて來て賴まれかくまつたといふ。孝助は天の助けと宇都の宮へ乘込み討たうとすると、實母は義理にからまれて二人を逃がして自分は死んだと判る。後を追つて兩人に助太刀の龜藏相助諸共鏖しにして歸京、新三郎のため新三郎濡佛を建立したのが、新幡隨院濡れ佛の緣起だといふ處でこの物語は終つてゐる。

さて、長々と梗概を書いてはみたが、怪談牡丹燈籠として傳へられてゐる物語も、實は作者圓朝には一向怪談の興味そのものが深刻でなく、草紙作者並みの怪異の味付け鹽梅である上に、わざと伴藏の惡事に事を片付けてしまつてゐるし、話の筋もあり來りの、ややこしい筋のからんだ

仇討譚に怪談をとり交ぜた世話風の緣起物で、なかに挿んだ圓朝の會話にも、落語家流の低級性がとれてないとすれば、實はさして注目するに足る假作物語とも思へないと誰も感じるに相違ない。實際、おなじ圓朝ものでもモウパスサンにもとづいた「名人長次」の方が名人氣質の描寫などはるかによく出來てゐるのである。たゞ、ずぶの素人がこれ迄にからくりをよく作り上げたと感心すればする迄である。

牡丹燈の怪を怪事とせずに、實は惡事であつたと解釋したところに、明治開化時代の圓朝の卑俗なる自然主義があるのだが、事實は、そのために折角詩興滿溢のロマンティックな物語を臺なし物にしてしまつてゐるのである。

櫻痴居士の脚色になる脚本の「牡丹燈籠」では、芝居といふものゝ性質上、飽くまでもセンセイショナルな怪談をさきに立ててあるので、通り一遍の怪談劇にすぎないにも係らず、見た目はなんとなく累のやうな、お岩のやうな醜怪がなくて美しい浪曼的超自然詩情を感じさせるところに興味がある。圓朝のにしても、實際にその高座を聽いたならば、巧妙なる話術の技藝によつて、怪異出現のあたりは讀本としてのあの圓朝物を讀むよりもはるかに興味がふかいに相違ない。カ

ランコロンの下駄の音は日本のひゞきを特に響かせて、この怪談の獨得の凄味である。

いづれにしても、話説の中心興味は、牡丹燈を携へて出てくる二麗人と美男とのからまり合ふところに存するので、怪談牡丹燈籠の興趣は、すなはち、圓朝獨占のものでなく、芝居の牡丹燈籠劇そのものでもなくむしろこれ等の話のもとになつた牡丹双燈をめぐる一篇の古說話にあると云はなければならぬ。たゞ、今日迄怪談といへば牡丹燈籠といふ程人口に膾炙してゐるのは、圓朝の創作的才能のためではなくて、一に下手に仕組んだ双草紙風の筋を辿る彼の獨得の話術と　脚本牡丹燈劇の浪曼的空靈美とによるもので、文學としても、戲曲としても、その不自然と筋の運びの拙劣と、朦朧たる性格と作者主觀の低劣と、何れの見地から見ても立派な出來の代物ではない。圓朝が單獨で創作したにしたところが、それは單に圓朝の創作的小才の證左になる位のもので、もとより明治文學史初期の文藝作品として、優位に置くほどのものでは勿論ない。あの程度の草双紙染みた脚色手法の所有者なら、當時幕末この方殘存した戲作老文人にいくらでもその人は居つたのである。怪談牡丹燈籠の興味は、であるから、どうしても、直接には圓朝の話術と小芝居向きの面白い、暢氣な、美しい幽靈出現場とにあるので、間接には支那の原話か有する、牡丹燈

を携へたる美女の怪のうつくしさに存するのであるから、この一篇の怪異談の價値を糺すには、更に溯つてその原型に到らなければならない。

富山房の「名著文庫」本「雨月物語」の緒言に、校訂者芳賀矢一博士は、「吉備津の釜磯良の竊鬼は圓朝の牡丹燈籠の本になつた聊齋志異の怪談その儘である。」云々と云つてゐるが、これは勿論、博士の誤りで、牡丹燈籠は「剪燈新話」の裔孫である。が、直接にその粉本となつたのではなくて、淺井了意の「伽婢子」によつたものにちがひない事は、既に「列傳體小說史」以來世間周知の事實である。

しかし、牡丹燈怪奇を扱つたものが「伽婢子」のみでないことも亦事實である。その最も近くに存するものとして、明治二十二年版石川鴻齋の「夜窓鬼談」二卷を擧げる事が能きる。この書は、ラフカディオ・ヘルン(小泉八雲)の著「日本妖靈志」In Ghostly Japan に於ける「情痴の業」A Passionate Karma と前後してかゝれ、一は漢文一は英文であるのも好い對照である。「夜窓鬼談」は「斯編多係傳聞。」といひ、又、「古談或改更原文。」と著者がことはつてある通り、さまざまの材料からの雜然たる蒐集で、說話學上の純一性は有たないけれど、讀んで興味を拗からず

感じる漢文體の戯著である。上卷に四十五篇、下卷に四十二篇を收めてある。その內の「牡丹燈」はすなはち圓朝本によつたもので、

「享保年間。江戶有二飯島某一。數世事二幕府一館二於牛門之外一。家亦小康。女名二阿露一。」にはじまり、「其夜二鬼。又入二生之室一。明朝伴藏告二白翁一。憂レ之與二伴藏一訪レ生。生未レ起。開レ室生已死矣。」に畢つてゐるが、その文末に「此事嘗觀二於土佐某氏所畫橫卷一。畫間以二和文一錄レ之。然生死後皆省レ之。」云々とあるから、あるひは土佐派の畫人でも之れを繪卷物にしたものが殘つてゐるのかも知れない。現存すれば一見したいものである。鴻齋は當年の漢文家としてもとより「剪燈新話」の原話は知悉してゐたに相違がないから、わざ〳〵剪燈の佳文によらずして圓朝物によつたのは、當時親ら圓朝の高座を聽いてその話術に感じ、その說話から取つたのかも知れない。この「夜窓鬼談」の挿畫は、平福穗庵の筆になるものであるが、牡丹燈の畫は穗庵としては甚だ出來榮えがよろしくない。一向に鬼氣の拔けた尋常婦人のそゞろなる夜行にすぎないのである。

例のカランコロンの凄場を鴻齋は「忽聞二牆外履聲來一。生意訝レ之。竊從二牆隙一視レ之飯島氏娘。携二牡丹花繡燈一。冉冉與二娘子一來。」と書いてゐる。畢竟、圓朝本の平凡な漢文抄譯にすぎないので

ある。支那原文を知るものは一層その感を深くする。

しかるに、ヘルンの牡丹燈はどうかといふと、「情痴の業」の劈頭を試譯して見ると

「東京の舞臺で、いつも人氣のおとろへない芝居は、名優菊五郎一座の"Peony-Lantern"すなはち牡丹燈籠である。この氣味のわるい芝居は、前世紀中葉に場面をとつてあり、もと支那説話から考案したものだが、圓朝といふ小説家が日本語體で創作した日本生粹の地方色の出たロマンスを脚色したものである。わたしはその芝居を見に行つて、恐怖の快樂の新しい種を菊五郎によつて親しませて貰つたわけである。」

斯く書いて、ヘルンは東道の日本人のすゝめでこれを飜譯する事となり、牡丹燈籠の中で特に幽靈譚のみを詳しく書いて、外の草双紙興味の騷動場面は略いてゐる。これは誠に賢こい方法である。その幽靈描寫は中々詳しい。いや、かへつて原作(圓朝の)よりも詳しいところがある。お露は"Morning Dew"(朝露)の意である。旗本は"Banner-Supporter"の意であると註し、又、「全く君に焦れ死をしたと云ふ事です。眞成に君は罪造りですョ。男の餘り美く生れると罪だネー」(原文マヽ)Isnt it sin to have been born so handsome that the girl die for love of

you? といふセリフを「西洋讀者には變に聞えるかも知れんがこの會話は寫實で行つたものである。」云々と註釋してゐる。幽靈出現の場は、

「ところが間もなくこの靜寂も、カラコン、カラコン kara-kon, kara-kon と近づいて來る下駄の音に破られ、件んの音は急にだん〳〵と近附いて來て、庭をとり圍んだ生垣のもとまで來た樣子。新三郎は何心なく物好きに趾頭（つまさ）き立つて垣の上からひよいと窺いてみると、女が二人通つてゆく。一人は牡丹花を描いた美しい燈籠を手に持つてこれは腰元らしい。いま一人は十七ほどの背のすらりとした孃さんで、秋草色染の振袖を着てゐる。」云々と書いてゐる。ヘルンは尚、圓朝本では俗惡な勇齋や、朦朧たる伴藏の性格を自分で創作的に解釋して、東方的性格の一方の代表に仕立てゝこの怪異の顚末だけを出來るだけ密畫に描いてゐる　終りに、ヘルンは日本の友人と新幡隨院へ親しく實地見分に出かけ、その友人に「西洋的に考へると、新三郎は見下げ果てた奴である。身は前世後世に百萬の生命存するを信ずる佛徒であり乍ら、冥界から男のために還つて來たこの女人のために、その儚ない命（ミゼラブル・エキジステンス）さへ棄てるをようせぬ我利我利亡者であつた。我利といふよりも臆病な男であつた。」といふと、友人は「日本風の立場で考へても新三郎は卑劣な人間で

すが、作者はかういふ弱い性格を使用しないと事件の運びがつかないので點出したのです。私の好きな人物（アトラクティブ・キャラクタア）はお米です、古風な忠義一圖の良い婢女（しため）の型で……」と云つた。それから墓地へ行つてみると、芋畠になつてゐて汚ない水溜りや手足のもぎ取れた佛像がある。近所の女にお露とお米の墓を訊いてみると、地藏樣の隣りだといふので其處へ行つてみると、ひとつは

「寶暦六年（一七五六年）丙子三月十一日

Eleventh day, third month—Rat, Elder Brother, Five-Sixth year of Horeki【A. D. 1756】……

根津邊の宿屋の亭主で吉兵衛といふ者の墓らしい。今ひとつは

演妙院法譽意貞顯志法尼（？）

尼さんの墓らしい。その法名はヘルンの譯名によつて假りに還元させてみたのであるから、寺内の本物とは大分文字がちがふかも知れぬ。ヘルンは「馬鹿をした。あの女にいゝ加減一杯喰つた」といふと友人は、「折角感慨に耽らうと思つていらしたので、あの女が骨折つて怡ばせてくれたのぢやありませんか。こつちが不可ないのです。あの怪談をまさか事實だとは思つてゐらつ

しやらないでせうね。」と答へた。

こゝでヘルンの文章は畢つてゐる。ヘルン文は例によつて佳麗であり巧妙である。この支那說話の純日本化ロマンスに於て、ヘルンはたゞエキゾティックな東方的詩情を樂んだにとどまるが、日本化せる支那說話の情痴の業因談は、多くの怪談物――「新著聞集」や「お伽百物語」や「玉箒木」や「百物語評判」や「お伽厚化粧」や「玉すだれ」中の畸談恠誌と共に、彼の東方浪曼主義の原泉になつた點で、再造說話の眞面目な世界を提出してゐるのである。

牡丹燈綺譚の直接の粉本が「伽婢子」であることは前に云つた。伽婢子による牡丹燈が明治にあらはれる迄に、なほ多くの感化影響を與へて來たことは、この說話が「伽婢子」全篇のなかでも出色の材料で、恐らく伽婢子なる名前は牡丹燈記中「明器婢子」のそれによつて與へられたに相違ないと考へられる點を見ても悟られるが、その部分的の感化、または分裂の跡は、山口剛君が既に之れを拾ひ上げてゐるからこゝにはその一切には言及しない事にしてをく。たとへば都賀庭鐘の「英草紙」巻三「紀任重陰司に至り滯獄を斷くる話」や、危洛隱士音久の「怪醜夜光魂」

巻四「山田半七亡妻の責を正しく見る事」や、秋成の「雨月物語」巻三「吉備津の釜」や、京傳の「小幡小平次」や、南北の「阿國御前化粧鏡」その他である。すなはち、冥府の條りや、死靈の條りや、符文の條りや、道人の條りや、牡丹燈の條りその他である。これらは、それぞれ牡丹燈談の怪異談としての重要性と、同時に庭鐘や秋成などをのぞく他の怪談作家の獨創性の貧弱とを裏書きする事實と見てよい。

しかし、凡そ怪談の構成條件となる大道具小道具は、いちゞるしい魅惑力を有した牡丹燈の明りが最初にハツキリと目についたればこそ、大家小家爭つてこれを粉本とし、大道具小道具ともしたのであるが、同じやうな道具立てが他に全く存在しなかつたわけではない。むしろ、怪異を表藝とするケレン好きのオリヂナリティー貧しき諸作家にいたつては、悉皆ゆる文獻から幻怪と畸異との場面を暗雲に借用してくるばかりか、普通並みの作家といへども、怪異のシーンになると、元來がさう澤山に創見を提出することがかたい性質のものでもあるが、ともすれば前人の結構や、落想を手とり早く眞似たがる。一々あげたら夥しい例に及ぶことであらう。就中、日本の人情にふさはしく、日本化が易い話說や場面ほど多く用ひられ、一般人性の本然に觸れた道具ほ

ど多く用ひられたことは申すまでもない。「奇異雜談集」や「怪談全書」や「伽婢子」や「英草紙」のやうな飜案を表藝に出したものは例外として、西鶴、秋成、馬琴等さへ落想の上の先人追蹤はまぬがれないし、又追從はしても、單なる輪廓の使用の上に尨大なオリヂナリティーの殿堂を築き上げたのであるから、莎翁が古年代記の材料に倚つたごとく、デカメロンが佛伊古文獻から受けて、更らに後出の諸佳篇に資財を供したごとく、もとよりとがめ立ては要せぬのみか、かへつて出典の考證から創作的技能の檢出を忙ぐべき筋合のものではあるが、化政度前後から後の亞流作者の一夜漬小說になると、構想や小道具の借用方があまりに無才で、露骨でいけぞんざいで、讀者を小馬鹿にしてゐるやうな氣のするものが多いので、斯る性質の作品や、その部分品の創意性の貧弱はいふ迄もない。それらの作家は擧つて牡丹燈又はそのやうな特異の內容と結構とを有する先人の文章から落想やヒントを得たのである。實は、爰にも德川初期怪異談の文學史價が存するのである。

が、古恠異談の價値は、大體二分して考へられる。一は民俗學的分類と湊合との學問的興味の上から、一は一個の文藝作品としての批判興味の上からである。牡丹燈の綺話は「伽婢子」によ

つて一般的になつた。先づこの冊子の內容を檢して見よう。
「伽婢子」十三卷、淺井了意著、寬文六年上梓に係る。六十七篇の小話の收錄である。主として「剪燈新話」及び「剪燈餘話」よりの飜案から成る。よつて此著に窺ふべきものは飜案小說としての價値と傳說上のそれとであるが、後者は題目でないから略き、先きに原本の輪廓をみると、「剪燈新話」四卷二十篇及附錄一篇は明の學吏瞿佑字は宗吉の著である。この人存齋と號し「歸田詩話」、「存齋詩集」の著者であるが、もと「剪燈錄」四十卷を撰したのが亡佚してゐたのを四川の蒲江の尹胡子昂といふがその一部分を「剪燈新話」四卷として拾ひ上げ、爰に世に出るに至つた。「剪燈餘話」の方は、明の盧江の人李禎字は昌棋の撰。博聞を以て稱せられた官人であつた。新話餘話ともに眞正面から勸善懲惡を一枚看板にしては居るが、方便としての鑑戒文章として以外に絕對に怪奇に對する興味がなくて、この種の綺話が出來るものでない。勿論作者等は、豐富に浪曼的感懷を寄せて書いたものにちがひなく、かの「夷堅志」、「搜神記」、「太平廣記」、「異苑」、「述異記」の類とともに、支那古文獻中豐富なる怪異談說集のなかでの佳作として、最も注目に値ひする一種である。

その巻二第四話「牡丹燈記」は今その劈頭原文を假りに和譯してみると、「方氏の浙東に據りけるころ、歳ごとの上元の夕、明州にては五夜にわたりてともし火を張り、城市の士女こぞりて見物に出かけるならひありき。至正二十年庚子の年のことなり。喬生といふ人あり、鎭明嶺のふもとに住ひしたりけるが、はやく耦を喪ひ、鰥居のわびしくて、そぞろに遊びいづる事なく、たゞ門に身を凭れて佇むことなどありたりしか。さても、十五夜の小夜更けわたり、遊びありく人かげも遉かに稀れとなりし頃、ひとりの丫鬟雙頭繪もやうの牡丹燈をとり挑げてさきにたち、美女ひとりしりへに隨へるがありき。年の頃は二八か二九か、紅の裙、翠の袖、婷々にもいと嫋々なる女のつらなりて西の方投して去りゆきぬ。月かげにすかして視るに、韶顔よはい若くげに絶世の佳人也。心そゞろにときめきて抑ふる能はず、女を追ふて喬生は」云々にはじまり、生がこれを留めて泊らせてみると「態度妖姸。詞氣婉媚。低㆑幃暱㆑枕。甚極㆓歡愛㆒」（原文）となりの老人疑ひ窺へば一粉粧髑髏と坐してゐるので、生は翁にさとされて湖心寺の西廊の盡くるところ小暗い部屋に來てみると、旅襯があつて「故の奉化符州判の女麗卿の柩」と白紙の貼り札がしてあり、雙頭の牡丹燈が懸けてあつて、その下に一明器婢子を置いてあり、その背の上に金蓮の二文字があ

る。明器婢子は葬具人形の義である。愕いた喬生髮の毛がぞつと立つて寺をとつかはと走り出であとをも見ずに逃げ出して、玄妙觀の魏法師といふ道士に救ひを乞ふて朱符二道を授けられるが一月あまり後に、友人の家で酒を飮んで心亂れ戒を忘れ寺内に入つて行くと、女迎へて生の手を握り柩の前へゆくと、怪しむべし、柩の蓋が自らパツと開いてその中へ生を抱へ入れて美女の姿が見えずなると、自然に又バタリと柩は閉ぢて了ふ。その後、どんよりと曇つた白晝や月かげ黑き宵には喬生と美女と手を携へて歩いてゆく、その先きに丫鬟ひとり雙頭の牡丹燈をとり挑げて東道いてゆく姿が折々見える事がある。これに遇つた人は屹度大病に罹つて高熱惡寒になやまされる。村人困つて魏道士にたのむと、自分では力叶はぬから四明山の頂に住む鐵冠道人にたのむがよいといふ事なので、けはしい山を攀つて道人に逢つて賴むと「魏法師のおしやべり奴が。お前達に厄介かけたなう。」といつて山を下り、西門の外へ來て方丈の壇をきづいて、そこに端坐して呪符を書いて燒くと、神人來つて命を乞ふので喬生麗卿金蓮三人を伴れて來させてはげしい訶責糺問に及び、牡丹燈は毀つて燒きすて、三人は九幽の獄に閉ぢこめられて了ふ。道人はたもとを拂つて山へ入つて了ふ。次の日に村の衆がまたお禮に出かけてみるともう居ない。草庵がある

ばかりである。急いで玄妙觀をおとづれて魏法師に逢つて訊いてみようと往つてみると、法師は瘄に病つてもうものを言ふ事が能きなかつたといふに畢つてゐる。

行文勁健かつ超逵であるが、鐵冠道人の一擧一動が短文の間に苛辣嚴正をきはめて、よく道敎眞人の眞面目があらはれてをる。美しく妖麗な死靈美女のおもかげと、强く剛い道士の面目とがコントラストの妙を形してをるところが、この文章の魅力の骨髓である。

この原文によつて、了意は、「天文戊申の歲、五條京極に萩原新之丞と云者あり、近き比妻に後れて愛執の淚袖に餘り、戀慕の焰胸を焦し、獨淋しき窓の下に、ありし世を思ひ續くるに、いとど悲しさかぎりもなし、聖靈祭の營みも、今年は取わき、此妻さへ無き名の數に入ける事よと經讀み回向して、終に出ても遊ばず、友だちの誘ひ來れども、心啡浮立たず、門に彳立て浮れおるより外になし、

いかなれば立もはなれず面影の
　身にそひながらかなしかるらむ

と打詠み淚を押拭ふ、十五日の夜いたく更けて、遊び步く人も稀になり、物音も靜かなりけるに

一人の美人共年二十許と見ゆるが、十四五許の女の童に、美しき牡丹花の燈籠持たせ、さしも徐やかに打過ぐる。芙蓉の眥あざやかに、楊柳の姿たをやかなり、桂の黛、碧の髮いふ計りなくあてやか也、萩原月の下に是を見て、是はそも天津乙女の天降りて、人間に遊ぶにや、龍の宮の乙姫の渡津海より出て慰むにや、誠に人の種ならずと覺えて、魂飛び心浮かれ、自らをさへ留むる思ひなく愛で惑ひつゝ、後に隨ひて行く、」言葉をかはしあつて「女と手を取組つゝ家に歸り」ともに酒をくんで、

「また後のちぎりまでやは新枕
　たゞ今宵こそかぎりなるらめ

と云ひければ女とりあへず

ゆふなく／＼まつとしいはゞこざらめや
　かこちがほなるかねごとはなぞ

と返しすれば、萩原いよいよ嬉しくて、互に解る下紐の結ぶ契や新枕、交す心も隔なき、睦言はまだ盡きなくに、早や明方にぞ成にける、」それから二十日あまりたつて「隣の家によく物に心得

たる翁の住ひけるが」怪しとおもつて覗いてみると、「一具の白骨と萩原と燈火の下に差向ひて坐したり、萩原物云へば、彼の白骨手あし動き髑髏うなづきて、口とおぼしき所り、聲響きて出て物語りす。」翁愕いて翌日萩原を強くさとすので、「五條を西へ、萬里小路より此處彼處を尋ね、」日も暮がた萬壽寺の浴室のうしろを北にゆくと古びた魂屋があつて「棺の表に、二階堂左衞門尉政宣が息女彌子吟松院冷月禪定尼とあり側らに古き伽婢子あり、後ろに淺茅といふ名を書たり、棺の前に牡丹花の燈籠の古きを懸けたり、疑ひもなく是ぞとおもふに、身の毛よ立ちて恐ろしく跡を見返らず、寺を走り出て歸り」翁に敎へられ「東寺の卿公は行學兼備て、しかも驗者の名あり、」ときき、卿公を訪ねて符をたまはり門に帖ると女が來なくなり、五十日許りの後、「萩原東寺に行て、卿公に禮拜して酒に醉て」かへるさに女戀しくなり、寺門の前まで來ると女が立つてゐて恨みつらみの怨言あつて「萩原が手を取り門より奥に連れて行、召連れたる萩原が男は、肝を消し恐れて逃げたり、家に歸りて人々に告ければ、人皆驚き行て見るに、萩原已に女の墓に引込まれ、白骨と打重りて死してあり、寺僧たち大に怪しみ思ひ、やがて鳥部山に墓を移す、其の後雨降り空曇る夜は、萩原と女と手を取組み、女の童に牡丹花の燈籠ともさせて出て歩く、是に

行逢ふ者は重く煩ふとて、あたり近き人は怖れ侍べりし、荻原が一族是を歎きて、一千部の法華經を談み、一日頓寫の經を墓に納めて弔ひしかば、重ねて現はれ出ずと也、」で畢つてゐる。

圓朝本の荻原新三郎が了意本の荻原新之丞から出たことはいふ迄もない、この假名草紙の簡單なストーリイが、かの草双紙の複雜きはまる筋となつて、單なる怪異のモティーフ以外に、圓朝本では姦通やら忠義やらが加はつてゐるが、實はそのやうなものは蛇足で、異國人ヘルンも他の一切を切り棄てゝ幽靈の條り丈けに目をつけた通り、飽く迄も牡丹燈怪異に終始する一編である。了意は上元を七月盆祭とし、美女の年十七八を二十許としたが、圓朝は了意が十四五許とした女の童を大丸髷の年增の下婢に直してをる。月下に初めて美人に逢ふ條りの了意の描寫は平凡で非力である。原文の簡勁にして印象づよきに遠く及ばない。和歌を多く挿んだのも蠶桒の効果をつよからしめようとした手段であらうが、短歌そのものは甚だうまくない。燈下に髑髏と語るところだけは、原文よりも了意の方が怪異のけはひあつて勝つてゐる。圓朝本は、「(伴)ところがネー其女が唯の女じやア無のだ(勇)惡黨か(伴)なにそんな譯じやアない、骨と皮ばかりの痩た女で髮は島田に結て鬢の毛が顏に下り眞靑な顏で裾がなくツて腰から上ばかりで骨と皮ばかりの

手で萩原様の首たまへかじりつくと萩原様は嬉しそうな顔をしてゐると其側に丸髷の女が居て此奴も瘦て骨と皮ばかりでズツと立上ツて此方へ來ると矢張り裾が見へないで腰から上ばかりで恰で繪に描た幽靈の通り夫れを私が見たから怖くて齒の根も合ず」云々と對話の間に挿んでゐるが紋切型の幽靈の常道を行つた姿にすぎない。これを生かすものは、圓朝の高座に於ける話法である。又、了意は卿公といふ人を點出してゐるが、これが短文の間ながらさつぱり活きてゐない、それのみのか愼みを命じた常人が訪ねて來たとて酒を出す、その酒に心が亂れて幽靈に再會するといふ段取は自然でない。圓朝本の勇齋も良石も俗物のうごめくにすぎない。これらに比較すると原話の鐵冠道人にしても、魏法師にしても悉く活きてその大小出世間人の面目紙上に躍如たるものがある。呪符の魔力の不可思議も原文では細かに傳へてゐる。むしろ、この方が主であると思はせる程に、符吏の出で來るあたりから、「黃巾錦襖、金甲雕戈、皆長丈餘、壇下に屹立し鞠躬して、命を請ふ。」といひ、「矧んやこの清平の世、坦蕩の時にして、乃ち形軀を變幻し草木に依附し、天陰り雨濕すの夜、月落ち參橫はるの晨、梁に嘯いて聲あり、其室を窺へども睹ゆるなし。蠅營狗苟、羊狠狼貪、疾きこと飄風の如く烈しきこと猛火の若し。喬家の子生きて猶悟らず

死ゞとも何ぞ恤へん。符氏の女死して尙ほ貪婬なり、生ける時知るべし。況んや金蓮の怪誕なる明器を假りて以て矯誣し世を惑はし民を誣ひ、條に違ひ法を犯す。狐綏々として蕩々たることあり。鶉奔々として良なし。惡貫已に盈つ。罪名宥さず。」の條りのあたり秋霜烈日の觀あつて、一面作者の道義感の烈しきをうかがひ見るべく、かへつて怪異の情のけし飛んで了ふ感さへあるほどである。魏法師を痯にした道人の嚴正もこの話の終りに興味を添へるものである。了意文では法華經の功德で幽靈がやまつた事にして、鈴木正三の「因果物語」風の結末になつてをるが、これも飜案に和風をつよめようとした手段の一であらうが、「元亨釋書」や「砂石集」以來少からぬ因緣談の一になつて、道家の香の高い原文の味と異るものになつたのは、止むを得ぬことだが遺憾であつた。「因果物語」に序を書いた雲步といふは、その書が「元亨」「砂石」よりも「證據正しくして、初心の人の爲に大幸ありといへども、只今現在する人の假名有之を以ての故に」云々などと吹いてゐる位、この種のきゝめも强かつた頃であるから、この結末も當年としての當然であらう。實際は、「因果」本中の說話も、經文功德は別にして、實事から出たと思しきものが少くなかつた。こゝに一つの價値が別存する。

「伽婢子」では世に知られた牡丹燈籠以外に「眞紅のうち帶」(「金鳳釵記」の飜案)や「十津川の仙境」(「天台訪隱錄」の飜案)等佳文が少くないが、總じて「連歌初心抄」をはじめ、「東海道名所記」、「百物語」、「京雀」、「北條九代記」、「武藏鐙」、「狗張子」、「曾呂利狂歌咄」等多き種類の假定、眞作うち交ぜた著作を見て、この「一向の粹僧」の多面性と博聞と以外に、近代怪異談作者としてその情趣豐かなる妙文の製作者であつた點は注目を要する。

了意も正三も緇衣の出で、假名双紙作者として佛教の寓意を挿んで、子女讀者の稚き胸に訴へた。「因果」は五年前の寬文元年に出たが、「お伽物語」や「百物語」(萬治二年)とともに德川怪異談說の事實上の先驅となつた。その「怪談」といふ小語も化政度すぎからはカツキリした獨得の意味と語感とを有するに至つたが、初期頃は怪談も異聞も殆ど同じ意味で、特に怪談好きの林文會堂が了意の「狗張子」(元祿四年)續集に擬して「玉櫛笥」(元祿八年)を出し、「玉箒木」(同九年)を出した頃は時尙既に大にこゝに傾いてゐて、十一年には林羅山撰と傳ふる「怪談全書」あり、その一昔前に西鶴は貞享二三四年にわたり、「諸國咄」や「懷硯」を出してゐるのを見てもわかるが、正德六年京都版「本朝怪談故事」などを見るとなほ異事奇聞集の義にとつてゐるか

ら、「英草紙」や「登志男」の出た寛延前後（即ち「窓穂猿」、「お伽櫻」を前にし、「怪談帳」、「とのゐ袋」を後にする）から漸くこの概念がはつきりして來たと云つて大差はなからう。かの凄味と俗氣とたんまり湛えた所謂「怪談」は南北と正藏とに代表せしめれば事すむが、われ等の興味はあの現實興味のつよすぎる「怪談」ではない、むしろそれ以前の Supernatural に對する强い興味の時代である。羅山子がその書卷一の「呂球」に物語るところ古獺の怪は「幽冥錄」より出たものだが、これすなはち、民俗學的河童類說話の一であるが、さういふ學問的關心を外にして思へば、異事奇聞の超自然事に就ての好奇心である。「怪談故事」卷四第十四「湖水蓮花祭」のごときは「古老笑談」に見えたりと書き添へてあるが、竹生島六月十四日神事の短かい記事で、これも亦土俗的興味のものであるにすぎぬ。「怪談藻鹽草」（享和元年）五卷にはタイトル・ペイヂに小書きして「此書は諸國の怪談奇事を僞作せず土地も名も顯然に出せしものなれば文花無して實處ある故人心を寒からしめて侍宿の伽となるべき書なり」とあるが、枕探しや尾長蛆、後怕や品玉の口繪さへ入れて諷刺半分の怪と眞の怪とをとり交ぜにした中に、眞の幽異談らしいものを收めてあるが、文壇作者の妖怪は職業意識が强すぎて人目を牽くことばかり考へるから、事實に即し

た興味の方面が皆無となり、只、怪のための怪に走つて、丁度英吉利ゴシック・ロマンス中の凡作のやうなものになつたから、藝術興味も學問上意味もなくなつてしまつたのである。

話は外れたが、まだいふ事がある。牡丹燈綺談はいまひとつ古書に見えてゐる。「奇異雜談集」がそれである。この書の現在本と、古マニュスクリプトとの間には差異があるとの事であり、刊行の年も朝倉無聲氏山口剛君によると、享保年中板との事であるが、予の見た故藤野古白氏藏本には卷末に孟春穀日とあるのみで、デイト不明であるから詳かには判らない。室町將軍義植の時分から天文半ば頃迄の記事である。中村豐後守の息子某の撰に係る事はその序に、「昔江州佐々木屋形幕下中村氏豐前守者其裔某所撰而錄唐土本朝怪異之說以遺後人」云々とあるのと、書中に挿んだ作者の文中から推測するにすぎない。この室町末期の怪異談が先づ近世怪談小說の俑を作つたものだといふ事は、それも無聲氏が書いて後に三四の人が唱和してゐる說だが、內容の性質と著作の推測時期と、刊行の時日とから見て、現在の處では先づ眞實といはなければならない。

さて、此書卷六第一話「女人死後男を棺の內へ引込ころす事」は純然たる「剪燈新話」牡丹燈談の自由意譯で「唐には正月十五日の夜。家々の門にともしびをあかし。種々いぎやうのとうろ

をはりて。門にかくるゆへに。男女諸人是を見て。曉にいたるまで。あそびありく事。日本の盆のごとくなり。是を三元降下の日といふ也。」云々にはじまり、「天朝のすゑの。至正年中の事なるに。明州の鎭明嶺のもとに喬生といふものあり。妻をうしなひて。やもめにして閉居す。正月十五夜にいたりて。諸人みな出て灯籠を見てあそび行といへども。喬生はひとり門にたゝずみて、みちに出あそばず。夜半のすぎになりて。道に人もなく。月のみあきらかなるに。丫鬟の童女一人ありて双頭の牡丹燈をかたにかゝげてさきにゆけば、後に窈窕たる美女一人したがひて、西にゆく。喬生これを見てやむ事をえず。すなはち出行て、ちかくみれば。はなはだすぐれたる美人なり。年に約せば十七八。くれなゐの裙。みどりの袖にして。ゆるやかにあゆむ。氣たかき體。まことに國をかたふくべき色なり。喬生心もまどふばかりにて。」云々とあり、やがて「こよひのにゐまくらわするべからず。鳥なき天あくるといふて出さるなり。喬生ゆめさめたるがごとくして。」云々「隱家の老翁これうたがひ、壁の穴よりこれをうかゝひみるに。粉をぬりよそほひしたる髑髏の女一人。ともしびの下に。喬生とならび居るを見る。」云々。「喬生湖心寺の門に入て東の廊架をゆきつくして西の廊架にうつりてゆけば。らうかのつくる所に。一の小堂あり。內に柩あり。

白紙にその名をかきて貼たり。文にいはく。故奉化符州判のむすめ麗卿の柩と云。前に双頭の牡丹燈をかけ。下に一の丫鬟の童女を立たり。そのうしろに金蓮の二字あり。喬生これを見て身の毛だち。鳥はだ立てはしりて寺を出て。後をかへりみずしてかへるなり。」云々。「このゝち空のくもるゆふべ。月のくらき夜往々に。喬生と女と手をたづさへて。おなじくありく。一の丫鬟双頭の牡丹とうをかゝげてさきにみちびき。ゆくをみるなり。是にあふものはすなはち重病をえて。寒熱往來す。いのるにくどくをもつてし。祭に牢醴をもつてすれば。粗いゆる事をえ。いなやのときんばいへさるなり。」云々。「すなはち童子と山をくたり。行歩かろく。すくやかにして。たゞちに西門の外にいたりて。一丈四方の壇をむすんで。むしろをのべて。端坐す。符をかきて。これをたけば。たちまちに符のつかはしめ、數輩化現す。符の煙より出たり。すなはち是道人の吏。護法のたぐひなり。」云々。「翌日衆みな山にのぼりて。謝せんとすれば。たゞ草庵のみありて。道人なし。又玄妙觀に行て。魏法師に謁すれば啞にして物いふ事。あたはざるなり。けだし鐵冠道人の。なせるところか。」で終つてゐる。

大體に於て意譯の體をなし、かつ了意よりはある所は力あつて原文の勢を傳へてゐる。これは

了意のは飜案で和風に更へてしまつたためであらう。故事を澤山引いた三幽靈の供言や、道人の巨筆の判の演舌はこれにも全く略かれてをる。到底完全に意譯する事が不可能と考へたからであらう。

この牡丹燈綺談意譯文が我邦に最初に渡つた牡丹燈籠の物語であつて、たゞ出板の時期が了意よりも約半世紀おくれたのと、了意ほどの才名ある文人の著者でなかつたために、一般的に流布し、感化を與へたその程度は、到底了意には及ばないが、原文をもととして云へば、この文章がとにかく唯一の「剪燈新話」の面影を傳へたもので、他は飜案であり換骨脫胎であるにすぎないのである。

さらに、近世日本文學史上怪異談の系統を引いたものが、「靈異記」、「今昔物語」のむかしはこゝにしばらく問はず、德川初期假名草紙文學の隆興時代から、了意、羅山、西鶴、庭鐘、秋成を經て化政度、南北の徒に接するまでの間の歴史にあつて、文學史價値に豐富なる產物を出してゐる事實を考へ、その先驅文學としての文獻として「奇異雜談集」を急先鋒として、「お伽物語」「百物語」(これは純怪談ではないが、後につながる事實の上からこれをも合せ考へる必要がある)

と「因果物語」「伽婢子」の四種をあげて來てみると、學者既にいふごとく百物語系統とお伽婢子系統とに分たれうるにしても、その分類は形式分類にすぎず、事實に於て假名草紙時代怪異談說の特色は、延寶時代より元文時代に及ぶ浮世草紙の元祿文學時代と、それより寬政に至る靑本時代とに於ける、怪談文學の先聲としてスュー。パァナテュラルなる事象に對する異常の興味と、その事象に對する佛教的解釋より生じた教訓的心向とが主體となつた說話文學で、その價値は後の怪異文學の源流であり、當代の平民文學として婦女童幼を主なる讀者とする、佛教的教訓文學の一種である點に存する。

「女さんけ物語」、「二人比丘尼」にしても「恨の介」、「薄雪物語」にしても、「藻屑物語」、「浮世物語」にしても、後の戀愛小說の先鋒としての特色の意外に、とかく鹿爪らしき教訓の口吻をまぬかれず、名所記や軍記類はこれを別として「他我身の上」や「可笑記」、「祇園物語」の類に於ける寺社口調のごとき著しき事例あつて、純文學としては想像と觀照との貧弱に於て劣れるはじめて文學の好餌をあてがはれた平民大衆の低劣にもよるが、德川三代の地堅め、凡そ、創業時代の啓蒙的特徵にも因るのであらう。

萬治寛文のその代表期に出た「伽婢子」のスューパァナテュラリズムは、教訓物、名所記、好色物、軍記等同時代の他の種類に比して劣つたものではない。すべてが創成飜案期の未熟と稚拙とを示してゐる事、明治初期開化文學と同一軌にある。それに對するわれ等の興味は、從つて土俗品興味、ゲテ物興味が先づさきに立つは止むをえないが、その中に、時代精神をよく現はした一點あるは看過しがたい。當時支那文學の感化は一番鮮かに裁判物の「棠陰比事物語」とともに怪異物の「伽婢子」類に出てゐるので、その飜案文學中に當時の平民の擧措と、士民の主觀とがにじみ出てゐる事を注目しなければならない。「牡丹燈籠」の飜案文中に窺はれる世相の調子は、明治開化文學中モオパスサン飜案文たる圓朝の「名人長次」中に窺はれる世相の調子と類例ひとしきものがある。それが「奇異雜談集」の古朴の文章になると、意譯文を通じても明らかに、室町末期より安土桃山時代かけての、士人の簡素朴直な感情の一部の調子を垣間見る事が能きる樣な氣がする。宗教觀、世相觀の片鱗を窺ふ事が能きるやうな氣がする。洪武・永樂の頃の錢塘の學士が蒐めた古說話を通じて、日本德川初期（明成祖永樂元年から數へて寛文六年迄に二百六十餘年ある）の士民の意向と、感情とを推知する事が出來る。原話の面影を知りうるのみか、その可なり

巧妙な飜案の腕前を見る事が出來る。飜案せられた短話世界のなかに、京洛情痴生活のひとつの型を悟る事が出來る。法華經一千部誦讀の効果は、佛教教訓文學の一種たらしめてをるが、今日の人が教訓文學（ダイダクティク・リテラテュア）に感じる不快な頑迷と枯燥と以外に、當時の大衆は、信樂と救援とに發する悦びと樂みとをよく享樂したのである。山岡元隣が「孔なき笛に太平のうたを吹けば、耳よりほかに其音遠く、指ならざるを以て無何有の月を指せば、ひかりかげを忘れたり、山を山といふとも、そもまたせしむるものはたぞ。」（隨筆「他我身のうへ」序）の禪味と教勸とにまつはる情味は、「しめやかにふるよいの雨に、おふとの油ちらめくほかげに、ひとり過ぎこし方のうれしさもつらさも、いまのさびしさにとりそへ、又長き行末のかなしさ迄思ひおくれば、袖は猶かはきあへるいとまもなく」とその第六の中に書いた感傷や人情味で、すなはち、假名草紙時代の文學は單なる枯禪林の教化を眞似る教戒文學ではない。凡そそこには教訓文學といふ範疇にあつて、味はひうる人性の洞察と感情の豐富とが、文章の句法の間に短かい乍ら活潑に動いて居る。「伽婢子」六十餘篇のティルズにもこの價値あり、「牡丹燈籠」はその一つであつて、輓近の描寫小説に慣れたものは、措辭の深意義に案外鈍感であるが、この頃の小説にしても、「英草紙」、「雨月物語」にしても、文

章の句法の間に、よく著者の觀察も神經も鋭くあらはれてゐる事實を解さなければ、およそティルズ小說の妙味は判らない。アラン・ポオの短話のごときも、正しく此視點から見るを要する。「奇異雜談集」のそれは、別に簡古蒼勁な意譯文章として、支那文學の早期の紹介として、室町文學史から見て獨特の位置を占めうるものであると思ふ。

『天人論』の著者

一

まだ中學に入らない時分のことであるが、郷里の我家に雇つてゐた若い書生があつた。顏の青白い、氣の小さい、神經質な、俗にむかしからいふ「精神家」といふ型の青年であつたが、この書生に就いて忘られぬ思ひ出が二つ殘つてゐる。

書生というても、方々から運んで來る小作米を、小作人の手から受取つて竹ヘラをぐいと米俵に刺し込んで、米粒を出して吟味して惡ければ小言の一つもいふ位の役廻り、贈答物を親戚に持つてゆくか、父の銀行に晝飯を運ぶか位しか用はなかつたから、閑暇の餘り、少年の予を對手に多く遊んでゐたのであるが、ある時錐を磨擦して熱くした奴を予の頸根子の邊りに押し付けたので「キャア」と叫んで泣いて祖母の許に駈けて行つたので、書生は目の玉の飛び出る程父や祖母やら

に叱られた。

この事は甚だ肉體的であるが、いつ頃からかこの書生が哲學に凝り出して方々から哲學書（というても哲學史概說でなければ、高橋五郎的通俗哲學論の類であるが）を借りて來て耽讀してるるのを予も亦再借りして、その內の一册を偶然に讀んだが、それが其後長く頸根子の熱さと比例して、予の精神生活を左右する哲學的思量の少くとも初期の有數の原因になつた。その書といふが外ならぬ黑岩淚香の『天人論』であつた。

二

「天人論」は當時（恐らくは今でも）テンニン論と發音したから、エンジェルの天人といふ成語を聯想して、最初この書の存在を聽いて突嗟に感興を催したのは、いふ迄もなくエンジェルに對する新考察論へのお伽噺的興味であつた。しかし、事實は天地人三才中特に天と人との關係に考察を加へんとした書である故に、この書はテンニン論でなく、テンジン論と發音せらるべきである。あるひはテンジン論と讀んだ人も多かつた事とも思ふが、田舍の小學生の我等は勿論、卒直

にテンニン論ですましてゐたのだが、それでも當時テンニンといふ發音に就て、原始的の疑惑を私かに抱いてゐた記憶は今なほ確かに殘つてゐる。

その『天人論』を讀んで、よくも判りはしなかつたが、街上に針を落すと戞然として音がある、音は針に果してあるかどうか、などといふ物理學的初級の設問に初まる宇宙觀的議論が、菊判の四號活字二段組で一杯に組んであるのを讀んで、世にも深遠な哲理だ哩と感嘆した事いふ迄もない。當時大學の社會學科に在學した母の弟(今の樋口龍峽)が歸省して、右の書生對手に哲學論をきかせたり、讀み古しの哲學史樣の雜書をやつたりした事を覺えてゐる。その後、書生は我家を出て上京し苦勞の効あつて、今は淺草邊で相當の革商を營んでゐるときくが、當年華嚴瀧に飛込んで巖頭の感を殘した十八歲の哲學少年藤村操の死が、書生と予とに深い感銘を與へて、「悠々たる哉天壤杳々たる哉古今五尺の小軀を以て此大を量らんとす」で初まる其遺書は古今の名文と思つて暗記し、「天人論」と藤村操とは一つになつて初めて幼い自分の頭に宇宙觀的疑念の芽生を與へたが、厭世的なおとなしい其書生の顏を見ると、何んだか近い內に厭世自殺でもしはしないだらうかと少年乍ら危惧した覺えもある。

予が長じて上京して、叔父の家に近い京北中學に入つた頃、遇然にもその學校は藤村操の出身校で、同窓の先輩阿部次郎君や安倍能成君又死んだ秀才魚住影雄君などは、藤村と同期であつた事も後に判り、厭世實は失戀で菊池大麓博士の娘に戀して、學校でも黒板に令嬢の名を書いては消しなどしてゐた事があつたと、阿部君などゝ同期の甲州邊の實業家から中央東線の夜汽車で偶然に聽いた事もある。

三

樗牛の美的生活といひ、梁川の見神の實驗といふ、今では若い人の耳には遠いが當時は青年の頭を支配した事、此頃の社會思想問題よりも遙かに切實であり悲痛でもあつたは、個人的覺醒途上の最初の愕心事實であつたからで、我國明治の小さなロマンティシズムの第一の波は、北村透谷によつてあげられ、樗牛、梁川之れに次いで更に具體化したのであつたが、原因は何れにあれ、藤村操が宇宙觀的懷疑の聲を殘して、水底の沒人となつたは、「天人論」の出ずべくして出でたと等しく同時代必然の現象であり、當時の流行語「煩悶」といふ言葉には、今の青年には判らない、

個人的焦燥と宇宙論的惑悶と、此二つの陰影が同時に織り込まれてあり、いつの時代にも頑迷な官憲や御用學者や、いつの時代にも愚昧な民衆一般は、この切實な苦悶をニキビの産物だとか、西洋カブレだとか云うて押へたりけなしたりしたもので、少數の靑年學者、たとへば予の記憶する限りでは、波多野精一氏如きは最も同情ある見方をしてゐたが、眞先に理解と同情すべき當時の小說作者など、案外ノホホンの暢氣千萬なもので、この當時の時代相を、切實に如實に痛切に描寫した小說は先づ一つもないと云つてよい。取材はしても理解や同情の足らぬ駄小說が多かつたのである。亞流小說家なんて大部分は衆愚趣味の喇叭卒にすぎんのだから無理もないが。

四

涙香の飜譯探偵譚が、文壇の評家に對手にせられなかつた事實、並びにその理については以前「中央公論」に書いてをいたが、今日に及んで、涙香の訥辯文章の雄辯性は、當時を知る者には意外な程の興味がある事は次第に判明したが、「天人論」の通俗哲學が、「地人論」や「破天人論」などいふ類書を生んだ程有名でありポピュラーであつたは、探偵譚譯者としての聲名が影響したと

ころも實際は尠くはないけれど、上述時代相中の顯著な事實である「煩悶」の解決として出た事は勿論であり、涙香に如何の哲學的素養あり、如何の切實の要求あり、如何の出來榮の著作で果してあつたかは、も一度「天人論」を讀み直して時代史中にイ立せしめて考察しなければ責任ある斷言は出來ぬが、他の涙香の言論に照しても、恐らくもそのものが卓れた思索の餘に出でた作とは考へられぬ。たゞ、いち早く此一書を出して自分の疑問を大膽に卒直に公けにしたは、假令へ、專門學徒の嗤笑を買つた事實はあるにしても、文化史的事實と見て注目に値する事實である。

抱月の所謂「索訊的興味」を主とする探偵譚に Boisgobey や Conway や Gaboriau の科學的關心を面白しとし、中頃はこの「天人論」の通俗哲學をひらいて晩年なほ「破天荒」や「八十萬年後の世界」に興味をつないでゐた處を見ても、涙香は新聞記者とし、新聞經營者としては昔の赤新聞とて蛇蝎のごとく嫌はれた「萬朝報」にたて籠り、辛辣、苛辣、時には惡辣の名さへひろまつた程の力量を見せ、死しては事實かどうか知らぬが、家庭の氣の毒な紛糾さへ噂話に傳へられた明治式人物であつて、而も同時に「科學」の感化に漂蕩し了つた明治啓蒙期の恰好文士の一人であつた事が判る。

生田長江が萬朝に入つた頃、突如として一面欄の平生は經濟政治評しか載せぬ論說欄に、美學論がしば〳〵揭げられたので、長江の筆と世人は思つたが、實は淚香の企てになつた事實だといふ話もきいてゐる。

五

それにしても、今以て予は持病に臥た折々などには、「天人論」は見たいとも思はぬが、例のボロ紙本や石版表紙の「有罪無罪」や「白髮鬼」や「海底の重罪」や「劇場の犯罪」や「眞暗」や「人耶鬼耶」など遠く二十年前の夕日のやうな興味を思ひ起し乍ら、幾度も幾度も讀み耽るのである。その面白さは當年「新小說」や「文藝界」に出た所謂文壇小說を改めて再讀するの比でない。どうも、淚香は因緣あつて予の讀書史に一生纏ひついて放れぬのであるから仕方がない。故あつて此處には「天人論」の事を書いたが、淚香が面白いのは勿論あの探偵譚の訥文である。むかしの回憶に感傷する爲のみでない。例へば十數年前のヨネ・ノグチ氏の拙劣日本文の興味のごとく、訥辯文のみに附隨する特殊の面白味であるが、すべての拙文に然るのではなく、それは特に人格

的に由來するものである。人格が如何のカーヴを描いて這般訥文の名文をなすか、その理論は別に說いて見たいと思つてゐる。

當代の讀書趣味

明治二十年前後の時代相をかへり見る側面觀的方法として、こゝに當代讀書趣味の標準が奈邊にあるかを究めて見たい。

當時の雜誌の最高水準「國民之友」第四拾八號附錄（明治二十二年四月廿二日發兌）及び同誌第四十九號につゞいて「書目十種」といふ特殊記事があつて、當時のいはゆる名士の嗜讀冊子十種を蒐め揭げてゐる。當時歐米でも切りに時花つた名著百種の類の模倣である事いふ迄もない。

先づ二葉亭四迷は長谷川辰之助の署名で左の書目をあげてゐる。（原文のまゝ。以下同じ）

ゴンチローフ著オブルイフ

ドストエーフスキイ著プレスツプレーニエ・イ・ナカザーニエ

ヴリスキイ著ジナア以上三種小說陸宣公奏議　　魏叔子文集

思軒先生探偵ユーベル

ゴンチャロフのオブルイフやドストイエフスキーの「罪と罰」を「小說神髓」の原史時代を程遠からぬこの時代に夙く讀んで愛書としてあげてゐる二葉亭は．專門語學の然らしめし所爲とはいへ、又、オブルイフはオブロオモフ程ゴンチャロフとしては著名でもなく代表的でもないとはいへ、兎に角ゴンチャロフとドストイエフスキーと、近代思潮のふたりの此の重要な代表人物をあげてゐるのが、他の名士のそれと比較して興がふかい。かれは、而して、同時に陸贄字は敬輿の奏議と魏勺庭字は冰叔の文集二十二巻とをあげてゐる。陸は唐代の翰林學士。諫皷がすぎて永貞中裴延齡に譖せられたる人。魏禧は依田學海も亦あげてゐるが、明末清初にいはゆる寧都の三魏といはれた三兄弟の一人、明亡びてより致仕した。百川が「節を守りて山林に老死せり。さるが故にや文に奇氣あり。」といひ「義を述ぶるに情を本とし理を後にす。」といふてゐるあたり、當年の四迷が思想特色の奈邊に在つたかを忖度する好資料ともならう。しかも、思軒がユーベルを推賞せるは、飜譯家としての二葉亭がこの先進に少からず負ふところあるを談り、又、當時の

ユゴオ趣味にかれも亦心醉せる一人であつた事實を談る。
二葉亭のこの撰擇に反して、尾崎紅葉が、

太平記	枕草紙　清少納言
風俗文選	娘節用　人情本
鶴一代女	京傳作文小紋雅話
唐宋詩醇	鶴五人娘
平家物語	俳風柳樽

と書せるを見れば、兩者の思想趣味に愕くべき差異あるを知るであらう。元祿復興の氣運漸く動かんとする當時に、西鶴物に耽湎したるは何の不思議はない、風俗文選や柳樽やは彼一代の俳趣味の兆であり、軍記物や人情本に小說創作の契機を求め得た彼が、語學に貧しい關係と、異國への文學興味を反動的江戶文學趣味で拘束せられ、而して同時にそこに在つて練磨せられて、この若き敏感な受感性強い青年期に、鷗外の如く四迷の如く、稚きエキゾティシズムに觸發する西洋

思想の培養を十分得る能はざりしは、紅葉がついにあの時代の小乘的文學趣味を、極度に洗練せる卓越せる小說家にすぎずして、前二者のやうに今日まで深く現代的共感を强ひる底力の弱い所以を悟り得よう。かれのあげた唐宋詩醇の如きは當時の一般人的教養にすぎない。

四迷、紅葉に對し、坪內逍遙は、

サツカレー、バニチー、フヘヤ
スペクテートル アヂソン氏
ワシントンアルヴンク 小品文
カウパーの詩
八文字屋物並丸本　　枕の草紙 一二册
論語　　かづらごろも　　春臺獨語

とあげた。逍遙は既に八文字屋の類からは卒業してしまつてゐた頃ではあつたが、かれの一生を通じて窺はるゝ英文學的教養と、八文字屋的趣味とがこゝにその本體を明らかにしてその上で、

論語や春臺獨語のモラールや考證趣味で統一せられてゐるを發見するは興味がふかい。

所謂文壇新進の名家三人迄（鷗外露伴は載つてゐない）が以上の返答をなしたに反して、新譯詩家として立つてゐた國府寺新作が

舊約全書中創世記 獨逸譯

新約全書中約翰福音原文

莊子　孟子

詩經　書經

ギョーテー著ファウスト　ハムレツト

マキアベリ文集英譯　ミルトン詩文集

を列擧せるは、この頃の基督教の文學趣味ではあるが、又、書目擧示に文學的虚榮心の露出を示してゐた事實がよしんば假りにあつたとして見ても、創世紀と莊子孟子に詩書經と、ハムレットにミルトン、ゲーテといふ撰擇は立派な標準で、只一種のマキァベリを除いては現代の書目とし

ても些の遺憾がない。書目に於て遙かに紅道の二人を凌駕せるこの譯詩家が、その詩業に於ては半月にも鷗外にも遠く及ばざりしは天稟の約束是非もない。廣義の創作の人としてでなくて、單なる鑑賞家として終始せるものか、徒らに識見の卓越を誇つたにすぎぬものか、同氏の傳記に暗い私は今立入つたせんさくが出來ないけれど、一點はるかに劣つたマキァベリを加へたところに武斷時代の鮮かな韓非子的時代色を見る。

饗庭與三郎篁村が

今様廿四孝　寶永ごろ出版 作者、月尋堂	廿七松堂　廖柴舟
笠翁一家言　李笠翁	曾我物語
根なし草　平賀鳩溪	鶴林玉露　羅大經
五雜組　謝肇淛	雨月物語　上田秋成
琴後集　村田春海家集	隨園詩話　袁子才

をあけたは、翁が文章に照して誰しも北叟笑まるべきも、その後に書して「和漢五部づゝ五部五

分に撰み出し」たのだが、平家や西梧や巣林子や共磧、園水、馬琴、種彥、浮世風呂、膝栗毛もすてかねるので、「少年の折は梧窓漫筆、中年は立志編品行論が精神で、」太閤記、三國志、馬琴、種彥から風來、殘口、黃表紙、蒟蒻本、八文字屋、西鶴、近松を神佛と拜し「只今にては上田秋成といふ新敎を奉じ嗜好更に一定」せぬが、右の十書は「一月の中に必ず顏見ねば病をおこし」とあるは例のおどけ交りではあるが、幕末名殘りの戲作文學者趣味をよくあらはして之れ亦面白い。それにしても、かれの好事家的五雜爼趣味の態度は、その博覽の自ら災して、斷考若干に相當權威は示したが、ついに一冊のまとまつた江戶文學史考をも殘さしめなかつたは惜かつた。實はかく生れた人ではあつたのだが、今の所謂國文學大家の無批評と淺薄とがはびこるにつけても、今少しまとめる才のある人であつて欲しいもの知りの篁村であつた。

袁隨園や琴後がこの頃の普通の敎養であり、趣味であつたとひとしく、ビーコンスフィイルドやバイロン（それもオーヅ・オン・ナポーリオン）やバーク、ヒューム、ギボン、リットンが今日のロマン・ローランやウエルズや現象學派であるのだが、中には少しの異り花もないではない。石橋忍月がレッシングのラオコオンを眞先きにあげた批評家としての表看板からも肯けるのだ

が、マイエルの獨逸國法學は業務から見て至極尤もしても、「寢覺記」や「若衆物語」が交つてゐるのは、この頃の修養書文學趣味としては不思議はない様ではあるが、今から見れば旣にこれらの古書すらも、今代人士の耳には些か遠いやうだ。加藤弘之がヘルワルドのクルツールゲシヒテやリリエンフェルドやイエリングをあげるとともに、バスチアンのデア・メンシュ・イン・デア・ゲシヒテやダ！ウキンやヘッケルをあげ、富井政章がパッシイやティエールと共にメインの名著「上代法律考」の佛譯に加へてやはりヘッケルを加へ、渡邊國武無邊俠禪子が羅什譯の中論や、鬼谷子や、戰國策や華嚴經とともにショーペンハウエルの「意象世界論」とハルトマンの「無意識哲學」をあげたは興味なしとせぬ。金子堅太郎子が「地方凡例錄」やバークをあげたはいいが、詩華集のゴールヅン・ツレジュリイをあげたは些か珍ではある。憶起す、後年明治三十九年頃に、文藝協會發會當時、今の一つ橋の商科大學講堂で講演會を催し、大隈伯の藝術論は御愛嬌として除けておいても、藝術會合の會頭を常任としてその頃よく勤めた金子子が、題からして不得要領な「米國に於ける美術上の價値」といふ變手古な講演をして、當時松崎天民とともにある通信社の記者をしてゐた私の某舊友が、晝は砲兵工廠に勞働者となつて働き、夜は片手間記者をしてゐる

勞苦を見かねて、初めて私が記者顏をして、この名講演の筆記をして通信者に送つて全國の田舍新聞に掲げられたが、一向要領を得ない論旨であつた事實を追懷すると、ボルグレーブと金子氏とは寔に微笑まるべき對照である。尤も、この頃は尙青春を去る程遠からぬ壯年の外國通として今の米國がへりがホイットマンをかつぐ程度の鑑賞の心掛け位はあつたのかも知れぬ。「黄金寶華集」はつまり英文字の「三體詩」であり「古詩源」であり「唐詩選」であるのだから。

詩は拙いが論は仲々顧る價値のあつた哲學史の大西祝が、「ウオルヅウルス、ベーコン、カーライル、エモルソン、シエーキスピヤー」と英文學中のみを限つてあげて次ぎに、「コールリッヂ、デクインシー、マシウ、アーノルド、オルヴイング」とあげ來つて、「擧げんと欲して擧げ得ざる者あり」とてラスキンとミルトンとを呼んだは、かれの詩論や思想を一通り究めたもののみには、矢張り興味のある事だ。

當時の大批評家と自他ともに許した依田百川が、一々註釋つきで史記に初まつて、順次に、韓非子、蘇老泉文集、魏叔子文集、水滸傳、金瓶梅、紅樓夢、源氏物語、大鏡、徒然艸、藩翰譜、椿說弓張月、邯鄲諸國物語等を列擧し、學者の本分としては、經書歴史法律地誌の類から動植理

化の諸學を讀までは叶はぬのたが、こゝには「好みて愛する書」をあげたのだといふてゐる處を見れば、やはり嗜讀者に相違ないが、漢學畑で小說評も劇評もやり、文學史の考證染みた事までやつた學海の趣味は、同時に當時の老人中の有識者の趣味と解して差支へない。金瓶梅も「權奸の情狀を寫すに、豪奢邪曲の言ふに忍びざる迄を漏すくまなく」その點が苦心の存するところで「淫猥の書のみとして見る可らず」といつてはゐるけれど、帝國文庫西遊記の序に、後西遊記の晦淫處を略叙して、興味ふかしと悅に入つてゐるところを見れば、表紙に庭訓本と書いて中に春宮冊子の類を挿んで北叟笑んだ底のこの當時の怪しげな政治家、學者、敎育家の僞善的一面（その僞善行爲にも、せんさくすれば些か同情に値ひする事情がないではないのだが）を聯想して、同時代人の矛盾を矛盾とせざる反省不足の道德思想を窺ふよすがにもなる。

敬宇中村正直が、バックルの文明史やフランクリンの自叙傳や、モンテーヌ集やアディスンのスペクテートアと共に舊約詩や杜詩、韓文、左氏傳、五經、四書をあげたるは硬派の文學趣味の好代表であり、内藤耻叟か四庫全書總目提要やら、下學邇言やら令式やらをあげたは專門に偏しすぎたもので、他の返答者中にも一般趣味と專門書とを各標準を異にし、又はその兩者を半々に

あげてあるものもあるが、かくありしは編輯者の放念に基くもので、耻叟のあげた和漢各十種の史書は、かれの學者的立場を考へて之れを見ると、又別種の興味があるのは、即ち史籍に對する價値標準の變遷を知る便宜があるからだ。

中江兆民が書物に多情で、和漢硬軟數多くして一々列擧すると該博を示すやうで、氣耻かしいと答へたは卒直正直で兆民らしいし、山田美妙がこゝでは文學に限るがといつて、貫之の歌や賈島の詩とともに、「みるとん詩集、どんきほうて、しエれい詩、ぶアにてい、ふエいあ、るみざれぶす、しるれる詩集」と書いたも浮薄の弱點は見免せぬが、とにかく英語に堪能で斬新好きで温柔體好みでハイカラな態度の人であつた新人の俤を示し、光妙寺三郎が、柳州文や網川詩や東壁や孟子や枕草紙や源氏とともに、「サフオー貴」詩、リユクレス詩、アルフレド、ミユセー詩文、モリエール劇、ウキクトル、ユゴー詩文、タシト諸史」をあげたは之れ亦、ハイカラの名に背かず、當時はやく此種の劣らぬ三郎や美妙やが、文壇學界と云はず世間一般に居つて、趣味の上の深刻でもないが、一種の孤獨地獨に皆苦しんでゐた事は想像するに難くない。只此兩人がどの程度に徹底してゐたかはこゝには論じない。

とにかく、斯る所謂洋學好きに伍し、福岡孝悌が、骨董祕訣や閒情偶奇や唐伯虎記事(寫本)や無聲詩史等十六種をあげて(以下五十九種略之)と書いたは愛嬌であるが、山川健二郎がディケンズ、サッカレ、ストウ夫人を世說新語や、甲陽軍鑑とともに讀んだり、福地櫻痴が五代史や孔羊傳とともにデューマ、莎翁、シルレル、リットン等をあげて、「議論の本は嫌で御座る、」といつたは彼等として實情であらうし、森田思軒が「韓愈が應科目時與人書を悅はずして李綱が康靖傳信錄」を愛し、テニソン應酬の作を悅ばずしてウオルヅウオルス「湖邊の吟を愛」すといつたなどはかれ等の本性をよく物語り、合せて時代の讀書の準備知識の程度をも示はしてをる事だ。

元田永孚が集義和書や諸葛丞相集をあげ、三島中洲が尙書、周易をあげたるは異とするに足らぬが、天臺道士かディケンズと共に、ロビンソン・クルウソオをあげたは敎訓の表意にしても面白い。山田喜之助がトマス・ムアに於ける、內田周平がハルトマン審美學に於けるとともに、一見奇異の感を抱かしめるが、實際に當人について詳しい人には左樣ではないのかも知れぬ。

外にも、ハミルトンのメタフィジックスや、ミルのロヂックや、カントのプラクティカル・リーズンをあげた人があれば、シェリダン、クリフォード、エリオット、グレイ、ベイコン、マコ

ウリイ、カーライル、スコット、コリンズ等の諸冊子にパスカル、ラシイヌ、サンピエエル等まで及んでゐる。

以上中の主なるものを、三宅雪嶺が一口評をした一文が添へてあるのが面白い。福岡子の書目を名前だも聞知したる事なき珍本の類、御不用の節拜見といひ、篁村はうまく、天臺は道士に似合はず不思議に、光妙寺や山田が詩文人らしく、渡邊が哲人らしく、山川が小說家らしいは一奇、紅葉は奥ゆかしく美妙は力んでゐると評し、さて自分は讀みたくもない本を飾つたり、好きな本を匿すことはしないが、嗜讀書を吐露する勇氣はない。强ひていへば國府寺等に似てゐると返答してゐるのも雪嶺らしい文句である。

坪内逍遙が莎翁をあげずに櫻痴がこれをあげたり、後のメインの譯者鳩山和夫がかの古法史をあげずに、却つて富井政章がこれをあげてゐるなどは主客顚倒ではあるが、大體當時の「名士」の意中の書が如何のものかは以上の略抄でも判明しよう。古典の考究にも、趣味的耽溺は多くあつても、隨筆的考證はあつても、文學史的批評はまだない。ざつと今から四十年前であるが、和漢書はとにかく、洋書の嗜好の對照の變遷は愕くべく甚しい。九十年代近くの英吉利は佛詩文の

影響を受けた文字通りの世紀末の頽唐時代であつたが、それらの反響はまだ此當時の日本に些かもない。一般的にいへば、十八世紀末とギクトーリア中期との文學の漫然たる輸入にすぎなかつた。が、それでも目醒めつゝある道程期の二十年代の日本には新聲であつた。(透谷のマンフリッド張りは新趣味のさきがけであつた頃だ。)ペイタア、ロゼッティ、ヹルレーヌの名の日本文字で署されたは、早くこの二十年代の末期であるを思へば、この二十年代の眩めく思潮のいかばかり急流であつたかは思ふだにすさぎしい。

和文學でも、芭蕉蕪村や萬葉をあげるものは一人もなく、漢文學は主として硬い經史のみで支那俗文學も厖大な小説傳奇類はあるが、支那獨特の怪異談を集めた說話集は一つもない。文學としても傳說としても、正當の興味がまだ眞に動かなかつたからであらう。

明治の二十年代はその初葉に、莎翁を讀んでその末期には、ロゼッティまで下つて來てゐるのである。これを見ても、明治の四十五年間にわれ等日本人が、泰西の五百年の近代思想を急轉直下に經驗し來つた事實を今更に感じられるのである。

新體詩創拟とその背景

明治文學史の回顧は、文藝復興期以來數百年間歐洲文藝思想史の縮圖の一瞥であつて、十九世紀文藝の輸入發達史の概觀である。

が、ルネイサンス以後の思想の起伏の模寫は、極めて粗笨に反思索的に非生殖的に營まれたが、前世紀文化の移入は、猪突的に、大鵜呑みに、バラック式に行はれた。明治文明が藝術的本質と所産とに貧しかつた所以である。多くの建設時代は概してこの軌程を走ることを免れないが、わが民族性が一層然らしめたことを見のがすことは能きない。

島崎藤村氏が二月の日々紙上に掲げた「感想」で、德川期文學を漫然と在來の分類法によつて分けたのでは十分でない。十八世紀的なる文學と、十九世紀的なる文學者との區別があることを基調とする要があると云ふたのは、私の宿說と全く同じであつた。われらは、十八世紀人としての

蕪村と十九世紀人としての一茶とを觀たいのである。

十九世紀第一年は、恰も享和辛酉元年にあたる。本居宣長の沒した年であり、「怪談藻鹽草」の出た年である。その後、鎖國的日本は、これより程遠からぬ先き、大槻玄澤の「蘭學階梯」を生み、「萬國圖說」、「紅毛雜話」を出し、寛政己酉、司馬江漢の銅版を產し、「海國兵談」を毀ち、露使に互市を迫られ、蘭人來り聘し、ハルマ和解成り、ついで露船北邊を窺ひ、近藤守重これを巡察したのであつたが、享和の後、漂人佐平球上を一週に及び、前野良澤亡び、露人來り寇して松前奉行設けられ、砲臺、烽火臺は出來る、英露語は官吏に學ばせられる、大槻氏の蘭書成り、阿蘭陀人の對譯辭書も出來る、高田屋が露船に捕はれる、玄澤の「蘭學凡論」が生れて間もなく改元して更に文政となり、天保、弘化、嘉永、安政、萬延、文久、元治と延びて慶應の四年が滿たずして維新となるそれ迄に、英船、米艦の來航のみでない、天地丸を修めたり、十二支砲、雷火銃を作つたり、三國條約や五國假條約を結んだ計りではない、塙檢校は死んだが大日本史は上板せられる、忠敬の實測圖や高橋作左衞門の譯本は出來上つて、シーボルトは長崎に來る、足立某の產科醫學、榕菴の植物學や化學の提示、長英變死して萬次郎歸朝し、櫻田の變間もなく留

學生は阿蘭陀國に向け出航する、次いで露、英、佛にも送られてゐる。王政の復古は鎖國を開放し武斷封建から福澤式高等開化文明の樹立となつた。

さて、新體詩を說くもの、在來「新體詩抄」に初まるを說いて僅かに明治二年版福澤本の「世界國盡」や同六年板の「暗誦十詞」の七五調唱歌の先驅を說いて、次いで、遠く飛んで「小學唱歌集」、「新體詩抄」の續出に及ぶを例とするが、福澤本の出現は單に兒童走卒に讀み易からしめようとて唱歌の形式をとつたにとどまり、それが軍歌の形式の素をなしたのは事實であるが、新體詩の詩感と直接何らの交涉はないばかりか、今にして思へば、軍歌唱歌として非才の徒の手にかゝつて生れたが故にかへつて大迂回をなして、純粹の藝術品が普遍性を帶びて誕生する事に障礙となつた。この時代に、低級な民衆指導の啓蒙的使命を果すには俚耳にもたやすく入り易い軍歌童謠の類でなくては、外に恰好な何ものもないではないかと云ふ反駁も起るであらうが、然し腰を下して書いた第二義第三義のものから入らしめるよりも、寧ろ、最初から、初めの程は判つても判らずともよい、第一義の藝術品を提示することの方が國民の藝術魂を純ならしめ、正統にして高調な國民的詩歌の誕生を、一路驀地に可能ならしめる捷徑である、正道である。作者は苦

境に泣くであらう。大衆は手にとらずして漫罵を恣にし、「とんやれ節」や、「猫じや〱」や「こちやえゝ」や「どんがらがん」や「お竹さん」の猥醜と俗陋とをきはめた擲聲に奔るであらう。それでよい。少數なる具眼の人の間から、やがて卒然として藝術の白光が必ず光つてゆく。最初に示された藝術と、この擁護者とが一團となつて巧藝の先驅となり、正道を歩いてゆく。その中には、模倣者が出來て末流文學の低級きはまる作品が幾何級數的に著しく增加してゆく。それは自然の經路である。只、最初示されたものだけが高く、正しい、純淨な位相に置かれてあるならば、一たび過渡期の塵にまみれ、開拓時代の埃を浴びた國民の血、民族の魂も、自然に又自ずと淨まつてゆく。結果から見れば、これとあれとの收穫には夥しい甲乙が必ず生じるであらう。

過渡時代の建設期としての明治初葉は、その時代に緊要なものしか食餌として攝つてはゐなかつた。あの拙劣きはまる「新體詩抄」が、全國津々浦々までひろまつて、鮮光のごとく之れを仰ぎ新聲のごとく之れを謳ふたことは故國木田獨歩も云つてゐる。獨歩年配の人間は一度は悉く皆この新詩のひびきを快しと耳にしたに相違ない。が、井上、外山、矢田部の新派詩人よりは、漢詩、俳句、短歌の舊派詩人、歌人、俳人並びにその鑑賞家の間に、遙かに詩情豐かに表現の天巧

を所有し、鑑賞の眼明らかに確かなる人が多かつたのである。只、彼等は時代の人でなかつた。この新らしい拙劣に入るには餘りに古き完成に泥んでゐた。趣味の固定した形に淫して、新情趣の必然を感じなかつた。己が趣味に自足してゐる間はそれでもよいが、自ら飽き足らなくなつても未だにその形骸に獅噛みついてゐた。やがて、時代の巨手によつてふるひ落されるまでは。

大沼枕山の詩技の秀抜は「新體詩抄」作者の足もとに寄りつけられぬ高所に達してゐた。成島柳北の瀟洒なる趣味識の妙致は、到底「小學唱歌集」作者のよくする處でない。鷲津毅堂、長三州、大槻盤溪、岡松甕谷、向山黄村、神波即山、菊地溪琴、森春濤、岡本黄石、小野湖山、鱸松塘の徒は、詩情に甲乙あり、鑑賞眼に兄弟の別は固よりあるが、「社會學の原理を」詠じる外山ゝ山よりも、詩技に秀で詩感に自由であつたことは云ふまでもない。否、明治十六年十月に下獄した一人の巾幗政論家の詩

囚裏幾相思。吾儂獨自憐。新霜人似水。舊夢夜如年、骨共清秋瘦、愁與輪月圓、家山有慈母。
應是缺安眠。

とか、または

雲氣未呑盡。半天餘數星。囚人皆在夢。燈火似烟青。
誤落人間二十歳。未飽甘酸世味新。與世沈浮㠀千夢。與雲漂泊輕似塵。云々

の如き、稚き辭句の整はぬ間にも、二十一歳の乙女中島湘煙の磊塊の氣だけは出てゐて、尙今居士が「勸學の歌」にまさる數等であるを見ても思ひ半ばに過ぎよう。

蓮月尼は早く明治初年に死んだが、子規が短歌の革新に志した明治三十一年、鐵幹が「天地玄黃」を出した二十年代末期までに至る國歌界が、宮內省流の造花歌と桂園くづしの乾菓子歌とで一杯になつてゐたにもせよ、蘆庵の後によるものも、八田知紀、熊谷直好の門に集るものも、松波遊山の風をしたふものも「忍ぶ草」の一冊や眞淵の歌論は讀んでもゐたし、言葉の搖曳の機微には觸れずとも、カイネティックな言葉とポウテンシャルな言葉との、作歌に於ける使ひ分けの法位は自ら心得てゐた。巽軒學士が「玉の緒の歌」にまさる秀歌を漁ることはいと易かつた。

民衆詩の代表的なものであつた俳句が、元祿天明の古句の淨心をすてゝ、月並者流に弄り、徒らに宗匠を氣取り立机を忙いで、俗慾を俳道に於いて滿たさうとした床屋俳諧の末流に持ちつ持たれつ、老鼠堂永機といひ春秋庵幹雄と稱する輩が下らぬ點取りに無識の閑人を呼び集へても、

其角堂に江戸座の洒脱なく、松江に古白雄の放逸なく、これ亦子規が革新の期まで長き春日の閑をむさぼつてゐたのであるが、今にして當年「開化時代」の新聞雜誌を手にして見ると、全く名もなき市井の投書家の間にこれはと思はず膝をうつほどの江戸坐ぶりが時あつてないではない。

それらの作の佳品逸調になると、宗匠の作をはるかに凌ぎ、「鎌倉の大佛に詣でゝ」感ありし倘今居士の新體詩よりも詩になつてゐることは確實である。

かう見てくると「詩抄」にゝ山が小序を書いて、

新體と名こそ新に聞ゆれど
　やはり古體の大佛の法螺

と洒落れたは誠の洒落れに非ず「西洋ノ風ニ模倣シテ一種新體ノ詩ヲ作リ出セリ」(倘今の序)といふてはゐるが、「明治ノ時代トナリテ某氏ノ爲メニ初メテ楠公内藏之助ノ忠義ハ權助ノ忠義ニ比ス可キヲ知リ……」(同上)と書いてゐる程度の「開化」思想が根底になつたもので、同じ書に巽軒が漢文の序を掲げて、「古之和歌。不足取也。何不作新體之詩乎。」と一喝してはゐるが、作例がこれでは結局空威張である。

その作例はどうかとざつと査べて見ると、凡て十九篇、内、巽軒一篇、ゝ山九篇、尙今九篇にして、創作は、「拔刀隊の詩」、「勸學の歌」、「鎌倉の大佛に詣でゝ感あり」、「社會學の原理に題す」、「春夏秋冬の詩」の五篇で　あとは莎翁のハムレットの獨白、ロングフェロウ、キングスリイ、シャール・ドレアン、テニスン、グレイ、キャンブル、ブルウムフォールド等である。

グレイはよく歌はれた「墳上感懷の詩」。これがこの集を通じての佳品である。譯者は尙今居士であつた。

山々かすみいりあひの
鐘はなりつゝ野の牛は
徐に歩み歸り行く
耕へす人もうちつかれ
やうやく去りて余ひとり
たそがれ時に殘りけり

四方を望めば夕暮の
景色はいとど物寂し
唯この時に聞ゆるは
飛び來る蟲の羽の音
遠き牧場のねやにつく
羊の鈴の鳴る響

猶其外に常春藤しげき
塔にやどれるふくろふの
近よる人をすかし見て
我巣に寇をなすものと
訴へんとや月に鳴く
いとあはれにも聲すなり。

（下略）

テニスンの「輕騎隊進撃ノ詩」はゝ山の譯である。

一里半なり一里半
並びて進む一里半
死地に乘り入る六百騎
將は掛れの令下す
士卒たる身の身を以て
譯を糾すは分ならず
答をなすも分ならず
これ命これに從ひて
死ぬるの外はあらざらん
死地に乘り入る六百騎。

（下略）

ロングフェロウ「玉の緒の歌」（一名人生の歌）

眠むる心は死ぬるなり
見ゆる形はおぼろなり
あすをも知らぬ我命
あはれはかなき夢ぞかし
などとあはれにいふは悪し。

（下略）

ハムレットの to be or not to be の白を倘今は

ながらふべきか但し又
ながらふべきに非るか
爰が思案のしどころぞ
運命いかについなきも
これに堪ふるが大丈夫（ますらを）か

又さにあらで海よりも
深き遺恨に手向ふて
之を晴らすがもののふか
どれも心に落ちかぬる
扨も死なんは死ぬるのは
眠ると同じ眠る間は
心痛のみか肉體の
あらゆるうきめ打捨つる
是ぞ望のはてならん
ア、しぬ、ねむる、ねむる時
萬が一ゆめみるならば
ハアこだわりが有るやうぢや。

（下略）

此等の譯詩に對し創作が更に劣つてゐるのは、この三人が詩才に非ざりし立證だ。在來「新體詩抄」と云へば井上巽軒一人の如くに代表せられてゐるが、事實、巽軒は一篇だけで、その一篇も右の「玉の緒の歌」で知る如く一番拙い。

創作では丶山の

我は官軍我敵は
天地容れざる朝敵ぞ
敵の大將たる者は
古今無雙の英雄で
之に從ふ兵は
共に慓悍決死の士。

（下略）

で初まる「拔刀隊」や、

昔し唐土の朱文公

よに博學の大人ながら
少年易老の詩を作り
一生涯は春の夜の
夢の如しと嘆きけり

（下略）

が人口に膾炙してゐる。「春夏秋冬」は「句尾ノ二字ヲ以テ二句ヅヽ韻ヲ踏ミタルモノナリ」と添書して

春は物事よろこばし
吹く風とても暖かし
庭の櫻や桃のはな
よに美しく見ゆるかな
野邊の雲雀はいと高く
雲井はるかに舞ひて鳴く

の如く脚韻を企てたるが注目すべく、ゝ山の「社會學の原理に題す」は

新聞記者や役人と
成るは最と最と易けれど
か樣な者が多ければ
忽ち國に社會黨
尙ほ恐ろしき虛無黨の
起るは鏡に見る如し

の調子で「詩抄」同人の詩眼の幼稚を最も明確に談つてゐる。

畢竟するに「詩抄」の史價は、ゝ山の「且夫泰西之詩。隨世而變。故今之詩。用今語。用至到精緻。使人翫讀不模。」といひ、尙今が「平常ノ語ヲ用ヒテ詩歌ヲ作ルコトナキヲ嘆ジ」といひ、ゝ山が「近世に至りては長歌は全く地を拂へる有樣にて事物に感動せられたる時の鳴方皆三十一文字や川柳や簡單なる唐詩と出掛け實に平輕なる鳴方なればなり。」とある如く、在來の長歌の姿物によつて歐詩の歌口を模せんとしたところ、而して用語に輓近の語を旨としたところにある。

當時とても在來の長歌を作るものがないではなかつた。神奈川の僧辨玉の長歌が一機軸を出したことは先人も云つてゐる。(日本大文學史卷五)その外本居豐頴、日下部足穗、渡邊重春等あつたけれど時代の歌口となる本質は固よりない。「詩抄」が稚拙乍ら西洋のポエトリーの輸入を企てたことは爭ふべからざる成功である。拙くとも、歌ふ何ものをも持たぬ大衆は小躍りして之れを迎へ之れを歌つた。「詩抄」の價値はこゝにある。

「新體詩抄」がポエトリーを模したに反し、明治十四年に出た「小學唱歌集」三卷はサングを模し、西洋の樂譜に合せ、又は新樂譜を作つて眞正面から唱歌と名乘つて打つて出た。しかも、單に唱歌なりしばかりでなく、用語の古雅と形式とに泥みすぎたきらひはあつたが、然し、尚夥しく殘る當年の「風雅趣味」に一致して、その後明治の末期迄靑少年男女の歌ふところとなつて、その感傷の表白の殆ど唯一のはけ口となり、感情の洗練の基礎となつた事は忘る間敷功勞で、この點、「詩抄」は二歩も三歩も「小學唱歌集」にその功をゆづつてゐる。

即ち「螢の光」はバアンズの Auld Lange Syne の曲をとり、「花鳥」はゲェテにより、「才女」は Annie Laurie に「菊」はトマス・ムアの The Last Rose of Summer に、「うつくしきわが子

やいづこ」は Blue Bell of Scotland に、「思ひいづれば」は Scotch Melody によつたものである。しかも、浪曼底格な旋律と日本古雅な用語とが、一見調和せざるが如くにして、實は不思議な新調和を形し、その後殆ど三十年も青少人のやる瀬なきセンティメンタリズムの表白となり

庭の千草も虫のねも
枯れてさびしくなりにけり
あゝ白菊　あゝ白菊
ひとりおくれて咲きにけり。

の哀調縷々としてつづき、「遊獵」の壯快、「寧樂の都」の婉雅は近い頃までもなほ歌はれてゐた。

も一つ、明治十八年十月版湯淺半月の「十二の石塚」は單行本個人詩集の嚆矢で、五七古調の舊約イスラエル民族説話に材をとつた、ベニヤミン族ゲラの獨子豪俠エホデがエリコ古城にエグロン王を刺す長い詩であるが、この詩集の草稿は「詩抄」の世に出た明治十五年よりもやゝ古くに成つてゐた由にて、果して然らば、新代草創の意識の上に樹てられた詩情でないにしても、この新詩材をこの長歌にものした半月の企ては、新體詩史上最初に特筆せらるべき注目に價する一

事件である。

半月詩と聯想せられねばならぬのは讃美歌である。新舊約聖書である。當時唯一の新趣味をこだはりなく注ぎ入れる捷徑は基督教を外にしては何もなかつた。新思想がこゝに生れて、基督社會主義や國家社會主義こゝに胚胎し、新感情がこゝに根ざして、故植村正久のブラウニング研究や教徒の英詩研究の果がこゝに結ばれた。日常生活様式に洋風をとり入れたのも基督教徒である。この徒の一番落付いた一番立派な收穫は、若松賤子の思想感情並びに彼女の遺作飜譯及小品「忘れがたみ」、「小公子」である。

ローマ字論が起つたのは明治七年で、「かなのくわい」が設けられたのは明治十七年である。國字の問題は、ローマ字にしても假名にしても多く言語文字の生命に縁遠き、或はこれを餘りに虐使する學者、新聞記者によつて無反省に稱へられるに過ぎない故、今日なほ些かもその業績が上らぬ計りか、その惡影響として、無知無思慮な漢字制限論や、假名遣ひ論まで假令その精神は了とするも餘りに粗笨の制度精神に於て出來上り、又は出來上りつゝある。明治十五年までの間にはこの方面の苦慮はまだ表面に出てゐないが、その芽萠は既に見えた。「詩抄」が平常語を使用す

るを使命としたのもその風潮の一餘波である。

英佛獨諸學が起り、福澤流の實利文明主義や、英儒折衷の同人社や、村上英俊の佛語塾や「東洋學藝雜誌」以來の帝國大學一派の獨逸主義や「萬國人名辭書」の刊行やを背景とする輸入主義が、歐詩の舶載をうながしたのであるが、完成せられた古き德川及德川前の趣味が一旦悉く仆れて、新しき何の美しきものをも授けられない大衆が、古風に對する空しき無知や、反感やにそゝられて新しいが粗雜なるこの手輕な移殖品を迎へたのは當然である。

畢竟、明治十六七年までに入つて來た思想は單純幼稚な現實主義で、科學の輸入や政治組織、社會制度の改革などに資するための便宜にすぎなかつたから、主觀と客觀との深刻な鬪爭は極めて少い。徹底した物質主義が謳歌せられる傍、古風な理想主義が蠢いてゐて、その間に單純な悲劇喜劇が演ぜられたことは、默阿彌劇を見てもかすかに判らう。たとへば、明治十二年書下しのざん切りもの、リットンが小說の飜案「人間萬事金の世の中」がそれである。が、その爭ひの社會現象として大きな渦を卷くほどのものではなかつた。新渡の宗教プロテスタントとても、宗教に幼稚なる國民の只憧憬する心緒に一味の淸新な空氣を注ぎ入れただけである。

すべて時代が、開拓と建築と組織と統制との外態を治めることに汲々としてゐたから、かゝる時代に偉大な詩歌、詩人は出られやう筈はない。若し、堀留町の問屋の土藏の片隅に大いなる詩の呼吸をなしうる魂の卵が生れたとしても、哀しい哉、それは必ず慘風虐雨、昔からなる稚き理想主義か新しがりの幼き現實主義のため、若しくは兩者の鬪爭のため、惜らその尊き唇を永遠に鎖されてしまつたに相違はないのである。

譯詩回顧

少しでも譯詩に經驗のある人で、少しでも根本的に近く思索の能きる人は、譯詩といふわざが畢竟自分の精讀のためにすぎず、他人への梗概紹介のためにすぎず、ついに、自他にとつてともすれば悪影響を與へ易い、しかしながら、バベルの塔の崩れ易い限りは此世の何處にとつても必要なわざである事に氣がついてゐるであらう。

私自身が度々拙劣な譯業を試みて、そのたびに後悔を重ねるのであつたが、明治大正にまたがる文學事業のなかで、この譯詩について一瞥をして見ると、矢張り拙劣なものが大部分で、よくも此樣な譯詩を臆面もなく公刊出來たもの哉と三嘆しないではゐられぬものが餘りに多いのに愕かされる。

尤も、明治大正の文明開化そのものが大牛移殖的建設事業であるから、近頃漸く日本の法律を

西譯すると云つても向ふのものゝ蒸し返しを返上する様なもので、その興味は法律學的よりは、より多く土俗學的であるのだが、半世紀の山島文化史の大部分がこの類を出でぬのだから、ひとり譯詩のみを攻めるのは酷である様だが、達意を主とする科學的文章や、結構布局を主とする通俗文學文章の飜譯なら八釜しくいふに及ばぬことは、逆に、萬葉古今や、芭蕉蕪村を英譯する事が絶對に不可能であると斷言して毫頭差支へがないに反して、大森博士の地震學論文や滔々たる俗小說などは之れを飜譯する事易々たるものである道理を考へても、容易に悟られよう。

勝海舟や中島廣足は近代譯詩家の祖であるが、英詩には關係がない。明治十五年出版の「新體詩抄」は十九篇中共五篇を除いて他は悉く譯詩で、即ち、莎翁。ロングフェロオ、キングズリ、テニスン、グレイ等であるが、七五調で一切合切譯して了つてゐるために、ハムレットの to be or not to be 云々有名な白(セリフ)も、外山正一博士は

死ぬるが増か生くるが増か
思案をするはこゝぞかし
つたなき運の情なく

うきめから重なるも
堪へ忍ぶが男兒ぞよ

云々と譯し、矢田部尙今博士は

ながらふべきか但し又
ながらふべきに非るか
爰が思案のしどころぞ
運命いかにつたなきも
これに堪ふるが大丈夫か

云々と譯してゐる如く、畢竟原詩の意を七五調で拙劣に解釋したにとゞまり、原作の色も香も調子も nuance も、inner rhythm も表現するどころではない、左樣に纖細な appreciation それ自身が譯者その人に於て出來てゐないのである。

Thomas Gray の Elegy Written in a Country Churchyard は iambic pentametre の四行句一詩節本歌全二十九節に返歌の The Epitaph が三節添ふた長詩だが、詩想といひ調子と

いひ穴勝ち東方人に玩味譯出の出來ぬものではなく、寧ろ日本人には親しみのあるこころとかたちとである。

この詩の飜譯は、右の譯詩集中で尙今居士が試みてゐる。「グレー氏墳上感懷の詩」がそれである。今その一二節を原詩と對照して見ると、

　山々かすみいりあいの
　　鐘はなりつゝ野の牛は
　徐に步み歸り行く
　　耕へす人もうちつかれ
　やうやく去りて余ひとり
　　たそがれ時に殘りけり

The curfew tolls the knell of parting day,
The lowing herd wind slowly o'er the lea,
The plowman homeward plods his weary way,

And leaves the world to darkness and to me,

四方を望めば夕暮の
　景色はいとぞ物寂し
唯この時に聞ゆるは
　飛び來る蟲の羽の音
遠き牧場のねやにつく
　羊の鈴の鳴る響

Now fades the glimmering landscape on the sight,
And all the air a solemn stillness holds,
Save where the beetle wheels his droning flight,
And drowsy tinklings lull the distant folds;

の如く、山々かすみの様な無用の挿入語があるけれど、第四行句などのやうに割合に無事な（然し平凡な）日本語化もあり、全體として勿論グレイの心緒を去る事遠きものあるもハムレットの様に甚しくはない。テニスンの「輕騎隊進擊の詩」やキャムブルの軍歌などがどうやら無事に近いのも、歌そのものが通俗的サングの類で當年の譯者に味解され易かつたからに外ならぬ。

ロングフヱロオの「人生讚歌」は、判り易くて道德的だといふので明治譯詩家こぞつて皆これを譯したが、判り易いといふ事は詩を感じないで理解しようとする錯誤から起きた見解で、道德的だといふのは、藝術に教訓を強ひる尋常科讀者の通弊を期せずしてあらはした事實を意味するものである。

A PSLAM OF LIFE

Tell me not in mournful numbers,
"Life is but an empty dream!"
For the soul is dead that slumbers,

And things are not what they seem.
Life is real! Life is earnest!
And the grave is not its goal;

云々で初まる、「奮闘生活」の著者ルーヅベルド大統領でも作りさうなこの簡單明瞭な道歌（ポエマ・モラーレ）を譯して、井上巽軒は

眠むる心は死ぬるなり
　見ゆる形はおぼろなり
あすをも知らぬ我命
　あはれはかなき夢ぞかし
などとあはれにいふは惡し
　我命こそまことなれ

我命こそたしかなれ
墓は終りの場所ならず

云々と譯し、外山ゝ山は

その靈魂の眠るのは
死ぬといふべきものぞかし
人の一生夢なりと
あはれなふしでうたふなよ
眠らにや夢は見ぬものぞ
此世の事は何事も
夢と思へどさにあらず

人の一生夢ならず
最とたしかなる事ぞかし

人の終は墓なくも
　墓にうづまるものならず

云々と譯し、三十年代に入つて英語界の先達の一人山縣悌湖は

　眠れる精神は死せるにて、
　　形は生みるにあらざれば
「人生は空しき夢なり」と
　悲しき歎もていふ勿れ。

　人生は實なり、まじめなり、
　　行きつく所は墓ならず、

云々と譯して、「評に曰く」で印度厭世思想の人生一夢觀を罵つて奮鬪生活を讃美してゐる。
　總じて此時代の飜譯詩家に喜ばれたのは、テニスン（それも君王牧歌の類でなく、教訓歌の類）やロングフェロオやヒマンズ夫人やキャンブル等で、バイロン、シェリ、ワーズワス、スコットサ

ウジー等もあるが、Wordsworth なら We are Seven, Samuel Rogers ならば A Wish, Hemans ならば Casabianca のたぐひで、譯詩の出來榮えも右と大同小異であり、異り種の譯詩家には後の工學博士大竹多氣がみどりと號して Southey の「ブレンハイムの戰爭」を譯したり、元の外務書記官の國府寺新作が Tennyson の「小河」を譯したりしてゐる事である。中では國府寺が一番卓れてゐたやうだ。

山田美妙の「青年唱歌集」(明治二十四年刊) には「まよひの湖」といふのが (かむべる作「ありんす、どおたア」の補譯) と銘打つて收められ、「夜の霧」(まあがれつと・でいらんど女史作小品の補譯) やルーマニヤ后カルメン・シルバ編軍歌のピエル・ロティが補譯を (多分はその又英譯から) 譯した

白き　は　清き　こゝろ　なり
ぶらばっと　山　峯　しろし

に初まる長篇もあり、「薔薇の使者」(英國まけい博士作ゼ・ローゼス・エランド)があり、美妙は英學が得意で、ハイカラな洋裝をして臥轉んでバイロンを誦むといふ當時の西學通靑年であつたのだが、譯詩として殘つたものは一つもない、かへつて

敵はいく萬ありとても

の軍歌などで（而もその作者が彼である事を知る人すら今日の青年の間には多くはない）知られてゐるやうだ。

私が十一二歳の頃に年長の友人から「歐米名家詩集」といふ四六版三卷本の譯詩集を借りて讀んだが一向に面白くなく、早速返却して西洋の詩といふものは蠟を噛むやうな味もそつけもないものだ、こんなものを作つて何故大家としてあゝも騷がれるのだらうと幼稚な疑問を起した事がある。譯者はブック・メイカァで知られた大和田建樹で、出たのは明治二十七年で、借りて讀んだのは三十年代初めの事だが、今から思ふと大和田氏が英譯に熟達してゐたとも思はれないから、多分は英學書生の直譯を同氏が訂正されたものでなからうかと今も疑つてゐるが、その後に出た山縣五十雄の「英文學研究」中の譯詩でも同樣で Wordsworth の「杜鵑に寄す」を

あはれ喜ばしき新客よ

では、原作の味は勿論日本語の詩として第一に語句拙劣で見られないのである。バイロンの海賊中の有名な一節

捲き轉がれよ、汝深き黑き青海よ、
捲け。

では、Roll on の海潮音が日本語として日本人の耳朶にはとてもひびかないのである。山縣氏は「英詩研究」三卷の註解本も出して（明治三十六年）、マーク・ツウェン譯文を原抱一庵が great Caesar stood with his back against the statue, like a lion at bay を「該撒は瀕頭に踞する獅子の如く、依然ポンペー像下に髮逆立てゝ起てり」と譯したと揶揄指摘したなど、有名な逸話もある英文壇の先人だが、譯詩に至つては半文錢の價打もなかつたのは是非もない。總じて今日ですらも、篤學博知に鳴る人々が微に入り細を穿つ譯註に反して、その批評の案外のたどたどしさと、その譯詩の自由極まる日本語化を切りに試みて、和洋兼學の瀟洒風流の趣を示されるとは、直ちに無條件に讃美する事を許されない事ではあるまいか。

むかしの譯詩家が押韻や氣息の注意は愚か、作全體の心の調子をないがしろにして、只意通ずれば則ち足るの亂暴な譯しぶりの中で、只ひとつ明治二十一年の「國民之友」八月號所載「於母影」といふ譯詩集のなかで、英獨詩の邦譯、漢譯は、その成功の度合はとにかくとして、文學的

無識の甚しかつた當時に、平仄律呂の末々にも注意に注意を重ねた苦心は、すこぶる尊敬に値いするものがある。卽ちバイロンの「いねよかし」は原作之意義及韻法に從ふもの、沙翁の「オフエリヤ」も同樣、バイロンの「マンフレッド」は原作の意義と字句とだけに從ふもの、同詩の漢詩譯に至つては原作之意義、字句及平仄韻法に從ふたと稱するもので、

その一節を引くと

戲曲「曼弗列度」一節

魔　語

When the moon is in the wave,

波上織月光糾紛

And the glow-worm in the grass,……

螢火明滅穿碧叢

宵暗燐碧生古墳

陽炬高下跳澤中
星墜如雨光疾於電
梟唱梟和弧客驚顫
殘月斜射千壑陰
風死林木渾絕音
正是威力加汝時
靈咒無假誰脫覊

以下六十行まで克明に譯してゐるが、オフェリヤの歌などが青年の間に愛誦せられた事は藤村の小說「春」を見ればハツキリ判る。

譯詩集として恐らくこの位の良心と、用意と而して感化のあとの著しきものゝあるものは固より明治己來空前にして後の「海潮音」と對照すべきものである。私どもとしても、酒井勝軍の「英詩朗吟法」や高橋五郎の「紅紫爛漫」や岸本乃武太の「海詩百篇」の類から英吉利の詩に入つたので、この「於母影」を讀んだのは遙か後明治三十七八年であつたが、それでも尙今思つて他の澤山に出て消失した詩集類にも、卓れてこの詩蓄の魅力は忘れがたいものがある。

本邦に於けるロゼッティ

Gabriel Charles Dante Rossetti が 1828 年に生れて、今年(昭和三年)五月十二日があたかも一百年誕辰にあたるので、二三の雜誌の紀念記事やら、早稻田英詩學會の駿河臺に於ける紀念祭などがあつた。予ゟ亦依頼せらるゝまゝに講演執筆等三四回にわたつて Rossetti に就て述べたので、今さらいふ多くはない。やゝ纒つた研究は八月號の「パンテオン」誌上で發表する事としたから、こゝでは本邦に於ける彼の足跡をざつと訊ねて見よう。

今判明してゐる限りでは、Rossetti がまとまつて一篇の論文として批評的に紹介せられたのは明治二十六年十二月號「早稻田文學」海外欄に於ける西蹊生抄譯の「傳奇派の名家ロゼッチが詩想」といふ一文であらう。尤もこの論文と前後して單に Rossetti といふ名前のみは同じ「早稻田文學」の外の雜文に二ケ所ほど散見してゐた事を見た記憶がある。この西蹊生は卽ち U. K. で多分

は金子馬治氏の匿名であらうと推せられる。英吉利の雜誌「十九世紀」誌上 W. Basil Worsford氏の一文の大要を撮んだものである。僅かに三頁(二段組)あまりの短文であるが、Ruskin が「ロゼッチは近代の傳奇派を英吉利に建設せる精神力なり」といふ言葉を引用して、以下、Rossetti が「孤獨の生活を愛し、觀察の範圍を小さき社會にのみ限りたる」ため Byron のやうに宇宙的詩人になりえなかつたと論じ、彼を目して「世界的詩人」といふは不可である、The House of Life すら「全く個人の抒情詩にして、決して全宇宙を含むが如き無邊なるものにあらず」と云ひ、「當代の人生」を「知了」したか、どうかが第一疑はしい。科學的進歩に同感出來ざりし如き「やゝ迂濶に失せるの嫌なきにあらず、」たゞ、「其の一身を全然美術の裡に投じて、毫末も他を顧みず專念人生の優美のみを研究して一切他の物を放擲しぬ、而して此の點にこそ實に彼れの詩の眞價値は存したれ、」と賞美し、一轉して、Dante が Vita Nuova で「戀といふ高尙優美なる精神上の想念を歌ひ、之れによりて中世人の間に靈知的活力を鼓吹せんと力めた」蹤を追ふて Rossetti も「戀といふ精神的妙力を歌ひ、」彼れの聲は「多數の詩人中最も可憐にしてまた最も優美なるに近きもの」となつたと稱し、又、Rossetti の思想を要約して「現世は必ずや來世に深く

結合せる所なかるべからず、地上の生活は必ずや天上の生活と深く關係せる所あるべき也」といふにありとし、「地上に於ける愛情の關係は唯これ天上に於ける無限の幸福の前驅のみ、現世と來世とは愛といふ連鎖によりて密に接繋せる所なかるべからず、所謂連續（コンチニュイチー）の法則は此清淨なる戀情に適用せらるべきものならんと。」といふが Rossetti の詩に貫通せる唯一の信仰であると斷じ、以下の詩を引用してある。

"Your heart is never away,
But ever with mine, for ever,
For ever without endeavour,
To-morrow, love, as to-day;
Two blent hearts never astray,
Two souls no power may severe,
O my love, for ever!"

そして、「愛はすべての思想、感情に卓越せり、愛は全宇宙を支配する最高の帝王なり、此の愛

情の最も圓滿なる形を、最も精緻なる感情と最も富麗なる幻象とをもて描寫し、以て其を精神的に解釋し且共の未來との連續を指示せん事、是れ彼れが畢生の事業たりしなり。」と紹介し、尙一言 Rossetti が自らの詩卷を妻の櫃と共に墓中に葬つた事を附記してある。但し再び掘出した事は誌してはゐない。

以上の抜書に依ても、此紹介文の原文が、當時なほ盛んに行はれた Mid-Victorian 風の常識的俗解を一歩も出ない凡說にすぎない事を氣づくであらう。が、それはこの場合どうあつてもよい。Byron の宇宙性を賞揚して Rossetti の局部性を斥けるものは今日と雖も英國には絕えない。けれども、この紹介文への興味はそんな所にあるのではない。愛に就て歪みなりにもその絕對性を頌えた一節が、當時の志士的日本、國粹反動的日本、儒教的忍默の日本に如何にひどいたかといふ所にある。しかし、遺憾ながらこの文章に對する反響のあとを拾ひ上げる餘裕は今の私にはない。これに對して殆ど絕對的に讚美の聲を放つたに違ひないのは若き「文學界」の一團で、之れに反して批評的攻擊の立場にあつたは必ずや「國民之友」一派であつたに相違ないといふ推測は、具體的例證をあげずとも、北村透谷と山路愛山との文學論爭を知る人の多く肯定する所で

あらう。

その「文學界」にも Rossetti 禮讃の聲はしば〳〵あげられたかと記憶するが、今手許にある二十二冊には纏つた文獻はなく、僅かに第四十九號(三十年一月)の誌上に、上田敏の「ロゼッティの詩篇」が出てゐるのみである。

その上田敏は三十年三月の「現代の英國詩歌」に主として Swinburne を論じて Buchanan の所謂 Fleshly School にも言及し、「近代の三詩伯」(二十九年十一月) には Rossetti, Morr's, Swinburne を短評 (主として賞美であるが) し、「ロゼッティの詩篇」(三十年一月) には小傳とともに詩篇發掘のことも Francois Villon よりの名譯に言ひ及んで、『セルバンテスが物語に夢の如き人の世を說いて「去年の舊巢に鳥はあらず」En los nidos antaño no hay Pajaros hogaño といへる如く「こゝにはふるとしの雪やいづこ」といふ結びの句を繰返したり。』と言つて

But wliere are the snows of yester-year?

の一節を原詩とともにその英譯をも掲げ、又、The House of Life を紹介して

A Sonnet is a moment's monument,—

に初まる Sonnet と

I marked all kindred powers the heart finds fair :—

に初まる第一 sonnet である "Love Enthroned" と、「古往今來ならびなき多感の情緒」の證として第六十一篇

By thine own tears thy song must tears beget,

に初まる "The Song-throe" を全引し、外に弟 Michael の "Dante Gabriel Rossetti, his Family Letters, With a Memoir," 2 vols, の事をも紹介し、佳篇には他に "The Sea Limits" と "The Bride's Prelude" の二篇ありといひ、妹 Christina にも言及して紹介に及んでゐる。これが本邦最初に最も詳かに且正確に近い程度で Rossetti を説いた雜誌論文であらう。尙彼が「海潮音」(三十八年)に收めた Rossetti 詩は「小曲」、「戀の玉座」、「春の貢」三篇の Sonnet で三番目の「春の貢」が佳譯であつた。外に「中京文學」二十八年四月號から「ローマン詩派」(赤司麗粹)といふが連載せられたが Rossetti に言及してあるかどうかは今調べがつかない。

森鷗外は「觀潮樓偶記」(「かげくさ」所收) 中に「今の英吉利文學」と題して輓近三詩派を生

じた、『一はロゼッチィが「ネオロマンチック」を奉ず。ドウズン等の名世に聞えたり。一は第十五六世紀の佛蘭西詩人(キリヨン等)を奉ず。ドブスン、ラング等其領袖たり。彼を「ステエンド、グラス」詩派と云ひ、此を「テボネエル」詩派といふ。兩者の外「エソテリック、オクスフォオド」詩派あり。マシュウ・アアノルドを推尊す。チクスン、ブリッヂ等最も稱せらる。』云々と書いたは短文ではあるが興味ふかき一文である。

當時、泣菫のKeatsと並んで、Rossettiを奉じてその感化さへ强かつたのは蒲原有明であつた。彼は三十二三年の頃の「新聲」にRossetti詩の散文譯を揭げ、次いで、三十三四年の「萬年草」か「藝文」かにもSonnet中の"Portratit"を飜譯した。上田敏の校閲を得たものである由、同氏から筆者への通信にあつた。之れ恐らく本邦Rossetti譯詩の嚆矢であらう。彼は「有明集」(四十年)にも「眞晝」、「聖燈」等白耳義旅中吟の譯詩を收めてゐる。その譯しぶりは甚だ巧妙である。藤村の「春」には有明のSilent Noon譯詩が挿入せられてある。「有明詩集」(大正十一年)には七篇の譯詩が收錄せられてある。

戸澤姑射の「英詩評釋」(三十六年)にはSister Helenの譯註を收めてある。Rossetti譯詩集

の最初のものは小原無絃譯「ロゼッチの詩」(三十八年)であつて、小傳とともに "The Staff and Script," "Sister Helen," "Sudden Light," 等九篇に Rossetti が譯した Sappho, Leopardi, 及び古佛詩第三篇の重譯も收めてある。譯しぶりは甚だ拙劣である。なほ外に「帝國文學」、「早稻田文學」その他岩野泡鳴の "The Blessed Damozel" 譯詩をはじめ、刊行物に揭げられた斷片的紹介や譯詩も相當にあるが「早稻田文學」(四十一年)に揭げられた Hall Caine 文の一節の外には特に記述するに足るものはない、近年に及んで出版せられた二三の文獻は、讀書界周知の事實故こゝには述べない。

畢竟、本邦詩壇に於ける Rossetti の影響は、一有明がその青年の頃感化をうけた事があつたにとゞまり、而もそれとて彼の生涯作に全影響を與へた程の大波動はなかつたので、大觀して具象的な影響の跡の認むべきものがない。Love に就ての Rossetti の徹底せる想念に關してだけでも、本邦の明治人には非常な異端的感觸を與へた事であつたに相違ない。Rossetti 一代の、名 Sonnet 集「命の家」よりひびき出る本能的 Love の中世的なる歌聲に聞き惚れて、新らしき日本の國の愛の歌をうたひ出るものは誰であらう。それは全く今後の問題である。魂も肉體も

ともに喜び、ともに疲らしげなる Rossetti のおもひ深げな、ぢつとりと落ついた名たたる愛の詩歌は、世界とともに永劫に youth と change と fate との間をゆききして持續する生命を持つてゐる。

畔柳芥舟著「文談花談」(四十年) 所載「ラファエル前派解說」といふ一文は三十六年中に公けにした小論文であるが、中にロゼッティに就て說明した項が多い。參考文獻中の有力なるものとして補記してをく。

附記。　明治三十一年十二月五日成美堂發行井上十吉著「最近英文傑作集」にロゼッティの The White Ship の註解が收められてあり、冒頭に簡略なるロゼッティ傳が添へてある。

詩評家としての高山樗牛

一

高山樗牛の詩評は、かれの批評の重大な部分では決してないが、當時他に異彩を放つた評家が多くない故を以てしてだけでも、明治文學史上に於て、一瞥を試みる價値はある。先づほゞ編年史的にかれの著作中から詩歌に關する論議を抽出して見ると、

(增補縮刷樗牛全集による)

第一期　明治二十四年六月ヨリ明治二十九年十月マデ

詩人と模倣と天然（「太陽」）

詩人と模倣（明治二十九年二月）

自然の詩人（明治二十九年二月）
天然と田舍（明治二十九年六月）
文化の關聯（明治二十九年六月「太陽」）
日本文化の規模
國民的詩人とは何ぞ
詩歌と道德との比較
ウオヅヲースとバイロン
敍事詩と抒情詩（明治二十九年八月「太陽」）
一、民族的敍事詩と個人的敍事詩
二、敍事詩の歷史的觀察
三、美術史に於ける敍事抒情兩分子の消長
四、客觀的主觀的
何故に敍事詩は出でざるか（明治二十九年六月「太陽」）

文學會漫評　（明治二十四年六月「文學會雜誌」）

　現今批評家の一缺點

　　一、詩と批評との關係

　詩人の眼孔

武島羽衣の『小夜砧』を評す　（明治二十八年七月「太陽」）

『文學界』の諸君子に寄する書　（明治二十八年十月「太陽」）

明治二十八年の文學界　（明治二十九年一月「太陽」）

新體詩形論　（明治二十九年一月「太陽」）

新體詩のけふこのごろ　（明治二十九年二月「太陽」）

今日の新體詩歌を警醒す　（明治二十九年四月「太陽」）

抒情詩及び敍事詩界　（明治二十九年十月「太陽」）

詩歌宗教及び道德　（明治二十九年五月）

第二期　明治三十年六月ヨリ明治三十三年七月マデ

詩人唱はず（明治三十一年三月「太陽」）
詩人と批評家（明治三十二年九月「太陽」）
詩人と史家（同上）

第三期　明治三十四年一月ヨリ 明治三十五年十一月マデ

土井晩翠を送る（明治三十四年七月「太陽」）
明治三十四年の文學界（明治三十五年一月「太陽」）

五、進歩せざる新體詩

以上諸篇を得べく、その内で、一般詩壇論、詩の本質論、形式論、對社會論等の諸篇を付けて純粹に詩評と見るべきものの內で些かでも鑑賞のあとが具體的に表はれてゐるものを求めると、前揭表中圏點を附した數篇にすぎない。而も、その數篇の傾向は、主として土井晩翠を賞美の心緒と、彼のいはゆる朦朧派を排斥せんとする精神との二を出でない。

そこで、先づ樗牛が武島羽衣を評した一文をとつて見ると、羽衣の詩『小夜砧』は形の上よりは叙事詩と見るべきであるが、これを抒情詩と見れば（圏點は原文通り。以下同じ）

『洵に意味深き作なりと謂ふべし。秋夜思婦の心、痲に亂れ火に燃え、世に遣る瀬無き一念の幻に、吾身ばかりの現を寄するもの情誠にかくもあるべくや。文辭の精錬典雅なるは言はずもあれ、再讀三讀すれば、幽玄一物の微、我心に冥契するもの有るを覺ゆ。世の徒に詞藻を富麗にして俗耳を娯ましむるものと自ら徑庭あるが如し。吾等は武島氏が是の詩篇を近來有數の作と稱ふるを吝まじ。』――「縮刷全集第二卷」一七八頁

と推賞し、ビュルゲルの『レノレ』の換骨脫胎に相違ないが、この有名な詩はスコット之れを英譯して William and Helen と題してゐる、「テーロル」「スペンサー」などいふ詩人の異譯もあるが、スコット本は飜譯の常として原作の妙を缺いてゐる處が尠くない。而も『レノレ』と『小夜砧』とは大意は同じであるが主意は異つてゐる。前者は『記實的』で、後者は『純主觀若くは抒情的』である。卽ち、後者の「事實を取りて之をファンタジー化したるもの」であると

し、後者は『記實的筆法』をなるべく避けて「專ら婉微恍惚の文字によりて夢現の境を叙せむと務めた」らしいと推斷し、さて、「美はしき馬上の道行の終り」で、後者が

物を覺えぬけうとさに
　あたりの景色ふと見れば
人氣たえたる古寺の
　半ばやれてぞ立てりける。

と叙したに對し前者は

Rasch auf ein eisern Gitterthor
Ging's mit verhängtem Zügel:
Mit schwankter Gert' ein Schlag davor
Zerspringte Schloss und Riegel.

と「明に書」いてゐるのに比べると「兩者の差別」が判る。「但し、夫の行方を共によりほのめかしたる用意は、武島氏亦之を怠らず。『あはれ、吾夫待ちねかし、寢よとの鐘も打つなるに、こよ

ひは馴れし我閨(?)のなごやが下に明してよ』と言へるに、夫は答へて、

　あな心無のいひごとや
　　來む年月の末かけて
　千代に住むべき我宿を
　　いそぐに何か憂かるべき。

と言へるは、『レノレ』の夫が妻に答へて、

　Weit, weit hier,……still, kühl und klein;
　Sechs Bretter und zwei Brettchen

と言へるに比して其深刻及ばずとするも、温雅は勝ぐれたるが如し。吾等を以て見れば、ビュルゲルのは少しく露骨に失せるに似たり、スコットが之を英譯して

　'Tis distant far, low, damp, and chill,
　And narrow, trustless maid.

とせしに比すれば、武島氏のは數層巧なるが如し。……鬼氣讀む者を悚らす如き馬上の問答の代

りに、夫を形容して『霧のまがいに影薄き』といひ『身は朝影と細り』と示せるが如き、少くとも妻が夫を抱きて、

But why so stern and cold?

と怪める様にせしスコットの譯のありのまゝなるに優りなむ。』――全集第二卷一八一―一八三頁。

と評してゐる。以上長々と引證したが、これを見てほど樗牛當年の鑑賞及び批評のセンスの能力と標準の有無とを推測することが出來よう。

羽衣の『小夜砧』はかれの作中では佳品であり、『身は朝影と』云々のパッセイヂは樗牛の引證した通りに巧妙の措辭には相違ないが、明治初年の長歌作者から『新體詩歌集』著者及び落合直文、大西祝、大和田建樹、山田美妙齋その外の原史的新體詩の發達の徑路を考へて、一たび優秀卓拔な譯詩集である、S・S・S社の「おもかげ」に眼をそそぎ、さて、二十年代末期から三十年代初葉にかけて榮えた、所謂大學赤門派の擬古詩人の一人である羽衣の詩業を一わたり調べて見て今日のわれらから彼の立場と價値とを考へて見ると、如何に過渡時代の青年詩家の試作にすぎなかつたといふハンディキャップを念頭に置いても、樗牛が價値づけたやうに、爾く秀でた詩價をこ

の『小夜砧』一編の上にとても置くわけにはゆかない。

特に樗牛は、鑑賞に於て全然的はづれではなかつたにも係はらず、價値づけの標準に於ては著しい見當ちがひを粗雜な心構へのままで行つたために、かへつて『小夜砧』そのものゝ正當の位相を、ともすれば癖感をもつて多くの傍人に迎へさせるやうな結果をさへ惹起してゐるのは允しがたい缺陷であつた。

即ち、獨逸詩人の作意と「小夜砧」の作家のそれとの比較を見よう。これは、よしんば後者が構想上の暗示を前者から受けたものにもせよ、樗牛自らも末文に於て辯解的に、

「斯く書振の異なるは、前にも言へる如く、主として想の相同じからざるに因るなれば、强ち之を以て彼此を上下せむとには非ず。武島氏をビュルゲル、スコットに較べ得べしとは尙更ら思はず、只武島氏の此の一編は、一個の抒情詩として又一個の飜案物として、注意すべき價値あることを述べたるのみ。」――「全集」第二卷一八三頁。

と說明してはあるけれど、かりにも如何の意圖のためにもせよ、民族と時代と國家と言語とを全く異にする二個の作家の詩品を比較する以上、比較の底意に兩者の立場を正當に認めた上で比

較の可能なことを肯定してゐるだけの準備がなくてはならぬのに、右に引證した比較の如きは、表面上兩者の位相を認めてゐると告白してゐるにもかゝはらず、比較その事が全く不可能で、ひがごとで、横紙破りで、比較のための比較で、更に詮索をたくまうしうして云へば、當時としては立派な知識であり、學者としての大條件であつた外國文學、英獨詩を引證しての比較が、學者的論文制作心理に於ける一個の快感であつたがために、こと更らに云はずもがな、無くもがなの比較を、それも餘計の個處にまで及ぼして、羽衣詩を推賞するの材料に供してゐるなどは全然無用の仕儀であつたともいはねばならぬ。

ビュルゲルを「少しく露骨に失せる」とし、その「深刻」は及ばぬけれど「温雅」は羽衣の方卓れゐるといひ、又、

But why so stern and cold?

のスコット譯の「ありのまゝ」を斥けて羽衣の「温藉縹渺」をあげた如きは、「一個の抒情詩そして又一個の飜案物として、注意すべき價値あることを述べ」るためにもせよ、詩の根本作意に對する批評の態度が、民族的國民的詩歌の本質を亡して、單なる自己の文學上趣味の好惡感に立脚

する甲是乙非の判別に外ならぬ素人評に近い粗笨の視察を形してゐるにすぎぬため、つひに文學高等批評上の最後の重要問題に接觸してをらぬ缺點がある。

樗牛の批評は、啻にこの一文のみでない、數多くの書生論に近い快氣焰が、頭のよい論理立てに飾られ、相當に讀みあさつた博識に裏附けられて、當年の文學作品としては最上の意味のジャーナリズム的所産としての價以外、何物もないものが少くないのである。

二

武島羽衣の詩を評して、樗牛は詩評家としての、而して又批評家としての全形を曝露したが、つづいて彼は、『「文學界」の諸君子に寄する書』（二十八年十月）を書いて、先づ「超然一意、靈界の幽趣を樂み、美術の神韻を歌ふ」この一派のダンテ、ペトラルカの遺韻を尋ね、アンジェロ、ラファエロの流風を慕ふ詩風を說き、「さるにても諸子の歌ふ響の、いかなればかくは悲しく心細きことのみ多かるぞ。」と二度までも繰返して、同誌上の馬場孤蝶が「蝶を葬るの辭」を評してこれをバアンズと比較し、その哀切を賞して終に「さはれ吾等は今日バーンズを歡迎せざるべし。」

その理由は、カアライルも "Shut t y Byron, open thy Goethe" と云つたが、そもそもこの語意を知れりや、「此世には苓よりも花よりも大なるものあるなり。」彼バアンズは「博大なる永遠なる人道に向ては涙を灑がざりき、そは彼れの悲しみは常に下と內とに向ひたればなり。人は徒に悲哀すべからず、悲哀によりて悲哀を脫せざるべからず、是れ大なる人、健全なる人、道德ある人の悲哀なり。」自分は『文學界』の諸子に向てゲエテ、シルレルを持出すほどの『物の勘定だに知らぬ男』ではないと自ら辯護してゐる。

バアンズを孤蝶と比較するの迂拙はしばらく措くも、樗牛の簡單なバアンズ觀、及び粗末極まる「文學界」觀、並びに他の纖細な心情への心からなる同情と理解とに乏しきは、これを以ても推しはかられうる。又、彼の衷心要求する詩歌の傾向が、ほぼ如何のものであるかも推量するにかたくない。

『文學界』の一般的傾向に對して、時代の東道者としての批評家として眞に理解と同情あらば、牛に向つて馬の動作を要求するが如きことは出來得ない筈である。彼は「孤蝶子を『文學界』一派の思想を代表せしむるを得べきか。」と速斷して、透谷の苦悶も、禿木の惝怳も、藤村の情緒も、

柳村の詩情も、秋骨の感懷も、天知の閑情も事細かに味解してゐない。否、心をとめてよく理解しようとすれば、ある程度までは理解出來ない事はない彼であるが、この一文は輕卒に大ざつぱに片つけてしまつた故に、彼の缺點が一番よくさらけ出されてゐるのである。

が、樗牛の美所は常に努めて公正の態度に出でんとした一事である。羽衣を推賞しすぎたのも、羽衣への個人的身びいきに出立したものではなくて、たまたま自分の思考する詩歌の型式に接近したがためであり、藤村をおとしめ、晩翠をあげたのも、一がたまたまわが希望と正反對の立場に立つた詩風にあつたからであり、一がたまたまわが主張と一致する本質を所有してゐたと考へたからに外ならぬ。否、寧ろその強き性格もて弱く拙き儕輩のある者をわが亞流たらしめんとした程の彼である。樗牛が羽衣、雨江、桂月、鳥山ら大學派詩人を評して「今の詩人は故らに其言を迂にし、其情を微にし、務めて讀者の感情を疎隔せむとするものゝ如し。」と云ひ、「彼等の作を讀むや、吾等の望遠鏡を以て其形を見、電話機によりて其聲を聞くの感あり。」とせるは結果から見て大體首肯しなければならぬ正論である。この望遠鏡式深山美人の描寫を攻めた樗牛は、かつて此派の羽衣の電話機式小夜砧の音を欣愛したのであるが、一たび賞美したわが舊言に囚はれ

ず斷然所謂擬古詩派の缺點をあげたのは、一面批評に正直で公正な彼の態度を示したものであり、一面わが主張し熱望する何ものかの本體が、漸く明らかになつて來たため、敢爲にあらゆる作品を評し去るを得たからである。

「通讀の際、其調子のみ耳につきて、其意義の索然たるもの」を斥けた彼は、確かに大學派の缺陥をついたのであるが、一面そこに云ふべからざる含蓄があり、調子を耳にし乍ら、同時に微妙な感情の搖曳を伴ふ危機を悟る度數が、鑑賞家として樗牛は割合に少なかつた事も事實である。羽衣一派にホイットマンを強ふるは、色鳥の羽毛をとり去つて、尙その美を認めんとするにもひとしい愚行である。

眞に樗牛が羽衣雨江らを知つてゐたのならば、眞に詩歌の纎細な鑑賞に耐へたのならば、匠氣と技巧とを攻めるに先立ち、簡素と眞率とを強ふるに先立ち、彼等の詩風が畢竟全然虛僞のものであるか、幾分の必然性によれるものであるかを判別し、若し、全くの虛僞又は盲目に出立してゐるものなら、是れに改心と變化と展開とを要求するは自然であるが、既に彼等の立場を批評家的寛裕を以て認め、且つ羽衣の場合の如く大いに推賞もした以上は、かれらの文語雅語詩その

表現法、その感情の本質、思想の本能をよく査べて、かれらの詩風の自然、必然に赴くなべに波のたゆたひにそれらの身を任せしめつゝ、その上で巧みに指針を命じるが評家のとるべき東道的態度である。裁斷批評の根本精神である。

『僞詩人とは何ぞ』(三十一年六月)に於てかれは、「文法と古語とを以て詩を造らむとする僞詩人」を嗤ひ、由來我邦には一種奇異なる風習あり、國學者とし云へば必ず歌人にして、漢學者とし云へば必ず同時に詩人たり、かく文法家語學家が詩歌を詠ずることをば一種の先天的職業の如く心得、世人も亦敢て怪むことをせざるは甚だ謂はれなき事ならずや。」といひ「彼等は決して詩人たらむが爲に國文を學びたるにはあらずして、唯國文を學びたる序に詩人たらむとの野心を起したるもののみ。」といひ、「多少古語雅語に通じたりと謂ふの外、何等詩才詩情の特に常人に勝れたるものあるに非ざる也。」といひ、「唯文字章句を巧みに排列して俗目を喜ばしむる一種の玩具たるに過ぎざるは、是非も無き次第とや謂ふべき。」といひつひに、「吾等は最早や彼等の作り泣き、作り笑ひに飽き果てぬ。吾等の欲するは靈魂の聲なり。」といつたは、當年の積弊を確かに鋭く突いた卓見で、これを讀んで冷汗三斗に及んだもの、恐らく夥しかつたに相違ない。此等の點

み見ても、樗牛が如何に天成のジャーナリストとして（天成の評家として以上）に惠まれてゐたかを推測するにかたくない。

然し、此等は一般現象への概括批評としてのみ許さるべきであるが、たとへば、樗牛が右の文章を草しつゝ、私かにその文敵としてゐたらしい形迹がたしかにある鹽井雨江の如きは、國文科出の文學士で國文學を專攻し國語學にも通じ、註解本の著書もあり、後には詩作を廢して一專門學校教授として終つた人であるが、かれが靑年時の詩作中の佳品を見れば、雨江は決して僞詩人でもなく、「詩歌を詠ずることをば一種の先天的職業の如く心得」た文法家でもなかつた。文法にも古語雅文にも通じてゐたため、その方の感化が著しくはあつたが、眞の詩情詩才をも持ち合せた純情の人であつた。眞摯の性の所有者であつた。

一見耳遠き雅語をあやつるを以て直ちに遊戲詩品となし、文法註疏の業に就くを以て詩才なしと斷じさるは、輕率以上の粗笨なる暴言ともいはねばならぬ。眞に詩に純なりや否やは、業務や外型や專門やに執する事なくして、直ちに作品そのものに對して、纖鋭の鑑賞眼批評心を縱横に發揮しなければならぬ。雨江が「花紅葉」や「暗香疏影」中の名品を味解しうるものは、外形一

見文法に囚はれ古文雅語に殺された造化文章のごとく思惟するも、よく味はへば、茫莫たる雅文の內、生々潑溂たる感情の奔騰あり、情緒の綿々縷々たる搖曳あるを悟るであらう。この微妙な詩趣を頓悟しないで、此時代の擬古派の功過を判定することは不可能である。

樗牛たまたま言を玩んで大言壯語するが、實はよく這般の消息に通じてゐたのであらうか。若くは然らざりしのであらうか。樗牛の殘した批評文を閱してゆくと、どうも後者と判定しなければならぬ缺點があまりに多く散在してゐるのである。而して、擬古派を論じて雨江桂月に及んだ一文を讀んで、特にその感を深くするのである。かれの鑑賞と批評とが、眞に名評家の域に到達してゐたならば、その批評精神は、その批評眼は、一人の雨江といふ迷へる詩人の天禀の詩才を更に美しく、いとせめて神の定め玉うたあたり迄發輝せしめて、この詩風、この詩情、この形式に於て明治時代のみが有しうる、獨自の詩的所產を產ましめる好助產術を經驗したに相違ない。しかるに事こゝに及ばなかつたのは、當年の唯一の詩評家樗牛が、この程度のジャーナリスト的眼光にすぎなかつたためと、雨江本人が時代の逆潮に抗して、飽く迄も自已詩感の源流まで溯江するの勇氣と自信とを缺いて、空しくその詩才を辛じてあの程度しか發輝出來なかつたがためで

時代と詩人との微妙な交渉は多くこの様な處にも窺はるべく、これを以て直ちに作品その人の天賦の貧弱と解するは速斷である。假令んば雨江は、藤村以上の詩才がない人であつたにもせよ、かれを培ふ時代の五風十雨がかれの詩情によりよろしかつたならば、あの程度よりもちつと立派な程度の業績を殘しえたに違ひないと考へられる。

樗牛の現實主義はホヰットマンを紹介し、（三十一年五月）合せて外山博士の新作詩を辯護してゐる。（同年同月）ホイットマンに於て樗牛が、他のロゼッティやバアンズやシェリやを論じた場合以上に、精密的確に近くその詩を鑑賞しえたのは、この軍鼓のひびきとゞろかす米國式人生詩人、「感情の響にあらずして意志の聲なり」と樗牛自ら說明せる、この十九世紀式現實詩人の氣魄に割合に早く能く接し得たからで、すべて世にホイットマン流の粗荒美を解する人多きも、ロゼッティの幽緻美を悟る人の少きが如く、樗牛程度の鑑賞眼を以てしては、此前世紀の北米詩人ホイットマンを談るのが唯一の適役であつたのである。

が、このホイットマン宣傳はあまり多くの影響を詩壇に與へなかつた。かれのホイットマニズムは、樗牛自身にとつては、正しく切實な一個の問題であり、嚴肅な一個の希望であり、痛烈な一

個の主張ではあつたけれども、詩壇には此等の論議に耳傾けるその以前に、もつと早くまとめねばならぬ多くの緊急問題があつたのである。彼等は文語の格律詩の存廢の問題に苦しんでゐるのである。この文語の格律に身を縛めつゝ、樗牛の呼ぶ簡素主義や直截主義に心を寄せんとするは、譬へば方丈の室にあつてマラソン競走を思ふ様なものである。樗牛自身もホイットマンの「アダムの子等」、や「未來詩人」を譯すのに

爾等は曾て女の肉體を愛せしことありや。

のごとき文語譯を以てしてゐるので、原詩のフレクシビリティーや自由奔放やの詞致を移するに口語又は口語に類する文語體を使用するには及ばなかつたのは、かれが尙未だ詩語卽文語の觀念を套襲してゐたからなので、穴勝ち文語の格調美と、簡勁とを愛する念より出でた語法の選定ではなかつたらしい。

文語詩の完成が當代の一大使命であつた上は、詩壇の風潮が靡然として、その方角に向つて動いたのは當然である。而してその傾向は、透谷梅花はじめ、藤村晩翠の二詩人を經て鐵幹、柳村、淸白より有明、泣菫に及んでつひにその頂點に到達した。樗牛の斥けた朦朧體は、かれが存在中一

圖にその進程を忙いだのみならず、明治四十年代初期に及ぶまでその行路をとどめなかつたのであるから、彼の進言が一として（論それ自身として不正ならざるも）具體化されなかつたのは寧ろ當然である。この卓れたジャーナリストの主張は、自己の主張の一面に急であつて、時勢（特に詩壇の）を大觀するの纖細の神經に缺くところあつたがために、ついに多くの貢献をばもたらさなかつたが、只、當時の一般的詩弊をついて亞流詩人を反省せしめ、遠く一詩風勃興の基礎を堅めた效勞はこれを認めなければならぬ。その事に就て更に一度究訊して見よう。

三十年七月樗牛は「朦朧派の詩人に與ふ」の一文を書いて、「本邦言語の性質として、字母の時間に變化なきこと、一言語を構成する字母の數量の種類に乏しきこと、隨て音律の制限は主として人身生理上のリュトムスに依りて規定せらるゝこと、是の如くにして感情思想は、一種の外的形式に絣束せられて共自由の暢發を遂げざること、是等の事情の我が詩歌の進捗を沮遏せる所の有力なる原因なるべきことは、吾人之を認む。」と述べたは大體に於て肯ずべき論述であるが、次に「然れども新體詩昨今の窘塞を致したる上に於て、直接の原因を成せるものは實に新體詩家共の人なりと言はざるべからず。是れ新體詩家を外にして、天下眼あるものゝ明に認識する所なり。」と

皮肉な觀察と口吻とを示してゐるのは、飽くまでも彈正臺に上して見る必要を感じる。叙事詩や叙事詩的抒情詩に「今日の詩形」が不適當だといふ樗牛の議論は尤もであるけれども、純抒情詩までが「やゝもすれば雕績滿目」で「故らに意の透徹を避けて隔靴掻痒の弊」あるが故に、（よしんば、「古語と擬古と必ずしも不可ならず」と辯明せるも）いはゆる朦朧派詩人が「僞善者の態度」をとつてをるのだと結論せるは、行論の不備以上に上來繰返し來れるごとく、樗牛の鑑賞眼の粗雜を認めざるをえない第一の所因である。

若し果して、古語や擬古が必ずしも不可でないといふ樗牛の言が眞實ならば、大學派詩人は如何に實際の詩人的態度を決したらばよいのか。樗牛は之れに對し、何ら黑人的具體的の提案をも示さず、ひたすら現實と直截とを說き、朦朧と散漫とを斥けんとするは說諭すべき本人を前に自ら目閉ぢて大言叱呼するの類にすぎない。著しく穩當を缺く所以である。而も、そのガイベルやウウランドやハイネやリユツケルトを引證し、ゲエテ、シエリ、キイツ、シルレルの難解あるも朦朧なしと說いたは、難解と朦朧との二範疇の間に歴然たる詩的區分を明確に認めた上の所言であつたらうか。樗牛果してキイツの感情に飽くまでも共鳴して表現詩句法の難を解けば、即ち

釋然として全篇を氷解頓悟し得たのであらうか。われらは、樗牛の多くの詩人寸評言に照して見て、かれが到然キイツの纎細な鑑賞家に伍する資格がなかつた事を信ぜずにはをられぬ。一歩を讓つてかれ自らはよく味解せりと信じたとするも、これ大ざつぱの解釋法にすぎず、キイツ、シエリ等の情緒神經は、樗牛の鑑識を超越し、遙かに纎細と幽微とを極めたものであつたのである。樗牛は、その朦朧詩の代表として藤村の「四つの袖」をあげて論駁してゐる。(三十年九月「朦朧體の末路」)。

島崎藤村は當年詩家の錚々、「作品の醇雅、思想の高潔を以て夙に同人に推さる。」と樗牛自ら記してゐるし、右の作が「近業中」苦心の作であるとしてあるから、作者と作柄について評者が全く盲目であつたわけではないが、『「四つの袖』は抑々何事を歌ひたるものなるか。吾人一讀して之を解する能はず、再讀三讀して僅かに其の髣髴を摸捉し得たり、」と云ひ、この作を解するの勞苦を以て「吾人は慥かにスヱデンボルグを一讀することを得べし。」と誇張し、その「艱深朦朧」を攻め、「比興工ならざるに非ず、措辭造語また纎巧を極む、獨り詩趣の索然たるを如何せむ。」といひ、

なさけの水棹こひの舟

云々の首節四行を解すべからずとしたはよい、が、

あゝ朱盃を舟として

なさけにうかびこひに醉ひ

君のほとりに漕ぎくれば

盲にかへる我身かな

を「何ぞ誇大の甚しきや。」としたは當らず、比喩の言は尙一層誇大なるをいさゝかもさまたげないが、只三行と四行の句が甚しく拙劣なるがために全節の效果が擧がらなかつたので、誇大を攻める前にこれは須らくその表現詩法の迂拙をせめるを正當とする。

あゝわが戀は夏雲の

かげに照る日の熱ければ

涼しき風の吹きかよふ

君の蔭こそこひしけれ

あゝわがこひはあを／＼と
胸の若葉のしげければ
やさしき涙ふりそゝぐ
君の雨こそこひしけれ

心の暗路むねの星
こひの道芝ふみまよふ
短かき夜のあけそめて
いとも露けき夏の朝

等の行句を評して「風雲月露に托して情を抒ぶるは、小歌曲の事のみ。」とせるも亦あたらない。小歌曲ならずとも、大詩人の詩情は譬喩の說法を用ゐて、この種の詩感の造形に成功せる事昔からその事例少くない。

只この藤村の詩が佳作でないのは、風雲月露に托して抒情したその事が悪いのではなく、譬喩文學の興味漸く廢れ來つた近代人の胸に、如何にしてかゝる表現法を用ゐてよく簡勁の表現を完し、熾情を傳ふべきやといふ特別の注意が不足で、只、筆先きの技巧に乘つて輕卒に詩心を滑べらしたに原くので、全篇の朦朧は過半の事實であるが、朦朧を攻めるはそもそも末の末の事である。更に詩歌製作の心理に立入つて、その技巧の失敗點を具體的に列擧して、その方面から作者の反省をうながさなければ、畢竟批評家の批評は、第三者の無責任な快哉を叫ぶにとゞまり、肝腎の作者自身にとつてよく他山の石たる事は難い。

しかも、桂月、雨江、羽衣らの詩に於て十把一からげに、その朦朧と散漫とを斥け去つた樗牛の文章の中には、玉石を同置とし本末を顚倒した如き例もないではなかつた。朦朧派を斥けるは樗牛の趣味ではあつたが、詩壇の最大事件では必ずしもなかつたのである。しかも朦朧體を斥けんとした一文として見ても、樗牛の文に以上の粗笨が多かつた事は、見のがす事の出來ない明白な事實である。

思ふに、當年の作家を通觀して、樗牛の評のため可なり手痛い重傷を受けた者の多かつた事は

推惻するに難くない事さきにも述べたが、評家としての樗牛の業績は、詩壇の一流作家に反省を求めた力はかく比較的弱かつたけれども、末派亞流の無自覺な小詩人らに大痛棒を與へた効果は慥かにあつた。樗牛の趣味が更に著しく接近した土井晩翠の詩を評して、彼が何と云つたかを驗すれば、樗牛の批評眼の眞價は更に一層高らかにせらるるのである。

三

高山樗牛は、曩きにホイットマニズムを提唱し、大學凝古派を斥け、朦朧體をさげすみ、當時の新體詩人某が評せしといふ「今の新體詩は一度讀みては一寸面白しと思ふことあるも、夜店にて買ひたる品物の如く、二度見れば興が覺めるもの多し。是れ含蓄なく、神韻なく、暴露に失し、平板に流れ、散文的に陷ればなり。」との一節を援用して、「所謂今の新體詩の中には是の人の作をも含めることを已れのみは心附かぬらし。」と一笑し、「されど吾等の見る所にては、含蓄を求むるの心已に誤れり。今の作家は已れの感情を胸より胸に傳へむとはせで、口先にて神韻がり、餘情がらむとす。火は燭れざるに移らず、假面假面をもて人を動かさむとするは誤ならずや。今

の新體詩はニキビの副産物なりとの評はいたく肯綮に當れり。所謂朦朧派は先づ其の僞善者の心を去らざるべからず。」(明治三十年九月『新體詩家の新體詩評』)と斷じてゐる。

が、この論文の中には、少しの矛盾と、多くの見殘しとが存するのである。この某といふ新體詩人の所言は含蓄神韻なしといふ意見以外に、平板に流れてゐるとか、暴露に失してゐるとか、散文的に陷つてゐるとかいふ別の意見もあつて、含蓄云々と平板云々とは一つの傾向に對する評語では必ずしもないにもかゝはらず、樗牛はわが主張の引用に便せんとする心に一圖であつたがために、此等の兩種の評言を一視してか、あるひは後者をば見て見ぬふりをしてか、含蓄云々の項のみをあげて、己れの所說に裏書せしむべく正に敵人の矛を利せんとしてをるのであるが、この某なる詩人は何人であつたかは、今日これを明瞭に考證することは出來ぬけれども、この引用文の文體から察しても、當時の如何なる程度の年輩の略いかなる傾向にある人の所言であるかは推察して、ある斷言を下すに容易であるけれども、かゝる臆斷はこゝには斥けて、文章それ自體の意味を正面から正直に受取つて考へて見ても、今日よりすれば此等の評言に的中する人は、藤村、梅花でなく雨江、桂月、羽衣でもなく、「新體詩抄」の作者等又は「新體詩歌集」の作者等の

一部に該當するものであり、井上巽軒といひ、外山ゝ山といふ作者の所謂新體の散文的詩歌に一番よくあてはまるもので、ゝ山の「可兒大尉」はじめ散文的新體詩の習作がすなはちその作例に外ならぬ。而も、この種の詩風を當時樗牛が肯定してゐた事は事實で、二十九年一月「明治廿八年の文學界」參照）樗牛唱道のホイットマニズムが最も低級に實現せられたとしたら、それは期せずして右の如き無含蓄、反韻韻であるのみか、あまつさへ過剰暴露にしてプロゼイックな詩風に陷るは當然である。當時の少壯批評家であつた堺枯川が「萬朝報」紙上で土井晩翠の「天地有情」を評してその低調と平板とを指摘したその文章は、批評も淺薄で態度も危なかしい低級市井批評の代表的なるものにすぎなかつたが、指摘したる晩翠の缺陷は、晩翠半生の詩風につきまとふ詩弊であつた事は見のがせない。その土井晩翠を唯一の詩友として、彼によつて樗牛はわが詩歌理想の具象現を實行しようと考へてゐたらしかつた。新體詩はニキビの產物などといふ膚淺極まる放言は、この原史的國士時代の末期の頃から時移つて大正時代に入つて、小說作者里見弴がその「潮風」中に乃木大將の恥毛を諷刺的に描寫する「新時代」までも、一般社會には殘存的に命脈をつないで來てゐた一種の科語術語の社會的低級概念化の一例で、儒教道德の萬能主義に基く藝術思

想への非理なる抗議の一に外ならぬが、その外「星とすみれ」とか「星菫黨」とか「海老茶式部」とか「煩悶」とか「見神」とか「自然主義」とか「現實暴露」とか「耽溺」とか、すべて各場合に異なるが類似の事例である。言葉の低級化ほど社會の未開を端的に表示してゐるものはない。夏目漱石が「わが輩は猫である」の中卷で當年提唱の象徴詩を嘲笑し去つたのなども、諷刺としては根本の知識と攻擊の態度とが淺薄で不眞面目であやふやで、この時代にともすれば先賢面をしたがつた「思想家」「國士」「有識者」輩の新興藝術に對する反感のための反感以上の何ものもなかつたが、丁度それと右の樗牛のニキビ評が正しく同一で、これらの點に於てはただ樗牛、漱石のみならず、明治時代の評家や學究や思想家が要するにこの種の粗笨な觀察と、樂天的な吟味とに運命的に甘んじてゐたのである。その點から見ても、樗牛は飽くまでも時代の產兒にして、よく時代の利弊を代表してをるいはゆる「評論家」である。

さて、然らば樗牛はわが主張を晩翠の詩の中に發見し、わが詩歌的理想を如何に晩翠詩中に生かさんと欲したか、かゝる企は成立したか否か。

樗牛が晩翠に就いての所言は、最初に明治三十二年七月の「太陽」誌上に「土井晩翠に與へて當

今の文壇を論ずる書」に見えてゐる。尤も、その前に『カーライル氏の『英雄論』の飜譯に就きて』（三十一年六月）で晩翠のカアライル譯本を紹介し、晩翠が「物質的文明の弊に堪へざる今の日本は須らくカアライルに學ぶ所あれ」との言說に對し「あゝ彼れに學ぶは何よりも易きこと也。現に神秘論は無學なる宗教徒、慷慨家の得意とする所にあらずや、……もし彼れに學びて益あるものならば、そは彼れが詩人としての狂熱と赤誠とのみ」と切言し、終りに「されど譯者の意、今の世のカアライル的經濟論を勸むるにありとせば、吾等潛かにそが人の子の誤まることあらむを恐る」と云つてカアライルは「哲學者にあらず、經世者にあらず又歴史家にもあらずして、一個の詩人のみ」と斷言してゐる處を見れば、當年に於て晩翠に一歩先んじた樗牛が、恒に先進としてこの詩人を誘導教化せんとする下心があつた事が覗はれ、又同時にこれは一瞥よくカアライルの眞相を突いたやうで、實は甚だ朦朧たるカアライル觀で、神秘說を職業宗教化の世迷言と速斷し去つて、些の不安を感じぬ程度の幸福なる低級實證主義者の口吻や態度では、此前記の浪曼時代の思想家カアライルの全體をうかがふ事が些かも叶はぬ。史家としても、思想家としても、將た詩人としても。

明治三十二年十二月、樗牛は「太陽」で『晩翠の詩』を論じ「吾れ藤村の調を取りて、其の辭と想とを取らず、辭柔弱にして想は朦朧なればなり、吾れ羽衣の辭を取りて其の想と調とを取らず想は淺近にして調は單調なればなり。然れども想淸く情まことなるに於ては、蓋し又當代の詩人たるべし。吾れ、人の是の二人を稱するを妨げじ、唯怪む、何故に土井晩翠を言はざるかを。」で筆を起し、晩翠は羽衣と共に世人の所謂大學派であるが、羽衣は國文出だけれど晩翠は英佛獨の文學に精通し、平生シルレルを愛吟し、その作には到處シルレルの俤があるといひ、辭は羽衣に劣り、調は藤村に及ばないが、想の高くして情の淸い事は二者を凌ぐ。その辭は概ね明澄で露骨に陷つてなく唯、「紆餘婉微の趣」に乏しい。『希望』といふ作には

沖の汐風吹きあれて
白波いたくほゆる時、
空のあなたにわが舟を
導く星の光あり。

云々で初まるが、これなどはその代表詩であると云つてゐる。而もこの作は、堺枯川がこの聯を

引用して、一句一句その低調と平凡とを指摘した作である。後年晩翠が『天地有情』を出すや、この作を卷頭に置いたは作者自ら自信したのか、友人樗牛の所言に壓服せられたのか、何れにせよこの詩は、枯川の所言の如く凡作に位するもので、晩翠詩の佳品ではない。枯川はたゞ外の特色をも見る明がなかつたけれど、樗牛はその點遙かに、枯川輩新聞記者の批評家者流に勝つてゐる事數等である。

この機會に、なほ當時の俗評の代表的なるものとして前記枯川の批評を、明治三十二年七月廿九日及び八月一日の萬朝報紙下より摘載して見よう。

枯川曰く「嫌いなるもの、伊藤博文、壯士役者、新體詩、年增の酸漿ならしたると或人は言へり。予も亦新體詩を好まざる一人也。然れども予は不食嫌の謗を免れんが爲め、此頃大々詩人の評判ある晩翠子の『天地有情』といふこと讀みたり。劈頭第一のまづさ哉」かく云ひて沖の汐風の一句を平凡、白波の一句を拙劣、夕月云々を平凡、黑暗云々を拙劣、空のあなたを弛緩、導く星云々を無力と評し「内容の理想に稍新とすべく高とすべきものありと雖も、終に詩を成さゞる也。」と斷じたは一見穩健らしいが、實は全然の出鱈目で、

み空の花を星といひ
我世の星を花といふ（星と花）

光はとはに若うして
世は斯までに老いし哉（夕の星）

罌ぞめごろも裾長く
『暗』の歩みに音もなし（暗と眼）

清き乙女のむくろより
などか菫の咲かざらん（造化咲工）

露のしづくに光あり
しづくの露に心あり（靜夜吟）

等は佳句妙想だが、多數の無力弛緩の句に擁せられて光を失してゐる。「長篇の如きは殆ど人をして讀むに堪へざらしむ。」といひ星の字を一卷中大凡五十用ひてゐるが、此字を一百用ひ得ば以て大々家たるべしなど、今も變らぬ粗芥の言辭を弄してゐる。

當時の新體詩を年增の酸漿と比較する嫉忌の情で、强いて一致せしめた低劣無恥の譬喩であるが、壯士役者と比したは、新らしく生れた未完成なる現代物への無批判的不快感の發露と見れば興がない事はない。長篇を悉く讀むに耐へずとしたは、早々の喧騷裡の拾ひ讀みの經驗で、この放語を敢てしたにすぎず、枯川の評は固より一瞥にだも値ひせぬ俗評中の俗評にすぎないが、この類の妄評が、如何に詩文壇に横行してゐたかの一例證としても、こゝに附記しておく價値はあらう。

これに比すると「帝國文學」記者が（第五卷第六號）「樂土豈遂に來らざらんや。其天の王國の來らむまでは、暫らく想像の力にたより、詩人のまほろしをかりて、時に或は身を天上に置き、時に或は天を下界に夢み、薄暗の世をたどらんかな。晩翠子の人生を見る夫れ此の如し。此思想は我が古來の思想に非ずして子が歐西文學の研讃により得來りしものなるや明なり。あながちに

此世を穢土視する小乗佛教的哀觀に非ず、またひたぶるに我世たのしとする淺薄なる樂觀に非ず……天の一方に光明を認めて徐ろに人生の路をたどれりとなり、科論にて云はゞ、新化論的樂觀なり。」といひ、戀の詩を作らぬ理由を考へ、晩翠の詩の弊は描かずして談らんとするにあるか」といひ「情に訴へずして智に訴ふることあり」といひ『暮鐘』を卷中の白眉と稱し『星と花』『墓上の花』をあげ『馬前の夢』『星落秋風五丈原』の二長篇を賞美し、當年の世評中晩翠の詩情熱の乏しといふは可なり、絕えて血なく涙なしと評したものがあるに對し「晩翠の詩また一種の狂熱あり。……吾人は評して冷靜の調ありと云ふのみ。冷靜の調何ぞ情熱の皆無を意味せん。」といふなどの處々を抽出して見ても枯川輩に幾層まさり、ある點樗牛以上の批判力があつたを立證してゐる。

この外、當時此詩集に對する評語は多かつたが、微細の個所に就ては樗牛多く此等の評家に及ばなかつた。さて又前にかへつて、續いて前揭の樗牛の文を丕べて行つて見ると、樗牛は晩翠を自然詩人に非ずとし、「其の對觀する所の一切、何れも主觀的潤色を帶びざるは無し。」といひ「彼れの物を見るや、先づ自家の趣好の理想中に鑄鎔し、沈錬す。故に情火燃えず、動もすれは冷到な

る思索に陷る。」と斷じ、ただ「而も一脈幽玄の詩趣、是れに依傍すれば覺えず人をして神往せしむるものあり。」とて晩翠の長短所はこゝにあると論じ、シルレルに私淑する晩翠が加ふるにゲーテの客觀的傾向を以てせば、造詣必ず倍蓰するであらうと推測してゐる。

晩翠の詩風の長短所を見極めえた人は、この批評を見て、評家自らがこゝに書いてある感想より今少し深いものを感じてをり乍ら、それを妥當の表現で具體化する事が出來ずに、ものの周圍を徒らにめぐるやうな歯がゆい云ひ方でボンヤリと云つてをり、而も用語が不適當であるためにかへつて評者の本心以外の事を、讀者に感じさせてゐるやうな結果に陷つてゐるのを發見するであらう。藤村の辭の柔弱は評者の主觀的立場から見た言葉で、柔弱あるが故にわろしとか、質實剛健なるが故によろしとかいふ標準が心內にあつての事であるが、樗牛のいはゆる柔弱は、樗牛自身の思想並びにその晩翠觀から見た觀察であるが、藤村の詩想は樗牛のそれとは、主張目的傾向を異にし、藤村の詩想は自ら極めて自然に必然藤村詩の辭をやとひ來つたもので、柔弱はこの場合一個の特色で、寧ろ「想清く情まこと」なのを肯定した以上、評家樗牛は自らこの主觀的評語の不適當なるを認めて徹回しなければならず、想を朦朧といふも、藤村の詩は明瞭すぎる位明

瞭で、その藤村をしも朦朧とするなら、柳村初め泣菫有明を見たら愕いて前後を忘れ、更にフランシス・トムスンのラティニズムやマラルメの表白法を見たらつひに浩歎せんとも限るまい。又羽衣の辭をとるといふ以上、想と調とをとらずといふは、言語文章の勢ひや調子のために滑りすぎた云ひ方であるが、これも亦「想清く情まこと」なるを認定してゐる以上は、想を淺近で以て蔽ひ、調を單調で掩ふはいさゝか亂暴で、羽衣の長所短所は一にそこにあるのであるから、淺近に墮しすぎた劣作、單調に陷りすぎた惡詩を救ひ、淡々たる平趣の間に一脈の淸想と眞情との香ひ出るかれの特色を闡明しなければ懇切ではない。一體にこの時代の文章が漢語調末流の徒を恒とする語勢に押されて、細かな感情や、纖美の神經を傳へる事を念としないはいふ迄もなく、他人の曲解をも顧みず、極大まかに論を運んだのは一般の時弊であつたと云はねばならぬ。この種の文章觀、用語感が禍ひして、漢文漢詩支那文學の全體が詩を歌へば則ち政弊を慨し、文をあやつれば則ち時勢を說く以外に、何等絕妙の藝術的趣致がないやうに、ともすれば取られ勝ちになつたのはやむを得ないが、全くは自然の成行でもあつたのである。

「動もすれば冷刻なる思索に陷る」と樗牛はいつた。晩年は果してそのやうなゲダンケン・リリッ

クの作者であつたのか。なる程、マ-ティリアル・ナウンよりもアブストラクト・ナウンの方が多いといふ程度の觀察をすれば、樗牛の詩も深刻な冥想說かも知れぬが、「夢」といひ「啓示」といひ「思想」といひ「神」といふ用語が如何に夥しくとも、晩翠は到底精緻の論證にも深遠の思索にも勝へうる詩人ではない。「冷刻なる思索」に勝へうる詩人なら、樗牛が望蜀するゲーテ的客觀傾向には求められずして既にこの時入つてゐた筈である。この論に於て、樗牛は晩翠を論じて端なくも夥しく自家の欠陷を暴露してしまつたのである。

さて、樗牛は明治三十二年の六月に『「天地有情」を讀みて』の一文を公けにしてゐる。「今の時に當り、多少の興味を以て『天地有情』の題目を讀み得るもの果して幾人ありや。詩の侮りを受くるや極まれり。」といふ最初の文句は、精彩あり感激あつて、從來の校友會誌的衒氣を去つてゐるのは注意しなければならぬ。かれは、先づ晩翠の詩の眞率をあげ、七五の單調を破らんとした努力の跟跡ありといひ、漢詩調を用ひたのはそのためだと論じ、ユゴォは聖書とヰルギルとダンテの愛讀者であつたが、ユゴォ崇拜家晩翠に、「宗教的、もしくは越絕的感情に富めるは」自然の勢ひであらう。また、ユゴォは「藝術の爲に藝術ありてふ主義」をとらなかつた詩人

だが、「是の理想、永遠の人生に對して、進步と自由と人道との福音を唱ふるもの、卽ち彼れの詩也、彼れの詩は是の故に、哲學的なると共に宗敎也。」晩翠詩の長短所もこゝにあると云ひ、又『自然は笑ひ、人は泣く。』といふはユゴォの套語で同時に亦晩翠の套語である。『暮鐘』にあらはれた厭世觀にこれを立證する「而も潛かに想ふに、二十世紀の曙光を迎へむとする現代の詩人は、かゝる單純なる人生觀を以て、果して能く一世の人心を捕捉し得べしとする乎」とかまへてそれも卽興直感を旨とするハイネのやうな詩ならよいが、晩翠のやうな「思索的將た冥想的傾向」の詩人には幼稚の譏りを免れないではないか。恐らく晩翠の哲學思想に『何等確實なる科學的研究の上に樹てられるものに非ずして、ダンテ、ユゴォの如き詩人の詩的想像に養はれたるものに過ぎざるならむ。是の如きは、十九世紀末の詩人が其の人生觀を得たる方法としてと、餘りに簡單なる方法に非ざるべき乎。』とてテニスンのやうな保守詩人でも『六十年後のロックスレー堂』で近世的知識を調攝するの必要を認めてゐるではないか。詩は時代に適應して初めて盛んになり得るのだ。人文進捗に隨つて新理想を捕捉し、時代精神に新解釋を恒に與へてゆかなくては人心に滿足は與へられない。この點晩翠は三省する要がある、と云つてゐる。

終りに晩翠の特色は「冥想的傾向」に富んでゐる事で、如何なる短篇でも多少の冥想を含んでゐる。この點がシルレルに近い。意識的で自覺的である。冥想的だから思索的なのである。シルレル、スキンバーンの冥想的抒情詩である。故に、「托意の高」と「思索の幽」はあるが、往往自然に遠ざかつて人情に離れ、朦朧難解の弊に陷る事すらある。「甚だ惜むべきに似たり。」と論じてゐる。

この一文を讀むと、この晩翠の處女作を熱心に讀んで努めてその特色を認め、それを論理化して、よく評家の誘導と是非の判定の公正とを期さうとした心の跡がうかゞはれる。今までの詩論よりも熱心に書いてある。晩翠の特色を輪廓的にはほゞ傳へてゐる。が、畢竟輪廓にすぎない。眞率を認め漢詩調使用の所因を、七五單調打破のためとしたのも確かに一因には相違ない。が、本來かゝる成心あつてもなくても、晩翠その人の詩情そのものが漢詩調を多く使へば使ふほど鮮かに特色を發揮出來る約束のものであつたのだ。漢詩調を雇つて來てこの位有効に成功した作家は前にも後にも晩翠以外にはない。前になかつたのは考へ及ばなかつたので、これは晩翠の功績で、後になかつたのは晩翠一人の試作と、その成功とで既に要求が足りて、尚これに立脚して新

意匠を構へ、新見地を發見せんとする欲求がなかつたからで、追隨者は勿論一しきり非道に多くポエトリーといはんよりはサングとして、一高校歌の類又は「荒城の月」程度のサングの間に模擬者を見出したは當然である。藤村の詩は微吟せられ、晩翠の詩は朗吟せられたのである。

晩翠の厭世觀の陳套をあげてゐる樗牛を見ると自らほほ笑まれる。「何等確實なる科學的研究の上に樹て」られない晩翠の詩は、ダンテ、ユゴォ如き詩人の詩的想像に養はれたにすぎぬと、テニスンを引いてまで十九世紀等でない事をいさめてゐるのは、晩翠自らにとつては意外の感があつたに相違ない。晩翠は英佛獨の詩を讀めもし、讀んでもゐるし、譯してもゐるし、その詩論を紹介もしてゐるが、本質的にかれはそれらの詩人の感化を受けてをらぬ。僅かに用語や布置や形容やの上に片鱗を認めて、樗牛が直ちにユゴォ、シルレルの感化夥しいとしたは、例のかれの速斷にすぎない。シルレルとスヰンバーンとを一緒にして、その冥想抒情詩の趣が晩翠にうかがはれると云つたは、樗牛の粗笨蕪雜な讀詩法をよく物語つてゐるものである。

晩翠の詩はつひに東洋的である。その精神に於て、表現の法に於て、晩翠の讀詩は畢竟知識以上の何ものにもならなかつた。樗牛が晩翠に科學思想の究訊を望み、近世主義の洗禮を要求して

ゐるのは、樗牛が樗牛自らに要求してゐるので、晩翠の眞骨頭を認めて彼に呼びかけて要求してゐるのではない。明治三十四年七月、樗牛はまさに歐遊せんとする晩翠にはなむけの辭を送つて「歌へ、大に歌へ。理想を歎ひ、人道を愛し、進歩を信じ、無窮に進む、是れ詩人たる君が天職也。」と云つてゐる。晩翠は舟出するに際して第二集『曉鐘』を殘して去つたが、この集の批評は處女詩集ほどよくなかつた。詩風がマンネリズムに墮しかゝつてゐるといふのである。舊感の再說だといふのである。樗牛は晩翠のよき友ではあつたが、よき詩的指導者ではなかつた。我意の強い速斷的なこの好ヂャーナリストの提言は、古風なる晩翠は幾度か躑躅逡巡せしめ、局面轉回の機を握る明斷を失せしめ、徒らに舊感情に低迷し、空しくこの暴君的心友の宣言に戸まどひして、つひに外遊から歸らんとして第三集「東海遊子吟」を故山にさゝげても、これには言葉の殘骸計りがうづたかく、演舌のみが喋言せられて、第二集に殘んの香をとどめた晩翠獨得の快調も悲壯も、哀感も、高吟も、悉くそのかげを潛めてしまつた。

樗牛が晩翠詩の冥想的傾向の全形と、その因緣とを明確にする事が出來なかつたのは、かれが詩學特に近代詩の發達史に就て知識が皆無であつたがためで、最初に賞めて最後に一寸けなすを

もて、批評家の自己を落さぬ唯一の禮儀的所作と心得る、同時代批評家のひそみにならひ、樗牛も終りに強いて樗牛の欠陷を指摘せんとして、その朦朧をあげたなどは最も亂暴極まる思慮なきわざで、晩翠が朦朧といふなら、小學讀本すら朦朧といはなくてはならない。言語藝術のあらゆるものをすら悉く朦朧として斥けなくてはならない。晩翠の非を突かんとして朦朧をあげた如きは、たまたま樗牛が無意識の間にその心友晩翠の詩人的未來を奪つたやうなもので、凡そ、晩翠如き詩人は細節には拘泥するところなく、大膽不敵に天馬空をゆく趣あつて、悠々と汪々と颯爽と瓢々と、詩情の赴くまゝに自由に詩意し得て、初めてその作を完うしうるので、難解や朦朧や不自然や非人情やの聲ごときは、些かも意にとどめずにゐなければ、澁滯と狐疑と因盾とが重來してその感情は昨の大鵬の如き英姿を、忽ち燕雀の如き無殘な姿と自ら變相轉身せしめて、つひに永久の寡默に入らざるを得なくなる。樗牛のこの一言が直ちにしかく晩翠の肺腑を突いたと斷言するのではないが、當時有力の評家の隨一として詩人たる、晩翠のほとんど唯一の知己として待つたその當人の所言であれば、それらの所言が如何計り詩人の胸を刺すところが深かつたかを私かに想像するに難くない。しかも、結果から見て、樗牛のかゝる所言は正しく晩翠の航路をはば

んだ感がある。

以上樗牛の批評文を見ると、かれの全著作に於てその詩評は、その美詩史的觀察よりすらも以上に劣等のものであるが、他の散文、たとへば小說などに於てもその理論の理論の方が作品の理論よりも遙かに卓れて有價値であつたし、哲學する事よりも、哲學史の理論を闡明することの方がさきに効果をあげたなどより考へても、樗牛は畢竟思想家といはんよりは評論家であり、批評家といはんよりはジャーナリストであつた。しかも、あるひは二葉亭譯の「親ごころ」を賞し(三十一年四月)、「文學の比較研究とは何ぞや」に於て「帝國文學」記者(上田敏?)に同じて比較文學を唱道し(三十一年四月)、民族傳說の蒐集を提唱(三十一年十二月)したなどに於て十分うかがはれる如く、時代の先行者文明批評家としての文學者、卽ち最もよき意味に於けるジャーナリストとして、かれは何れの論文に於てもその特色の發揮してゐるので、その詩論も精緻の鑑賞なく該博の知識は些かも認められぬが、その俊敏な一流の讀書法で得た最新知識を活用して、飽くまでも時勢に卽して主張し切望し宣傳した上に、その幾分の價値があるので、若し夫れ細かな鑑賞に於ては、抱月にもあるひは梁川にも及ばず、文藝史的知識に於ては、上田敏に劣るところ

が多かつたであらう。それにも係はらず、かれの論策が一代の人心をとらへたのは、その華美のスタイルと、颯爽たる主張とに基く以外に、その種のジャーナリスティックの立場に立つて、天分を十分十二分に自ら悟つて、之れを發揮しつくし得たためであつたに相違ない。かれの「研究」はその歴史畫論に於ても「詩歌の所緣と其の對象」に於ても、老子論に於ても、近松巢林子論に於ても、「菅公傳」に於ても「平相國」に於ても、恒に常に時論的立場から見てのみ文學史的にも本質論的にも有意義である。樗牛全集六卷中、餘戲にひとしき日記消息や、想華小品の類はさて惜いて、流石に專門の關心を絕やさなかつた美學美術史に關する一卷は別とすると、文藝評論や史傳史論の項はつひに「時論及思索」の一卷に要約せられても敢て不可としない內容價を持つのである。

明治文學の一古典書

――「泣菫詩集」を讀みて――

一

明治文化の史的考察が初まつたのはこの四五年來の事で、雜誌「中央公論」、「解放」等が早くもその計畫を試みたが、その研究の一部册にまとまつたのも、岩城氏の明治文學史、藤原氏の敎育史、三宅氏の思想小史から解放社の日本文化史の明治期はじめ、最近頻出したその數は少くはないが、肝腎の資料にして色々の事情から、一部屬又は全集の形に於て收錄せられたものは未だ多くない。今にして蒐集せずんば終には湮滅に及ぶ恐れなしとせぬ。現に大震に於て失はれた文献目錄を見れば、在來文献夥きにすぎて、寧ろ取捨に迷ふの觀があつた德川文學資料も、一夜にして容易に入手しがたき珍品になつてしまつたものも少くないし、明治初期文學史資料も著しく減

少して來た事實が明瞭に看取せられる。「時」は價値である。明治初期遺品の如きは、在來好事家の好奇心を牽くにすぎなかつたのが、近來文化史、文學史、土俗史等諸種の方面から、爭つて蒐集研究せらるる傾向あるは、既に歷史の霧に包まれてゐるわれらの生命の母胎、明治文明の總論的並に細部的研究が、歷史的にも時事的にも有意義である事實が、いよいよ明かになつたからに外ならぬ。

二

その明治文化史の中で精神內容的感情方面を擔當する文獻特に詩歌の部面は、如何の研究狀態にあるか。國歌と俳句とに於ては子規全集が刊行せられたり、晶子全集が出たりしてゐるが、池袋淸風以後、淺香社やつゞいては新詩社、又、竹柏園や根岸派のアンソロヂーもなければモノグラフもない。子規一派の俳諧運動に燃犀な史眼を向けた概觀史もない。新しい詩の方面に於ては岩野泡鳴と、河井醉茗と、川路柳虹の斷片的研究がかつて雜誌に載つたが未完に了つてしまつた。白鳥省吾氏の研究と、福井久藏氏の詩史とが單行本唯一のものであるが、前者は資料に夥しく貧

弱の上、批評眼皆無にして、且、事實に對して拔き難き偏見が滿ちてゐるため、無きに如かざる近頃での惡書である。後者は叙述に引きずられ、批評精神の鈍弱な決點は見のがせぬが、史料をひろく集めた點は認めなければならぬ。その外には、予が大正十一年來數回にわたつて「中央公論」に分載し、近く完結する千餘枚の小研究があるが、筆者として尙資料の缺乏を嘆じてゐる事と論じ足らなかつた點ある事と以上、云々する事は差しひかへておく。

三

新詩史資料中、在來世に出たものは、島崎藤村の全集と、有明詩集と、醉名詩集と、上田敏詩集と啄木、泡鳴、鷗外等の全集があるが、與謝野鐵幹のそれは未だない。新詩社、文庫等のアンソロヂーもない。就中、出づべくして出ざりしもの、而も必ず出なければならぬ必要に迫られてゐたものは薄田泣菫の家集であつた。何が故にかく云ふか。

泣菫の詩は、明治三十年代から四十年代初葉にわたつて榮え、藤村晩翠二家並立の時期を受けついで、泣菫、有明の並立時代を形づくつたエポック・メイキングの古典書である。その特質は、

泡鳴に當年の「文章世界」で古語の濫用と罵られ、上田敏に「藝苑」でしば〳〵推賞せられたが古語の復活に特別の同時代的意義を認めた作者の企ては、詩集「白羊宮」一卷に於て殆ど完全に近い程度に成功に迫つてゐるのみか、簡單に早飲み込みする時代の愚鈍な批評家が、單に優美な感情を弄ぶものとか、古語に匿れて現代的感情を表白するの敢爲を知らぬ怯懦を敢てしてゐるものとか批評したにもかゝはらず、早くも二十年を經過してゐる今に於いて、客觀的に史觀を下して見ると、啻に古語復活の末節に於いて詩人の天稟を發揮したのみでなく、同時代の青春の熱望の中心生命を、正しく明瞭に確實に詩化してゐる上に於いて、この一卷は藤村、有明、柳村の詩、譯詩、露伴、紅葉、一葉、漱石の小說、鷗外、逍遙の飜譯及び硏究、子規、晶子、其他の歌句等とともに永久性の史價ある作品であつて、同時に、右の諸家に史價以外の絕對價に乏しいものがあるに對し、「白羊宮」一卷には、今の世にもこの後の世にも遍く時處を絕して嗜讀せらるべき絕對價がある。「泣菫詩集」は、實は「白羊宮」一卷のみでも鑑賞家の立場から云へば惜しくはないのである。が、史家並びに泣菫に興味と價値とを認めてゐるものにとつては、このたび出た泣菫詩集は「花密藏難見」を當年の「新著月刊」に揭げた「暮笛集」「ゆく春」の昔から、「二十五絃」「しら

玉姫」を經て「白羊宮」（明治三十九年五月刊）の完成に達し、「十字街頭」に收録した明治四十一二年代の後期の作品、及び著者自らクリスティナ・ロゼッティの「シング・ソング」にならつたといふ「子守唄」に及ぶ殆ど全部の作品を收めてゐる點で、この上なき便利な有意義な書である。この書は、作者自ら編輯にあたつたが故に、古典書の體裁をとるやうな事は謙遜せられたのかも知れぬが、かゝる全集の價値が、ゆつくりと樹陰で耽讀するが如き上には非ずして、好詩家の机邊になくて叶ふまじき必携の便宜書である上に存する點から見ても、全作品の總牽引を附し、出來得べくんば創作月時と、發表月時及び誌名とを目次に並記し、年代的に組んで詩感進歩のあとを一瞥して明確にしうるやうにした上に、當時の美文すなはち散文詩の類をも卷末に收め、作者の小傳と諸種の肖像をも挿み、作者自らの感懷を希くは詳記して欲しかつた。これは本書に於ては固より望蜀であるが、今後上梓せらるゝ凡ての古典的意義ある出版物の當事者に、特に語つておきたい一事である。

四

泣菫詩集の生命が「白羊宮」にある事は前に述べたが、「白羊宮」の出た三十九年代は、日本近代詩の浪曼思潮の青春時代であつた。元祿の回顧とニイチェ主義の紹介と、國家の膨脹と、個人の覺醒とを經驗した新日本人が、ロマンティックなリリカル・クライを藤村に見せ、鐵幹にあらはし、晩翠にほのめかし、而して、泣菫、有明の二人によつて一段と磨きを掛けられて、日本感情の異邦的陶醉と、古代的耽愛とを示した。すべて浪漫的なるものに通有する特性は、地處に於ては遠國の思慕であり、時期に於ては古代の讃美である。遠く遙なるものへのあこがれは、浪曼的なる詩人思想家の特質であるばかりでなくして、人間のすべての昔からなる悲願である。この哀求の浪曼的なるものと自然主義的なるものとに於て、一は端的に全生活の方向と內容とを支配し、一は間接に實證的なる步みの原動力となる。『あゝ大和にしあらましかば』は、形式をロバート・ブラウニングの "Oh, to be in England" にまねて、その精神は直に上代日本特にも寧樂山城王朝の盛時を憧憬しつゝ、現在の奈良の古都を遠望したる卷中での佳品である。

あゝ大和にしあらましかば、

いま神無月
うは葉散り透く神無備の森の小路を
あかつき露に髪ぬれて、往きこそかよへ、
斑鳩へ。平群のおほ野高草の
黄金の海とゆらゆる日

にはじまり、

石廻廊のたゝずまひ振りさけ見れば
高塔や九輪の銹に入日かげ
花に照り添ふ夕ながめ、
さながら、緇衣の裾ながに地に曳きはへし。
そのかみの學生めきし浮歩み、

の麗句、雲の如く空想を刺戟する。『聖ごころの誓しをも、知らましを、身に。』といふ結語はなくても十分に『いにし代の珍の御經の黄金文字』、「常花かざす藝の宮」の「美酒の甕のまよはし」は魂に沁み入るのである。

「望郷の歌」は、ゲエテがウヰルヘルム・マイスタアのミニヨンの歌にならつて、京の四季のうつり變りをうたつたものである。

靜かに暝る夕まぐれ、稍散り透きし落葉樹は、
さながら老いし葬式女の、懶げに被き引返へて、
物嘆かしきたゝずまひ、樹間に仄めく夕月の、
夢見ごゝちの流眄や、鐘の響の青びれに
札所めぐりの族人は、すゞろ家族や忍ぶらむ

に秋光の沈靜美を叙し、

都入りする御講凪ぎ、日は午さがり夕越の
路にまよひし旅心地、物わびしらの涙眼して、
下京あたり時雨する、うら寂しげの日短を

に冬景の靜寂美を叙した佳品中の佳品で、上田敏が「藝苑」第二號に學殖ある詩人の一例として泣菫が中古軍記類に散見する語を驅使し、西歐詩文の造詣も深く「暮笛集」にエルギリウスの第一牧歌を摸した如く、この篇はミニヨンにならつて「日本の趣味」をあらはした「新らしき日本に生いいでし舊るき花」であると稱したのは至當である。尙、かれは同誌第六號でこの詩集を評し「わがゆく海」と「笛の音」をアンリ・ド・レニエに比し、「冬の月」、「零餘子」を古代希臘サッフオオの餘韻であるとした。蓋し、各節第四行を六音に止めて「情熱更に烈しき」を感じさせたからであるといふ。

白羊宮中の長篇佳品は右の二篇で、「妖魔自我」の如きは未來の轉化を豫想せしめて而も板につかず、部分の佳句を外にして全體としては失敗作であるが、「白すみれ」の

忘れがたみよ津の國の
遠里小野の白すみれ
人待ちなれし木のもとに
摘みしむかしの香ににほふ。

とか、「をとめごころ」の

黄金覆盆子は葉がくれに
眼うるみて泣きぬれぬ。
青水無月の朝野にも、

嘆きはありや、わが如く。

の如く、「大葉黄すみれ」、「牧のおもひで」等小曲に哀調ひしと小胸を打つ名作がある。泣菫が、「暮笛集」に芽ぐみ、「ゆく春」に育んだ浪曼詩感は、「二十五絃」で詠史體の試作となり、「しら玉姫」で民謠體の習作となつたが、「白洋宮」に於て初めて獨自のスタイルに到達し、新詩創まつてこの方、藤村、晩翠になく、早稲田詩派、擬古派になかつた新詩情の鮮かな香ばしい美花を咲かせて、同時代の青年の憧れの代辯者となり、敎養ある少數者の熱望をあらはし、泣菫の個性と時代の個性と民族の個性とこれ等三個は、悉く此の一卷に凝集せらるるに到つた。明治新體詩は泣菫と有明とに於てその頂點に達したのである。

五

「子守唄」は今の童謠であるが、泣菫の小守唄は古風な民謠情緒を多分に帶びた子守唄であつて今の語義に於ける童謠とは著しく違ふ。從つて、この集が今の童謠に與へた感化は、單に選擇せ

られた微妙の語句の使ひ具合の上にあつて、その外の上にはない。泣菫の詩的特性の殘る唯一のものは民謠である。たとへば、「小隻と桂女」、「花賣娘」、「鶯と大原女」、「三の百合」がそれである。

深山樒の小枝にも、
花はほのかにくゆる日を、
日雀、日雀女、そなたには、
母御でないか、子でないか

に初まる「鈴蘭の歌」の如きは代表作である。此等の民謠にも作者の古語驅使が大膽に行はれ、古代思慕が基調をなしてゐるため、一般的にはなりえなかつたが、此形式に於ける泣菫詩感の獨創性と、技巧の冴えは認められた。又「ゆく春」の「南畝の人」に「農夫の生活の平和と苦闘と悲哀と」を歌つたのは、藤村の「勞働雜詠」と共に新詩材に率先したものとして注意すべきであ

るが、何れにもそれ以上の價値はない。「しら玉姫」中の「夏の日」に

夏の日は又もめざめた

の如き口語の加味も、七五調と口語加味とが妥當な一致を示してないけれども、試作として史的注意には値ひする。

六

泣菫詩は、その後期の「十字街」に於て「街頭」をうたひ、汽罐車を詠じ、「うつちやり拾ひ」を賦して新轉回を企て、又「死の勝利」に輓近派の頽廢詩感を表はさうとし「葛城の神」にシェリが「プロメシウス結縛」の面影を忍んで「人生の努力」をうたはんとしたけれど、それらは凡て未完成若しくは失敗に了つた。泣菫の企ては完成せられなかつたけれど「白羊宮」一卷は、日は春の白羊宮に位するの時天地開闢したといふ傳說に準じて、永遠に青春のごとく香り、無限に創

造の夥しき歡喜を與へるであらう。これは、凡そ眞正の藝術のみが有する特權である。古典の域に達したもののみの力である「白羊宮」、「有明集」、「海潮音」、此等が出て既に二昔に垂んとする。由來、人智は太古から横にはひろがつたが、縱にはある程度を越へてはもう早や進歩しなくなつたといふ論は、こゝにも極々小さい乍ら證據立てられてゐる。現代詩の蕪雜と鈍劣と低級とを感じるものは昔ゆかしきこれらの古典書に赴くことを忘れ得ないであらう。歷史を無視して結論のみを模擬せんとする、思想上個性なき思想家と自稱する輩が、文壇學界に夥しい時、詩感の必至の生命を刻苦の果てに唯一の言葉の靈に託さうとする詩の殉難者が、漸く詩林に跡を絶たんとする時、この古典書の出現には寔に二重の深い意義があると感ぜられる。

忘られたる明治佳詩

――再刻本孔雀船解題――

一

藤村、晩翠の詩が、今日なほ少年男女の唇に上ること決して稀でない。ふさはしき價あるとともに、歌ふのに便宜があるからである。その次期を代表する泣菫、有明の詩書は、稀本として幾分の高値を呼ぶことはあつても、到底一般の諷唱に堪へうるものではない。詩境の特殊性のほかに、藤村、晩翠詩のごとく易々として高唱しうる性質のものでないからである。

このデュエット二組の時代、明治詩史の中葉より末期近くに及ぶ二期の間には、これら四人の合唱團以外に、なほ妙しき歌ごゑをひびかせた詩歌の伶人が絶無であつたわけでは固よりない。それは文學史を見れば判明する事理である。しかしながら、當時文學青年の熟知せる普遍的の名

前でありながら、今日殆ど全く顧みられない文學的集團がそこにはある。これは、一般流布の文學史に於ては多くの頁が割き與へられてはゐない。その理由とするところは、その集團的生命が明星派の如く建設でなかつたからである。日本派の如く創造的でなかつたからである。しかも、一人の詩才が秀什合篇あつて、容易にその名を忘却すまじき性質のものがある。文庫派がすなはち之れである。

二

文庫派の機關雜誌「文庫」は、最初の前身を「少年園」といひ、二十年代早々に生れ出て、間もなく「少年文庫」を派出せしめ、更に二十八年早春には雜誌「青年文」が分出せられ、同じ年の夏から「少年文庫」は初めて「文庫」と改題せられた。これが十二、三年間にわたつて少青年の筆戰場となり、あるひは文壇への踏臺ともなつた文庫派の誕生である。

が、文庫は詩篇をのみその文學對象としたのでない事いふまでもない。戯曲も評論も短歌も小說も、盛んに作られ續々と掲げられた。今日の文壇に名をなす小說家、戯曲家、評論家、文學史

家で、この畑に一度び種まかむと試みたことのないもの丶方がむしろ少い位である。それは、もつとも、四十代五十代の人々についてのみいふことである。

評論家龜雄千葉江東もこ丶に記者として在つたし、塚原白龍又は久保田山百合の後身、島木赤彥もこ丶に據れば、山岳文學と浮世繪研究に於て知らる丶小島烏水もこ丶に生れた。人形研究の淸水橘村や、戲曲家山崎紫紅のこ丶に在つた時期もある事を知る者今日に於ては尠からう。むかしは、黑川(高瀨)文淵も、一柳芳風も瀧澤秋曉も、五十嵐白蓮も、葉末露子の山田壑も、一色白浪も、吉野臥城も、健夫・小牧暮潮も、溝口白羊鮫島大浪もこ丶に集まり、當年は相當の詩數を生んだのであるが、現代に於てその名をすら知るもの、これ亦多くはない。河井醉茗、橫瀨夜雨がこ丶に生れたことは周知の事實である。醉茗は今日なほ詩作を忘れぬが、旣に二十年のむかしに枯渇せる詩泉を掘りかへさむとするにすぎず、夜雨は轉じて明治初年文學世相資料の纂輯上板に心掛けてゐる。兩者ともにかつては文庫詩人として、前者はその主盟の立場に立たしめられ、後者は傷情詩風による一般嗜讀家の渇仰の對象となり、その生命誌を詩業によつて、文學史上に鏤刻した一時期を持つ人々である。が、醉茗・夜雨と三人鼎立の形をとつてゐた他の一人の詩人、

暉造・伊良子淸白の詩品については、僅かに一部の具眼者をのぞいては、當年その詩の美と力とについて、正當の言あげをなしたものは甚だ少かつたし、今日に於ては、その具眼の士が更に一層僅かになつてゐる事いふまでもなく、たゞ、當年上梓の際殆と賣れゆきのなかつた唯一の詩集「孔雀船」が、元價の十四倍以上を示し、好事家のなほ飽とところなき捜訪の的となつてゐるのは、その詩價があまりにも認められなさすぎた事實に對する反動でもあり、文學作品を離れて骨董的興味の對象となつた所爲でもあらう。

三

淸白の作詩は「少年文庫」二十七年六月號所載「あさの小蝶」前後より始まると定めて大差はなからう。いはゆるすゞしろ之舍の名に於て、三十年代に入つてより切りに長篇大作を公にした。たとへば、三十三年の「南の家北の家」の如きがそれである。當時、讀不書生と號する同じ誌上の評家（瀧澤秋曉）はこれを評して、健全にして淸新といひ冗長、新奇、輕調などの缺陷があるとも言つた。

われらが觸目したところによると、其當年淸白の詩多くは凡境を出でず、刻苦して個性ある言

葉を創造せむとして、大部分は印象鮮かならぬ冗漫凡劣の詩境に空しく低迷するものが多かつた。醉茗が多作してその少數作によつて詩的生命を斷然維持し、文庫派代表となつて、あやめ會その外の詞華集に參加してゐるに反し、淸白の名は小さき文庫の軒端を出ては些かも聞えないのである。夜雨が詩は、天下靑春士女愛誦の的となつて、その哀婉とその殉情とその淸素とを酷愛せられ、筑波根詩人の名は、實質に於ては醉茗よりも、より以上に文庫を代表してゐるかの觀があつた。由來日本的靜謐溫籍の情趣の優婉なる表現は、少くとも後期文庫に見る通性であるが、この特色に立つて、而も最も强く靑年子女の感傷に訴へるところ多き自然の內容を持つものは夜雨の詩であつたからである。

が、たへば夜雨の詩品は、同じ物の再說でなければ、同じものを時と處とを更へて同じ心境に於て觀じたものゝ續出にすぎない。その孤獨と哀傷との生活內容が、齡を加へて愈よ深刻になりまさつたならば、彼の詩は卒然飛躍を示して、さきの詩境より蟬脫して新出程に出立したに相異はないが、この躍動が彼には全然なかつた。靑春の情思その齡とともに衰へるに伴れて、老優の化粧して脚燈前に佇むの觀を見せるか見せない內に、その詩作は中斷せられて了つた。

四

淸白に於ては、幾多凡劣の試品を推積しながら、次第にその腕をみがいて行つた。三十九年五月五日左久良書房刊行するところの彼の處女詩集にして、最後の詩篇たりし唯一の小篇「孔雀船」は十八篇の作詩を收めてあるが、その中には當年行はれるあらゆる詩風の試作が含まれてをり、而もその多くは、大部分成功に近づいてゐるのである。

「漂泊」「淡路にて」等卷頭の哀情は、「不開の間」「鬼の語」等卷尾の鬼語とは反對の詩情であり、「夏日孔雀賦」に若き藤村の感化あざやかなれば、「花賣」に泣菫のおもげをしのぶべく、「華燭賦」に鐵幹の「紫」調をうかゞへば、「旅行く人」に文庫通有の淡々たる旅人情緒を見る。

しかも、「漂泊」の高雅婉麗の想像美を讃するものは、同時に、「月光日光」の浪曼的古譚の抒情的斷聲による特色ある表現美を推賞せぬ事は能きぬ。「五月野」第一聯の豐麗が示すゴシック主義は、三十年代の藤村、晩翠はいふ迄もなく、泣菫にも有明にも無い獨自の詩境である。もしこの佶崎詩風を眞劍に掘り下げて行つたならば、明治文學は異邦にも誇るに足る卓れたる浪曼藝術

を妊孕し得たであらう。「不開の間」の鬼情にもその簡勁の用語に、深き選擇と强き好惡との餘に成る獨得の詩境の展開が見られる「戯れに」のヒューマアは、作者には珍しきシニシズムとサアカズムとの片鱗が見られるが、この方面の新展望も一應考へられぬ事はない。逸作「初陣」の壯麗體には、泰西浪曼盛期の高調と豪華と情熱とのひゞきを感じる。最終に收めた「駿馬問答」は、當年唱道せられたる日本的譚歌史詩の要求に應じて作られた詩作の一であつて、太平記を新體詩風に書き下しただけに過ぎない程度の箇所と、又さういふわざと散文的に譚る詩旨を、嚴しく新體詩的約束に句切つて表現したのが、かへつて異常の効果を收めた部分とが併有せられてある。當時夥しき譚歌續出の間に於て、正しく異色ある一試作といふ事が能きる。

斯くわづかに十八篇を收めた小詩集に於て、淸白はさま〳〵の異れる詩情の建設を試みて、それら相異つた詩情はそれぞれ大部分成功の域に迫り、そゞろにその將來を想望せしむるに足るものがある。而も、世評を概觀すると、四十二年二月號「太陽」增刊文藝史中新體詩界の項で、たゞ「淡々の詩風であつた」ですましてゐるのは、卷頭一二篇をバラ〳〵と見て此無責任な一抹評をなしたにすぎず、三十九年六月の「帝國文學」で、「氏の用語は頗る豐富なるに其作多く人を動かす

の力なきは」云々と論じたのは、豐富なる語彙を連ねた特別詩風が、單なる語數夥多以上の異常詩價あるに想到しえず、又、この特別詩風に全く同感を持ち得ないものといふ言葉であり、たゞ文庫といふ小天地にあつては「白眉」であり「錚々たるもの」である事は「帝國文學」も「早稻田文學」もともに認めてはゐるが、全詩壇に於て如何の詩價があるかといふ事を考へたものは多くはなかつたのである。

世評は斯く顧みるには足らぬが、內容の優秀は一部具眼者にのみ明らかに認められてゐた。これを詩集としてみれば、僅かに十八篇を收める小册子であり、而も前半の殉情と、後半の鬼語との間には一見何らの交渉なくして、たゞ面白づくで色々習作したかの如くに見られるが、具さに省察すれば、それら大體二種の傾向は、淸白獨自のロマンティシズムといふ特色に於てかつきと結ばれて容易に分ちがたきものがある。

淸白表現の妙は、たゞに客觀の叙事に長ずるのみでなく、主觀の抒情にも長けてゐる事は、大小內容量の差は固よりあるが、あだかもキイツがオードに於ける詩才の圓滿無礙なる發揮を聯想せしめるものがあり、もし彼に順當の詩情の展開が行はれたならば、コオリッヂのごとき立場の

浪曼詩調の怪奇性を所有するに至つたかも計りがたい。それは凡て未定の問題として、既に過去の内に葬られた事である故、今さら樣々の推測を許されないが、三十九年一月號「文庫」所載「落葉の歌」などをみると「孔雀船」以上の新鮮も獨創性を見られない。あるひは、既にこの頃から詩壇よりの退出を覺悟してゐたのではあるまいか。もし、この當時尙見るべき新詩境の表白が行はれたとするならば、筆者も亦必ずや記憶してゐるに相違はなく、當時唯一の正統詩評を行つてゐた雜誌「藝苑」の鏡影錄に於ける上田柳村の心眼にも止まらぬ筈はない筈である。柳村は特に淸白を認めてゐたのではないが、新詩風には歷史的事情を斥けても、率先同感する傾向ある柳村であるから、「孔雀船」がそれ以上の壯麗を飭つた際、彼の一言を發せしむべきよそほひを示さぬといふ理は毫頭ない。所詮淸白はこの異常價値ある習作集を殘して、その精進をとゞめて了つたのである。既に努力の甲斐なしと得悟したのか、他の外的事情に纏綿せられたのか、その間の事情は淸白以外に知る事は出來ぬが、その後少數の發表作品に著しき特色がなかつた事を考へて、上述の如く自ら退壇の志望があつたらうと推測を加へる事は、あながち粗笨な考へ方といふ事は能きないであらう。

詩史は次第に移り、詩家は時とともに變つたが、「孔雀船」に盛られた詩情の正しき後繼者はつひに出なかつた。この詩風たるや、人間すべての想像生活の展開に於て見られる普遍性ある必至のもので、この詩情に對する憧憬と要求とは、如何に世界と時代とが變化しても永代不易である。しからば、この程度の業績を殘した「孔雀船」一卷を、明治全文學史中の最も注目すべき作品の一と斷ずる事は斷じて不倫ではなからう。しかも、性質から考へて、それが一試作集にすぎないものであるところに特別の興味が存するのである。

上田敏の譯詩に就て

詩を譯すことは、不可能を可能とせむとする徒なる試みであるとか、美玉を瓦礫に變へんとするものであるとかいふ一般論がむかしから行はれてゐる一方、それでは、全然佳い譯詩といふものはないのかといふと、決してさうではないのである。

オマア・カイヤムのルバイヤット譯詩はフィッツジェラルドの逸品と傳へられ、ロゼッティのギロン譯も、並べるもののない譯詩の模範と稱せられてゐる事は周知の事實である。良譯詩に、しかもば適有せられる特色は何かといふと、夫れは大體に於てその國語の表現法を重視しつゝ原詩の持味を極度に發揮せむとする企てに成功した一點である。上田敏の譯詩のごとき、正しくこの特長に於て成功した好適例であらう。

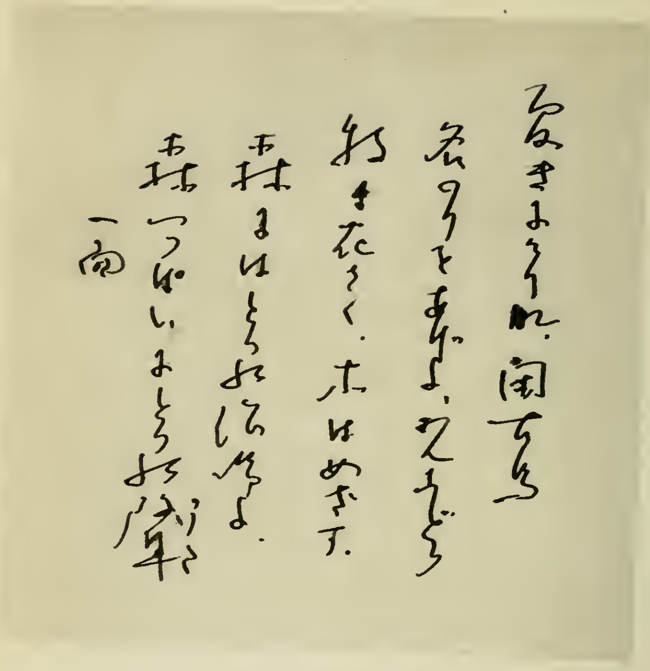
譯詩集「海潮音」を見ると、五十七章の全詩中、英吉利詩人四人、すなはちゲブリエル・ロゼッ

ティ、クリスティナ・ロゼッティ、シェイクスピヤ、及びロバアト・ブラウニングを算へるのだが、その中で特に問題とすべきは、兄ロゼッティとブラウニングとの二詩家である。

ブラウニングの「春の朝」は名譯の定評あつて、殆ど古典の名を恣まにしてゐるものである。

春の朝

時は春、
日は朝、
朝は七時、
片岡に露みちて、
揚雲雀なのりいで、
蝸牛枝に這ひ、
神、そらに知ろしめす。
すべて世は事も無し。



上田敏詩集未定稿

原詩は、一八四一年の劇詩 Pippa Passes の朝の場で、少女ピパの歌ふ小唄である。

〔From without is heard the voice of PIPPA, singing——

The year is at the spring,
And day is at the morn;
Morning is at seven;
The hill-side's dew-pearled;
The lark's on the wing;
The snail's on the thorn;
God's in His heaven——
All's right with the world!

〔PIPPA passes.〕

ある者は說をなして"that little raggel girl!"のうたふ小唄にしては言葉が高尙すぎると云ふかも知れぬが、ブラウニングのドラマは、戲曲といふても、之れを今日のわれ等が親しんでゐる近代寫實劇の約束ですべて律し去るわけにはゆかない。散文劇ではなくして劇詩の形式精神の歷史の上に立つて、飽くまでも詩歌の一樣式として創作せられたものであるが故に、作中人物が、假令へば職工であつても女工であつても、必しも現代劇に寬められるやうな實際性を作者は一圖に要求してゐるものではない。又、ある場合に、實際に於て作者自らが之れを要求しても、當年の用語の本性と劇文學の概念とは、今日の夫れとは少からず異つた形質を執らしめるに至るものであるが故に、この場合に於ても、一少女ピパが唄ふ歌であつても、この譯詩の程度の用語と內容との古典性は寧ろ允さるべきである。之れを特に口語自由詩形に飜したならば、かへつて原詩の圍氣と感觸と香氣とを抹殺し去る惧れがないではないからである。

創作としてのこの譯詩の妙味を辿ると、year, day, morn, と時間を狹めて來る描法は、一見、平凡な形式主義的ではあるけれども、原詩既に然るが如く、極めて形式的な云ひ方の間に、かへつて自由な、律動的な、活潑な結果を收めるものであつて、

時は春
日は朝(あした)
朝(あした)は七時

といふこの三句の歌ひ初(だ)しは、展開的に時間の舞臺を要約し來り、その間に、極めて律的功果ある短句の整列が、單なる羅や〳〵ながらに歌ひ澁るやうな拙劣が少しもなくて、明晰にして新鮮な感情が簡勁の語句のうちからかがよい昇るうれしさがある。若しこれを、

頃は春にして
日は朝けなりき
朝の七時に……

云々の如く譯し去つたとするときは、

The year's at the spring

云々の簡明卒直な描法の抒情聲が、散文的叙述の鈍重感をもたらし來つて、「時は春」といひ、「日は朝」といふ名詞止めの簡勁性直截性の格律的功果を失して了ふに至る惧れがある。

特に指して七時といひ三時といふ如く、確定の時間を示す法は、之れ亦一見散文的叙述の定法の場合に於ける慣例使用法の如くに考へられて、しかも、この場合に於ては、その感情を土臺にして逆に一種の功果を雇ひ來つて、明確に指示する間に一種の詩歌性抒情性を醸し出すもので、かくの如きは西詩に多くその例を見出すのみではない、

白髪三千丈　縁レ愁如レ箇長
不レ知明鏡裏　何處得二秋霜一

のやうな李青蓮の詩に於ける三千丈の形容が、淺薄な邦人俗士の間には唐人の駄呆羅の好適例のやうに引合ひに出されるもの在來時あつて見る例であつたが、勿論の事ではあるが、之れ詩を解する事を知らざるの甚しきものであつて、三千が三萬でも三十萬でも數の大小はかくの如き場合に於ては全くかまはない。長いといふ云ひ方が、只長いといふ平常平凡の云ひ方だけでは允されない場合であるが故に、たゞ長いといふ形容を三千丈といふ如き數的確定の指示描法によつて試みる間に、詩を解する事深きものによつては、三千丈といふ計量的觀念は全然泛び來らずして、長いといふ觀念に附隨して、尚さまざまな餘韻を含ませてひびき來るある物を感ずるのである。

この三千丈の詩例と七時の詩例とは、性質に於ては勿論相違はするけれども、特に數的指示をする事が必ずしも計量觀念を附隨し來らずして、かへつて描法の新趣を感ぜしめる事例としては同一と見る事が出來るのである。今一寸あたまに泛んで來ないけれども、右ブラウニングの七時と全然同一の數的功果が漢詩などに於ては、しばしば擧げられてゐるのを見るのである。

片岡に露みちて、

といふ一句は、

揚雲雀なのりいで、

とともに、特に新技巧を示すなにものも無いけれども、「片岡」、「露みち」といひ、「揚雲雀」、「なのり」といふが如き用語が純日本的親密性を帶びて、やゝその強すぎるものを感ぜしめるものがある位に、われ等平生に於ける用語例を聯想せしめる力を澤山に所有してゐる事が、この譯詩の創作的特質を強める一つの手段として役立つてゐる點に於て允される二句と解さねばならぬ。

勿論、「露みちて」だけよりも、dew-pearled の方が、白露の阿古屋の玉とばかりきらめく、vivid にして複雜なる二語連結の簡勁詩語で、原詩の功果の多大なるに如かないけれども、極め

て短かい氣息の一句の間に原詩 dew-pearled の意義とその功果とを收める事は、固より到底不可能であつて、詩に暗い單なる語學的忠實家に限つてこの様な場合に、わざわざ長たらしい直譯をして、原詩を全く讀まぬ讀者にただ退屈を感ぜしめ原詩も亦かくの如き退屈なものなるかを疑はしめるものである。hill-side を片岡は先づ最も妥當の日本的好譯語といはなくてはならない。「揚雲雀」の一語で既に原句一行をほゞつくしてゐるが故に「なのりいで」は全く餘計なつけ足しであつて、この様な場合にあつて研究者の注意すべき事項は、そのつけ足しが果して幾何の毀損を原詩に與へてゐるか、若くは原詩の云はざる語句の間に隱約のうちに、この程度の感情が仄めかされてあるかどうかといふ事である。この場合に於ては、特に著しい功果をあげたといふほどではないが、決して無用のつけ足しと稱するわけにはゆかない。

The lark's on the wing;

の一句を何故に作者が雇ひ來つたかの問を發してみれば、單なるこの小鳥の姿のみでなく、よく鳴くを本性とする、この小鳥の囀る歌聲は條件的に從屬する性質のものであるが故に、すでに「揚雲雀」の日本的香氣高き詩語を用ゐる以上、これらの小鳥にはつきものなる「なのり」云々の

日本的叙述語の從い來るは、全く日本文的自然であつて、而も同時に、原詩の趣を必しも損せしめず、かへつてこの鳥の特性をはつきりさせたとすれば、このつけ足しに難癖をつける理由は毫頭ない。

蝸牛枝に這ひ、

の句に於ては、特に論ずべきものはないが、終二句

神、そらに知ろしめす。
すべて世は事も無し。

は、ブラウニング樂生的人生觀の綜合と譯者も自註せる如く、名だゝる二句であつて、原作者の心境の簡勁な一抹描寫であるだけ、「神、そらに知ろしめす」は用語の妥當性に難はないけれども、

すべて世は事も無し。

だけでは

All's right with the world!

の積極的人生觀の焦點が十分にあらはれてゐるとはいへない。しばしばこの句は

と間違つて引例せられると學者もいつてゐるが、ウエルではなくライトでなくては困る語である。「事も無し」だけでは消極的措辭すぎて原詩の氣息の激しさがよくあらはれてゐるとは云へない。思ふに、「神、そらに知ろしめす」といふ無難な日本的語法の譯句の後をすぎに引き受けて、「すべて世は」と巧みに出は出たが、音調の關係もあり、あとがうまくつゞかないので、知つてゐて「事も無し」と調子の難なきを慰めとしてまとめて了つたのであらうけれども、正しくこの最後の四文字によりて、この好譯詩は畫龍點睛の妙味を缺いた憾みがあると云はねばならぬ。さりとてそれならば、どう云ふ譯語をあて篏めたらはよいかと云はれると、直ちに評者に於ても胸中に成算があるわけではない。ブラウニング詩中の佳品たる、この劇詩中での逸作といはれる歌の中での、特に卓れたこの春の朝の一篇に於ける特に中心となる最後の一句が、十分にその眞趣を發揮するに至らなかつた事を、之が特に好譯詩であるが故に一入心殘りとするまでである。

ブラウニングが譯詩の中で、外に注目すべきものに「岩陰に」がある。「瞻望」がある。ともに全體としては申し分もあるが、大體に於て、又は部分に於て、あなどりがたき上田敏の手腕を見

るには絶好の標本である。

これが「春の朝」ほど世評に上らないのは、一には全體として必ずしも無缺陷でない點もあるが、それよりも、前者の輕快に比して、これらが共にブラウニング的壯重と苦澁とがある點からである。一般人はとかく苦澁の情を嫌ふものである。「岩陰に」をとつてみよう。これは Dramatis Personae (1864) 中の James Lee の第七章 Among the Rocks の譯詩である。

Oh good gigantic smile o' the brown old earth,
This autumn morning! How he sets his bones
To bask i' the sun, and thrusts out knees and feet
For the ripple to run over in its mirth;
Listening the while, where on the heap of stones
The white breast of the sea-lark twitters sweet.

嗚呼、物古りし蒼色の「地」の微笑の大きやかに、
親しくもあるか、今朝の秋、偃曝に其骨を
近く横へ、膝節も足も、つきいでゝ、漣の
悦び勇み、小躍に越ゆるがまゝに浸たりつゝ、
さて欹つる耳もとの、さゞれの床の海雲雀、
和毛の胸の白妙に囀ずる聲のあはれなる。

This is the doctrine, simple, ancient, true;
Such is life's trial, as old earth smiles and knows.
If you love only what were worth your love,
Love were clear gain, and wholly well for you:
Make the low nature better by your throes:
Give earth yourself, go up for gain above!

この教こそ神ながら舊るき眞の道と知れ。
翁びし「地」の知りて笑む世の試ぞかやうなる。
愛を捧げて價値あるもののみをこそ愛しなば、
愛は完たき益にして、必らずや、身の利とならむ。
思の痛み、苦みに卑しきこころ清めたる
なれ自らを地に捧げ、酬は高き天に求めよ。

右の詩に於て、前半が特に巧妙であることをば何人もたやすく悟るであらうが、實際、前半の方が後半よりも譯しよい本質のものなのである。後半の抽象的な用語が教訓的に並んでゐるに對し、前半は爽快なる自然の描寫である。具體的な言葉が多い。自然の叙事は、これを日本的詩語にうつし出すのに、抽象的な談理的な言葉よりも、たやすく詩になりやすいからである。
特に最初の二句は全く譯詩の範圍を脫して創作詩的の美と力とを含んでゐる。原詩一行の呼吸

の長さを計つて、この程度の長さの一句となした事も妥當である。「今朝の秋」といふは純日本的語法で、しかも俳諧情趣の豐かなひびきと陰影とのあるよい言葉である。これを知つてゐる人といへども、this autumn morning をかう譯すことを一寸考へつかないものである。秋の朝といふ風に、ともすれば原詩の言葉の順序を追つて決し下してしまひたがる處である。そこを、ひつくりかへして「今朝の秋」とやつたところに、上田敏の譯詩に際する日本語彙の準備の豐富をもはせるものがある。この二句に於て、他の言葉はそつくりそのまゝにしておいても、今朝の秋を、何んとか無理して句調に難のないやうにしておいて、秋の朝とやつたのでは到底この譯詩の味はひの薄まる事夥しきを防ぐわけにはゆかない。

あるひは、この場合、「今朝の秋」がいさゝか日本語臭の强すぎる事を論じるものもないではなからう。單獨にはなして見れば、なるほど、「今朝の秋」はかなり日本文學史的臭味のつよい言葉であるけれども、この二三句の中に今朝の秋を置いて誦んでみると、いつたい、詩體は西洋詩を移植した新體詩型であり、歌つてゐるところの情緒も、在來の日本的なる詩歌のそれとは大いに趣を異にしてゐるものであるところへ、こゝら二三句の用語が全然俳文の臭味とも、二十年代の

美文とも小説とも、短歌とも異つてゐる新體詩獨自の言葉の布置であるために、ともすれば生硬な、陰影のない、趣のない、バサバサした感じを與へ易い譯詩語の一群の中で、ひとり今朝の秋が異彩を放ち、しかも、他の用語とあまりに權衡を失するほどの憂ひはなく、かへつて、この四字あるがために、他の言葉まで、親しみ深く、うるほひある言葉のやうに化してさへゐる點で、あらゆる功果をこそあげてをれ、決してこの語の用法の機會と個所とを失してはならぬのである。「歎つる」の用法も巧みであれば、「さざれの床の海雲雀」も惡くない譯しぶりである。sweet をあはれとやつたのは、日本的あはれに昔からさまざまの意味があり、（かなしも同様である。）單に哀れといふ意味をあらはすのみではない、かなり廣い意味の感動の叙聲であるからだ。但し、この場合に於て、「あはれなる」は前後の關係から考へて、一般的用法として通用してゐるところの哀傷の意が眞先きに胸に來る。これでは、假令んば如何なるあはれに特別用語例があるにせよ、この譯詩の缺點といはねばならぬ。原詩を讀んでから後に、もう一度このあはれを讀むと、さういふ風な用法にも應ぜられぬ事はないが、譯詩は固より原詩と獨立して存在すべきものであるからこの缺點は飽くまでも缺點として見ねばならぬのである。

第二節に於て注意すべきことの一つは、（他にもあるが夫れらは一切省略して）doctrine といひ、life's trial といひ、love といふごとき言葉が澤山に出て、而も、前半の描寫悉くの說明であつて、この說明をするためにのみ前半が据ゑてをかれたのかと考へると、折角の前半の巧みな詩語もさつぱり面白くなくなるやうな氣が一寸せぬではない。これは讀者中にも、相當に同感者が多いであらう。

しかし乍ら、他の多くの凡々たる敎訓詩とこれとを比較してみると、穴勝ちに談理癖の丸出しだといつてこの後半をけなし去るわけにはゆかない何物かゞ在る。それは何かといふと、抽象的な言葉を敎訓的な語法で並べてゐる間にも存するところの强い情熱と、高い信仰との氣意であつて、この氣意が直ちに讀者に感情の勢ひ猛に卒然と迫つてくる。しかも、その勁い氣意が、詩形の約束に於て言葉の羅列の間から生れる自然の妙味と合致して出てくる。云はば、表現の巧術によつて、この氣意がはつきりと他人のあたまに感ぜられるのである。たゞ、ひとつの概念を說明したのではない。それならば、枯淡な叙述になつて、何等ひとを感動せしめる何物の感情的調子をも容易に伴ふものではない。更に又、假令んば强い信仰と情熱とあつて、一種敎訓的調子の言

葉をなしても、その言葉の並列の間に言葉そのものから來る美と力とがなければ、詩的効果は生じない。篤信の宗教家の熱烈な說敎は、說敎そのものとして第一義的であつても、それが直ちに詩ではない。その說敎を詩のやうに句切つて歌つても、句切つて印刷しても、それだけで詩になるわけではない。詩となる條件を根本から缺いてゐるからである。その詩の條件は、凡そ言葉が詩と化するに至る重要の要件の本體そのものである。

後半の詩で感ぜらるゝものは、愛の樂生觀であるが、それが愛の樂生觀とはつきり書いてあるわけでは決してなく、愛の樂生觀とかういふのは、ブラウニングの他の色々の作や文章を讀んで畢竟するところ彼の篤信の根元の姿といふものは、その名を稱して愛の樂生觀といふものであると判明してから後に、さてこの後半の詩節を讀むと、明らかにそのブラウニングの心の調子が歷然と出てゐるので、さてこそ、こゝにも彼の愛の樂生觀の片鱗がうかゞはれると斯ういふ迄の事である。但し、凡そその心調が露出してゐる事はいふ迄もないが。

原詩後半の第一句は第二句と照應して全き意味をなすのであるが、第一句の强い確信の調子は第二句の old earth 云々といふ形容と相俟つて、この二句を枯淡なる教理からまぬがれしめてゐる

る。譯詩第二句に於て old を「翁びし」とやつたのは、old といふ言葉の直譯だけでは、(この場合の old earth といふ二語が十分に力強く置かれてあるために、) 不滿不足であるを免れないところから、わざと少し持つて廻つて「翁びし」とやつたので、この類の轉化は譯詩に於ては十分許される事である。但し、何でもかでも詩的になりさへすればよいといふ上から、片端から日本語的の詩語に更へてしまつてはいけない。こゝでは old の一語が十分に利いてゐるから、その利いてゐる調子をあらはすために、「翁びし」といふ變つた深い趣のある譯語を雇つて來たものである。第三句と第四句とは一つになつて、第五第六句に對照され繼續せられてゐるのである。この第三四句が一番教訓的の香がつよい。しかも、その一語一語の進み方並び方をよく見ると、(而して第三、四句全體が一つとなつて、) 一個の强い情緒が抒情詩の形に於て、言葉の功果を伴ひつゝあらはれてゐる。之れがこの二句の强味である。原詩にあつては第五句それ自らで一段落をなしてゐるが、詩情のつながりから見ると、判然第六句につゞいてゐるので、譯す上の口調の便宜上から、譯詩に於ては直ちに第六句に連接せしめて終りとなつてゐる。これも特にとがめるに及ばない個所である。實際いふと、第五句だけで、! で終る一行を形作るのは難かしいのであ

る。絶對に不能だといひ切る事は出來ないが、非常に難かしいと思はねばならぬ。それで、すぐに第六句に接續する方法をとつたのである。この二句は大してうまい譯ではない。大してうまくない爲めにこの譯詩も、初めの出の巧妙なるに感心しながら讀んで來ても、終りになると少し落膽する心持ちにならざるを得ない。原詩にあつては、こんな個所は實はブラウニングとしては普通の場所であり、且かういふ歌ひぶりの詩風は彼の本質と一致してゐるところでもあるところから、初めから讀んで來ても、最終二句に至つても、譯詩に於けるが如き氣の抜けた感じは持たないですむ。否、如何にもブラウニングらしい感激を感じる。感じなければならぬところである。

總體から見て、故に、終りに近づくほど拙劣が增して來てゐるのだが、これは上述の如く如何にも譯しにくい所であるから無理もなからう。とにかく、ブラウニングをこれまでにこなした譯詩は外には、明治文學史には絕えても見ない事は確かである。

「瞻望」も Dramatis Personae 中の Prospice の譯であり、「岩陰に」に類似した長所短所のある佳品であるから細かい部分は略してをくが、

怕るゝか死を。——喉塞ぎ
おもわに狹霧、
深雪降り、木枯荒れて、著るくなりぬ、
するの近さも。

Fear death? — to feel the fog in my throat,
The mist in my face,
When the snows begin, and the blasts denote

云々で進行する初節は、穴勝ち原詩の句語に拘らず、又、かなり奔放な譯しぶりを發輝してゐるが、譯詩としては寔に佳い創作詩的實感性に富む美と力とが潜んでゐる。中間には冗長と稀薄とがないではないが、最終の、

And with God be the rest!

そのほかは神のまにまに。

は verlaine が「詩法」最終の痛烈な一句を偲ばしめ、彼は諷刺であるが、之は正面からの堂々たる信仰の告白で、しかもこの一篇を結んで千金の重味を感ぜしめる妙句である。

「出現」、「至上善」はブラウニング譯としては拙劣に近い二篇で、前者は透明を缺き後者は迫力を缺く。莎翁、ロゼッティ等の譯詩に就ては稿を改めて述べるであらう。

ヴヰクトオリヤ文學輸入閑話

ヴヰクトリヤ朝文學といつても、こゝでは話を進める便宜上詩歌を中心にして話してみようと思ふ。

明治十年代の頃には、主として英佛文學の抄譯や意譯や飜案の類が多かつた。數からいつても年代からみても、英文學位大がゝりな長年月の輸入を試みられた西洋文學は勿論外にはなかつた。フランス文學が、直接譯で提供せられるやうになつたのは明治も三十年代末期からの事である。ドイツ文學も二十年代に漸く始まつて、三十年代末期から漸く盛んになつて來たにすぎないけれども、その感化たるや、むしろ英吉利文學のそれにも卓れた業績をあげてゐる。英吉利文學は、それならばどのやうな役目を果したか、又は、遂に何等の役目をも果さず終ひになつてしまつたのかといふと、これは凡そ文學輸入の初期時代に見る通性であるが、英文學プロパアの解釋、味

到、批判などといふ事よりも、假りに英文學を素材として、一般文學といふものを解釋し、味到し批判する方面にむしろその効果が擧つてゐるのである。すなはち、文學史的に正しい位相にすゑてをいて、一人の詩人散文家の作品なり人柄なりを、嚴密に通釋するといふ事はしばらく措いて、それよりも面白い一篇の戯曲なり、詩歌なり、小説なりを採つて、その內容を紹介して、その滋味を我文壇に濺いで、新らしく芽生へようとする文學幼芽への培養たらしめるといつた風の紹介法が、意識的なり、無意識的なりに、一般英學者の間に實行せられてゐたのである。

されば Lytton, Edward George Earle Lytton-Bulwer, Istr Lord(1803—1873) の小説を意譯するといふ事は小説家にして政治家たりしリットンの立場並にその思想そのものに大部分共鳴してあだかも自分の拙劣な創作才能の代辯として、この政治小説を飜案する事により、時代と時代文學とへの寄與たらしめようと企てた事になるのである。政治界と文學界とどちらへ強い意識が働きかけてゐたかは、個々の譯者について一々場合が違ふけれども、多くは政治の方が主であつて、文學は從の關係になつてゐたのである。が、文學本位に考へてみると、意識か無識かに於いて、一般に文學そのものゝ內容の豐富に志したものと解釋して差支へはないのである。同様な

事は Beaconsfield, Benjamin Disraeli, Ist Earl of (1804—1881) の文學輸入の場合にもいはれるのである。細かに見てゆくと、明治初期輸入の英佛政治小說にも甲乙丙丁の階級はつけるが押し並べて文學的に低級であり淺薄であり、陋拙であり卑俗である、筋の運びのためには不必要な場面をも飾つてみたり、人物の性格をば作中のヤマを拵へるために、中途で歪めて見たりするやうな事をも平氣でする。興味が本位であり、同時に又、政治意識が主であつて、文藝作家としては副の立場にある事、所謂大衆文學、通俗文學、煽情文學と呼ばれるものと全然同一である。この點今日のプロレタリヤ文學は、非常によく明治十年代の政治小說に似てゐる。判りがいゝ安價な感激性に富んでゐる。大ざつぱな書きつ放し文學であるなどの諸點を見ただけでも、あたかも半世紀すぎて衣を更へて再來したのではないかと思はれる程に似てゐる。今日、あの頃の政治文學を漁り讀む者は、專門の文學史研究家を除けては、明治物好きの讀書家か單なる小說讀みが土俗的玩具を翫賞するやうな調子で一寸讀んで見る位にすぎないので、その藝術的價値の低劣な事はいふまでもない。德川時代にあれ程立派な文學を產出した日本人が、西洋開化の影響をうけて、かへつて此やうな幼稚なる劣等極まる、原始的作品に立ち歸つたのが如何にも不思議なやう

にも感ぜちれるほどである。が、之は別に不可思議でもない。とかく改造期といひ建設期といふ時代には、一技一能の卓れた藝術の士は迎へられず、解せられぬことを知つて山林に逃遁して、隱士のやうな生活を送るでなければ、市井にかくれて牙籌でもとつて前垂掛けで暮してしまうやうな場合が尠からずある。そして、表面的の外部的の建設が一般大衆の氣になつてゐるので、政治上社會上の問題を矢鱈に扱つたもの、その方面の感激を無暗に粗笨に扱つたものが一般讀書界に受ける。小說や詩歌など今まで讀みもしなかつたものまで、政治的經濟的社會的關心からしてつい小說を讀みだす事になる。さうした讀者が增加して、在來の讀者は昔の作品を讀みかへす方に廻つて仕舞ふといふ段取りになる。明治十年代にもてはやされた須藤南翠の「新粧の佳人」とか「綠簑談」とかいふ政治小說を、讀者が一たび大正三年十二月號「改造」所載金子洋文「赤い湖」と比較してみるならば、性格の無視と群衆描寫の拙劣と、幼稚極まる感激と安價なる英雄主義感情と以外には、兩者ともに何ものも所有する處なく、それらの諸點で誠によく類似してゐる事を發見するであらう。只、洋文よりは南翠の方が、日本文を作る事が遙かにうまい位が相違の點である。

この時代に出た「新體詩抄」は今の新らしい詩の元祖であるが、大部分は譯詩で、原作者はShakespeare, Longfellow, Tennyson, Gray, Kingsley, Campbell などがあり、それらの作者の作品を調子も意味も陰影も無視して、ただ夫れ七五調風に唱ひやすく引き直したものがその大部分であつた。が、選び出されたものは、Tennyson ならば「輕騎隊進撃の歌」とか、Campbell ならば「英國海軍の歌」とかいふやうな軍歌風の song が多いからしてまだよいが、これらの軍中歌でなかれば Longfellow の俗解にたやすい「人生の歌」か、詩ではくろうとにも素人にもともに喜ばれる Gray の「墳上感懐の詩」などであつて、この種目丈けみても當年の嗜向の特色がはつきり判るのである。

初めて立派な譯詩が文壇に出現したのは、明治二十二年の八月の「國民之友」に掲載せられた「於母影」といふ十七篇の譯詩作詩集で、譯者は森鷗外その他であり、英獨漢詩の飜詩が交つてゐるが、Byron のごときは Manfred の一節を漢譯して原作の意義と字句と平仄韻法までもうつし取つてゐるのである。二十七年に博文館から出た「歐米名家詩集」(大和田建樹輯)三卷には英米獨詩百四篇を譯集してゐるが、譯しぶりは拙劣であるけれど、これだけこの當時に集めたのが

珍重された。又、内村鑑三の「愛吟」にも、高橋五郎の「英獨詩文研鑽」にも、「短篇詩集評釋」にも譯詩があるが、これらは三十年代初期である。三十三年代になつて評釋や譯詩が俄然と增加した。二十八九年この方上田敏が近代英詩佛詩を紹介した結果が今や漸くあらはれたのである。が、近英文學の中でも、浪曼時代の詩歌は多いが、特にヴィクトオリヤと限るとさう澤山にない。三十四年に出た上田敏の「文藝論集」と最近海外文學二冊との二種の本は今日讀んでも益するところが少くない。彼の紹介で初めて近英詩人の名を知つた人が多かつたのである。小野竹三の「英米名家詩抄第一集薄もみぢ」(三十七年)のごときは三十五年に出た「英詩文評釋」(坪内逍遙)の感化から生れたものであり、山縣五十雄の「英詩研究」といふ評釋書も(上卷は三十六年夏、中卷は同年秋、下卷は翌年春出版)この風潮の結果である。若月保治の「三人の歌女」は英米名家詩抄第二集として三十八年春に上梓せられてゐる。

この三十三年代に輸入せられた英米詩歌は、ヴィクトオリヤ朝よりはむしろ浪曼期に多かつた。そして、浪曼期詩人もヴィクトオリヤ詩人も、ひとしなみに近代詩人として受けられてゐたから、特にヴィクトオリヤ朝といふ時代區劃の意識は、凡ての人々にはさう判然となかつた。それほど

文學史的纎細な自覺を持つ人々は寥々たるものであつたのである。若しありとすれば「海潮音」の上田敏位なものであつたらう。山縣五十雄の三卷本には Browning, Tennyson, MacCarthy, Willis, M. Howitt, Kipling, Trench 等のヴヰクトオリヤ朝にぞくする詩人が評釋せられてゐたが、數から云へば、Shelley, Wordsworth, Southey, Hemans, Mother-well Campbell, Hood, Cowper 等の浪曼詩人のそれが多いので、その當時無暗に拙劣な譯詩を續出した人に、木村鷹太郎と小原無絃とがあり、木村鳴潮は Byron に限つてゐたからまだよいが、無絃は Scott でも Wordsworth でも Rossetti でも Burns でも Byron でも Hugo でも、何でも手あたり次第に亂譯して、而もその調子が千篇一律だつた人で、「西吟新譯」とか「ロセッチの詩」とか「ユーゴーの詩」とか「バーンスの詩」とか「海の詩」とか「花の詩」とか「虹のかげ」(英米名家詩抄第三集)とかいふ譯詩を澤山試みて殆ど全て失敗してゐる。

「海潮音」には Rossetti 兄妹と Browning とがヴヰクトオリヤ朝詩人を代表し、前者の「小曲」と「春の貢」、後者の「岩蔭に」「春の朝」「瞻望」などが傑作譯詩として推賞せられ、今日に至るまで愛誦せられてゐるが、その時分のヴヰクトリヤ詩人の譯詩で今日に殘るものとてはこ

の上田敏の外には一人もない、關露香が「詩人と戀」(三十四年)を出して Byron, Shelley, Burns 等の戀を談つても迚々しい拙劣な紹介であつたし、畔柳芥舟が「ラファエル前派解說」(三十六年)を試みて Rossetti 等の運動を說いても、史的準備知識のない漫然たるしきうつし風の紹介にすぎなかつた。

要之、明治時代は四十年代五年間を入れても、何等まとまつたヴヰクトオリヤ朝の史的研究は出でず、人は莫然と浪曼期の連續くらゐに考へてゐたにすぎなかつた。移植せられた譯詩とても上述の上田敏の外には蒲原有明が Rossetti 數篇の譯詩で、上田敏に對立する譯出の妙を示したに止まるだけである。この有明の譯詩は、まだ人多く之れを云はぬが推賞すべき譯し振で、兩者ともに Rossetti に於てその絕妙を發揮してゐるのも面白いが、やはり之れはヴヰクトオリヤ朝詩家の中では、此詩人が一番よく日本人の胸にも響き、又それを傳へ易い時代であつたにもよるのであらう。Swinburne などになると、韻律の宏大壯重の一點が最初から飜譯には不向きだから人も手をつけないし、Tennyson は一切り時花つたほどもてはやされなくなつてしまつたし(それには相當の根據があるのだが) Clough や Arnold, Thompson や Browning は思想的の共鳴

者が日本人の間には尠いし、旁々もつて Rossetti がその繪畫的特色とその藝術主義とに於て、若き日本人に好んで嗜讀され、且之を移植しやすいと信じられたものであるらしい。果して Rossetti がたやすくて、Swinburne が難事であるかは、實は判然と定めがたい問題なのだが、譯出の業に比較的成功した上田敏、蒲原有明の二人が、Rossetti により近い距離の感情の所有者であつた事だけは事實であり、Swinburne よりも Rossetti に於て實際に愛好者が多かつた事も亦疑ひなき事實である。

紀季文學輸入閑話

英吉利語を通じて歐洲文學が味はれた時代――明治三十七八年以降大正も四五年頃迄（勿論その前後とても行はれた事はいふまでもないが）この間に於て、何が正確に熱意を持つて移植し輸入せられたであらうか。

自然主義文學の全盛時代には、Flaubert, Maupassant, Zola, Goncourts, Daudet などの名がさかんに叫ばれた。五十錢本の英譯紙表紙 After-dinner Series のモウパッサンが丸善の棚を賑はしたのは此頃でてる。モウパッサンは多く三遊亭圓朝により明治も二十年代に「名人長次」といふ和名に改籍されて高座に上つた事があるが、怪しい英語とそれにも增して怪しい日本語の力で木片を嚙むやうな譯文小說として、モウパッサンがあらゆる新聞雜誌のうめ草になつた時代に於ては、この佛蘭西小說家の藝術を鑑賞する先きに、一般讀者は elotic 興味の pornography で

も讀む野心でかの短篇小說に向つたのであつた。今にして思へば、モウパヽサンの淫褻記事の如きは何んでもない只事である。廣津君譯の「女の一生」が何萬と賣れたのは十年程前の事と思ふが、今のモダン兒女は、かやうなものでは何の刺戟ゝ感じなくなつてゐる。

モウパヽサンがこんな原因でもてはやされても、その師匠フロオベエル の大小說は一向に歡迎せられなかつた。淫褻がないからに外ならない。（淫褻に全く筆がわたつて居らぬわけではない。elotic を叙して美しい描寫に成功してゐるものに Madame Bovary がある。巴里の公苑を轆々ときしり去る馬車の中から、ふと投げ棄てられた紙片が秋の蝶のやうに、ひらひらと路傍に舞ひ落ちるあたりの一節を人は記憶してゐるであらうか。）日本の自然派文學はいろいろの點で硯友社文學から一大飛躍をなしみたけれど、その運動は一面多大の缺點が伴つてゐた。佛蘭西自然主義や、獨逸輓近派小說や、英吉利紀季文學を紹介した事はしたが、少くとも大正初期迄の出版界には、ひとつとして完全な佛蘭西近世文學史も公けにされなければ、纒つた獨逸輓近文學運動史も上梓せられなければ、批評ある世紀末英文學史に就ての著述も出なかつた。モウパヽサンやゾラを移入するなら、ゴンクウル兄弟やドオデも輸入しなければならぬのに、これらは一向に顧み

られなかつた。その當時の小說家や文學靑年が僅かに英譯で讀んでみた位である。況んや、フロオベエルより Ralzac, Stendhal と溯つて近世寫實小說の系統を考察するやうな事はとんとされなかつたので、今日に至る迄これらの巨人の大作の好本譯は一向に出ない。影響もない。

英語で佛蘭西小說がもてはやされたに引きかへ、獨逸輓近小說は、紹介者があつても深い同情と理解とで行つたのでもなければ、それらの英譯本も極少いので、これはHebbel, Ludwig, Freytag 以降 Linddau, Tovo'e, Blaibtreu, Alberti, Kretzeer, Sudermann, Bahr, Holz-Schlaf 等名のみ傳へられて、實際には譯された數は寥々たるものであつた。それにも增して英吉利小說はいはゆる Mid-Victorian の中庸小說が詰らないといふ先入感が固執的に這入つて仕舞つてゐるので、今日でこそ悉皆ゆる高等英語學科の教科書に採用せられてゐる Thomas Hardy すら、その響はほんの一部の人々が耽讀するにとどまつたのであるし、Henry Harland にせよ Hubert Crackanthrope にせよ、George Egerton にせよ、George Moore にせよ、Jane Rarlow にせよ、Arthur Morrison にせよ、Richard Whiteing にせよ、Henry D. Lowry にせよ、Ella D' Arcy にせよ、William Maugham にせよ、Israel Zangwill にせよ、J. M. Barrie に

せよ、Jan Maclaren にせよ、Francis Adams にせよ、Cunninghan Grahan にせよ、同時代作家の何人もが叮嚀に妥當に紹介移入せられるやうな事がなかつた。今日、駈け出し英米青年作者まで事々しく紹介せられ、英雄化されるに比して寔に雲泥の差がある。その原因について、當時一流の皮肉屋は、今の（即ちその當事の）小說家諸君、文學青年諸君には、英譯大陸物は文章がやさしくて、どうやらかうやら誤間化して讀過出來るけれど、本國物は中々言葉が難解で歯が立たないから、それで讀まれもしなければ、紹介もかつがれもしないのだと言つた。これは皮肉な觀察で、確かに當年の小說青年の缺陥を突いた評には相違ない。しかし、畢竟はついに一面觀にすぎないのである。言葉がよしんば難解でも、彼等の求むるものが强烈に完全に出てゐるならば、强いて困しんでもかぢり着いたに相違ない。それをしなかつたのは、（少數の英語に堪能な紹介家までも敢て手を出さなかつたのは、）彼等の求むるものの資格を十分に備へてゐないからであつたからに外ならぬ。

今にして考へると、當時英吉利は大陸文學移入の時代で、佛、獨、伊、露特に佛蘭西の自然派から强い感化を受けた時代であり、Crackanthorpe の Maupassant に於けるがごとく George

Moore の Zola に於けるごとく、要するに佛蘭西文學模倣時代の觀があつた事は日本と大差がなかつたのである。（たゞ時代として二十年の差があつた。）それ故に、同じ傾向のものなら、模倣物よりも原物に赴きたい志向があり、實際あらはれる作家の價値も、佛蘭西の代表作者の代表作の方が、英國青年小說家の代表作より卓れてゐる事はいふ迄もないので、ひたすら英譯を辿つても、何んでも佛蘭西本山に參ぜんとする傾向を示したのである。語學としても、當時は佛蘭西語を解する者は僅少であつた。その僅少な佛蘭西語家が文學の畑に入つて、ゾラやモウパッサンを云々しても、識見や鑑賞が低劣で讀むに耐へないので、彼等はその後の露西亞語家の露西亞文學紹介ほどに世間受けがよくはなかつた。そのくせ、識見の程度は兄たり弟たり難い程度の低劣であつたのだが。

露西亞文學に到つては、二葉亭死後全然人がない。しかも要求が著しいので飜譯に紹介に日露戰役この方、輸入し再說せられたその數は夥しい量に上るのであるが、文學史的研究も祖述の域を今日全然出でず、飜譯も一昔前に比べれば些か上手にはなつたが、まだ四迷の糟粕をなめるにも足らぬ駄文家の集合にすぎない。下手な直接譯の Turgenieff を日本語で讀まされるよりも、

假令んば誤譯の個所がたまに在るにもせよ Garnett の英譯文の文章らしい方を愛したくもなれば、タドタドしい中學生文章の直接和譯文 Tolstoi に赴かんよりは、むしろ熱心なる A. Maud の英譯文に參ずるの無事なるに如くはない事になつて、一册の飜譯小説が出ると、その英譯本が競つて丸善で賣れるといふやうな現象が生じたのであつた。

いはゆる九十年代 Eighteen-Nineties は日本で明治の二十年代に相當するが、Oscar Wilde の伊達や Max Beerbohm の風流が傳へられた頃、日本はまだ紅葉の「色懺悔」一葉の「たけくらべ」露伴の「五重の塔」の時代で、その二十年代も末つ方に、雜誌で云へば、「國民之友」、「早稻田文學」、「しがらみ草紙」、「帝國文學」、人で云へば森鷗外と上田敏などによつてほんの紹介的に大陸及び英吉利の世紀末文學者の名前が喧傳せられ初めた頃であるにすぎないのであるから、自然派文學全盛の明治四十年は恰も一九〇七年に相當し、彼方では今日の西歐文學の中堅作者等が、そろそろ筆に油が乘り初めた頃で、時代は英吉利ならジョオヂ王朝に移つてゐるのであるから、全く比較はとれないのである。

紀季英詩人の中でも、Lionel Johnson, John Davidson, Francis Thompson, Ernest Dowson,

William B. Yeats, Oscar Wilde, A. E. など鐵中錚々の名と實とがあつたのだが、これらが傳へられたのは明治二十年代末から三十年代にかけてで、實際に紹介されるに至つたのは四十年代から大正初朝かけてであるが、詩壇に深刻な影響はついになかつた事、モウパッサン、フロオベエル Anatole France などの名のみ小說界に傳へられて、その法風が傳火するものが全く無かつたのと全く同一である。

要するに、明治末期日本の西歐紀季文學輸入は、地上三尺の上を通りすぎた空ッ風にすぎなかつた。地上に根を下した、高く天上を指さしたその種の作家はついに生產せられるに到らなかつた。自然主義の理論と實際とは、更に今一度正確と熱意とを以て試みられなければならない。Neo-romanticism の感情と體系とは、更に今一度正確と熱意とを以て考索を試みられなければならない。Imagist と云ひ、Expressionist といふけれど、Symbolism の理論と歷史とが如何に淺薄に解せられ、如何に上のそらに受取られて現に居るかを考へれば、若き日本の文學界は、まだ西歐世紀末文學の洗禮さへ碌々に受けてはゐないかと、つひ攻めたくもなるのである。

今日の、自ら急進派を以て任じる青年文士のたまたま理論やその創作を見ると、彼等が新らし

いと信じてゐる事は、とうの昔に西歐紀季文學の中で、散々に經驗せられ繰返された事柄で、只彼等のみが認識不足、歷史知識不足のために彼等にのみ新らしく感ぜられるので、さてこそ一般的にも新らしがらうと考へて、新派を以て自任もすれば、この作者にはふさはしい程度の讀者がその周圍にこびり着いて、爰に一團の自稱新派文學が成立してゐたにすぎない。彼等の感覺も、彼等のノンセンス振りも、彼等の自暴自棄も、彼等の伊達も、彼等の風流も、彼等の表現も、すべて皆世紀末に於いて確かに人類は經驗して來たのである。問題は、一旦經驗せられた諸現象の新時代的再採擇が、如何に自然に密接に人格的に行はれうるかといふ事である。(但し新興の無産階級文學には、とにかく一通りの理論と建設志向とがあると認められる。要は、その文學論的存在理由につき嚴正に考究を施して、その普遍性の範圍の可能につき論索すべきである。徒らに彼等の吹き鳴す草笛に狂舞するは、理智と認識とある青年のとるべき道でない。)新らしい物を好むものは、古いものの歷史を一通り調べ上げてから聲をあげないと、とかく赤恥をかき易いものである。

新詩史上森林太郎氏の立場

一

明治の文藝史を顧ると、類に於ては相當な偉材で送り出されてゐるが、其中には凡て史上人物の然るが如くに、時代の波の起伏のかげんで實價以上に評價されてゐる人や、その反對の人が少くない。いろ〳〵の時代のハンディカップを取り除けても、尙且眞正に群を拔いて聳立する大才永久性と普通性とのあるものが果して幾人あるであらうか。文豪といふ威めしい言葉も、此頃では餘程安賣されて來た樣である。これはひとり內國の文人に對してばかりではない、外國に對する邦人の評價からしてが少からず輕卒になつて來てゐる。大した俊銳でもないのに、その人が死んだが故に、文豪といふ稱號を奉るよい加減さは、死人に對して美女の名を奉る新聞記者のさかしらと類似の心理から出發してゐると見て大過はない。外國人なるが故に、なんでもかんでも文豪

にしてをけば間違ひはないといふ出鱈目と類似の經薄だと考へても大差はない。それで、近頃では、世界的云々といふ稱號に移つた。これにも、嚴密に情吞すると、實はよい加減なものが多いのである。

このやうな偉材に對する出方題の評價が行はれる今代に、森さんの如き性質の人の業績を一般に向つて、正當に批評することは、そこに二種の難關が伴ふのである。一般人にその業績の本質が知れがたいといふことはその一である。最も重視すべき究學結果が、中途にして死去のために完く發表され了らなかつたことはその二である。

森さんの文章は、本質的に、古典主義的精嚴と明確とを所有してゐた。明治の文人で、この人程明確な表現ある文章を書いた人は一人もない。一字一句をいやしくもしない事はいふ迄もないが、只凝りに凝るといふのではなくて、我が思想感情を、如何にして明確に妥當に表現せんかといふことがその努力の大部分であつたらしく思はれる程である。その文章は簡勁である。一絲も亂れない。氣品が高い。寸分の無駄すらない。それでゐて含蓄に富んでゐる。余情が深い。清醇がある。而して、それらの秀れた特徴が明確といふ一點に束ねられてゐるのである。

この文章は、誠によく氏の人格の全部を語つてゐる。隨分ロマンティックな文章や取材をも好んで扱つたが、その本質はクラシカルである。クラシシズムといふ意味が、この人の文章に於て初めて具現されたのである。その文章はクラシカルの明確であるが、その人となりには科學者としての教養が感化されてゐることも忘れてはならない。森さんの實證哲學は、その科學者としての一面に由來するものであり、その文章に表はれた明晰といふ特質は、やがてその科學者としての半面に由來するものである。こゝに氏の立場の一つがある。

その文章はかくの如き適確さがあつたに係はらず、その人格と同じく俗人には近よりがたいあるものがあつた。これが、紅葉、漱石、樗牛、獨歩などと反して一般的になりえなかつた原因である。精讀して見れば、決して深遠な屈曲せる思想を背景とする小說許りでは決してない。が、どうしても一般的ではなかつた。いふ迄もなく價がないとは思はれぬ。自然主義時代は、それで隨分罵詈されたものであつた。氏もそれを氣にしない樣な顏をして、實は氣にかゝつたので方々でやり返してゐる。洋行から歸つて「舞姬」を公けにし、續千駄山房文の該博、精到、明知、强靱な批評や紹介やを以て文壇を風靡したが、硯友社の末輩末社が大部分をなす文壇そのものに、ど

の程度迄あの文章の澁味のある持ち味が解されたか大いに疑問である。晩年には考證に力をそそいだが、「山房札記」その外の、かの類の少い精緻な考證振りも、その方面の興味あるもの以外には味はれなかつた。唯一の普及された書といはれる「即興詩人」とても、實は、高級な一部の讀者に眞黑くなるまで讀まれたにすぎぬのであつて、同じ書でも、紅葉好きの小說讀みの書棚には奇麗な顏をさらしてゐた。紅葉は小說好きに好かれ、獨步は素人に好かれ、漱石は隻方にまたがつてゐたが、氏のみは、文士のための文士であつた。

森さんは何をやつても余裕が綽々餘りあつた。「あそび」といふ小說の中に出て來る木村といふ小官吏の仕事ぶりを、同輩が「君は遊んで仕事をしてゐるやうだ」と評する。が、その木村は役所でずば拔けた。仕事に忠實な者であつたのである。氏も亦、人生の御役所で稀に見る格勤者であつたが、その仕事ぶりには恒に悠々たる余力があつた。獅子は兎を打つにも全力をそそぐといふ事が事實なれば、氏は獅子を打つにも悠々余力を殘してこれを行ふた人であつたと言はれよう。氏の小說を見ると、それが極端に出てゐる。「苦腦」を好む、「必死」を好む、「眞摯」を好む今の人々には、どうしてもそれがもの足らぬのである。今代小說の理想から見ると、寧ろもの足らぬ

のは當然である。森さんのあの種の小說の存在理由を肯定してかゝらねば、讀んでも面白くないのは當然である。然し乍ら、森さんの一生を顧みて、その小說に及ぶと、その各が立派な役目をして立派な存在を主張してゐるように私には考へられる。

二

明治の新詩は、詩のよく判らない全くの素人らによつて創設された。詩の判るセンシブルな人々は、あの生硬な幼稚な詩體を考へ出すことなど思ひもよらなくて、又、素人らが創設したのを見ても、てんで讀む氣がしなくて、立派な傳統の上に立つて、然し乍ら次第に頽廢に瀕してゐた漢詩や短歌や俳句の方專念してゐた。いつでも革命の第一人は素人である。傳統美の値を知り拔いた人に、流血は必ず豫想しなければならない革命は出來ない。破壞の犧牲に想到すると、革命的方法を避けて、漸進主義に傾きたがるからである。

明治十五年四月、矢田部良吉、外山正一、井上哲次郎三人の合著になる「新體詩抄」が公刊されて、いはゆる新體詩の事實上の創成を見たのであるが、その先蹤はその前年に文部省音樂取調

掛によつて刊行せられた「小學唱歌集」三卷に見るべく、更に古くは明治二年刊行福澤諭吉の「世界國盡し」にも明治六年の「暗誦十詞」にも見られるが、これらとかれとには、創作心理内容に一味の差異があることは見てかゝらねばならぬ。いはゞ、「新體詩抄」迄のは、明治以前の長歌、今樣の類の形質的繼承にすぎぬのであるが、「新體詩抄」は、それらの上に立つて新らしき精神を盛る新らしい形式の創造の熱望に驅られてゐた。たゞ「小學唱歌集」のみは、西洋の樂譜に合せてサングの模倣を試みて、此種の歌唱のうたの第一聲となつたもの故、「新體詩抄」に並べて特別の意義を認めなければならぬ。

その「新體詩抄」とても、たゞ新らしい精神で、新らしい形と覺しきものを拵へたといふだけで、事實は在來の今樣の類と大差のないものであつたのであるが、取材の方面に、或は材料の扱方の上に新味と云へば云ひうるものがあつたので、しかも創作はたゞ五篇で、他の十四篇はキャンブル、テニスン、グレイ、ロングフェロウ、キングスリー、莎翁などの譯詩であつた。しかも、譯詩作詩、押し並べて外形律の約束に左右されて、心のリズムの柔軟性を失した技巧の幼稚さであり、うたはれた思想感情の詩人の作と思はれぬ、概念的な歌ひ方又は解し方であつた事は爭はれ

ない。寧ろ、その後に出た明治十八年刊行湯淺半月の「十二の石塚」の方に、本質的な詩念の自由な活動を見るのであるが、總じてその後明治二十二年頃までは、十九年刊行合本「新體詩歌」の類のアンソロヂーが出て、「新體詩抄」的精神がいよ〳〵普遍され、一般化されて來たといふにとどまつてゐた。ただ湯淺半月のみは、明治十九年二月十五日に創刊された雜誌「國民之友」にしばしば注意すべき小詩を揭げてゐたし、山田美妙も、夙く詩歌の方面の新開拓に志あり、紅葉、九華等と合著の「新體詩選」が明治二十年に出版され、又、同年に雜誌「以良都女」を創刊し「女學雜誌」や「國民之友」にも切りに新詩謠を寄稿してゐるだが、その作品には重視するに足るものはなかつた。二十一年の五月に硯友社の機關となつた雜誌「我樂多文庫」があらはれて詩欄も設けられたけれども、硯友社そのものが、領土には性質的に無緣であつたから、これも亦注目するに足るものは殘してゐない。畢竟するに、創草時代の新體詩は、提唱者の精神として「平常の語を少しく折衷して」よく「吾人の心に感ずる迄を吐露す」るといふ企ては、可なりの程度まで達せられて來たのであるが、新詩にたづさはる人が詩人でなかつたから、終に佳作を生む事は出來なかつたのである。尙、落合直之の「孝女白菊の歌」は、二十一の東洋學藝雜誌に揭げられて奎

國愛誦の的となつた。

三

處が、明治二十二年八月發行「國民之友」第五十八號の夏期附錄にＳＳＳすなはち、新聲社同人の手になる譯詩「於母影」が收められた。森鷗外、落合直文、小金井喜美子、井上通泰等の手になつてゐるが、どれを誰れの作かは今以て明かでない。さきの「新體詩抄」が英詩を紹介せるに比し、これは英詩のみでなく獨詩をも飜譯し、すべてこれは抄譯し、意譯し、直譯し、音譯し、飜案し、あらゆる點で異邦詩の形質の上の移植を試みたので、詩史の上に特別の功業のあるものであつた。森さんの詩才がどの程度まで現はれたかは、惜しい事に詮索する事が出來ないが、時代に一歩進んだ新創造の材器あることは、はやくこの譯詩の上に十分あらはれてゐる。

「於母影」に就ては、再刻「水沫集」の序に氏は次の如く述べてゐる。「何の方針もなく取りて何の次第もなく集めたるものなれど、社中の人々がしのばずの池に臨める樓上に夜を徹して、此の一卷を編み成しし時を憶い起せば、毎篇毎闋毎句毎字。一として深き感慨の媒ならぬはなし。

就中、カプリ島上の喇叭の響を傳へし落合直文氏のみは、早くも亡きひとの數に入りぬ。」この詩叢には英國でバイロンと莎翁、獨逸でレナウ、ゲエテ、エルマン、シェッフェル、ハイネ、ゲロック、ケルネル、フェルランド、ハウフがあり、それに高青邱と平家物語からの當代詩體譯が添へてあるのだが、中で、ミニヨンの歌の第一節をひくと、（小金井きみ子譯詩だが鷗外の紫黃が十分加へられたものと認める。）

「レモン」の木は花さきくらき林の中に
こがね色したる柑子は枝もたわわにみのり
青く晴れし空よりしづやかに風吹き
「ミルテ」の木はしづかに「ラウレル」の木は高く
くもにそびえて立てる國としるやかなたへ君と共にゆかまし

といふので、從原作之意義及字句考と後に註された譯詩であるが、循套の形式をはなれて、自由な文語體を典雅に使用したこの譯詩は、後進の典據となつたものである。その外マンフリッドの

和譯及漢詩などゝ、靑邱詩の譯業とともに、悉くいはゆる鷗外式の宏才博知を示す一例であり、鑑賞の確實性を表はす一證である。

此「於母影」を揭げた當年の「國民之友」は明治詩史の上では舊「明星」と並んで詩歌に與へた功績の上で二大標目をなす雜誌であつた。前にも書いた通り、「於母影」が揭げられる前から、此雜誌には美妙が書いてゐたが、その他獨逸詩人の作もこれと前後して誌上に揭げられ、北邙散士、湖處子、梅花道人、殘花、操山、磯貝雲峰等その後詩壇に活躍した者皆一度はこの詩上に詩を練つた。(其年十月「柵草紙」が發刊された。)

四

森さんの作は、その後又途絶えて了つたから、つゞいて作風が變遷してゆく模樣を叙述することは出來ないが、當時詩壇に一番活躍してゐた美妙が、二十三年末から四年にかけて「國民之友」に連載した「日本韻文論」は、新體詩初まつて以來、最初の論難辯駁の中心となつた。その批評家として石橋忍月や、內田不知庵に伍して論陣を張つたのが、森鷗外當年の千駄山房主人であつ

た。明治二十九年發行論文「つき草」の中に收められた「美妙齋主人が韻文論」といふ一文がそれで、もと、二十四年十月の「國民之友」に掲げられたものである。美妙の此論が出ると、忍月が「柵草紙」に美天狗といふ名で「韻文論をあざける」と題して批評を試み、次いで「國會新聞」に「美妙齋に與ふ」を掲げ、不知庵は「國民之友」に「美妙子にあたふる詩辯」を「國民新聞」に「美妙齋に一言す」を書いた。別に「評判の韻文論」といふ無名氏の文が同紙に出、路功處士といふ人の「外形論者」といふ文も同紙に出、美妙は此等に對し「柵草紙」と「國民新聞」で忍月に答へ「日本評論」で不知庵に答へた。美妙の韻文論は韻律の詩學 Poetik に關する論議である。韻律法を韻格と稱し、韻格の制定は韻語と散語と混合しない事にあるといひ、韻語韻句の完全な節奏をなすに至る一定の順序の標準を韻律とした。韻律は抑揚であり平仄である。揚音を高調といひ抑音を低調といふ。揚音は又長音であり抑音は短音である。國音の揚抑は不定自在で縦横運轉する大便宜の語であると云つた。これに對して、鷗外は仔細に論評を加へ漢（詩法纂要にいはく、平聲學音皆揚、仄聲字音皆抑）英獨などの抑揚音は一定したのが常規で、抑揚相通じるのは變體であるのに、國音ではくもといふ音が蜘蛛となり雲となり、かまといふ音が鎌とな

り釜となる等變通自在であるのを美妙子が欣喜してゐるが、自分に云はせると「所謂勝手の格律の敵なる」を憂ふのである。勝手の極は無格律であると云ひたいのであると論じ、又、美妙子は言葉或は句をして、節奏をなさしむるときに至つて纔に韻律があると云ふけれども、言葉の句をなすとき、(versification) 最早韻律に入つたものである。初めに美妙子は、散文には節奏なく、韻文には節奏あり、これがその差異であるとし、縦令散文に音調があつても、樂調又大節奏即音樂上音調ではない。樂調又大節奏ありて猶散文だといふのは誤りで、散文と看做された韻文即ち賦の事だと云つたが、自分は、美妙子の稱して節奏及大節奏又樂調といふは、韻律に同じものだと考へる。韻文を唱歌にするときは調の高低を約定する。これをふしづけといふ。所謂賦詩合樂である。ふしづけをして樂に合せるときは、韻文の行調が變化して仕調となる。仕調を樂調だとする普通の用語例で、美妙子はふしづけをしない韻文に樂調を與へたものであると論じ、更に美妙が詩の本質にたま〳〵言及したのを捕へて、根本詩論を論じてゐるがこゝには述べない。不知庵忍月が美妙を批せし當否を論じ、美妙の所論の正邪を識別し、諸家の云ひ足らぬ個所を補ひ、嚴正正格の詩論を掲げ、純文字雜文字の定義、詩と始學との關係よりいはゆる余情といふ語の本

義を闡明して詩の本質を明らめてゐる。恐らく詩壇最初の味解と學識とを兼備へた詩論であつた。その外、氏は平仄を論じ（二十二年三月、四月）、スタイルを論じ（二十四年十月）韻文と句讀を論じ「詩と韻文」を論じ「ポエトリーと詩」を論じ、朗讀問題を論じてゐる。朗讀問題とは、關根、饗庭の二氏が當時の東京專門學校で、和文朗讀法科を新設せんとし、「讀賣」紙上で東京專門學校文學科一學生と稱する讃成論者と、日就社の一員といふ拙々生と稱する不可說者との論爭から開かれた論議である。これに就ても例の精到な筆法で、兩者及び逍遙子の論旨の可否を比較論駁し自已の所論を樹立してゐる。

五

森さんの文學は、その當時創刊よりも批評研究に傾いたから詩作は凡てなく、小倉に任に赴き又歸京して、文壇が一回轉し、自然主義が勃興しかゝつた明治三十九年、上田敏氏の雜誌「藝苑」が發刊された頃、同誌初め雜誌「趣味」及び「明星」に忽然腰辨當といふ署名で小詩が公けにせられ、是非の論や作者の正體論などが一切り喧しかつた。即ち、明治四十年二月發行「早稻田文

學」の「三十九年文藝界一覽」は、一月の欄で、「前年蒲原有明、上田敏等によりて唱へられた種々の論議ありし、佛蘭西象徵派的詩風我詩壇一部の流行たらんとする傾向著し」と報じ、五月に「明星派諸詩人の作に著しく象徵主義的傾向あらはれ初むと稱せらる。」と報じ、六月に、「滿州より凱旋せる森鷗外腰辨當の匿名の下に新作風新體詩「都鳥」を「趣味」に揭ぐ。」と報じ、七月に、「腰辨當森鷗外によりて試みられたる純自然派的詩風の影響各所に見ゆ。」と報じてゐる。

森氏は、明治三十七八年戰爭に從軍中の長短詩を、後「うた日記」と題して公にしてゐる。が、その中の詩は、（今手許に其書がない故引例は出來ぬが）右の腰辨當詩の以前の作であつたらしい。腰辨當時代の詩は、譯詩をもこめて、後一括して詩集「沙羅の木」となつて大正四年に阿蘭陀書房から公刊された。その序に、「沙羅の木は主として雜誌明星の後期に私のした試である。縱ひ中には他の場所で公にせられたものが交つてゐても同じ時代に同じ嗜好から生れたのである明星の初期、中期は私は局外に立つて居た。明治三十七八年の戰に私が滿洲にゐた頃、與謝野君夫婦に手紙の往復をした。彼二人と私との交通は、戰が罷んでからも絕えなかつた。沙羅の木はそこに培はれた芽ばえである。それが風殘雨虐の中に苗して秀でずにこゝに哀な記念を留めてゐる

る。」云々。

此詩集には譯詩デーメル八篇モルゲンステルン一篇、クラブント十篇、ビョルンソン、グルックショッテリウス各一篇、作詩「沙羅の木」初め十五篇に、短歌我百首が添えてある。

三十九年は泣菫の「白羊宮」が出、有明の、後、「有明集」に收められた諸篇が現はれた頃である。この所謂自然派風印象詩は、市井雜事を咏じた小詩であるが、その用語は文語であり雅語である。僅かに會話に日常語が交へてある。

舟人よ。あの鳥を見よ。
「はあ。ありやかごめでがさあ。」
氣ちかきにおぢぬさま見よ。
「臭くつて食はれませんや。」

——「都鳥」——

詩集「沙羅の木」の詩壇に於ける感化は少くない。象徴派の宮殿に閉ぢこめられた詩神をしばらく街頭に彳ませたのが腰辨當の詩であつた。が、その詩神は、尙、昔ながらの典雅な衣を身に纏つてゐた。近代の建築美とは些しそぐはないのである。そこで、詩神は再び何處かへ行つてしまつた。十年の後に改めて又衣を更へて巷々に現はれた。今度は正しく近代の着物である。が著しく着物の體裁をそなへてゐない。大體は着物には相異ないのである。森鷗外氏の試みは、詩史の上から見るとエポック・メイカとしての効業ではない。が、捨てゝをけば仲々に開かない扉を進んで押しあける敏感と、聰慧と宏才と決斷の先蹤はいつも森さんである。「一幕物」の劇に於ける、新歷史小說の小說界に於ける、皆此方法であつた。就中、劇に於ては一番目ざましい成果があげられてゐる。晩年の考證物が今後十年つゞいたならば、恐らくは驚くべき大作が續出したことゝ推される。學匠としての油の乘つた昨今であつた。何よりも呉々も口惜しく思はれるのは此方面の未完成に終つた一事である。

畢竟するに、森さんの詩業は詩集「沙羅の木」一卷につきると云つて過言でない。數にすればわずかに創作詩十五篇である。しかも、その少數の作詩中に、何人も手をつけない點をいち早く

試みてゐる。そして、それは相當の波紋をその後の詩壇に殘した。が、よく窺ふと、森さんの詩は韻文の中よりも、散文の中にふくまれてゐる。いろいろな姿態で、詩人森林太郎が、散文の小說の中に、劇曲のトガキの中に、論文の例證の中にあらはれてゐる。森さんも、多くの近代散文名家と等しく、詩心ある名散文家の一人であつた。

自然主義的なる詩歌の發生

自然主義時代には主唱者にも攻撃者にも雙方に矛盾があつた。島村抱月の自然主義を生ぬるいと云つた岩野泡鳴その人の「新自然主義」の自家撞着と前後矛盾との所論の大部分は、抱月その人の未徹底性よりもその思想の透徹を缺いてゐた事は衆目の視るところであつた。自然主義に反對した文藝革新會は、自然派的文藝理論の論理的矛盾を突いた點がいくらかあつたけれど、畢竟反對のための反對、自已存在のための反動思想鼓吹に結果してしまつて、何等文學史上に影響はない。

しかし、自然主義的なる文學と思索とに、不滿と、輕視と、罵詈と、批判とを加へたものは多かつた。文壇其ものは、若き青年文學者の文壇即ち自然主義の世界であつたけれど、既成文壇と世間とからの抗言は免れなかつた事は當然である。不滿を表はすは中年讀書家と、既成作家のあ

るもので、輕視を浮べるは學者側と老大家の一團とで、罵詈を加へたは自然派に直接打倒せられた文學一派と、世間一般の彌次馬連とで、批判を與へたのは、公正の思想趣味の所有者である極めて少數の學者評家であつた。外に冷然とこれを無視した一派も少くなかつた。

その中で興味のあるは、森鷗外、上田敏、夏目漱石三人のこの派に對する態度であつた。鷗外の作品が自然派から遊戲的の一語で默殺、又は排斥せられてしまつて、それに遉がの冷靜な鷗外も、多少の憤懣と大部分の揶揄心とを感じて「あそび」に於ける眞實性の藝術性とを闡明したことは、冷笑的な『不思議な鏡』や、『あそび』や、『ル・パルナス・アンビュラン』等の諸小品を見れば判る。約めて云へば、鷗外の態度は遊戲的で、その缺點は無情調にあるといふのが自然派側の意見であつたのだが、今日之れを見て、鷗外の藝術的態度を根柢から不眞面目であつたといふ者は、識見ある人の間には一人もなく、その作品に情趣がないといふ者は、鑑賞眼のある人の間には一人もない。當年の自然派論客の右の妄見は、自分の淺薄な觀察と無神經な味解力とに基くので、鷗外文の諷刺性を顧みる餘裕もなければ、その枯淡なる老成の情趣を味ふ神經もなかつたからで、當時のいはゆる早稻田派文士の通弊は、ヒューマアを解する事が出來なかつた事で、そ

れは、學閥の餘弊として官學に繼子扱ひせられてゐた處から來た色々の點で無餘裕狀態にゐた事情にも依るが、又一には前期早稻田文學の坪內博士の、いはゆる沒理想的寫實主義精神を繼承する底意から、極端に浪曼的作品を斥けるを以て能事足れりとした點にも基く。

しかし、自然派論客の幼稚な行論を認めるものは、同時に當時の鷗外の復活後の作品の大部分の價値著しからず、只ほんの小品物にしか過ぎなかつた事をも認めねばならず(鷗外小說の、沖淡高古にして、文章美の極致を表はし、明治小說最高の水準を示せる幽妙の佳品は、後の『高瀨舟』一卷が代表する。)反動文學者連の中の硯友社殘照の駄洒落れ好き(例へば文藝革新會の一人登張竹風が之れを代表する)と、時勢の急潮に遲れた陳套性(例へば島村抱月を漫罵した中島孤島が之れを代表する)と、舊浪曼派趣味的架空性の幼稚と、姑息と不貽性と(例へば「帝國文學」を中心とする靑年文士が之れを代表する)をも亦認めねばならぬ。しかも、この反自然派的態度に出た鷗外が、自然主義的なる詩歌の始祖であつたのは皮肉である。

上田敏は學究詩人の立場をとつて、この運動に最初は冷靜な態度をとり、公平な批判をさへ加へようとしてゐたに係はらず、騎虎の勢ひ猛なる若き最少日本自然派は、自己の文學上立場に對

立する集團、「明星」及びその後身「スバル」、「三田文學」などに關係ふかき一人としてその文學上論述を、必要以上に攻撃してやまなかつたから、流石に穩當を喜ぶ鑑賞家柳村も、歐羅巴では三四十年前に時花つて廢れた文學上の一主義が、日本では今日榮えて、而もそれが全部であるかの如く思惟してゐる無知の集團があると云つて自然派を揶揄した（四十年十月『趣味』）。之れを抱月が反駁して、フランスで何十年前に流行しようが、今の日本にとつては必然の存在理由があるから起つたと云つたのは至言で、御風も之れに同じてゐるが、柳村もほんの雜文中に無雜作に書いたものだから、自己の眞意をつくしたものはなかつたのだが、洋行歸來後のかれが、ロマン・ローラン一派の文學の社會性を紹介し高調した事を考へても、三十九年の『藝文』鏡影錄で社會的關心を說いた事を考へても、この言にはゆきがゝりの感情が大分手傳つてゐたらしく思はれる。尤も、上田敏の社會文學紹介は知識として文壇を肥沃した點は多かつたが、その人物に妥當な本質の行論として、句々熱を含む迄に至らなかつたから、主張としては非力に終つたは當然である。これは鑑賞文學者の自然の結果である。

最後に、夏目漱石の態度は些か不徹底であつた。その作品が相當に見るべき程度に達してはゐ

たが、實質以上に今日迄評判され喧傳せられてやまぬのは、その感情趣味の日本的（寧ろ徳川士人的儒林的）なると、知識で威めしく武裝した爲めと、スタイルの運命的にやゝ高級の通俗性を帶びてゐたためとに外ならぬ。その小說が、その門下の徒が高唱する程高價のものでない事は、識見ある者は一般讀者と雖も今日之れを悟り、文壇に於ては阿附や遠慮やその外の理由であまり云はぬが、これを兎に角云つたものに、谷崎潤一郎一人だけある事を私は記憶にとどめてゐる。その漱石が、自分丈けは詩歌の既成形式として漸く當時過去のものとなつてゐた漢詩（それも和臭のつよい陳套詩）と俳句（それもホトトギス一派の束縛を出でぬ無獨創性の）とに晏如として安住しながら、上田敏の象徵詩を姑息因循の態度で揶揄したり、西洋特に英國詩歌に對しては、相當に研究あり興味を持ちながら、「讀まないから僕にはわからない。」と云ひつゝも新體詩に就ては「無理に窮屈な言葉の中に思想を欲めやうとしないでも、今少し自由に、遺憾なく、十分にセンティメントを歌つて見られさうに思ひます。」（三十九年八月「早稻田文學」）と云つた言葉がその最も公平な一語で、日常に於ては嘲笑以外何もなかつた如き、又自然派文學に對する態度も、鷗外が自分から自己の性慾史「ヰタ・セクスアリス」を公けにして禁止せられたり、公々然と田

山花袋を作中人物に引張り出して、之れを俎上の魚として堂々嗤殺し去る如き活達の態度には出ず、恒に漱石は陰性にひそんで冷罵してゐたにとどまるから、その冷罵の對象となつた自然派末派の愚昧と非論理とは、當然冷罵に値ひしたもので、冷罵は卽ち宜しいが、低徊趣味といふ自己の文學境致から則天去私といふ人生觀上の態度に辿りついた、一文學者の他流派や他形式に對する態度としては、不親切であり、少くとも綿密なる眞摯を缺き、文學上の論述者としては跛足的であり、片輪であつた。

が、此等三家はとにかく各の小世界を有した上級文士であつたから、餘りの無思慮や無知を示さなかつたが、末流の自然派、反自然派の陋劣と無知との際限なく甚しかつた事、今日の末派文士の眞に恰好なる先祖の觀がある。

自然派文學を唱へた中で、主唱者として唯一人島村抱月嶄然群を抜き、評家としては同感の立場に傾いた中澤臨川が著しく秀で、長谷川天溪、岩野泡鳴、田山花袋等の主張者は、一は論理の粗笨、一は前後撞着、一は思索皆無に於て各抱月に劣り、生田長江は反自然派的立場にあつて、自然派の論理の缺陷を突く事は出來たが、自分の自然主義文學作品そのものについての認識不足は

蔽へなかつた。獨逸デカダン文學の冷嘲的史叙を試みた片山弧村は、自然派から不眞面目の評を受けたが、實は不眞面目以上に自己の文學觀の不確立に基く、文學史家としての資格の皆無を暴露した、史料の俗解の見本を示したにすぎなかつた。抱月門下の天弦、御風、星湖三八の祉論を見ても、天弦が何んとなく自然派と離れた心境條件を具備しながらも、その要求の一面に基いて論理の確實性を發揮したに反し、あとの二者は史的知識も乏しく文學論的定見も碌にまとまらぬ、所謂時論の範圍を出でなかつた。

「スバル」一派は論爭を避けて高踏したから、論議は六號物以上に無いが、自然派末輩が、自己の流派の作品は少年の手習草紙でも兎や角論らふたに對し、この派の作品は全く默殺し、たまに口を挿めば全く同情なく理解なき冷罵を頭から加へた一例は、鷗外の推輓によつて出た、木下杢太郎の小說小品に與へた態度を見れば一見明白である。漱石門下にあつては、哲學出身の者は論理の組立てはうまいが、鑑賞味解が粗硬で評家としての一要件を缺き、青年作者のそのある者は作品は相當に卓れてゐたが、推理に拙であり論文の體裁さへなさなかつた中に、公正な立場に在つた者は、例へば安倍能成があり、偏狹にして排他的無知を發揮したものに、例へば臼川野上豐

一郎がある。自然派末期の頽廢から新傾向を誘發したものは、勿論かの硯友殘黨でなく、漱石門末でも亦なく、（後者は批評的ではあつたが、創造的でなかつたから。）鷗外柳村を導者とするスバル畑によつて、海外歸來後の新感情を吐いた永井荷風であつた。

かう見て來ると、鷗外の文學史的重要が愈よ目立つて來る。藤村、晩翠のあとを受けて泣菫有明二家の作風が一代を風靡した頃から、既に詩歌に於ける自然主義の要求があつて、抱月と御風は『早稻田文學』に之れを論じ、（四十年前期『早稻田文學』及び同年十一月『詩人』）『帝國文學』も固牢なる『アカネ』一派の國文學趣味を嗤つて之れに同じ（四十一年九月號及び十二月號）戰陣から歸つた鷗外は腰辨當の匿名で、三十九年初夏より『趣味』、『藝文』『明星』その他に自然主義的なる詩歌の習作を公けにして、忽ち一群の青年詩人の感化さるるところとなつた。この傾向は汽鬪車を雅語でうたふ泣菫や、大鋸ひきを格調詩で賦する有明にもその影響を與へ、日本自然派の頽唐主義は小說に於ける暗黑描寫とともに、詩歌に於ける小世紀末主義、小セイタニズムとなつたが、他の一面である現實直視直叙の三昧主義は、古語雅語を避けて安易語より延いては日常語口語となり想像世界の對境から、家常茶飯の詩材に移つた。櫻井天壇が獨逸象徵詩を紹介したのもこの時で

天壇は、孤村よりも親切であり綿密であり、且同情的であつた。
四十年九月の『藝文』に掲げられた腰辨當の『朝の街』は、

朝あけ大路　　しめやかに
立ち並ぶ店　　まだ醒めず。
けはひひろびろ。

搏風檐壁を　　いろどるや
塗繪廣告　　繪看板
露にぞはゆる。

刹那ちりぼふ　ひと群の
素足はらうづ　破帽子

新聞くばり。

のごとく、詩材は街頭小景で、その直叙の間からわき昇る詩情の新鮮が、當時の人目をひいたのであるが、言葉は嚴格な古文語の格式を守つてゐる。同年五月の作『雫』も同趣の作である。（石川啄木などは當時なほ『明星』の完全なる感化の下にあつた。）

寒き雨　電車を籠めつ。

ゆきかいに線(いと)きしろへば
逆る青き火二つ。

人いきれくもるガラスを
まじろがでしばしまもりぬ。

窓面の雫小紋の
二つ三つ寄りては流る。
わが思そこはかとなく
浮び來るやがてぞ消ゆる。
鐸は鳴る神田須田町。

同じ趣の作に『三枚一錢』がある。

足早き角の怪、電車
さやぎつゝ來てはとどまる。

かねやすが門邊の逵。

降る乘る蜉蝣の群に
聳り立つ麥稈帽子。
何か爲る。汝壯漢。

籠のうちゆとりいでゝ呼ぶ
「昨日の新聞三枚一錢。」

さやぎつゝ電車過ぎ行く。
「昨日の新聞三枚一錢。」

日常語使用の家常茶飯小景の直叙は、しばしばヒューマアを主題とする。前の昨日の新聞に類

するものに「都鳥」がある。

初夏の日暮。みどりの
ただ中に夕ばえ煉瓦
速(まね)かざるまらうど立つ。
高鳴るや嘲る汽笛。

機關(からくり)の不斷の鞭に
むちうたれはためき過ぐる
塗丹に經(たて)をゆづりて。
川の緯(ぬき)漕ぐわたし船。

房州と人呼び聞きし

牙彫(げぼり)めくをぢ擢とりて
中流のゆふあけ潮を
皺みたる腕(かひな)にしのぐ。

はや近しさんや棧橋。
水棹には芥まつはり、
浮木觸れ、水底草の
乞兒(かたゐ)ぎぬちぎれ靡けり。

にび色の川淀水の
渦卷に、雌雄か、白鳥
並ぶ。こやさすらい人の
ぶりし日の風流(ふりう)の記念(かたみ)。

舟人（ふなびと）よ。あの島を見よ。
「はあ。ありやあかごめでがさあ。」
氣（け）ぢかきにおぢぬさま見よ。
「臭くつて食はれませんや。」

のごとく、

房州と人呼ぶ

云々では「房州」の呼名の感じがつよく出ないし、

牙彫（げぼり）めく

云々では象牙彫さながらの表情のといふ心持ちが、その簡明すぎる使用法のために。ともすれば看過されやすい。をぢ櫂とりてといふ語は、前半につながるをぢの二音語と櫂の音と不用意に韻を踏むので、反つて調子が混雜した上に印象に錯雜を來たす。詩句の用語は右のごとく、文語そ

れも極めて簡明を主とする正統文語で、その間に
「はあ。ありやあかごめでがさあ。」
のやうな日常語が點綴される事は、硯友社時代の小說が文語の地の文の間に、日常話の會話を交へるとひとしく、歷史的に見れば、言文一致境に到るまでの文章の過渡期體である。當時上田敏は評して「單語は印象の强きを選び、節奏には大膽なる「跨」を用ゐ、棹尾の一振に口語を挿み」(三十九年七月『藝苑』)と賞美したが、この評は兎角鑑賞家の陷り易い過褒であつた。それは、文壇は四十一年六月の『早稻田文學』にリリエンクロオンを紹介した。

銀行家パラツツオ。主人は旅行に行つた。
よし。召使は外に出た。殘るは小猫一匹。
「今晚お出で。八時によ。淋しいわ。」
我は往つた。主人の室へ。戀の花園。
ソファの上。嵐の如く、又やさしく、又恥も無く。

キスはキスを呼ぶ。「アー放して。」
「放せつて。」柔音と硬音。
朝。別離。夜の客は出でゆく。
歸りの路は長い。オーはでなソテよ

のごとく小說的詩材を簡單に印象的に扱つた詩の譯出で、徹底自然派の客觀重視主義と記述描寫主義のわづらはしさに抗して起つたといふて、印象的自然派のアルノー・ホルツを引き、當時一流の詩人と崇ばれたる氏すらも、その習作を試みたとて右の譯詩をその作例に引いたものである

自然主義的なる詩は、畢竟この天壇のいはゆる印象的自然主義に朝宗して、用語に口語を使用して、――や……や――等の小道具をさかんに使つてまで、刹那的印象の自然主義的描寫に成功せんとしたが、この方面での大いなる詩業はなかつた。年少の詩人が此等の創作や譯詩に刺戟せられ、これを模倣して新作を公けにしたが、只形式を模したるにとどまり、必然性の上に樹つて個性ある詩想を表白ししたものは一つもなかつた。例へば三木露風や川路柳虹がそれである。

有明や泣菫も、これにつまづいてより再び起たず、露風や早稻田詩社の小詩人等もこれを模して何ものをも產せず、次第に他の詩風に移るか詩林を永久に去るかしてしまひ、畢竟、本邦明治末期に於ける自然主義的なる詩歌は、用語と取材と詩材の扱ひ方とに於て發生時代より幾分の進步は示したものの、史的重要價を持つ何ものをも殘さずに、次なる傾向に推移して了つた。その次期は、大體散文壇と步調を合せた享樂主義的なる詩歌であるが、三十年代に於けるがごとき、空靈的架空的舊浪曼主義詩でなくて、現實生活受用の一點に、自然派文學と異る一種のニオ・ロマンティシズムの色調を帶びてをり、自然派文學を境にして、浪曼的なる詩歌に、大體に於て自然主義以前以後の二種の差別が生じたと解してよい。これは、西歐文學史の段階に準じてゐる事象である。

日本詩歌の變遷

「日本詩歌（歌謠とのみ致ていはず）の變遷を限られた少數紙幅中に收める事は眞に困難事である。こゝには簡略に詩歌主潮精神の起伏の歸趨したところを覗ふにとゞめる。」

一　詩歌の起原の問題

方法論的に、藝術特に原始詩歌の起原を究める方面の研究が、晩近愈よ精密の域に迫つて來たに伴れて、宗教學的、民俗學的、土俗學的、人類學的人種學的貢献の資料を整備して、藝術科學的處女地の開拓から頓に行はれ、在來の獨逸美學的、藝術哲學的、心理學的藝術學の研究と共に、原始民族の藝術特に詩歌謠の發生學的檢索が、開化人類の到達し得たる、藝術的頂部の視點を離れて一般原始的なる人文の有機性の間に、その藝術の絕對性、文化性、近代性を訊ねんとするに至つた。

卽ち、詩歌の原始狀態に就て、蠻野の民の稚拙を土俗品的に愛玩する以上に、ブッシュメン的原始繪畫の中にも、古インカ的殘闕藝術の中にも、周代無專鼎の蟠燕の中にも見出される藝術本能の絶對性を尊重する如くに、先史民族の原始歌謠の個人的起原論を決定せんとするので、例へばパウンドの小著（一九二一年刊）の如きがそれに近い。この說は比較人類學的方面に於ける在來の集團起原論を脅かさんとするもので、該小著にあつては引證の例話が尙部分的であり、論據も幾分薄弱の批難が免れないが、ガムマレやキットレッヂ如きチャイルド系統のバラッド學者の間に Comparative balladry の問題に就て、かつて個人說、非個人說の論難があつた如く、又、常識的にその後者が平俗人の讃動を得た如く、パウンド說、亦多くの吟味と批難とを蒙らねばならぬ事いふ迄もないが、原始心理に就てあまりに牧歌的な概念を抱いてゐる現代究古學者の群が、ballad-dance から發して常にお定りの道を忙ぐに對し、キットレッヂに次ぐパウンドの說は、目下は兎に角將來の研究に向つては、ある光彩を與へる價値のある提唱の一つであらう。

二　上代歌謠

昔者諸冊二神唱和して、
阿那邇夜志。愛袁登古袁。
阿那邇夜志。愛袁登賣袁。（「神代記」）

と宣りたまひ、これ詞姿こそ完全でないが本朝和歌の初まりだと宣長もいひ（「石上私淑言」）。古くは「古今」の序にも其つもりで引いてある。激越した感情の語の歌姿的形態は見られる。同じ意味を「神代紀」にも引いてあるが、こちらは散文律に近い。人皇諸記に散見する散文律詩には、明瞭に詩感の普遍存在と、キットレッヂやパウンドの説に資料を提供する個人の姿とさへ浮んでゐる。しかし、何れにしても、記紀ともに稗田阿禮とか、太安麻呂とか、舍人親王とか、その外の實際撰者の手が加はり、その感情が彩られてあるから、おぼろげなる原始人心のデリケイトなる詩歌情緒の搖曳の明暗强弱を、後天的に兎角の評を試みるは、ある程度以上無駄に等しい。

須賀宮に素尊が八雲の神詠

八雲立つ出雲八重垣妻ごみに八重垣造るその八重垣を。

といふ形をそのまゝ受取れば、國語に即した五七底音の交換であるが原形の程は何とも判らない。

撰述時代の形式觀念と、感情との規範が加はつてゐるといふ疑ひはどうしても免れない。史的濃霧に晤澹として閉ぢ籠められてゐるのだから。

從つて、寧樂朝に入る迄の原史歌謠は、諸記挿入のそれにしても齋部廣成の「古語拾遺」(大同二年)や古風土記などに片鱗を示すそれにしても、個人の姿を約束してゐても實は民衆合作の場合が少からず、又反對に讀人不知の合作的歌謠にしても、萬一神の意によつて是を穿鑿し得たなら、確實の個人の手によつて成つたと判明すべきものも少くはなからう。畢竟われ等は、記錄時代の時代精神を通じて上代原史又は先史時代の詩感を忖度するに止まるのである。

沖つ鳥鴨どく島にわがゐねし妹は忘れじ世のことごとに。

といふ佳作は「神代記」により火遠理命といふ作者を强ひられても、その回顧的感傷の性質から遙か後世の感情が加はつた作品と斷ずべき徵證がある。同樣に、戰爭詩でも思邦歌でも酒ほがひでも、新室樂でも、歌垣の燿歌でも、神語歌でも、天語歌でも、國見歌でも、賤歌でも、久米歌でも、一般求婚歌でも卽ち片歌でも、同答歌でもカプレットでも五七音長歌でも下照姬がうたの如き自由詩でも、素尊ごとき五七音の短歌でも、あらゆる內容あらゆる形式の上代歌謠は、八雲の神

詠時代から神武帝の頃に至り、更に應神帝雄略帝等の頃を經て飛鳥時代に及ぶ長期間に、多くの形式の創草期と、多くの詩感の試作期とを經過して、共間世界に存在したあらゆる原始歌謠のタイプを經驗したが、惜い哉、記錄家のかなり傍若無人な選擇を經てゐるため、どうしても原始時代そのものの姿と香とを直ちに感じる事が出來ない。詩語の使用の變遷史の研究や、神話傳說の探訪や、極大まかに見た神代史、原始時代史の民族感情の考究には役立つが、作品それ自體として言葉の搖曳の間から、時代精神と個人的又は民衆的作者とその特性とを感じとるには不便である。只、日本武尊が酒折宮で火燒翁と唱和した新墾筑波の如き連歌の始めは、詩語驅史の上から見ても留意すべく、尊の劍に愛着を寄せた歌の如きは、歌旨と形式とが單純で、而も勁烈の氣に富んでゐるから、最もその原容を忍ばせるに近いものがある。外にも比類が少くはない。が、上代人の優雅の一面は撰述時代のそれと混淆して、多く分明を缺くのは止むを得ぬ。

飛鳥時代は、欽明帝十三年佛敎渡來前後に始まり、伎樂も榮え萬葉先驅の古歌も起つてゐるから前期大和時代をうけて、歌謠の性質が漸く個人文學、技巧詩、記錄藝術に近づいた事が一見判明するが、持統帝朱雀八年に藤原に遷都あり、後十七年間の藤原宮時代を經て元明帝和銅三年の

平城遷都から、咲く花の奈良の都に接してゐる其間、隋朝文化移入の結果、田舞や百濟樂も起り、隼人舞や踏歌が生じ、抒情文學欝然と繁つて萬葉集の謠籃をなすに至つた觀がある。

三　奈良平安朝詩歌

大和時代の口傳文學が記錄化されたのは、多く奈良朝に入つてからであるが、奈良朝は開化し收穫した時期で、その種や苗は既に飛鳥藤原宮からあつた事いふ迄もない。この民族の詩魂を姙孕し之を目醒したのは、神代から大和朝に續く民族發達時代の五風十雨であるが、これを生育せしめた力の一は、隋唐外載の文化であつた事はいふ迄もない。かくして、奈良朝は一千三百餘年の大和時代の結算時代として記傳時代として、此民族の詩魂が前後漢六朝隋唐間、間接直接の文化的影響を力として、建國來始めての文學的發聲を試み且大結集を行つた時代で、恰も殆ど時を等しうして、支那では玄宗開天より代宗大曆中に至る盛唐時代の詩歌期であつた。

佛教の詩歌的侵潤の一例は、奈良藥師寺佛足跡歌碑の金石文二十一首（內二首缺損あり）に見る。（狩谷掖齋「古京遺文」）しかし、その

良き人の現目に見けむ御足跡すらを我はえ見ずて石に彫りつく、玉にゑりつく。

式の思想は、形式上の注目以外には內容價値は稀少である。「日本靈異記」や「續日本記」にも亦此頃の歌謠の俤が窺はれる。眞に奈良朝を代表し、地理的にも時間的にも古日本抒情生活全體を抱容統一したのは「萬葉集」である。

長歌、短歌、旋頭歌四千五百余首作者五百余人を收めたこの大詞華集は、漢字の正・假・戯訓や戯・具・略・省書、假字を自由に用ゐて、抒景、相聞、羇旅、敎訓、問答、民謠等複雜の題目を統べ、撰者は古來橘諸兄とあるが不明であり、成立年も孝謙といひ嵯峨といひ聖武といひ稱德といひ又平城ともいふが明かでない。由來、萬葉の基調音は素撲簡勁にありといふものが多い。固より八代集の纖巧に比べてそれには線の太い素撲性があり、「新古今」の、縝密、淸奇、纖穠、典雅に較べて、これは焦點確かな雄渾と、冲淡と高古と超詣とが多いが、平安城文明が隋唐盛代の余波を澤山に受けて、家居文學京畿文學の粹を示はした干係上宮廷造花歌の弊に流れ、豪宏卓落の古趣を失したため、一きは萬葉の勁建なる素撲が目につくが、萬葉には萬葉獨得の綺麗と典雅とがあり、共典麗は潑刺たる原史人の新鮮感情からまつしぐらに生れ出た。從つて、萬葉の詩美は比較的に、

原始詩情の自然性に近く、そのもの足らなさも亦此處にある故、直ちに萬葉をあげて古今以下八代集を悉く斥け去る萬葉イチスは不當であるが、樸直を崇ぶ趣味性の人と、開化的頹唐を我と自らもて余した今代人とが、反射的にこの古樸を愛するはかへつて自然である。それのみか、集中の佳品に至つては人性の秘奧に分入り、古名匠の鑿を振つて痛烈な抒情詩美のゴシック建築によく成功してゐるものが夥しい。「萬葉」に次いで「伊勢物語」(弘仁期)と前後して「古今和歌集」があり、「後撰和歌集」があり(延喜天曆)次いで「拾遺和歌集」(道長期)を經て平安末期の「後拾遺」、「金葉」、「詞花」、「千載」等諸集を數へ、人麻呂、赤人、憶良、旅人、家持、額田女王、石川郎女、大伴坂上郎女等の萬葉期から業平、遍照、小町、貫之、和泉式部、紫式部、俊成に、鎌倉期にまたがつて西行がある。

「萬葉」が五七古撲音を基調とせしに反し「古今」は七五流麗音を主音とし、前者が長歌二百六余首を算せしに對し、之に全千余首の內僅かに五首を數へるのみ、貫之が

人はいさ心もしらすふる里は花そむかしの香ににほひける

の佳調や、讀人不知ずといふ、

夕ぐれは雲のはた手にものぞおもふ天津そらなるひとを戀ふとて

の逸作に代表せらるる「古今」の優婉は、「萬葉」の奇古と變り、「後撰」以下の人工美に遠く卓れて、後世歌道の目標となつたが、其後の勅撰諸集は主として「古今」の缺陷を思ひ切り擴大して、次第に無感激のたゞ纖細を旨とする彫蟲末技に走り、その間少數の詞人がよくその傾向にあつて、歌風の純情を保つに過ぎなかつた。平安末期の亂國に人となつて、佛教文學の感化裡に在り最大の漂泊文學を殘したのが「山家集」の歌僧である。「金葉」戀歌の第一と顯輔が推せる越中が

待ちし夜の更けしを何に歎きけむ思ひ絶えてもすごしける身を。

の如き、平安末期和歌趣味の標準の奈邊にあるかを談つてゐる。

長歌が衰へた理由に就き、故藤岡東圃の解釋は杜撰に近い。東圃は疊對の句の謳吟調が後に耳よりも目を主とするに至り、平安京複雜民情を感激せしむるに足らず、加之、漢詩文勃興して長歌特に迫害せらるとなしたが、事の根元は端的に詩形そのものとして、五七七五の單調音の冗長なる連續が最初から疊對如き變化にて、その散文化を防ぐ能はざるに在つたので、只、恰好の長さなる三十一音詩のみが殘留し得たのである。長歌の興味は藤原宮時代に於て、既に必ず短歌の

下風に立つてゐたに相違ないと推せられる。

推古以來、異朝樂の普及につれ神樂歌が進步して、民謠風又は短歌風の獨自歌詞を形造つたが、鎌倉期に入るに先立ち早く衰滅したは、環境の爲めに此古撲嚴肅の樂舞が征服せられたので、之に反し滑稽本意の里神樂が存在したるは、英國奇蹟劇神秘劇の變遷の次第と同一である。雅信撰するところ催馬樂に於ける民謠、延喜中に撰定なられた風俗歌、祚事に採用せらた東舞の歌、童謠の言葉、これ等は民間の雜謠である。時には無名詩人の佳作もないではないが、大體は俗解を本旨の創作意義少き衆愚文學で、これに價値つける者は主として土俗學的見地からである。佛教教理の普遍のため讃頌の體をなして創作せられたのは和讃であり、和讃に出發して文學に純となつたは今樣である、即ち新體歌の謂であり Dolce Stil Nuovo の心組もあつたらうが、口誦せられて白拍子の舞踊と伴ふるに至り、後又謠曲の勃興と共に亡んで形態だけが近代まで殘つた。その外、辻歌、掉歌等の俗謠もあるが、興味價値は主として矢張り土俗學的範圍内にある。

隋唐文化の輸入と共に、我邦の文學樣式の一となり了つたものに漢詩がある。佛教とともに漢語漢文學が渡來してそれを誦讀の必要から、最初は支那語支那詩文をその儘發言して、その意義

を悟る方法を發して終にはこれを國訓して、而も日本的意義を附加するに至つて、漢文學漢語の漢詩文は、卽ち國語國文學の範疇に入る事となり、勿論外來樣式の臭味は言葉の性質上免れぬにしても、台閣の學士貴人は自由に之を使用するに至つて、記紀文章の如きさへ出るに及び、天平勝寶三年の「懷風藻」が詩集の權輿として出現する共以前にも、大友王子を漢詩最初見の作者として大津皇子以下個人の作及作集も少からず、（石上乙麿に「銜悲藻」あり）今悉く亡佚して傳はらぬが、該詞華集には歌人旅人初め十數人の作ある程故、普及の程度は推するに難くない。「懷風藻」は約百年間（淡海朝より平城京迄）の作者六十四人の百二十篇を收錄し、飛鳥、寧樂、文明の隋的なりし如く、後世の邦人漢詩よりも支那風を帶び且創意に富む。

淡海帝の孫皇子葛野王は大友皇子の長子で、母君淨御原帝の長女であるが、

五言、遊龍門山一首

命駕遊山水。長忘冠冕情。安得王喬道。控鶴入蓬瀛。

の作がある。正にエキゾティシズム時代のチャアルズ王子である。「懷風藻」後、嵯峨帝弘仁五年勅して「凌雲集」が成り、三年後更に「文華秀麗集」が出て、淳和帝天長四年「經國集」が出、

外に個人詩集「性靈集」(空海作)が出た。上に嵯峨帝の好學雅遊あり、下に詩家學士みちて最初の詩學「文鏡秘府論」は逸材空海の著と知られ、「菅家集」、「野相公集」、「都氏文集」等の個人集と村上帝時の「扶桑集」一條帝時の「本朝麗藻」、「本朝無題詩」成り、菅公如きは温八叉に私淑したとあるから、平安朝の仁明帝承和三年は、恰も晩唐文宗開成初元にて、爾後九十年間が晩唐故、正に當時の高襟詩人の隨一人である。

漢詩漢文學の感化は源語初め散文にも著しく、例へば現代の某々詩家が英語佛語詩を自在に物する恐らくそれ以上に當時にあつては普遍したもので、これが次第に衰へたは假名交り文の發達と共に、その方の藝術的表現性が發揮せられたためで、獨り漢詩は詩と稱して漢字漢文の榮えむ限り、尙久しく民族詩感の一方のはけ口となつてゐた。朗詠が生じたものも口誦に便せる朗誦歌の異種を新渡唐山の新文學中に覓めたに外ならぬ。

四　鎌倉室町の詩歌

文治年中から吉野朝廷までの武家時代は卽ち鎌倉期である。中央集權的文化政治の平安朝期か

ら源家覇府を稱へ、北條氏之に代り軈て足利黨の擡頭までの百五十年間は、殺伐と戰闘との亂離の間に武士階級が專斷政治を行ふた時代であるが、所謂平安末期天仁元年には義家卒し、十二年目の元永二年には淸盛が生れて、南都北嶺の爭（久安元年）は恰も「詞花集」の成つた翌年であるから、平安末より既に亂世に及んでゐたその詩的影響は圓位が風詠にも早く十分に見えてゐる。

亂世に崇ばれる「力」は運慶快慶が作に現はれ、「力」の非力を嘆ずる佛者の遁念は「方丈記」に見え「徒然草」に現はれ、日記紀行にも瞥見せられるが、「新古今」を筆頭とし、其れに「千載集」が前行し、「新古今」につゞく「新勅撰」（定家撰）、「續後撰」（爲家）、「續古今」（爲家）、「續拾遺」（爲氏）、「新後撰」（爲世）、「玉葉」（爲兼）、「續千載」（爲世）、「續後拾遺」（爲藤、爲定）、「風雅」（花園院）、「新千載」（爲定）、「新拾遺」（爲明）、「新後拾遺」（爲遠、爲重）、「新續古今」（雅世）、等續出して二十一代集となり、外に「新葉集」（宗良親王）初め「百首抄」（定家）その他のアンソロヂー、「拾遺百番歌合」、「遠島歌合」、「光明寺攝政歌合」の類の歌合に、「八雲御抄」あり、「金槐集」、「玄玉和歌集」、「明日香井和歌集」、「夫木和歌抄」あり、「新古今」は定家、家隆、雅經、有家、道具、寂蓮等撰に任じ、優玄の新技巧を志して、よく古今以外に出でたが、古今以上の詩感內

容量に概しては到達し得なかつた。當代歌道の理想は、定家が「近代秀歌」に貫之の巧と強を稱し、その簡素と妖艶に缺くとを慊らぬとしたに徴しても、將た所謂有心體の主張に照しても推知すべく、よく高所に到らなかつた所因は、餘情といひ優雅といふ目標を一に手法の末節に於て囚はるものが多くなつたためである。爲家の「夜の鶴」に「言葉を優しくとりなして」といひ、辨入道眞觀の「簸川上」に「たけ高く遠しろき第一とぞおぼえ侍る。」といひ、「爲兼郷和歌抄に、」「言葉にて心を詠まむとすると、心のまゝに詞のにほひゆくとはかはれる所あるにこそ。」といふ心は凡て可なるも、只古歌心を慕ふといひ歌論に急なるは、即ち内に創作の熱火なく只創作の果を恰ばんとする焦心の余、詩學の云爲に走りたる時代なるを露はせるもので、その間、二條毘沙門堂兩家の新舊爭ひあつて、家兼時に新派體を稱し萬葉人をあげても、その作品に革新の實は尠く、僅かに定家門から出て古萬葉の精神をつかんだ將軍實朝と、それにつゞく仙覺が新點の好事業と、懷賢舜惠等の研究とは、更に寂印を經て南北朝に入つて俊成、由阿、宣胤より宗祇に及び、古文學新研究の道漸く開けるに至る素因をなした。實朝は歌人としてのみでない、此點に於ても歌論史上に注目すべき位相にある。

これを「萬葉」「古今」を産んだ前時代に比し、此時代は怠沓と墨守の時代で全體として見るべきものではないが、中に少數の光りある作家を包藏し、「新古今」その他に於て累々たる駄句拙歌が手技の末節に困じて生あくびする中に、少數の幽玄餘情體あつて、勿論古萬葉になく、古今にも出なかつた時代色を婉雅と哀調と纖麗との間に完成した。これを今日の萬葉好きが認めねば公正の趣味に立つものとは云へぬ。たとへば、宗良親王が「李花集」の如き、纖緻の風の理に眞率の實感蠢くを感じ、頓阿が「草菴集」や「末木集」、「新葉集」等アンソロギー中にも寂歷のひびきをよく愛するものは、此時代只織巧一念の造花歌類のみでないを得悟らう。

和歌を外に、五山の詩僧が產んだ文學特に漢詩に就て一瞥の要がある。鎌倉吉野京師相續く亂世の和歌が、只管ら纖緻ゝ競ひ內に惻々たる哀感を含めるに對し、他の時代相の一面を强調するは五山禪僧の和臭を蟬脫した冲淡雄渾の漢詩作で、さきに建仁二年に建仁寺建立あつて榮西を開山として禪宗開け初めてより、文應元年には宋僧普寧來り、弘安五年圓覺寺成つて正安元年元僧寧一山歸化して爾來五山頓に榮え、夢窓、虎關、雪村、此山、義堂、絕海の詩文僧輩出し、就中絕海の「蕉堅稿」は明僧道衍も讃嘆の聲を禁ぜず、義堂の「空華集」は天寧の埼公も日本此郎あ

るかと嘆仰した程の黄絹幼婦で、五山詩は應永以前最も隆昌を極めた詩想の性質と學問の性質とから五山が自由に漢詩をマスターし得たは當然である。

漢詩文の影響は謠曲にも見えるが、其謠曲と並び行はれたは當代新文學の連歌で、和歌贈答は古くから存し日本武尊の筑波詠に初まり、平安末期には俳諧連歌行はれ、宗祇に到つて全盛を極め江戸に入つて漸く衰微したが、其間、宗砌、救濟、梵灯、善阿、周阿、良甚（文和五年「菟玖波集」二十卷成る）等出て、宗長、紹巴、宗鑑、守武現れて新俳諧の形式を完了した。

小歌の類も大永八年「閑吟集」成つて早歌、田樂、近江節等の三百首を收めてゐるは注目すべきである。

五　江戸詩謠

戰國桃山期を絕て一たび大江戸に入るや、山僧文學が朱子學を儒門に殘して、漢詩は學者政治家輩の玩物となり、和歌は幽齋に「衆妙集」元政の「草山和歌集」、後水尾院に「鷗巢集」あり、「慶長千首」「林葉累塵集」のアンソロヂー、眞淵、宣長、春海、蘆庵、景樹の歌學あり「幽齋聞

書」、「國歌八論」出で、萬葉は作に感化せず註疏のみ發達し末期に曙覧元義等の再說者あつたが德川期の文學センスは畢竟堂上より庶民にひろがり、詩感は連歌を經て俳諧に移つたので、貞德は紹巴を繼いで「御傘」十卷に三つ物の根元を說き、伊丹派の鬼貫を經て宗因の通俗談林派を通過し、踏靑芭蕉の正風こゝに生じ、當年民族詩興をこの翁一人でよく代表し得、こゝに十哲生九郎ち蕪村現れて寛政六俳人となり、綾足の片歌試みられ「温谷集」に大和詩作例出て遠く明治の新體詩を豫感せしめた。天明の狂歌は赤良管江等之を築き、慶紀逸「俳諧武玉川」を撰して新附句を纂し、雜俳爰に起り次いで柄井川柳の「柳樽初篇」發市せられたが、もと市井文學の小品藝術は小乘的昌平の鎖末趣味を示はすのみ、民族詩感の昂揚は些かもなくしてつひに明治に到つた。小唄の類の民謠調はその純情かへつて、此等の小藝術に勝るものもないではないが固より文學の本道ではない。全三百年江戸の詩情は悉く芭蕉又下つて蕪村の十七音句に盡き、俗形に執いて反つて大雅に徹し得た。正に詩人の詩業である。

六　結論

文字を借りて言葉を現はし是を漢讀し、國訓し國義を與へて表現妥に成り、傳統の原始詩情は幾度か變轉した隋唐宋元明清代詩文の粹を味ふて形態改まり、詩感展開して旋頭歌廢れ、片歌亡び連歌起り漢詩榮えて一貫連綿の詩形は三十一音詩に盡きるが、十七音詩生れて民族は二種の詩形を確得した。

國語の音韻の約束は長歌の遍在を充さぬ。長歌亡び今様すたれた大和詩榮えなかつた所以である。漢詩文に堪能の時代人が漢詩に詩與を托したは自然である。しかし其は異邦詩をよくする者が異邦語詩を便とすると質的大差はない。依て民族は一方長、短、連、片歌、漢詩、俳句の詩形を凭る外、一面散文律の自由を愛でた。本邦に隨筆俳文等散文詩の昔から夥しかつた所以である。

詩形の短小は民族精神の要求也とするは短見である。國語の音樂的思想的功果を顧る要がある。吾等は尚夥しく強く廣く厚き感情の氾濫に苦しんでゐる。詩形の問題は民族詩情の中心の切實悲痛な當面の問題である。

一葉の日誌文學

明治文學の回顧は、表面上の花やかさに比して內容のそれに伴はぬ點に於て、他の文化施設史──哲學、經濟、法律、政治その他の史的考察の場合とひとしく、結果から逆つて顧る時は、われらに夥しき寂寥感乃至失望を與へる。

この寂寥もしくは失望は、表面的華飾に對する反動情緒であり、他の時代との比較から來る當然の歸結でもあり、もしくは、他の國々の同時代のそれと比較された場合の結論でもあるが、一たび立場を替へて、建設的使命の成就の成否の問題から之を再査する時は、──すなはち、凡そ近代的なる思想、情緒、制度等の移殖と改造と輸入と施設との跡を考究する立場に立つときは、その間大小是非の差別はあるが、時として拾ひ物のやうな氣持がしないでもない程度の「發見のよろこび」を感得する事も稀ではない。こゝに主題として選び出した一人の閨秀作家一葉女史、

樋口夏子の人間性とその藝術とのごときも正しくその一である。

悉皆ゆる文學史に於て、女性はしば〲「女性なるがゆゑに」といふハンディカップを附せられてその卓越を保證せられる事が一再でない。今の日本文學に於ける女性の位相は特にそれが甚しい。これは單に現代日本に於ける特別現象ではない。敎化侵潤の機會を適當に與へられる事の、家庭的擔任者であるといふ理由の下に、割合に尠かつた過去の女性を有する悉皆ゆる場合に於ける通性現象である。

然し乍ら、杳かに過去となり了つた時代の文學の考察——すなはち古典的なる文學史の考究に於ては、女性は男性と同等の立場に立つて、何等のハンディカップをも附せられる事なくその本質價を嚴査せられるのである。萬葉集に於ける女詩人、平安朝に於ける閨秀詩人、隨筆家、小說家の卓越に比して、德川時代のそれが荒木田麗子以下の諸巾幗者流を數へ盡しても杳かに劣るものあるは、近世日本女性の古代日本女性に較べてその藝術性の低下を云々するよりも、それ以上以奥に遡つて、女性の社會的、敎化的立場の自由性の多寡に就て考へなければならないものがあるからである。英吉利文學に例をとるならば、十七世紀のアフラ・ベンより十八世紀のメァリ・タイ

を經過して、十九世紀末のアリス・メネルに至る女人藝術の經過を一瞥しても、必ずしも數世紀に一人を辛うじて產するほどの第一流人物を索める事が出來ぬにしても、一世の情念生活を代表する人間としての優秀藝術家をひろひ出す事は難事でない。たゞ、その數に於て劣る事と、質に於て時空を絕する卓抜級に至り得ない事と、此二者に就ては自ら他の問題として扱はねばならぬものがある。一葉の如きも、明治半世紀の文學者流中、旣に性別的ハンディカップを完全に斥けて考へうる現代に於て遡つて考へる時は、多くの男性文人の滔々たる間に伍して、嶄然群を拔いて光つてゐる何物かを、何人も感じないではゐられぬものを所有してゐる卓れたる藝術家であることに異存はない。

たゞ、何が故に卓拔なりやの問題に至つては、見る人によつて多少の差別がある。一般讀者に知られてゐる一葉は小說家樋口夏子であつて、その代表作は、「にごり江」(明治二十八年七月。二十四歲作)であり、「わかれ道」(明治二十八年十二月。二十四歲作)であり、「たけくらべ」(明治二十八年十二月。二十四歲作)である。その以前の作品は一二の例外はあるが大部分例へば「曉月夜」(明治二十五年十二月。二十一歲作)にしても、「雪の日」(明治二十六年三月。二十二歲作)にしても、「花

ごもり」(明治二十七年四月。二十三歳作)にしても、多くは習作であり未熟作であり、何等一葉の特定の一時代を認めしめるほどの重要價のない凡作劣篇にすぎない。すなはち、一葉は、天がなほ齡を貸し與へたならば、更に展開したかも知れない好望のあるものと、それには反して時代の急激な變動に處して準備を失して、空しく異才を適當に延ばすの期を捕へる事を得ずして、時代遅れの「過去の鬼才」の殘骸にすぎないものとなり了るであらうかも知れない豫感のあるものと、此二種の豫嗜を味はれながら、ある一時期を確立し得た小さき「奇蹟の年」——明治二十八年に於て卓れた業蹟を示したまゝに若うして亡んで了つたのである。

「たけくらべ」等の代表作が、當年の男性小説家の間に伍して煌々の輝きを見せた事はいふまでもない。誠に此年の比較的佳品を拾ふならば、露伴の「新浦島」(國會新聞)、柳浪の「變目傳」(讀賣新聞)、鏡花の「夜行巡査」(文藝倶樂部)、柳浪の「黑蜥蜴」(同上)、鏡花の「外科室」(同上)、三味の「新袈裟物語」(太陽)、紅葉の「鷹料理」(四つの緒)、小金井喜美子の「浮世のさが」(太陽)弦齋の「小弓御所」(報知新聞)、喜美子の「名譽夫人」(文藝倶樂部)、澁柿園の「最上川」(單行本)天外の「はやり唄」(二六新聞)等で、喜美子のは飜譯であるから除いて他の諸篇に比して、一葉

の作品は此年新舊作合せて七篇の內特に「たけくらべ」、「にごり江」の二篇は、藝術の絕對價に於て高き位相を示し、同じ女流の稻舟女史、ゆふ風女史、楠緒子女史の同年の作などの比較すべからざる美と力とを表はしてゐる。「藪鶯」の處女作以來旣にその確固たる位置を占めて動かない花圃女史も、湘煙女史や曙女史や若松賤子女史等も此年に特異の收獲はなかつた。これら凡べての女流作家を通じて一葉が唯一の輝きであつた事もいふ迄もない。

しかし、小說家一葉の將來はどうあつたであらうか。花圃默し稻舟死して、長き活動をつづけた巾幗者流は一人もなかつたが、一葉かゝりに長命して著作をつづけたにしても、かの浪曼的鏡花が奇異の展開と存在とをつづけた如くにその樣に、轉展激しき過渡期に於てよくその流風を持續したとも考へられぬ。勝氣で、固執的な一葉は、自分の住む世界の消息としての小說が、その同時代性を失したと人にも云はれ自分も考へたならば、いつそ筆を折つて縫ひ張りの業に潜念して文壇などは一切介意しなかつたに相違ない。一葉は古き女性の最も卓れたる者であつたが故に、その新時代に對する態度も、必ずや一きは徹底的であつたに相違ないと推せられる。樗牛逝き紅葉去つた三十六七年の交まで辛じて筆をつづけたにしても、自然主義運動の排他的熱中なるや、

到底一葉の存在を許すまじく、一葉とても到底双在する事すらいさゞよしとは思はなかつたに相違ない。一葉の死は、最も適當の時期で假りにないにしても、その時期に著しく近接した時に起つた事であるのに相違はないのである。

そこで、一葉の藝術の頂點を、如上の理由で、「にごり江」その他の數篇と定めて、その前後左右の男女作家と比しても、その卓越は改めて縷說する迄もない事ではあるが、全然類を絕した特異の作風の作品類といふのではない。同じ元祿文學勃興の氣運に際會し、狹斜の巷說を材とし、下町式男女老幼を扉ひ來つて、情痴と本能と義理との纒綿し紛糾し錯雜し右往左往する世態の表裏を活寫するに至つては、硯友派とも根岸派とも特に著しき差別はない。同じ空氣の中にあつて等しなみなる時代文學の傾向に在つて、一葉は獨自の個性の風格を十分に發揮したが故に、その藝術性の卓拔を稱せられるのである。

しかるに、此優秀小說以外別に更に一つの卓拔文學が一葉にあつた。その日誌はそれである。この日記に就ては、夙くも馬場孤蝶が「一葉全集」後篇の跋文に於てその價値を說いてゐる。卽ち、「或時代に於ける或婦人の心の經過を可なり詳細に記した記錄として、人間的興味に饒な書類

として」これを推賞し、「人間の心の記録として不朽の價値がある。少くとも、在來の日本の文學上に於ては、比類の少ない文書」であると激賞し、「負けぬ氣性の婦人であつた。落魄したと自ら思つて居た。侮られまい、欺かれまいとは、他人に對する時の一葉君の態度であつた。『日記』は斯ういふ婦人の心中の記錄なのだ。」と說明し、「私どもは『日記』を一葉君が生地のまゝで人の前に立つたものと考へざるを得無い。」と斷じ、「一葉君の書き物のうちの最も重んずべきものの一と考へる。」と再說し、「一葉君は『日記』を文章の稽古、習字の稽古の積りで書いたのださうだ。書き放したまゝでロクに讀み返しも爲無かつたものらしい。今日殘つてゐるものはその全部では無く、一葉君自身で、鼻紙にしたり、反古にしたりした部分が大分あるといふ話だ。原文は實に旨い字だ。殊に大急ぎで書いた部分が實に見事だ。」といひ、又、「一葉君は『日記』を燒けと遺言したといふ」と誌してゐる。

以上要約摘記した孤蝶文で、日記の性質と位置とはよく判明しよう。が、日記文學としての價値については言が不足であるを免れない。

日記文學は、作者が日記の文學として書いたものと、偶感偶記の偶然なる殘存文書としてわれ

らに與へられたものとの二種がある。ピイプズやアミエルやイブリンやゴンクウルや、「高野日記」や「はるのみやまぢ」や、「臥雲」、「台記」、「海道記」の類から「中務內侍日記」などの日誌文學を包含させると、紀行と隨筆と記錄と美文との多方面にわたつて、その種別は甚しく廣く多い。文學として殘つてゐるものだけでも、その存在理由は多岐にして錯雜である。が、何れにしても、日錄といふ形式に於て、人間の藝術性がその本能と、知識と、道義と、享樂との各方面に於て、能ふ限り鮮かに生々と表現せられてゐる點に於ては一である。ある場合は小說的結構ともなり、ある場合は隨筆的印象ともなり、ある場合は散文詩的效果ともなり、而してそれらの何れとも違つて何れにも通じて獨自の表現機構と位置とを確有するところに、さけすむべからざる儼然たる領域があつて存する。

一葉の日記文學に於ても、貧苦と藝術苦と反抗と焦心と、哀傷と自足とのさま〲な心の境介に應じて、一葉といふ卓れた女性の心理史が活潑に鮮明に展開してゆく。樋口家の家記としては明治大帝治下の知識的無產階級にぞくする一小商家の隨感的記錄であり、小說家一葉女史の手記としては、女史の佳品傑作の背景となる實際生活の具體的說明であり、時としては時勢批判であ

り、世相の觀察であり、ある時は戀の私語であり、處女の咏嘆であり、戀される女の冷靜なる嘲笑であり、跡取娘の決心でもある。つゝましき中に諷刺を藏し、婉雅のうちに冷察が仄見えてゐるところに、一葉の性格がよく現はれ、師匠や心靈家などへの考察、集ひ來る青年文士への用捨なき批判に、かへつてその勝氣な心中にわだかまる淋しさや苦しみが表はれてゐる。明治二十四年四月十一日「若葉かげ」に初まり、明治二十九年七月二十二日の「みづの上」に終る四十篇の日錄は、これを明らかに小說と切り放つて、この日記しか殘さなかつた無名婦人、又は末流婦人文學志望者の手記として見ても、その表現力と、その人間性その藝術性深奥性は爭はれない。特に媚をよせて集る文學青年等や、齋藤綠雨、樋口勘次郎、豪商松本某、關如來、心靈家某等に對する感慨には女史の思ひちがひもあらうし、圖星もあらうが、さういふ男たちの云爲が一葉に反映してさまざまの推察や、反省や苦笑や嘲罵を綴つてゐる心の動きの細かい描寫は、優雅な美文體ではあるが、具象性も直截性も十分に具へて、甚しく印象的であり多面體的である。二十歳から二十五歳に至るまでの一處女の家居日記として、この文章には夥しい詳密なる心理效果がある。

このやうな日記は、明治諸文獻中の公けにせられたるものの中に多くを見ない。假作せられた

る小說類以上に、この一文書によつて、われらは明治文化の中葉期に於ける、婦人性とその情緖と及び背景となれる世相の斷面を瞭かに看取しうるのである。紅葉には、死後上板せられた「十千萬堂日錄」があるが、これには食慾と宴會とつかひ物との記錄の間に、僅かに人間紅葉の半面があら〳〵とうかゞはれる斷片的記載があつて、尠からず興味を牽く書物ではあるが、それは飽くまでも小說家紅葉に興味と、價値とを感じる者にとつてのみの興味にすぎず、若しそれ一市井人尾崎德太郞の閑居記錄としてみるときは、その興味と、勿論その價値との大半を失ふものであるにすぎない。齋藤綠雨にも零細なる斷章日錄の小冊子として、死後はるかの後に出版せられたものがある事世間周知であるが、之れ亦綠雨の性癖の一部面の殘照といふにとゞまり、到底日誌文學としての獨立的價値に乏しい。二葉亭の俳諧日錄はその名の示す通り以外のものでも以上のものでもない。湘煙の小記はあまりに非文學的であり、眉山の「ふところ日記」は俳文的名文章とたゝえられてをり、大體それに相違はないが、日記部に入れるべきよりも、寧ろ紀行部に入れるべき性質の好短篇であると稱した方が、より妥當に近いであらう。學者、政治家、新聞記者等の卓れたるものの日誌もその數決して稀少でないが、紅葉の場合とひとしく、その職業專門に裏打

ちさせて初めてその史價が生じるので、拙劣極まるその表現法は、固より獨自の文學價値を發生せしむべくもないものが大部分である。

二十五年一月中の半井桃水を訪ふあたりの、心緒のあやしき激動の女性らしき詳かなる描寫は同じ經驗に取材した小說「雪の日」の描寫そのものよりも小說的でもあり、藝術的でもある。平田禿木に初めて逢つた二十六年三月二十一、二日の長文にしても、田中みの子なる友人への情を簡勁にうつした條りにしても、師中島女史の淫行に對する忌憚なき感情のつつましき流露にしても、長短參差として一個藝術魂ある巾幗者流のありのすさびの水莖の跡が、その實殆ど小說以上の描寫的魅力をもつて、人に迫るの實感を與へられぬものはなからう。特に、それらの心性史の容葍の間に、思ひ出したやうに鏤められた社會記事、大石大使歸朝とか、伊藤勇吉君きずいえて參內とか、きりすと敎徒子ころしの件重禁錮三年づゝと申渡さるとか、福島小佐浦鹽斯德を去る五百里の地に無事着されたるよし電報ありといふとか、千島艦の處在たしかにしれるとか、淺草吉野町强欲婆平澤ひな斬殺せらるとかいふやうな市井雜事の仄聞の手記は、貧しくつつましやかに小商ひして暮す女家內の小さな茅屋の窓から、高い大空を見上げるやうにも感ぜられゝば、女乍

らも一家の見識を自信する處女の女らしき意見を吐くさまをまのあたりに見るやうにも感ぜられる。

二十七年二月の條に、天啓顯眞術會本部久佐賀某なる者に秋月某女と名乘りて面會し、長時心談の上心の痛苦を訴へるところあつて後、這個心靈術漢書信をはせて郊外散策に誘ふにきつぱいと拒絕の手紙を送る條りの如きは、事實の眞を何處まで描いたものかは判らぬが、女史の性格性癖を雄辯に裏書きするのみか、全日誌中最も煽情小說的色彩鮮かな個所として注目を牽く。

恐らく、明治に出た無數の遺稿中、この日誌の如きは正しくその藝術價の最上を以て允さるべきものであらう。而も、時は明治二十四年より九年に及ぶの間であり、筆を執るものはたゞ齡五々の春にも滿たざる處女である事を注意する要がある。獨步の田園日誌と蘆花の村居日記とは、一葉に次座するものと稱してよからうが、それとても三十年代若しくはそれ以後の產物である。われらは、この時代この婦女によつて、實にこの日錄文學を明治文學史中に殘された事に就て限りなき喜びを持つのである。

嗜讀傳發端

むかし〳〵の小波が、勝々山時代から、涙香、丸亭の探偵物時代を經て石井研堂ものゝ科學小說を嗜み、轉じて紅葉、篁村、眉山、南翠、美妙、麗水、一葉、柳浪、探菊、三昧、蓼洲、得知、乙羽、靑軒、鏡花、浪六、思案、水蔭、櫻痴、弦齋、新二、太華、天囚、文海、霞亭、抱一庵、眠山、花痩、嵯峨の舍、花袋、天外、稻舟、薄氷、松葉、不知庵、紫山、花圃、露伴、逍遙、鷗外、等の小說飜譯の數々をまだ柔かいあたまの小學尋常の三四年頃から分らぬ乍ら讀み耽つてそれと同時に漣山人、櫻桃、小舟等の「少年世界」や桂月、雨江、羽衣、臨風、月杖、蝶二、天隨らの美文韻文に少年魂を打ち込むかと思へば、春浪、鷗村、來城らの勇ましいを通り越した冒險奇談に坐ろ小胸を踊らせて勇士になつたり若衆に變つたり、文學少年になつたり、お伽噺少年に退いたり、科學好きになつたり、夢想家に轉じたりしてゐる間に、「少年世界」の漢詩の投書家牛田

良平の材能を羨まめば、服部躬治の「少年歌話」を耽讀もし、「小學新聞」の少年俳句の三等に當選もすれば、「中學生」の新體詩欄にまぎれ込んで、賞品の來ないのに業を煮やしたりしてゐる內に、たう〳〵標本的な數學ぎらひの文學少年が出來上つて、いつの間にか夢なつかしいわが世の春の朝ぼらけといふ花の十代もすぎてしまふ事になつたわが少年時代を顧ると、事每に一々この書籍の感懷がついてまわらぬ事はない。

今以て臥ても起ても步いても立つても坐つても、財布のひもはゆるんでも、いつかな本ばかりは手離しさうにもない變人扱ひの、ビブリオメニアになり上るまでの過去三十餘年間を今年丙寅の孟春、客の氣の絕えたを幸ひに机に臂ついて考へれば、さま〴〵の悔ひと羞らひとなつかしさと、さて今日までよくぞ生きて來にける哉、といふ心閑けさと少し許りの埃り見たよな誇りの香ひのするものまでが、ミングル・マングルして目まぐるしいそのマイクロコズムの其中に、七轉八倒する小さい男は北海のメールストロームへ投げ込まれた漁舟のやうでもあれば、內庭に渦を卷く小旋風にあほられる紙片れのやうでもあり、砂時計を携へた死の神にうなぢをとられる小鬼のやうでもあれば、節季におはてる小商人のやうでもあるが、その小さなエルフ奴がきまつて小さ

な本を小脇にかゝへて、アラビヤ夜話の昔の惡魔に宙につるされてをるのであるから、われとわが身と本といふものとが、宿命あつてともぐに生れて來たやうな氣持ちがするのも不思議ではない。かのヂロラモ上人なら救ひの手をも下されよう。

古本屋のおやぢ奴が小憎らしくもなつたり、なつかしくもなつたり、ひとの目付けて置いてあるべき一物がない許りに、洗ひさらいかつさらつて行つた三井の圖書掛りが恨めしくもなれば、早く買はなかつた本が見すく暴騰して小癪にもさわる。必要册子を骨董同樣に扱つてゐる和本屋、唐本屋の主人めが癇にもさわれば、龍動はマッグズ邊りの高賣り店で買ふなら三四十兩もする初版本を、早稻田邊の小汚ない小店で半圓ほどで買つては友達あつめて威張つてみたりする。憐子は東坡ではないが門を閉ぢて書僻になつてしまうのだが、それを通りこして書痴か書淫かまさかビブリオ・クレプトまでには成り下らないではあらうが、さてく情ない書物地獄だと、自ら慨いて見ても同情顏する人は一人もなし、まゝよ勝手に臥ころんでこの小春の好日を讀み暮せと横本片手に横になれば、いつか中探してゐた烏有先生傳の材料が目付かつた、早く忘れない內にノートに書き込めいと又起き上つて靑鉛筆をとる、傍に昨年の秋のシーズンに出た倫敦の古本目錄

のとどいたのが二三十册も散ばつて、方々に欲しさうな本の赤いアンダアラインがしてあるのに目がついて、これは耐られぬと立ち上れば、目の前のめくり暦に明日は火曜日とある。こりや、講義の新稿の調べもしておかなくてはと、書齋目がけて馳け込むとたんに表のリンがチリ〳〵と鳴つて、「へい丸善でムります。」とよくしたもので正直に掛とりに來るのだからやり切れぬ。

靑年の頃に讀んだモウパスサンの短篇中に、人は床に生れて床に戀ひ床に死すとあつて、尤もだと感じたが、自分は本を持つて生れて本を持つたまゝ戀して、本を持つたまゝ死ぬのではなからうかと思つたこともないではなかつたかも知れぬ。いくら正直に告白しようと考へても、高がルソー程度の不正直しきや書けないのかと思へば、「僞はらざるの記」を書いた獨歩が、何んだ少しもあけすけ云つてはをられぬではないかと叱られてゐるのを當然と考へぬでもないし、ストリンドリ見たやうに、告白小說で片づけた方が賢いとも思へば、日記しかつけなかつた無言の思索詩人、アミエルのやり方が小憎らしいやうにも感ぜられ、ウソと眞實とのあはひを云つてゲエテの自傳見たやうに、鐘がなるのか撞木がなるか試してみろとも決心しようとするのだが、どれもこれも厭になると、それではいつそ老書生の讀書傳でも書いたなら、無事で安心で昔なつかし

くてよいではないかと、さて一人背いて筆をとつてみるのである。

自分はいつ一體本を見たのだらう。生れて直ちに經書を讀破した神童では無かつた筈である。が、ほとんど遠い一世紀も前から文字を知つてゐたやうな氣持ちがする。

小學校も一年はわるくて二年はよく、三年はわるくて四年めにはよくて、高等科に進んだ筈だ授業中にしやべつて立たされて、一人殘されてゐるのがいやさに一寸一人芝居をしてゐる處を、窓から覗いた友達に見付けられて末代までも冷かされた覺えはあるが、よく出來ると云つて賞められた記憶は更にない。數學の時間には悄れて作文の時間には大元氣だつたおぼえはあるから、作文や國語や歷史だけは少しは出來たのかも知れぬ。尋常五六年の作文の時間に「舊記によれば」と書くべきやうな個所を、「古事記に曰く」と書いてしまつて、「お前はいつ古事記を讀んだ?」と冷かされて腹の中では「何、讀んだ事はあるのだい。」と云ひたかつたのが、生來の氣弱からつひ「すみません。」で頭を下げて後で一人で癇癪を起した記憶があるから、今から考へると、さぞ齒の浮くやうな作文ばかり書いたのだらう。自分が一番うまいと自負して居たのに、近頃となりの

椅子にゐる友人がめき／＼とやけに嚴かしい文章を書く。變だなと時間中何げなく横目をつかふと、その子供國府犀東の何とかいふ難かしい本を持つて來て、その中からひよい／＼書き抜いてゐる。怪しからぬといきまいた事もあつたが、その友達は後中學を出ると長い事自分の家の店番を仰せつけられてゐてその間に、生來の覇氣を皆なくして漸つと兩親をなつとくさせ、上京して齒科醫學校を出ると、その年にポつくり死んでしまつたが、妙に犀東張りの漢文くさい文章がすきな、犀東ばりの新體詩まで作つた男であつた。透谷を朗讀したり近松を朗吟したりして、美文韻文で持ち切つてゐた自分を少からず啓發してくれた友達は、その後文學をやめて今では大阪で流行る齒醫者をしてゐる。詩を作らぬと絶交するとタイラント振りを發揮して、無理にも詩を作らせる事にした友達は、海員になつたり洋服屋になつたりして居たが、今は生死の程も分らないが昔思ふと戀しい友人の一人である。藤村の小説に出て來る娘と筒井筒の戀のままごと見たやうな事をしたと、自ら小説に書いて同人間に冷かされた友達は、今は木曾の山奥のお大盡で治まつてをるらしい。厚い露伴叢書を持つて來てわざ／＼貸してくれた友人は、大學生のまゝで天龍川の波に呑まれてしまつたし、「布團」を讀んでしまつて「ふふん」と嗤つた友人は今では九州邊の會

社の重役になつてゐる相な。三木露風は「少年界」での投書家仲間であつたし、川路柳虹は「少年世界」の和歌のそれであつたとは、輓近漸く何かのきつかけで知つた事であるが、子供の頃に中學校のえらい先生樣ぢやと人に云はれて一度遊びに云つた國語の先生は、子規が平賀元義を初めて岡山の新聞で紹介したといふて隨筆に書いた、今は青山學院の羽生永明教授昔の芳太郎先生であると、これも近年になつて聞いた話である。

祖父が堅い神道家で父が堅い銀行家である處から、一切り時花つたいやな言葉を今では何とも思はずに使つて見ればかの軟文學、その軟派の文學の本は餘りない家であつたが、それでも化政以後の草艸紙は古いつづらにしまつてあつて、話をねだる度毎に大きな眼鏡をかけた祖母がそれを讀み〳〵話をしてくれたが、話がともすれば途絶えるので、本を見ずに話せと我まゝを云つて叱られた事もあつた。

そのかはり、四書五經から後藤點の飜刻本やら、平用門の神道書は澤山あつて、どうかすると何げなく開いて見てゐた一くさりを不思議に今でも覺えてゐる。

東京に遊學してゐた叔父から祖父宛に送つて來る雜誌の中には「國文學」、「心の花」、「明星」、「文藝界」、「新小說」等があつたが、「少年世界」の小波のお伽噺と一緒に「新小說」や「文藝界」の春雨や秋聲天外の小說をも讀めば、「明星」に出た「小詩人」發刊の豫告がどれだけ小さい胸を踊らせたか知れなかつた。赤い「帝國文學」の表紙をあけて樗牛や上田敏や竹風や嘲風の論文をひろひ讀みしたものである。「少年文學」の「雨の日ぐらし」や「こがね丸」を耽讀すると同時に「文藝俱樂部」に每號出た地方通信の怪談物を漁りよみしたし、「少年世界」の增刊の「海と山」、「紀元節」、「春遊び」、「祝砲」などをくり返しくり返し讀んで、中でも「春遊び」の猪波曉花（大橋乙羽の變名か？）の「出世大黑」の夢がたりや福田琴月のエキゾティックな冒險奇談「白薔薇館」、鏡花の小品「炭の鋸」の佳麗文章、秋聲がバルザック（と知つたは後の事だが）譯「猛獸の愛」などを喜び、大澤天仙が「讐討少年」の挿畫に少年が仇（と思ひあやまつた男を）うたんと詰めよせて片膝立てゝ、九寸五分を拔き放つた身構へがすつかり氣に入り親戚の金物問屋の息子からこつそり貰つた黑さやの短刀を拔いて、一人で二階にかくれてその身構へをやつて嬉しがつてゐるところへ、女中が上つて來たので照れてしまつて無暗に叱りとばした覺えもあるし、「白

薔薇館」では濠洲の戰塵を浴びてゐる土民軍の首領が、月下滿園に白バラの香を立てるホワイト・ローズ・ホテルの一室に閉ぢこもつて、植物學の研究に餘念がない處が氣に入つたのは、植物採集の興味を石井研堂の科學談から注入せられ、毎日〳〵秋ともなればドーラン下げて、原野にとび出す折柄でもあつた故であらうが、俠氣と異國趣味と科學熱と詩趣と、この少年の氣に入りさうなもの四色を一篇の短篇小説にこめた琴月文の氣のきいたハイカラな文體に魅せられてしまつたのであつたからに違ひない。「紀元節」では想太郎といふ少年が、天國地獄を旅する夢がたりが大好きで、日に一度は必ず見る熱心さであつたが、親戚の軍人上りに貸して無くされてしまつたくやしさは三十年近い今日までも忘られぬ。その後つひにあの增刊を見ないせいもあらう。

多賀宗之中尉の陸軍談は、長尾耕作大尉の海軍談ほど興味はなかつたが、眞面目なだけ一度は屹度讀んだ讀物であつた。「少年世界」も小波が獨逸に行つてゐる間、水蔭が留守を守つてゐたがほんとに面白かつたのは其以前の古びた趣味の史話や小説やで堅めた第六七卷頃までゞ、小波が歸朝してからはぐつと調子を下げてやさしくなつて、話もたわいなさすぎてさつぱりつまらなくなつてしまつた。難かしくても昔の方が面白かつたのである。

その小波の世界お伽噺は「不思議の洋燈」、「魔法博士」、「ホラ先生」何れも愛讀措かなかつたけれども、その前の日本昔噺にせよ、博文館の歷史譚にせよ、樗牛の「釋迦」、柳村の「耶蘇」、千河岸櫻所の「高野長英」、春山鶴峯の「島津齊彬」、大和田建樹の「大塔宮」はじめ少年讀本中の紅葉の「俠黑兒」何れも無我夢中に讀んだもので、少年讀本の叢書は特に卓れた作が多かつたが、小中村義象らの「花の白雲」式の史譚は國文調が勝ちすぎた上、精神が稀薄で興味がなかつた。

これら雜然たる文學少年趣味の間から、別の勢で萠え初めたのは探偵小說であつた。少年われの冒險慾感傷慾をみたしてくれた此等のもの丶、其後の經過如何は後に廻して、しばらく探偵興味の歷史を顧みてみよう。

○　探　偵　物

私が初めて小說らしい小說を讀んだのは、記憶してゐる限りでは、明治三十年か三十一年の頃の時事新報に連載せられた「小旦那藤三」といふ探偵物であつたらしい。わが家では嚴格で姦淫や强盜やの醜怪記事をことさらに、きはどい所まで毒々しく露骨に書き立てた明治中期の三面記

事全能の新聞をとる事をせずに、三面欄のないルビのない堅苦しい前々期の日本新聞、三宅雪嶺氏が自ら指揮してゐた頃のあの新聞をとつてゐたので、讀みたくても面白い通俗小說が讀まれない。おかげで、あの時分の日本新聞はロクに判りもせぬによく讀んだものであつたが、隣家の呉服屋へ遊びにゆくと時事が來てゐて、よく樂天の畫がうまいとかまづいとか評判してゐたが、そんな時に借りて何げなく讀んで見ると、成程、平生愛讀してゐる「少年世界」とは又別の趣があつて面白い。自分の知らぬ世界がはでに面白く書いてある。その時分は三日目の午後に東京から着くのだが、着いた頃を見計らつておとなりへ駈けて行つて借讀みをしたものであつた。其内にふと父に目付かつて叱られたが當分やめられなかつたものである。その呉服屋の前には古道具屋があつて、そこに眇目の人のよい小母さんが居たので遊びにゆく內、賣りに並べてある雜書の間から、扶桑堂大川本の涙香小說を見つけ出して、借りては讀み借りては讀みとう〳〵皆讀んでしまつた頃には、小母さんもあまり好い顏をしてゐなかつたと覺えてゐるが、おかげで探偵物がすきになり、「少年世界」に連載されたマーク・トウエインの「乞食王子」やカロルの「不思議國巡廻記」（これは「學窓余談」であつたかも知れない。）に凝り出して少年の誰も皆好くなる冒險談、

探偵談には一通り卒業してしまつたが、探偵談にはまだ飽きもせずに、英語が讀める様になつてからガボリーオからドイル、リーブからルブラン、ルキュー、フリーマン、チェスタトンとなまけ大學生の閑暇に任せて讀み漁つたが、今以て昔の名殘りか探偵小説は好きである。

その涙香物も一切り明治二十五年頃盛んに大流行して、島村抱月が前期の早稲田文學でその「索究的快樂」を主として「詩的快樂」を從にする根本態度を大に痛罵した事があつたが、面白いものは面白いので、今日も「死線を越えて」や「地上」が賣れたのは義憤に當らぬ當然で、當時とてもよいものはよいで別に儼然と嚴存し、モンマルトルを門苫取と發音し、シャンゼリゼーを覺えられない珍發音でやつつけて平氣でゐた涙香本が、時には馬琴調時には直譯調を試み波瀾重疊を本願として、記憶に便にして親密を感ぜさせる日本姓名を用ゐ、場處のみを歐化時代のあこがれの對象たる巴里や倫敦に殘したのが人心を獲た所因であらうし、その流行は思想史上から見ても、文學史上から見ても不思議はないが、二葉亭の名著ツルゲーネフ小説は二十一年の交に出て僅かに一部具眼者を狂喜せしめたも之れ亦きはめて當然である。

が、此頃流布の大俗小説よりも、昔の涙香物の方が今見ても面白く氣持ちがよいのは、老人染

みた尙古的偏感からであつたらうか。私は左樣考へぬ。「ドナルト・ダイキ」譯本「銀行の賊」の跋に淚香はメスメリスムの事から小說のセンセイショナル傾向を論じてアラン・ポオに言及し、小說快樂本位說を主張してゐたが、淚香彼自身政治に色氣あり、新聞事業に手を出して小說はほんの片手間仕事故通俗屋と罵られても、苦痛ともしなかつたであらうし、世間も彼の本來が別に在つた事は知つて居り、硯友社の香夢樓みどりが譯本「執念」に序して「黑岩淚香先生は小說家に非ず自ら爲す處ある人なり。」など書いてゐるのを見ても知れるが、明治文明史を編んでも彼を新聞記者先達の一人となし、探偵小說史の重立者となすものはあつても「天人論」著者として、明治哲學史中の重要人物に算へる人はなく、政治論政論家としてのウデやアタマの卓越を回顧したがる者はない。矢張淚香は明治的記者の先達の一人で、ガボリオやデュウマーやヒュウ・コンウェイの飜案者として、俗文學史の一區劃に小さい名を止める人にすぎない。けれども、現代の大俗小說が作者の生活の窮迫のあまりか、人心のうつろい易きためか、餘りに目先きの新らしさや小道具の飾り立てやに腐心して、讀者としてのわれ〳〵が初めからぐつと腰を下ろして讀んでかゝつても、尙、且さつぱり面白くも何ともない、ともすれば原稿稼ぎのさもしさが、文字の間から

浮出して見えすぎるに比べると、昔の探偵物は涙香はじめ丸亭素人でも、南陽外史でも、榎本破笠でも、菊亭笑庸でも、只それ興味本意の三昧境に入つて、悠々と書いてあるから如何にもさもしい處がなく、もの欲しげな處がなくて通俗ながら面白い。

當時出た涙香物は、大川屋と扶桑堂と金櫻堂とから出版されてをり、極くたまには三合館や薫志堂の藏版物も交つてをつたが、その涙香物とは、ざつとあげると

涙香集　劇場の犯罪　巨魁來
惡黨紳士　如夜叉　死美人
非小說　鐵假面　執念
活地獄　大金塊　美少年
他人の錢　白髮鬼　孃一代
人の運　捨小舟　怪の物
女退治　女庭訓　人外境
武士道　露國人　心と心

繪姿　古王宮　幽靈塔
雪姫　有罪無罪　玉手箱
妾の罪　決鬪の果　銀行の賊
片手美人　梅花郎　人耶鬼耶
海底の重罪　塔上の犯罪　眞暗
法廷の美人

等で、その外には萬朝紙上の呼物であつた「八十萬年後の世界」(?)とか「巖窟王」とか「噫無情」とか比較的輓近物と通俗哲學書として、哲學的思考の能力を最初に與へられた明治人がきそつて藤村操の煩悶事件等に關連して興味を集中して耽讀した「天人論」の類である。

例のザラ紙に刷つた菊判の粗末な本も昔おもへば厭な氣はしないのみか、その後大川屋が縮冊本時花りに乘じて惡クロースの袖珍本にしたので、到頭わるいものをわるい處へ落付かした氣がして不快だつた。あの菊判版にしておくか、又は、澤山はないが「法廷の美人」のやうに十年代に時花つた四六版のハイカラな石版刷りの方が昔ゆかしくて、この俗小說に何ともいへない土俗

味的價値を添へる。

「人耶鬼耶」などは「銀行の賊」とともに探偵文庫といふ大册の中に英人ブラックの講談「切なる罪」や井上勤譯ジュール・ベルヌの政治小說「佳人の血涙」や、同じ井上の沙翁の「人肉質入裁判」などと一緒に出た事があり、「如夜叉」などは赤いバックの美しい石版刷り表紙の厚い四六版で讀んだ方が、ザラ紙の菊版本よりは同じ扶桑堂本でも遙かに氣持がよかつたものだ。

涙香本の中では「雪姬」や「捨小舟」のやうな人情小說、家庭小說がかつたものよりは、「片手美人」とか、「人耶鬼耶」とか、「眞暗」とか「有罪無罪」とかいつたやうな、ウンと毒々しい犯罪一方の純探偵小說の方が面白かつた。「眞暗」のごときは、終りまでホントに眞暗で子供ごゝろに犯人の目星がつかず、讀み了つて、ハハア左樣であつたかと、今更らあたりを見廻して何となくそこらの空氣やら、もののたゞずまひやら、家具調度やらが犯罪的な氣がして率然と恐ろしくなり、讀んでゐた本を投げすてて往來へとび出して見ると、もう薄ぐらがりだと思つたのにまだ西の山には赤々と夕日が燃えて、夏の午下りの山間の靜かで暢氣な城市の大通りを、これは又暢氣きはまる顏をした百姓や商人や白縮緬をはば廣にしめたお役人などが、ぶらり〳〵とそつつき

歩いてゐるので、今までの息詰つた心持ちは自分だけの幻想であつたかと、今更あたりを人を見まわしてつく〴〵感に堪えられなかつた事も一再ではなかつた。

「白髮鬼」は特に文章がすぐれ、結構がたくみであつた。情仇新傳といふ妙な割註がしてあつたが、一旦死んだものが、實際に又蘇生して奇怪なロマンスを綴り出す趣好は珍らしくはなく、涙香本の中でも「非小說」にその趣好が用ゐられてあるが、涙香自らもその事を序文中に說いて、當時「非小說」を讀んだ讀者が、假りにも醫學士にまで死人なりと認定せられたものが生返る筈なしと詰つて來たに對し涙香は、いや、死んだといふよりも、死せしと見えて死せしには非ず、暫しが程命を停止せられ居るものなり、共例は種々ありと見え暫々洋書に散見する所なるが、中にも米國文學家故アレン・ポー氏の記す所の如きは、英學者の大抵讀みて知れる所なれば余は同氏の記事を例に引き斯る事もありと答へて言解きたりと云つてゐるし「鐵假面」の一節にも、オーピリエーが蓄骨洞より骸骨と爲りて生返つたくだりがあるし、又、ボアスコベの「大復讐」と云へる小說にもゴントラン・ド・ケルガスなる者が地底より蘇生し來りて、舊情婦を瑞西の山巔にて救ふ一條がある。がそれでも足らなくて醫者に訊ねた處貸してくれた西洋醫事新法の雜報欄に

「ある天然の作用に由り、一時生命を停止せられ全くの死人となり或時を經て生返るの例は最早や事々しく記す迄もなけれど是も其一か。八十四年の流行病にて死去したる伊國の貴族ハビョ・ローマナイ氏は何時の間にやら蘇生したる事實確かなり。其後ネープル府にて社會の上下を驚かしたる大事件も實は氏の關したる所なりといふ。」

と書いてあるので、早速西洋に問合した處、ローマナイ氏は目下自傳を著作中で、脫稿次第出版の約あり直ちに送り申さん但代價幾何其節までにお送り被下度云々と、返事が來たので大喜びで待ちに待つてゐると、辛つととゞいたので早速讀んで譯したのが本書である。「平凡にして而も無類(プレーン・バツト・オリヂナル)とは此種の趣向を云ふ可きか」と書いてあるのなど涙香の新聞小說に筆とつて當時の讀者を極端に狂熱させた腕前のわかる所である。

「有罪無罪」も佳品の一であるが、これには中江兆民が序を書いて、「刑の輕きは小人の不幸にして君子の幸なり」とてさかんに尋常俗吏の疑獄を斷じる事の危險を說いてゐるが、三十年初期までの國事犯や、その他の犯罪で怪しいあたまの法吏が、無辜の良民を寃罪に泣かしめた事情を知りぬいてゐる兆民自身には、かいなでの小說者流の著作の序とも思はれなかつたであらう。それ

はとにかく涙香が、「則ち西洋にて探偵小説（デテクチヴ・ストーリー）と稱するものの類なり。」と書いてある標本的の物語で、これや「玉手箱」などはいはゆる涙香物の典型的なるものであつたらう。「銀行の賊」は繪入自由新聞に「銀行奇談魔術の賊」といふ題で掲げられて讀者を引いたのである。

涙香に次いでは丸亭素人の

獄中の働　　三人探偵　　黑闇鬼
殺害事件　　慘　毒　　死人の掌
其囚人　　多湖廉平　　生殺自在
槍田夫人

等がある。丸亭は原本の選擇も文章も涙香に遠く及ばず、「慘毒」「多湖廉平」などが好評であつたらしい。

丸亭に次いでは菊亭笑庸あり

林中の罪　　不可思議　　鬼美人

嫉妬の果　耳と腕　火焰の首

等の作あつたが、これ亦丸亭と甲乙かはるところはない。

其外、榎本破笠に「黒眼鏡」南洋外史に

忍び夫　啞娘　どくろ船

祕密黨

その他あり、水田南陽は後に博文館から例の「魔法醫者」を譯して少年われらの大喝釆を博した。この本の前半は實に面白い奇々怪々といふ文字通りの筋であつた。

外には、我爲我意樓主人の「新發見黄金世界」は煉金術で黄金を作つてヒマラヤ山を打ち抜いたり、獨佛戰爭を買ひ占めてしまつたりする話、三遊亭圓朝が「歐洲小說黄薔薇」のハイカラな處をはじめ、「名人長二」にモオパスサンの俤をうつし、

業平文治漂流奇談　敵討霞初しま　松の操美人の生埋

荻江の一節　鏡ケ池操の松影　鶴殺疾及の庖丁

松と藤藝者の替紋　雨夜の引窓　蝦夷錦

敵討札所の靈驗　菊模樣千代の龜鑑　女學校
お里の傳　お蝶の傳　お辰の傳
お婉の傳　名人長二　八景隅田川
蝦夷なまり　政談月の鏡

等をあらはしたのも此頃であるが、これらは探偵小說でもなく、自分が讀んだ確かな記憶のあるのも五六を出でない。

探偵小說と思つて買つてさうでなかつたけれど、とにかく面白かつたものに、春の屋主人逍遙の「ふたごころ」がある。これは「フオールス・フレンド」といふ米國小說の譯本で繪入新聞にかゝげたもの、後、三十年の交に春陽堂から出たのであるが、表紙にバイブルのロ！マ字を六七行轉倒させて橫に書いてあるのが目を引いた。

浪廼家主人とあるは何處の誰か分らぬが「赤繩奇聞花吹雪」と題して「ドン・キホーテ」中の一節を我國ぶりに飜案したものが出たのもこの風潮の餘波に外ならぬが、今日から見れば明治飜譯文學史の材料にならう。

探偵小說流行の餘波としては森鷗外が、ある新聞のつゞきものとしてアマディウス・ホフマンの「玉を懷いて罪あり」をかゝげたのは、三十八年改訂水沫集序に、「エドガア・ポオを讀む人は更にホフマンに遡らざるべからず。此篇の如きやゝ、我嗜好に遠きものあるを、當時强ひて日刊新聞に連載せしは、世の探偵小說を好む人々に、せめて此種の趣味を知らしめんとおもひしなり。」とあるが、門苫取流の涙香本から一たびこのホフマンに來れば、同じ怪奇を描き、ひとしく探偵心を激發せしめる取材に則つた小說にもこれだけの差異があるかと驚かれる。金紙細工の歌舞伎芝居の龍宮から、ほんものの上天廣寒宮にでも移されたやうな氣持ちである。わが趣味にやゝ遠いといふてはゐるが、鷗外さん、もと〳〵この探偵趣味が皆無なわけではなく、かへつて逍鷗露紅と云はれた他の幸田、坪內、尾崎三氏に比べて一番多く持つてゐられたに相違ないその證據は、後「諸國物語」に收められた短篇譯篇中にポオの「うづしほ」と「病院横町の殺人犯」と「十三時」と揃つてポオ的の代表趣味なるものを譯し、中にも「モルグ街殺人」はポオの探偵小說中の佳品であるし、又、探偵ではないが怪異の興味に出立するものにカルル・フオルミヨルレルの「正體」があり、カルル・ハンス・ストロオブルの「刺絡」があるし、レニエの「復讐」や「不可說」や

シュニツツレルの「アンドレアス・タアマイエルが遺書」があり、諷刺的なハンス・ハインツ・エヱルスの「己が葬」がある。これら飜譯者の選擇興味の一貫した趣味を揃へ上げて考へて見ると固より漁史のいはるる通り、丸亭菊亭の亞流に汚さるゝ探偵小說興味をポオ、ホフマンの高所まで引上げやうといふ下心があつたには相違なからうが、譯者個人としても亦少からずこの種の趣味に耽ることを否まれないものがあつたと推測されるものがあるではないか。

「玉を懷いて罪あり」は我國最初のホフマン移植で、やゝ後に思軒居士が「ピット・エンド・ペンヂュラム」を「間一髮」と譯したのが恐らくポオの移植の先聲であつたのに對する。ホフマンはその後雜誌「新古文林」で短篇を發表した人があつた、がその譯文は完く齢するに足らぬものであつた。ポオのごときも鷗外に次位するごとき譯文は、ポオの呼聲のみ徒らに盛んである割に今以て一向に出ない。ボドレエルの呼聲盛んな割に一として佳譯が出ないと同一で、これは文章詩句の妙味が直ちにその作全體の價値と關連してゐる風の作品にあつては、原作文章の妙味を半減するに於ては、殆どその俤すらも忍ぶ能はざるがためである。これを判り易い事例でいへば鏡花、鷗外の文は外國に移すこと難かしいに反し、白鳥や武者小路のものはそれほどでない。前者

は文章が全篇に磅礴して內容を形成し、後者は一篇の布置による精神が直ちに全篇の內容となるからである。（この議論は後の機會に詳しくする）

さて、探偵小說の流行がわれら少年に愕くべき感化を與へたことは、當年の小學校の先生方は夢にも考へられなかつたであらうが、啻にわれらのみならず大人までもこの風化の下にあつたは、いはゆる撥髮小說榮へ而して衰へたあとまでも、涙香ものが次々に我々のあとから生れ出た少年に古本屋や古道具屋から三錢五厘で購はれては愛讀せられたのでも知られる。大正に及んで涙香が復刻されたから、一旦亡び去つて再び萠え出たのだと考へるのは淺薄であり形式的である。

世には需要がかなり强くあつても、樣々の事由で供給が何年かの間、之れに伴なはぬ事がしばしばある。少數で大冊の學問書なら、機敏な古本屋は定價五圓の「解說西域記」を四十五圓位にせり上げる位の事はするが、涙香ものでは元々何千と出たものであり、價が廿錢卅錢の安價な本故多少の需要は感じてもおいそれと出すことは手びかへやう。涙香ものは二十年代に全盛期の赤道下を航過して、三十年代四十年代初期には全く亡び去つてゐたのではない。古本が古本となり又その古本となり、甲から乙、乙から丙と轉々して辛くも需要をみたして行つたのだ。しかも涙

香物には涙香物の文章の低級乍ら土俗品的の一種獨特の面白味がある。昔ゆかしき香がある。この風味を感じとるだけの準備と敏感とあるものでなければ、後に生れた少年ではいくら奬められて讀んだとてちつとも面白くないのは當然である。それよりもコオナン・ドイルをたど〳〵しき青年文士の片言文で讀んだ方が、とにかく文章が現代的で判るから面白い。三津木春影の暮田博士があれば、涙香のガボリオには用がなくなるのは尤である

一月の「早稻田文學」を見ると江見水蔭が

「探偵小說を社中が匿名で出したのも此歲であつた。涙香物が横行して、普通の小說も賣行が惡い。毒を制するに毒を以てすだ。讀者をして探偵物に倦きさせる程探偵物を世に出した方が好いと春陽堂主和田鷹城が反間苦肉の計略なので、僕も「四本指」「女の死骸」「船中の殺人」等を出した。」

と書いてゐるが、成程、硯友社小說は紅葉はじめ當時の高級新興文學で、涙香物は俗受ものだから早く飽きさせるには、澤山市場へ出して滿腹させてしまへばよいと云ふ理屈も一理たるを失はぬが、眞面目で製作に精進してゐるものが、そんな間拔けな方法で我黨興隆の秋を便々と待つ

てゐられるものであらうか。又、そんな低級物にわが筆を染めて筆の汚れを感じないであらうか。茶氣と衒氣にみち／＼た二十年代の文士であるから、その位の事はしたであらうが、單純にさういふ原因のみでやつた仕事とは考へられぬ。これは矢張り春陽堂主の販賣政策と作者側のふところ加減とが妥協して、それに前説の茶氣衒氣が加味せられて出來た事ではなからうか。して見ると春陽堂の探偵ものも、この當時の涙香文學の餘波たる事は爭はれぬ。

その春陽堂の「探偵小説」は各卷五集で五卷あつた。

第一卷

第一集　十文字　　第二集　百萬兩

第三集　電氣の死刑　　第四集　五人の生命

第五集　やれ手紙

第二卷

第六集　影法師　　第七集　足の跡

第八集　美人狩　　第九集　風流醫者

水蔭が右の內の三篇を作つたとすれば紅葉、鏡花、眉山等は何を受持つたか、彼等の全集にはない様であるが、眞實作つたのなら全集には必ず加へるべきである。友情の安賣は公私をわきまへぬ愚昧の沙汰であるのみか故人の眞實を亂す所以である。その道の好き者は調べ上げて下さるとよい。

右の「探偵文庫」で自分が幼くして讀んで今も覺えてゐるのは「足の跡」の一篇で、しのぶ譯としてあつたのが誰かは判らぬ。文章も拙ければ結構もまづい。とても涙香の足もとにもよれない探偵小說の駄作である。その緒言に「方今感情的小說の流行太甚しく事實的小說全く形を斂めてより世間人心を活殺する處の奇譚に渇するや久し、此書は專ら這般の需要に供せむが爲に特に脚色の奇絕妙絕拍案三歎に堪ふべきを」云々といひ、「毎號一卷讀切として、驛窻、汽船、汽車、馬車中の好伴侶たらんことを期す。されば其價は及ばむ限り最低額となし、以て讀過一番の後は途上に棄却して些の遺憾なからしめむとす。」とある。卷後には東京地方間の汽車時間賃銀表がついてゐるから、六ペンスの本のひそみにならつたのであらうが、その內容も讀過一番に耐へず中途で棄却したくなる程なのは決して涙香小史を笑へた義理ではない。その後何處やらで(博文館か)

ニツケル叢書といふのを出して五錢で賣つたが、これにも探偵じみたものが一二あつたと記憶する。春陽堂は此外に「高等探偵」と題して、「木戸少佐」、「大毒藥」、「戀の嫉刀」の三篇を出したが反響はなかつた。

明治二十四年六月に森澤德夫といふ人の「闡幽」「燭微探偵淵軌」といふ冊子が出た事がある。岸本辰雄と小松原英太郎との序があり、田中靑山伯の題辭があり、白雲居士西毅一といふ人の跋がある。その跋は

「君嘗任警視廳第二局第一課長。明察洞見。探隱偵微。大憝巨猾心慓氣喪。」云々

とあるから、在職當時擔當偵使からきいた所をそのまゝに誌したものらしい。色情奴、政狂以下十二章が收められ附錄に品川鐵の事を誌した一篇がある。事件に奇なく探偵の法に妙はないが、當時の世相をこの方面から知るには、なまじ主觀を交へないだけそれだけ素朴で便誼である。これも當時の探偵興味につれて世にあらはれた產物らしい。

德富蘆花の「探偵異聞」は遙か後三十三年の頃の版であるが流石に文章も巧みに布置も新らしく多く飜案ものらしいが、巣鴨の奇談以下七篇を收め秘密條約の篇など陸奥宗光の面影をよく忍

ばしめて文章遊勁であり、「巣鴨の奇談」は後癡兵院となつた宍戸（？）某といふ華族の庭園で、秋は古池に紅葉のトンネルが赤くうつて、三十七八年頃までは、宍戸の紅葉とて新聞の觀楓だよりにまで見た屋敷を舞臺にした舶來物らしい短篇で、「毒藥」はロシア虚無黨運動の一挿話、遉がに文章がすぐれて少年輩の耽讀の的となつたものだつた。

明治卅年六月博文館創業十年の「太陽」記念增刊は、「書生氣質」をはじめ、竹の屋の「當世商人氣質」、四迷の「浮雲」、龍溪の「浮城物語」、露伴の「大詩人」、鷗外の「埋木」、紅葉の「二人女房」等過去十年間の名作を改め收めた大冊であつたが、その末に樗牛が「明治の小說」を論じて、「明治二十年から二十五年頃までの小說家は紅葉はじめ、多くは狹隘なる主觀を有せる寫實家」で、「作中に表はれたる人生世相は殆ど作家の主觀をば自己の貧少、且偏頗なる閲歷に倒照したる小人生觀に外なら」なかつたとしたは當然の評語で、自分も亦少年乍らあまりに突飛あまりに偏つたありうべからざる世相を肯定的に饒舌してある、その繁に耐へられないといふ感じがした。それも初めから浪曼的にありうべからざる事を肯定してかゝつたロマンスならば、主觀のフォーカスの動かし方で、かへつてありうべき樣にも感ぜられるのであるが、これは全くそれと正反對

なのであるから猶困つたのである。

で、樗牛はこの作風の「無味放埒浮艶淫靡」に社會が漸く「倦厭の色を示し」て、浪　の撥鬢小說、涙香一派の探偵小說がとつて代つて出た前驅で、その後驅としては鏡花、眉山、天外の觀念小說であるとした。卽ち、「倜儻情に泥ま」ざる「濶達物に拘ら」ざる「任俠義に勇む」、「我國民の特性」をあらはしてをり、「夫の武士道なるものと其本を同ふ」してゐる俠客の風を傳へた物語が久しく中絕してゐたのを捉へて「奇矯遒勁」の筆で書いたゝのが撥鬢小說で、これに代つたのが探偵小說、小說もこの邊が「墮落の極」に達したが、次いで弦齋、麗水、蓼洲らの歷史小說があらはれたけれど「是れ時か、勢か、又は機のまだ熟せざるが爲か」佳品がなくて觀念派の勃興となつて明治の小說は其第三期に入つたと論じてゐる。

大體に於て甚しい謬見はないが、議論が荒けづりで因果關係を飛躍させるのが樗牛文の最大缺點故、この論文も畢竟今日から見て大した參考にするほどのものではないが、若い樗牛がこの當時これまでに洞察出來たのは、彼の好ヂャーナリストたる資格をよく物語つてゐるものといふべきである。只、撥鬢小說、探偵小說の出現の意義に今少し省察を加へ、歷史小說不振の原由を極

訊し、鷗外、思軒、柳浪の特殊位置を確かな論斷によつて、文學史的鳥瞰を試みなくては文學史のていさいは備はらぬのだが、此三子を只一はけにぼかし去つてしまつたのは、餘裕がなかつたのか、洞見が不足であつたのか何れにしても缺點と云はねばならぬ。

就中、探偵小說について一言の批評らしい批評を加へるところがなかつたのは、かいなでの當年の赤門文士や、稻門文士並に大俗で齢すべからずと、わが識見の不足を棚に上げて上品ぶつた批判力の膚淺を證據立ててゐるものである。

探偵物は文學の大通りをゆくものではなかつたが、ひろく探偵ものといふ中にはポウのごときホフマンのごときもののある事を親切にも教示した鷗外らの譯業に省みても、現在の涙香一派の全盛を、只商賣敵として罵り去る硯友文士の態度に倣はずして、この社會の興味本位の一見單純な要求が、眞底に於て如何なる宏大のスケールの文學樣式を暗々裡に要求してゐたのか、それを現在の涙香文學とは如何の因果ありや、如何に取捨し、如何に鹽梅すべきか等について、今少し懇切な解釋が評家としての槫牛や、抱月にあつて欲しかつたのである。然らば三十年の後に我等が土俗品的價値を愛玩する涙香小說の類から、純藝術品のよきひこばえが萠え出でなかつたとは

断ぜられまい。

かく迄に社會の興味を煽つたのは、社會文學趣味の低劣を物語ると同時に、樗牛の指摘せるやうな前期文學よりの反動もあつたらうし、更に深い所からその近年の文明に覚めて、而して得られざりしものを無意識的に喑々裡に覓めてやまなかつたものがあつたに相違ないと考へられる。これ、土俗的ながら涙香の探偵文章が、當時一般の讀書子の間に抜くべからざる魅力のあつた所以で、歐化思想の胚胎したエキゾティシズムが喜び迎へる異邦舞臺、特にも佛京巴里英京倫敦等を背景とし、當時人心に一種のこだはりはあり乍ら親密を感ぜしめるやうな日本名を用ゐ、變化と複雑とに富むシーンズの轉開によつて、讀者の抱月がいはゆる索究的趣味を牽引してやまなかつたのが、普通の元和三男士的日本ロマンスに飽いた人を喜ばせたのであらう。

若し、蓼洲一派の歴史小説が性格の創造に於て、事件の展開の精神に於て、浪曼感情の發揮に於て、史實の藝術的新解釋に於て、現實主義に立脚する超現實派的主觀を强調する諸特徴が加はつてゐたならば、異國情調も浪曼的要求も自らこれに附隨せられて、上下讀書階級の凡べての要求をある程度に於て滿足せしむべきやうな普遍價値ある同時代藝術が完成せられた事であらう。

挿畫附記

○上田敏譯詩古代英吉利歌謠未定稿殘闕は、富田碎花君の好意ある發見により上田家より借用した。既諸版上田敏譯詩集には未載の譯詩である。

○牡丹燈籠の芝居畫は、河竹繁俊君の了諾により早稻田大學演劇博物館の蒐藏品類中より選擇した。

○德富蘆花の小說「黑潮」手稿は、大阪某氏の所藏に屬するのであるが、德富夫人の手を經て借用する事を得たものに係る。（著者）

昭和四年五月五日印刷
昭和四年五月十日發行

明治文學襍考　金參圓貳拾錢

著者　日夏耿之介

東京市神田區北甲賀町四番地
發行者　坂口保治

東京市神田區錦町三丁目十七番地
印刷者　白井赫太郎

發兌　東京神田區北甲賀町四　梓書房　電話神田二七七五番　振替東京七八六四四番

發賣　東京神田區錦町一ノ九　文修堂　電話神田三五九三番　振替東京五八七二番

横瀬夜雨著　**太政官時代**　價四、六〇　送〇、二七

伊良子清白著　詩集　**孔雀船**　價三、五〇　送〇、一八

横瀬夜雨著　詩集　**雪燈籠**　價三、二〇　送〇、一八

日夏耿之介著　**明治文學襍考**　價三、二〇　送〇、二七

北原白秋著　長歌集　**篁**　五月上旬刊

北原白秋著　童謠集　**月と胡桃**　六月上旬刊

梓書房

梓書房版